

---

# 冬時間

能勢恭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

冬時間

### 【Nコード】

N8035S

### 【作者名】

能勢恭介

### 【あらすじ】

帝を戴く二〇〇〇年以上の歴史を誇る帝国。

北緯五〇度を最前線とする「北方戦役」は膠着状態に陥っていた。

陸軍第55派遣隊D中隊に所属する入地准尉は、決して踊りの輪に加わって踊ることはない、槍の穂先のその穂先。そしてその槍が折れても積極的に回収されることはなかった。

帝国海軍の巡洋艦が白波を立てて北へ向かい、空母から発艦した艦

上戦闘機が空中戦を繰り広げ、爆弾を鈴なりにした支援戦闘機が敵の上空に現れても、入地はじつと息を潜め、光学照準器の向こうに目を凝らすのだ。

戦艦の艦砲射撃より。

支援戦闘機が投下する自己鍛造誘導爆弾より。

声を発しない敵の兵士の銃弾より。

すべてが醒めない夢のように感じる自分自身が怖い。

とある国のとある北の戦場で、言葉と夢のはざままで揺れ動きつつも敵を葬り続けるしかないとある戦士の話。

友軍の射撃音が聞こえなくなつて、半日。聞こえるのは獰猛なト  
ンボのように大きい蚊の羽音。味方の足音も息づかいもなにも聞こ  
えない。北緯五十度近いこの町に空挺降下して一週間が過ぎていた。  
完全に包囲されている。

そういつて過言ではなかった。私たちは窓ガラスがほとんど抜け、  
やたらと風通しのよくなつた、かつては病院だつたとおぼしき建物  
に逃げ込んだ。もつとも、敵の部隊が私たちを完全に追尾している  
のかどうかは疑問があつた。非対称的な戦闘。途中まではそうだつ  
たからだ。どこかでボタンを掛け違い、こつなつた。この北の空を  
とりあえずは支配していた味方の攻撃ヘリコプターはいなくなり、  
もはや味方と呼べるのは、やや離れた場所で背を丸めるようにして  
装備品の再チェックをかけている南波なんばだけになつてしまつた。南波  
は傍目には落ち着いて見えた。私は、もちろん、平静だ。二人とも  
そついう訓練を受けているのだから。

「言葉が聞こえなくてもいいなんて話、あんたは信じるか」

私が問つと、南波は壁の向こうへ歩いて行つた。興味などない、  
何も話すべきことはない、そう背中が語つていた、ように見えた。

ここは以前は病院だつたらしい五階建ての建物の五階。エレベ―  
タは動かさず、地上へは螺旋階段で下りるしかない。敵の狙撃に遭わ  
なければの話。

南波は引き続き、腰のホルスタに挿した制式拳銃メルクア・ポラ  
リスMG-7A 9?口径セミオートマティックに右手を添えたま  
ま、しかしゆつくりと歩いて行く。

「迎えはまだ来ないのか、」

私が言葉を投げつける。

「入地、」

「なんだ」

「お前があそこのLAMを潰してこい。あと、向こうの対空機関砲だ。あれも潰してこい。そしたら、>白鳥くが迎えに来てくれる」

>白鳥くは友軍の輸送ヘリコプター。ドアガンを装備しているが、対空兵装は皆無。そしてチャフもフレアも積んでいない。バスマたいなものだ。航空優勢が確保されて、地上も制圧されていないといそれと離陸もできない。

「空は私たちのものはずだろう、」

この一週間で、豊沼から高泊より北側の空に、敵の戦闘機の姿はなかった。

「空はな。地面は違う。だから、近接航空支援を要請するんだ、これからな」

南波は疲れを見せない。

「南波、さっきの話」

私が言うと、南波は面倒そうに首を一度振り、しかしこう言った。「じゃあ訊くが、言語は収斂進化の結果であって、同時発生したそれらすべての言葉が、高度体系化される過程で、たとえば共通語彙を含むような場合、何者かの意思が介在したと考えられるだろうか？」

南波らしくない、そう思った。彼の口から「収斂進化」などという言葉が出てくるとは思わなかった。

私は肩から胸にかけて提げてあるタクティカルスリングに指をかける。私の右手もまたヘツツアー4716自動小銃のグリップを軽く握っている。光学照準器と30発入りの弾倉、そしてフラッシュライトにフォアグリップをゴテゴテとレールにくっつけた総重量は4キロを超えてしまう。レシーバの一部は樹脂製だが大部分は金属でできている。軽くなるはずがなかった。しかも、私のタクティカルベストには、予備弾倉がごっそり詰め込まれているのだ。軽くするには、撃つしかない。撃てば軽くなる。しかし撃てない。

「よし……支援戦闘機が近接航空支援をはじめ。それからここを出る」

南波が低く言う。短い双眼鏡のようなものを頭からかけているが、それは東洋電機工業製 L L R R - 5 2 5 - K L S 戦闘情報ディスプレイシステム、いわゆる C I D S であり、これはひどく軽くできている。派生形をヘリコプターのガナーや戦闘機パイロットが使用する。もつとも、それは端末として使用するだけで、南波がいま装備している C I D S には演算素子から通信デバイスからバッテリーからがぶち込まれ、航空機用のものと比べると 3 0 % ほど重い。私はそれを首都の戦技情報技術センターで見た。

「89式戦がいつ来るって？」

「電子マーカを先ほど発報した。20分もあれば」

国境ギリギリに展開して、おそらく戦闘空中哨戒中の89式支援戦闘機。双発軽量のターボファンエンジンを搭載し、自己鍛造爆弾 G B U - 8 など搭載ペイロードは5トンを超える。G B U - 8 は全地球測位システムとあらかじめ投下母機にプログラムされた地形データ、そして衛星リンクで送られる目標そのものの画像データを見て、判断し、自分の形を適切に変化させて目標に突入するかわいそうな兵器だ。そして投下母機である支援戦闘機は1機では来ない。最低2機のエレメント、おそらくバックアップでさらに2機、合計4機の1フライトもちろん、その上空は81式要撃戦闘機最低4機がカバーする。帝国空軍の81戦闘機といえば、「猛隼」の愛称で呼ばれる名機だ。

「さっきの質問に答えていない」

南波が手招きする。しかし不用意に窓に近づかない。狙撃を恐れているのだ。空沼川が見渡せるが、縫高町鉄道橋は落ちずにそのまま残っている。距離、800メートル少々。30口径の狙撃用ライフルでも十分に届く。もし50口径のアンチマテリアルで狙われたら、ひとたまりもない。

「言語がどうしたって？」

「収斂進化は、わかるな？」

「わかる」

「答えてみる」

「系統が全く異なる生物が、進化の結果、同じような形態や生態を獲得することだ。有袋類にその傾向が強い。あとは、魚とイルカ、そんなところかな」

「俺の理解は間違っていないかったな」

「どうだか」

言いながらも南波は鉄道橋、そしてその右手に広がる港、船底を見せている駆逐艦からそのさらに右手、黒煙がわずかに上る重油タンクをナメて、高速道路のランプウェイ、そして巨大な主塔がそびえる吊り橋まで、抜け目ない仕事で眺めるのだ。衛星からのリンクは途切れず、南波のCIDSに繋がっている。空の目で地上を見る。その気になれば壁の向こう側も見える。

「南沢教授に聞いた。都野崎で」

「帝大のか」

「そう。……教授が言ってたよ。人類が等しく言語を持っていることについて、誰も疑問に思わないことが不思議であるとかなんとか。言語を持たない部族がいたとして何も不思議ではないだろう、なぜなら、文字を持たない部族が現実に存在するからだ、と」

私はタクティカルスリングに左手をかけて、少しだけまた居住まいを正した。いつでも発砲できる体勢ではあるのだが、私のCIDSは三日前、風連奪還戦で敵のSVDにぶち抜かれた。頭までぶち抜かれなかったのは奇跡に過ぎず、しかし、それはただの執行猶予なのかもしれないと、CIDSなしの索敵がいかに脳と精神にやすりを掛けるのか、この建物に逃げ込んでから悟ったのだった。

「それで、」

南波が先を進めると促す。彼は彼で持っていたライフルを空沼川の支流、勅使尾川テシオに沈めてしまった。ライフルの予備弾倉はすべて、だから私がもらった。だから重い。だから私は彼を守る義務を負う。彼は私を誘導する義務を負う。

「必ずしも人類に言語は必要なのか、それははたして蓋然性がある

議論なのか、と」

「南沢教授らしい」

都野崎市の中心部。広い公園を望む帝国大学の教室で、私は教授からその話を聞いた。都野崎は戦域からかなり遠かったから、街は平和だった。任務がなければ私はおそらく、北緯五十度も近いこんな殺風景な場所には来なかったと思う。

「しかし、音声化された言語と、文字に起こされた言語ははたして共通なのか、という疑問も提示された」  
「なるほど」

「ハルトマンの仮説、わかるか。文字と音声の、処理の」

「言語野の話か」

「そう。脳が言語を処理する場合、おおむね言語野と呼ばれる部分の血流が活発になるが、しかし一方、文字を読み込んでいる際、視覚に関わる外側膝状体の血流もまた活発になるんだ。だから、」

「言語を処理するとき、脳は二系統で計算している」

「南沢教授の仮説だよ」

「おもしろいな」

南波の左手が手持ちぶさただ。腕ごと吹き飛ばされなかったのは、やはり奇跡なのだ。敵の戦車が森の向こうから現れたとき、味方の攻撃ヘリコプター4機は、空沼川に哀れ油膜を流しながら沈んでいたのだから。

「その脳の処理系統だが、」

私は南波の背中に自分の背をつける。これで360度、ほぼ死角はなくなる。壁の向こうは南波がCIDSで監視する。壁のこちら側は、私が肉眼で監視する。我々二人の反射速度は、野生動物のそれすら上回る。そういう訓練を受け、そういうデバイスを装備した。電子的、有機的、あらゆる。無駄口を叩きながらも、監視の目は緩まない。ハルトマン・南沢モデルの仮説と同じだ。戦闘地域における哨戒行動……高度に制御されたレーダーを装備した巡洋艦のミサイルシステムと似ている。同時に複数の目標を監視、追尾、攻撃で



きる。脳が同時に別々の事柄を並列処理する。これはある意味人類が進化したのだらう。電子的・有機的補助を得て。ブレイクスルーだ。

「本当に、お前は思うか。音声を持たない言語が存在するなんて」「イノビリジム諸島のアツポ族の話をしてやるよ」

やや寒気を感じる。実際気温は低いのだ。あと数十分で日が暮れる。まもなく夏を迎えるとはいえ、高緯度かつオチャコヴォ海高気圧から吹き出る空気は冷たく、このあたりは盛夏でも最高気温が三〇度に達しない。

「イノビリジム諸島では、長袖シャツを見たこともないような連中が半裸で闊歩してる。主食はバナナとヤムイモで、タンパク質は湿地に住んでるは虫類と、森の中の昆虫類で摂られる。塩分が極度に低い食生活の彼らは、世界的にも低血圧な部族としても知られる」

「それで、」

南波が右手親指で、拳銃のスライドをイライラとまで回している。南波は私の話を嫌うのだ。話が長くなるからだ。彼には予告編もいらないければ、形容詞すらいらぬ。直截な物言いを好む彼は私と言語体系がちがうのかもしれない。

「アツポ族は、感嘆詞以外の言語を持たない部族だと思われていた。彼の地を旅した探検家であり人種差別主義者であり落ちぶれ貴族でもあったジョンストンに発見されてからね」

「16世紀の話だな」

「そう。以来、イノビリジム諸島はちょうど大洋の中継地にぴったりだったから、船乗りたちが大挙して押しかけた。ノリホ鳥が絶滅寸前に追い込まれたのは、彼らの食料にされたから、だよな？」

南波は返事をしない。CIDSを装備した顔面上半分は表情がわからない。うつすらと無精髭が伸びていたが、それでも清潔な雰囲気を漂わすこの男は、まったく奇妙な存在だ。この町に住民はすでなく、逃げたか虐殺されたか（戦闘に巻き込まれた、と政府は言うだろうが）、あるいは空沼川に沈んだかだ。先週、敵の駆逐艦が

二隻やってきて、艦砲射撃で町の地形を変えた後、湖に逃げ込もうとした民間船を何隻か撃沈している。もつとも、その駆逐艦も民間船のあとを追うように沈んでいったが。沈めたのは友軍の支援戦闘機だ。

「鳥の話はいい。腹が減る」

「同感だ……で、船乗りたちはあることに気づいたんだ。アツポ族が、二音節以上の単語を話さないことに」

アツポ族は、まるで狼煙か、さもなければ敵味方識別装置のサインのような、ごく単純化された言葉しか話さなかった。船乗りたちが意思疎通を図ろうとしても、何年かかって彼らの言語を理解できなかつた。仕方なく、船乗りたちは、土や木箱や紙の上に絵を描いた。それでなんとか「会話」を行った。もつとも、船乗りたちは宗主国の領主たちと同じく、アツポ族を人間と見なさなかつたから、それで十分だつたのかもしれない。

「文字、」

「まだその話はあとなんだ」

日が暮れていく。縫高町ぬいたかまち鉄道橋は国鉄木須加線では最長の鉄橋で、巨大なカンチレバートラス構造となっている。標準軌、複線の線路がまっすぐ続き、しかし走る列車は途絶えたままだ。ここから南へ15キロほどの湿原地帯で、D66蒸気機関車重連に牽引された20両編成の貨物列車が敵の戦車部隊に襲われた。空挺降下する際に私も南波もそれを見ている。暗闇だつたが、そのときはCIDSが有効だつたから、真つ昼間みたいになんでも見えた。

「近接航空支援までは？」

「とりあえず訊いてみる。」

「あと10分」

「間違いなく？」

「ディスプレイには>READY<の表示がある」

「>STANDBY<じゃなく？」

「>READY<だ」

「信用してもよさそうだね」

「奴らの姿も動かないしな」

「今どんな感じだ？」

訊くと、南波はほとんど体勢を変えず、低く言う。

「7時の商店に、二人。9時の変電所の向こうに、T99が2両、歩兵が6人。鉄橋にLAM持った奴らが4人。高速の料金所の裏に、エンジンが冷え切ったT99とSDD-48（自走対空砲）が1両、そんなところだ」

「一時間前から変わらず、ね」

「こちらの戦力を把握し切れていないんだろう。撃ち込まれたら一瞬でおしまいなのにな」

「CIDS様々つてところ？」

「いや、EMP（電磁衝撃波）が効いてるんだ。奴らは対EMP装備を持っていないからな」

二日前だ。友軍の戦術核が上空100キロで炸裂、この辺り一帯のヒューズはぶっ飛び、コンピュータは沈黙した。電装品がお釈迦になる魔法の兵器。

「奴らの戦車はなんで動くんのだ」

「原始的な構造なんだろうよ。コンピュータがなくても砲塔は動き、撃発もできるからな」

「それで、あの河原の発電所にいるハスキーも離陸できないんだな」

古びた火力発電所が見えるが、その敷地に敵の攻撃ヘリコプターが2機いる。衛星による偵察情報で存在は知られていたが、いまだローターの音は聞こえず、エンジンに火が入る様子もない。だから先日の近接航空支援でも無力化されず、放置された。あわよくば奪い去って、30？チェーニングあたりを掃射してやりたい衝動に駆られるが、私も南波もウィングマークを持っていない。だからエンジンのかけ方すらわからない。地上でチェーニングをぶっ放してもおもしろいかもしれないが、飛べないヘリコプターはただの棺桶

だ。

「話を戻してくれ、退屈になってきた」

南波が言う。望むところだ。

「ウルリツヒ・グリマーという地質学者が、イノビリジム諸島を訪れたのが、けっこう最近になってからだ。20世紀を過ぎてからだ」

グリマーは母国で地質学を専攻しているが、言語学にも興味を抱いていた。自身が植民地の生まれで、雑多な租界界隈で話される様々な言語に触れた経験を持つからだ。大洋戦争で従軍したときも、前線部隊には派遣させず、もっぱら通訳として後方支援に当たっていたようだ。

「諸島は、帝国海軍と彼の国の大艦隊が大海戦をやっただろう」

「戦艦同士が艦砲撃ち合うなんて、壮絶な話だよな」

「流れ弾で駆逐艦が轟沈する、そういう世界だ」

当時は、大口径の艦砲を備えた戦艦同士で艦隊決戦をする、そういう時代だった。いま、戦艦はその巨大な艦砲の威力を、地上攻撃に使う。命中精度はミサイル攻撃に及ばないが、敵兵に与える心理的影響、そして凄まじい破壊力。だからいまだに戦艦は航空機とミサイル巡洋艦に守られて現役だ。

「グリマーもその故あって、イノビリジム諸島に赴任した。そして、アッポ族に出会うことになったわけだ」

「それまでに島を牛耳っていた連中とは別の国の軍隊だな」

「そう。そして、グリマーはそれまでの連中とはちよつと違い、言葉に興味を持ったわけだ。曰く『彼らの言葉には、文節というものがなかった。感嘆詞しか存在しないように聞こえた。およそ形容詞というものも存在せず、固有名詞を口々に話すだけで、彼らとは会話が成立しなかった』。それはそれはグリマー博士は驚いたわけだよ。戦争が終わって、グリマー博士は、イノビリジム諸島をふたたび訪れる。わずか千キロ東で、我が国が核実験を繰り広げようとしている中ね。そして見つけたわけだ。彼らの文字を」

「文字を」

「そう、文字だ」

アツポ族は文字を持っていた。ジョンストン以来の船乗りたちが、筆談に近い形で会話をしたのは、実は理にかなっていた。グリマーが発見した文字は、すべてがいわゆる表意文字であり、表音文字はひとつもなかった。そして特筆すべきことは、彼らアツポ族の文字は、その大部分が発音することができないという事実だった。

「発音できない？」

「そう。文字は存在するが、発音できないんだ。その表記体系は猛烈に発達しており、私たちの言葉よりも複雑で、文字数は数千を超えることがわかったんだけど、そのほとんどに音が割り振られていなかったんだよ」

「どういうことだ？」

「発音できないのさ」

「そんな文字があるのか？」

「あつたのさ。イノビリジム諸島に」

「ちよつと待ってくれ。文字はあるが、それはようするに、話せないということか？」

「そういうことらしい。アツポ族の文字は、それが文章と呼べるほどに文法もあり、かなり多種多様な言語であることがグリマーの研究でわかったんだけど、アツポの彼らにいくら聞いても、音声が存在しないんだ。視覚だけでしか機能できない言語だったんだ」

「すると、文盲はいないってことだな？」

「そこなんだ。イノビリジム諸島は、周囲が千キロ近いけっこう大きな島だが、火山があつたり溪谷があつたり、平地が少ない。だから部族としての人口も少ないんだ。人口の分布も偏っていて、数十人という集落はほとんどない。数百から数千というオーダーになる。その中には当然、視覚障害を持った人もいる。文盲じゃない。本当に目が見えない、文字を認識できない人もいるってことだ」

「どうするんだ。そんな、視覚に頼り切った言語で、」

「助けるのさ。アツポには極めて強い互助の関係がある。疑似血縁

関係に近い。自己主張をしなくても、分業がものすごく進んでいて、私たちがいうところの社会的弱者が存在しないんだ。南波、お前には子どもがいたな」

「ああ」

「言葉をしゃべるようになったのはいつ頃だ」

「二歳頃だ」

「それまでは、どうしてた。子どもとはコミュニケーションは全く取れなかったか」

「そんなことはない。ああだこうだと声を出すからな」

「そういうことだ」

私が言うと、南波は理解したのか、絶句した。

「言葉がいらなくていいか」

「事実、ジョンストンたち船乗りは、会話をしなくてもアップとコミュニケーションできていた。音声としての言語、文章として成立する必要なんかないんだよ。単語だけ、数少ない音声単語だけで、それはどうも固有名詞だけのようだったけれどね、それだけで成立してしまうんだ」

「本当か、」

「事実お前は、子どもと文章なしの会話を成立させたんだらう？」

腹が減った、トイレに行きたい、のどが渴いた、痛い、かゆい、寂しい、遊びたい、嬉しい。それらに言葉が必要か？」

「ああ……」

「アップの発声はそれだけなんだ。音楽みたいなものだ。実際、私が映像で見たアップ族の『会話』は、小さな子ども同士の会話のようだったし、歌のようだった。彼らは発声はできるんだ。私たちと同じ人間だからな。けれど、文字を発声しない。必要最低限なことは、簡単な、ものすごく簡素化された音声で取る。そして、複雑なコミュニケーションは、文字で取る」

「しかし、文字に音がないなんてこと、あるか」

「お前、『ひまわり』知ってるか。ヴィンセントの絵だ」

「しつてる、本物は見たことないが」

「音にしてみる。あの絵を」

私が言うと、また南波は絶句した。

「索敵、大丈夫か」

思わず言うと、小さく頷いた。

「絵を、音声化できるか」

「……できない」

「そういうことだ」

「その、アッポの言語は、絵と同じだって言うのか」

「極端ないい方だが、そういうことなんだよ。グリマーが導き出した結論は、そういうことなんだ」

「そんなことがあり得るのか」

「それこそ、お前の言う収斂進化ってことじゃないのか。画家たちは、異文化、異言語であつても、絵を描くことで通じ合えるそうだから」

「信じられない」

「私も、最初はそうだったよ」

都野崎の公園で、対空砲陣地を望むベンチで、南沢教授と、丹野美春と並んで座り、グリマーの論文を読んだ。晴れた日で、その日は防空演習も済み、道行く人々は晴れ晴れとした顔をしていた。中で私だけが、表情を凍りつかせ、そして次の瞬間には、すべてが変わって見えた。

「世界にはそういうことがあるんだよ。たぶんね」

日が、暮れた。

数瞬、私と南波のあいだに沈黙が挟まった。

空沼川が流れる音が聞こえた。ゆっくりと。水深があるため、外洋から艦艇がそのまま入ってこられる。だから、縫高町鉄道橋も区間高速の吊り橋も、通過する船の最低高に合わせてある。重巡洋艦だって入港できる。港を再建すればの話だ。

「……来るぞ」

南波が低く言い、窓から離れた。

遠く、雷鳴に似た爆音。

89式支援戦闘機だ。

CIDSには彼らがすでに見えているだろう。そして、パイロットからはすでに我々が見えているはずだ。体内に埋め込まれた生体マーカーは、血液から有機器官の如く栄養分を摂り、それを電源にする。最低稼働時間、一〇年。除隊してもなお、摘出しなければ、私たちは国防省……いや内務省か、彼らに追尾される。仕方ない。我々自身が軍事機密なのだから。具現化した機密。発声できない言語のように。

「ダウン」

南波が言う。階級は南波が上。年齢は私が上。不思議な関係。

「女の子は下がってな」

南波が数時間ぶりにCIDSを上げ、瞳を見せた。

ギリギリしていた。

一週間前、空挺降下したときと変わらず、もう三日も何も食べていないにもかかわらず、36時間以上眠っていないにもかかわらず。私は南波に言われるまま、数メートル下がり、コンクリートの壁に身を隠した。

爆音。

石田航空発動機製J E - 200 M K 5ターボファンエンジンの咆哮だ。一万メートルの位置エネルギーを速度に変換しながら接近する4機の89式支援戦闘機のパイロットは、HUDにこの町全体を捉える。いま南波は私の自動小銃を構え、目標物にそれぞれマーキングを行っている。セイフティがかけられているのでハンマーはダウンしない。アッパーレシーバに装備している東洋光学機工製E F - 300 F 56 L光学照準器は索敵モードで、内蔵デバイスがトリガーを引くことに対象をロックする。そして映像・位置データとともに上空の戦闘機に送られる。パイロットは考える必要はない。シユートキューに従って、機体を制御（それすらコンピュータが行う



が)、リリースを引けばいい。パイロットもまたCIDSを装備し、視界は真昼のような明るさだろう。光彩が開ききった夜行性の猛禽だ。町の入り口で4Gかけて急上昇、続けざまにフレアをばらまき、敵のLAMを避ける。アフターバーナーに点火、上昇しながら加速する。その姿が、私の閉じたまぶたの裏に見えた。作戦はすべて事前に頭に叩き込まれている。そう、物理的に。

何か空気を切り裂くような甲高い音……支援戦闘機がGBU-8をばらまき、それがこの町めがけて殺到している音だ。死の叫び。雄叫び。89式支援戦闘機1機あたり5トン、10発ずつのGBU-8が死のダイブをかけている。

CIDSがあれば、壁を透過させて、南波をも透過させて、その向こうが見えるはずだ。4機の89式支援戦闘機が高度1000メートルで投下した自己鍛造爆弾GBU-8は、寸胴の弾体の側面を急に広げ、空中で無数の子爆弾を分離する。分離した無数の子爆弾は安定板を展開、その瞬間、町は壮絶な、まさに断末魔の叫び声に包まれる。この叫びは「地獄の声」とも呼ばれ、敵の市民や兵士、さらには友軍の兵士たちからも忌み嫌われていると聞く。私が実際に聞いたのは、今が初めてだった。全身が総毛立つような、恐ろしい声だった。子爆弾はシーカーヘッドをキラキラさせながら、衛星のガイドや、南波のガイドや、あるいは自律的に選定した目標に向かって落下していく。その姿が、閉じたまぶたの裏に見える。

「口開けて、目閉じて、耳ふさいでるか！」  
いつまでたっても、南波は私を少女扱いにする。不愉快だった。私は返事をせず、目を閉じて、しかし、身体に響いてくる爆発音を、その瞬間に喪われるであろう数十の兵士たちの命を、ほんの少しだけ哀れんだ。

いくつかの言葉が散っただろう。  
そう思って、それを弔いにした。  
いつか私が弔われるのだろう。

それでもいいと思った。

でも、私はこんな場所では、死なないことにしていた。  
爆音。

悲鳴のような音。鉄橋が落ちる音。

火力発電所が、そして敵のヘリコプターが粉碎される音。

水柱が立つ音。

南波が叫ぶ音。

私も。

とりあえず叫んでおいた。

爆音。

言葉には聞こえなかった。

矢羽根があちこちねじ曲がって立っている。北向きの道路標識には弾痕がいくつもの凝っていた。私は南波と二人、南へ向かう車線を歩いていた。南波はいまCIDSを跳ね上げ、肉眼で索敵中……脅威が存在しない証左でもあるのだが、この辺り一帯はすでに友軍によって制圧されていた。

「とりあえず、燃料を確保したい」

南波がぼそぼそと言う。この程度の発声で私の耳に届くものだから、この道路……ハイウェイ、国道なのだ、一応……は実際確かに安全なのだ。私のヘツツアー4716、.223口径自動小銃にしても、ローレディにして保持する必要もない。

「燃料つて、」

「俺たちのだ。さすがに、腹が減った」

南波も肩から自動小銃を提げている。私と同じ4716ライフル。ただし、一般型だ。光学照準器は私のと同じ東洋光学機工のEF-300F56だが、「L」ではない。Lタイプは全地球測位システムを独立して内蔵していて、固体高分子形燃料電池で駆動する。レテイクルはトリチウムによる発光だが、CIDSとのインターフェイスを備えているだけに、駆動用の電源が必要なのだ。だからやや重い。ほかに、フォアグリップはついておらず、フラッシュライともついてない。もっとも、フラッシュライトは個々人による判断でタイプを選べたから、この銃の持ち主はライトを必要としなかったのかもしれない。南波は一言短く、それに文句を言ったが。

ようするに、戦死者の装備品だ。

89式支援戦闘機4機による近接航空支援で、おりこうさままでかわいそうなGBU-8自己鍛造誘導爆弾合計二〇トン四〇発の攻撃を受けた縫高町は文字通り壊滅、敵の部隊も壊滅、もうもうと立ち上る黒煙とヘキサニトロヘキサアザイソウルチタンが炸裂した「ケ

ミカルな」臭いがたちこめていた。

私たちは現廃墟元病院の五階から、崩落を免れていた非常階段……幸い建物内側に生き残っていた……から脱出した。このときも南波のCIDSが重宝した。CIDSは私たちにとって、もはや殺気を感じとる野生の勘とも言える装備だ。私たち人間の目は赤外線を見ることができないが、CIDSはできる。衛星のリンクを活用すれば、壁の向こう、建物の中にいる赤外線が発信源を突き止めることもできる。衛星が持つ凄まじいセンサのおかげだ。車でドライブするとき以外は関係ないと思いがちな衛星も、こういうときは命に関わってくる。そのときもCIDSはスーパーサーチモードに切り替え、南波が私の自動小銃を構えた。本来は私が前衛を務めるべきだが（小柄だからだそうだ）、野生の勘を失ったただの人間である私にその任務はできなかつたのだ。

北緯五〇度に近い縫高町は、すでに初夏に差しかかっていたが、とにかく冷え込んだ。闇にまぎれて私たちは町を出るつもりだったが、ふたつの要素から行き足は鈍かった。

ひとつ、2マンセルの片方が野生の勘を失っている。

ひとつ、二人の疲労がピークに近かった。

疲労は、もう訓練でもどうしようもない。限界そのものを高めることは可能で、それを電子的・有機的に行うことももちろん私たちには施されている。エリート然とした医官によるカウンセリングという名の洗脳により、精神的補強も受けている。しかし、五十キロを二時間台で軽々と走り抜けるランナーも、走り始めの五キロとゴール寸前の五キロでは、肉体的にも精神的にも別人になっているはずだ。私たちも同じ。そして私たちは眠っていないかった。

「アルファとデルタがKIAになったのは痛かったな、」

通りに面した民家は、正面から見るとまともだったが、ふと視点を変えると、南側の壁一枚がそっくりなくなっていた。建物に囲まれている、南波のCIDSにも全く反応がなかったから、私たちは一時その民家で休憩した。

「A Hが全滅したからだ」

私が答えた。

この作戦、空挺降下による潜入から空軍によるEMP攻撃、敵防空網と電子的装備の排除、そして近接航空支援の反復の後の脱出とタイムスケジュールはほぼそのとおり行うことができた。目論見がはずれたのは、私たちが潜入したあと、国境ギリギリ、超低空をNOEしてきた友軍の攻撃ヘリコプター4機が、華々しい登場とは裏腹、敵のSDD-48自走対空砲が森の中から突撃し、その25?機関砲で軒並み撃墜してしまったところだった。事前偵察では存在を確認できていなかった。どこかにいるのだろうとは思われていたが、縫高町に侵攻した敵部隊に紛れ込んでいるとは誰も思わなかった。衛星からも確認できず、私たちの空挺降下前に空軍が大々的に行った89式支援戦闘機と64式戦闘爆撃機による執拗な空爆でも発見されなかったのだ。

理由はわかった。

「まさか、装甲をまるごとはずしてるとは思わなかった。事前に画像で習熟した形状とはぜんぜん違ったからな」

南波は民家の台所をまさぐっていた。灯りは使えないが、CID Sは星明りひとつあればなんでも見える。拡張機能を使えば、人間の耳には絶対に聞こえない超音波を発振し、エコーロケーションで部屋の間取りを表示されることもできるのだ。エコーロケーションの欠点は、ものの形と位置しかわからず、色も質感も温度も一切が不明ということだけ。視覚機能のみを提供される。それだけでも十分だが。

「本当なら、あんながらくた、>ホワイトアロー<でアウトレンジされてるはずだった」

友軍の攻撃ヘリコプターA H-232は地上攻撃用に射程6キロのAGM-785を8発装備している。たかだか射程2キロ程度の機関砲の餌食になるような航空機ではなかった。

「あれでガタガタだ。……入地、お前魚は平気か」

「何かあった？」

「サケの燻製があった。食べそうだな」

差し出される手許はもうまったくモノクロで、ぼんやりと何かが見えるが、色もなにもわからない。おそらく先ほどの近接航空支援で敵部隊は全滅したはずだ。二時間経つが、南波のCIDSに反応するのは、シカとキツネだけだったからだ。だから灯りを点しても問題はなさそうだったが、むしろ敵がたとえば私の点した不自然な炎を、衛星軌道から確認しないと限らない。ここはそういう世界的に助長し、精神的許容範囲を狭める足かせそのものだ。

「飲み物があればね」

「ゆっくり食べ。しょっぱいぞ」

「ありがとう」

私は南波からサケの燻製を受け取り、ゆっくりとかじった。おそらくは手製なのだ。おいしかった。今が極限に近い空腹であることをさっ引いてもおいしかった。

「救援は、望めなさそうだな」

私が言う。CIDSがあれば、こんなおおっぴらな音声会話をする必要もなかった。細長いリップマイクに音にならない囁きをするだけで、CIDS本体が関知する会話しようとする意思……それは脳波なのだが……と実際に口蓋から発せられた音声らしきものを増幅修正させてイアフォンに出力するからだ。

「無理だな。救援機が撃墜される」

「FV（垂直離着陸型戦闘機）なら」

「二人乗るには二機必要だぞ。リスクも二倍だ。それに、一機しか到着できなかつたら、お前、どうする」

「言ってみただけだ。気にするな」

「わかつてる。俺もただの無駄話があったただけだ」

「正直で結構だな」

「脳を休憩させなきゃな。それとも寝るか？ 十五分でも眠れれば、

多少は違つぞ」

「いや……、国道まで出よう。夜明け前に。この緯度なら、午前三時には明るくなってしまふ」

「同感だな」

燻製のサケはあつという間になくなった。とりあえず、口の中で食べ物を咀嚼するだけで、あれほど荒ぶっていた空腹感は多少落ち着くから不思議なものだ。本来は作戦終了までのレーションも持参していた。

私たちの所持品は、……私は自動小銃にタクティカルベストの予備弾倉、腰のメルクア・ポリリスMG-7Aとさらにその予備弾倉、南波は腰のMG-7Aと予備弾倉、CIDSのみという、恐るべき軽快な装備だが、空挺降下時にはこれに加えて、南波はもちろん自動小銃、私はCIDS、そして二人ともバックパックを持っていた。あまりかさばらないが、容量のでかい奴だ。しかしそれは、風連奪還戦で失うことになった。

「休むとダメだな」

南波が表情もなく言う。会話に感情が含まれる。CIDSを解すると、感情までサポートされない。だから本来の作戦行動中は、南波がどんな口調なのがわからない。

「出発するか」

私が言う。あまり感情を込めないで発声したが、彼の耳には合成音声として、本当に抑揚のない無表情な言葉として届いたはずだ。

「いや、もう少し休んでいこう」

言うつと、南波はCIDSを跳ね上げた。

「南波、」

「目が乾くんだ。これ」

「なんかしゃべるか」

「そうだな、……じゃあ俺から質問してもいいか」

南波の目が光っていた。私の目が暗闇に慣れたからだ。月が出ている。三日月だが、町は目さえなじめば、本当の暗闇ではなかった。

「どうぞ」

「お前は、言葉が専門なのか」

「それ、質問？」

「まあ前置きみたいなものだ」

「帝大では、いちおう、そういうことをやっていた」

「なぜ情報班に配属されなかったのかな」

「それは、私が希望したからだよ」

「トリガーハッピーか」

南波は連邦国のスラングを口にした。彼らは自動小銃を傍らに戦場をかける兵士のことをそうして揶揄するのだ。

「射撃の成績はよくなかった。訓練次第じゃないか、こんなの」

「下位5%は永久に上達しない奴らだぞ」

「じゃあ私はそれに含まれなかったんだ。反射条件も学習させられたしな」

脳に。

「身の上話は、まあいい。長くなるからな」

南波がちよっと笑ったのがわかった。

「言葉の話だ」

「南波、その話はさつき終わったんじゃないか」

「近接航空支援に邪魔されたのさ。俺はこう見えても学問に造詣があるのさ」

「考える筋肉か」

「なんとも言うってくれ。……聴かせてくれ。言語を持たない部族は存在するのか」

「アツポの話か」

「あれは、音声としての言語を持たない部族の話だろう、違う。人間は言語を持たないと生きていけないのか？ 人間としての構成要件に、『言語を話し操る』という項目が含まれているのかどうか、それを知りたい」

「おもしろいことを言うな」



南沢教授のクラスでも、南波のような質問はなかったと記憶している。

記憶。

そう、記憶。

「おもしろいか。俺は気になっていた。なぜ世界中の文明に言葉があるのか。言葉と文明は不可分なのか。じゃあ、熱帯雨林の中で外界と遮断されて生きている、およそ物質的文明を持たないナントカ族やナンチャラ族は、高度に発達した精神的文明は持っているのかもしれないが、言葉を持たないのか。そんなことはない、彼らも言葉を持っているよな。国营放送で見たぞ」

確かに密林の奥で数万年と変わらぬ暮らしを送り、森の精霊と共に生きているような彼らにしる、独自の言語を持っている。

「アツポ族とやらは、文明を持っているのか」

南波が訊く。

アツポもまた、イノビリズム諸島という熱帯、森に行けばふんだんに食料があり、凍死する心配もなく、人が動物として生きるのに不自由しないあの島にいて、物質文明は持たない。多くのそうした部族がそうであるように、精霊を信じ、一人の神を戴き神を孤独にさせることもない。高層建築を築くこともないが、釘一本使わない住居を建てる技術を、成人男性なら皆持っている。光学照準器や衛星リンクに頼らなくても、自らが作成した弓矢で三〇メートル先の獲物を射貫く。そして、私たちが射殺した敵兵の屍をなんの感情もなく踏み越えるのに、彼らは射貫いた獲物に感謝の祈りを捧げる。精神的文明とすればそのとおりだと思うが、音声的言語を持たないアツポも、文字を持ち操り、壮大な叙事詩すら文字で描く。アツポの居留地には、熱帯雨林特有の板根を加工した幹に、凄まじい分量の文字が描かれている。それら一つ一つが物語なのだ。

「アツポの生活が文明かどうか、私はたぶんYESと答える。そして、少なくとも私は、文字を持たない文明を知らないし、文明を持たない部族も知らないよ」

「やはり言語と文明は不可分なのか」

「いや、むしろ人間と文明が不可分なのじゃないか」

「動物は言葉を操るか」

「それはお前の方が詳しいんじゃないか」

「准尉が少尉に『お前』とは乱暴だな」

「それは失礼しました。けど南波、私が二つ年上だ」

「それは失礼しました、お姉さま。なあ入地、動物って意思疎通をどうやっているんだ」

どこかで物音がした。足音。人間ではない。私にはわかる。南波にもわかる。人間が歩いたにしては音が軽すぎる。キツネだ。

「クマが来たら守ってくれよ。これでもか弱き乙女なんだ」

南波に言う。

「5・56? が効くのかね。いや、あなたにじゃないぜ。クマにだ。三十口径の方が安心できるな。手負いの獣はやつかいだぜ」

「あなたの祖父さんは猟師だったか」

「いや、郵政局の配達人さ」

「そうか。失礼。……狸々の類は言葉を解するようだ」

「本当か、」

「動物公園で飼育されている個体はな。そういうのもいるらしい。簡単な文章なら理解できるそうだ。もっとも訓練しないと無理のようだ」

スルランゲン半島の狸々だったと記憶している。神野座市の動物公園だった。カードに書かれた記号や、それらを組み合わせる「文章」を作成できる個体がいた。

「野生種にそういうのはいないのか」

「道具を使う動物はたくさんいるが、今のところ火を操る奴と言葉を使う奴はいないみたいだな」

「海軍の奴に聞いたことがあるぞ。クジラは会話をしているらしいじゃないか」

おそらく南波が聞いた人物は潜水艦の乗組員に違いない。潜行航

行中の潜水艦の艦内に、クジラの声が響くのだという話は私も聞いたことがあった。水中では音波の伝達速度が空気中とは桁違いで、しかも遠くまで届く。数十キロの距離を隔てて、クジラが複数の個体間で会話としか思えない音のやり取りをしているのだそうだ。

「それは私も知っている」

「もし言語と文明が不可分なのなら、クジラは文明を持っていることにならないか」

「南波、それは fallacy of the undisturbed middle っていうんだ。媒概念不周延の虚偽、詭弁だよ」

「そうかな」

「そうだ。乱暴すぎる」

「すると文明と言語は不可分ではないということになる」

「動物は言葉を話すか、という話じゃなかったか」

「クジラが文明を持っていないとなぜ証明できる？ コルテス山地のマラーチオ族とやらは銃も持たず建物も造らず飛行機も車も持っていないが、あなたの論理なら精神的文明を持っていることになるだろう。するとクジラも言語を操るなら、精神的文明を發展させているかもしれないじゃないか」

「クジラは食い物だ」

「すごい論理だな」

「いや、そもそも論理が破綻している。クジラが文明を持っていないという証明はできないが、だいたい文明を持っているという証明もできない。クジラ語なんてものがあるなら解明できるかもしれないが、今のところ『クジラの歌』に規則性はなく、せいぜいがさっきあなたと話した、人間の赤ちゃんの意思表示程度のものとしか考えられていない。そして、南波、文明の定義はなんだ？」

吐く息がはつきりと白かった。話が些か壮大になりすぎたとやや後悔の念もよぎったが、私は南波との会話を、すでに楽しんでいた。近接航空支援で89式支援戦闘機が投下した、あの禍々しいGBU

- 8の断末魔の叫びを忘れたかった。あの音は確かに恐怖を喚起させ得る。

「話を戻そうか」

私が言う。喉が渴いた。バツクパツクがあれば、泥水でも濾過して飲めるフィルターが使えたのに。夜明けを待てば、葉に滴る朝露でも飲めるだろうが、サケの燻製はやはり塩辛かった。

「今のところ、人間以外の動物で、独自の言語を持っていると判断され得るものは発見されていない」

「それは認めるよ。悪かった」

クジラの歌。動物にも感情はある。ネコのしっぽを踏めば引つかれる。犬の食事を横取りしようとするれば牙を剥かれる。意思表示なのだ。彼らの音声は。逆に人間の脳が肥大化したのは、単純な意思表示でしかなかった。「音」を組み合わせ、規則性を持たせた言語に発展させ、それがシナプスを刺激したからだという説が信じられている。私もそれに同意する。言葉は難しい。しかし、

「私もわからない。人間に限っていうなら、文明と言語は本当に不可分なのだろうか。いや、言語を持たないまま成体となり、寿命を全うする人間は存在できるのだろうか」

「あんたが迷っているようじゃ、話は終わりだな、姉さん」

南波は時々私を「姉さん」と呼んだ。私は彼を弟に感じたことは一度もなかったが、「姉さん」と呼ばれるとき、彼の精神は限りなくフラットになっている。だから私は安心する。

「いや、南波、あんたの意見はある意味的を射ているんだよ。そう思う。難しい命題だと思う」

南沢教授に聞いてみたくなった。丹野美春ならどう答えるだろう。都野崎の街並みが一瞬フラッシュバックした。丹野は私が入隊することに最後まで反対していた。教職に就くのだと信じてくれていた。私は日常を離れたかった。精神にやすりを掛けて磨いてみたくなかったのだ。南波にそう言ったらどういう顔をするだろう。怖くて言えなかった。

「俺が気になることは、」

南波はまだ話を続けている。彼がこんなに話し好きとは知らなかった。宿舎で見かけても、談話室で見かけても、彼はいつも無言だったからだ。談話室ではよくEid（画像情報ディスク……記録メディアの通称）で映画を観ていた。

「人間は、あの『暗黒大陸』と呼ばれた荒野で誕生して、何万年もかけて全大陸に行き渡ったんだろう？」

南波が好んだ映画のタイトル。「風と剣」……中世のはぐれ武士が寒村を守る話。私も好きだ。「慟哭の空」……連邦国の映画。大戦争を舞台にした派手な作品だ。私も一度だけ観た。「観測気球を上げる」……これもたしか連邦国の映画だ。青春映画だった。意外だった。

「人間は、あの大陸を出るときすでに言葉を持っていたのか？ それとも、全世界に伝播する過程で言葉を操るようになったのか？ どう思う？」

「それがあなたの言う『収斂進化』ってことか？」

もしそうなら、南波を私は見誤っていたかもしれない。南沢教授に紹介してもいい。丹野美春と議論させてみたい。

「そうだよ。言葉の進化さ。もし言葉を持っていなくても、環境や場所によって進化が始まって、有袋類がほかの地域の動物たちのようにニッチを埋めて進化したように、イルカのヒレと魚のヒレが似ているように、そうして言葉が発達したんじゃないかと、俺はそう考えたのさ」

「どちらが先だと思う？」

「何が、」

「人類が分化していったとき、すでに言語を持っていたのか、それともそのあとか」

「それはわからない」

「いいんだ、南波、あなたの意見を聞きたいんだ」

微かに重油が燃える臭いがした。港のタンクがまだ燻っているの

かもしれない。これが軽油の臭いなら、敵の戦闘車両の残骸の臭いだ。

「いま、世界にはどれくらいの言語が存在してるんだ？」

「百年前には、二八〇〇の言語があると言われていた。今では八〇〇〇種は存在しているだろうと思われてる」

「そんなにあるのか」

「大まかな分類ならもう少し減るだろう。方言みたいな言語も全部カウントしてるからな」

「すると、あなたの出身地の北部自治域と俺の出身地の奈野倉岩も別々言語ってことになるのかな」

「私たちの言葉は、文法や語彙に共通項がかなり多いから、方言による分類はされていないよ。ただ、私たちの言語には類似語がない孤立語だと考えられている」

「そうなのか」

「湾口域や羅の言葉にも似ていると言われてきたが、文字体系の発祥が同一で、それをこの国の文化が拝借して発展しただけだと思う。だから、湾口域や羅の言葉とは別系統の言語なんだよ」

同じ文字を使っているながら、友好国であった歴史はただの一度もないという不幸な国際関係。東龍海を挟んだ歴史的大国の湾口域と、その属国・羅。我が国と戦火を交えたのも一度や二度ではない。言語は別系統だが、人種的には同一とみなされている。DNA調査でも、「同じ種族」と呼べるほどに分化してから歴史が浅いそうだが、文化や文明、価値観の乖離は著しい。もはや同居する余地はなかった。

「なぜそんな数の言葉があるんだ、」

「神が、混乱させるために言葉を乱した」

「それ、『西』の宗教だよな」

「私たちにはなかなか理解できない教義だけど」

私たちの国に根付く土着の宗教は、あの密林に住むアツポヤ、コルテスの奥地の部族のように、山や河、森や生き物すべてに精霊…

…私たちはそれを「かみさま」と呼ぶ……が宿ると信じるアニミズムが強いものだ。孤独な神を戴く国とはそもそも価値観は相容れない。その点、もしかすると私たちは、精神的文明に属するのかもしれない。ならば、この星を何度も蒸発させ得る核兵器を保有し、地形を変えることが可能なほどの艦砲射撃を得意とする戦艦を持ち、町を焼け野原にできる爆撃機や89式支援戦闘機のような芸術品を生み出す私たちの「文明」は、むしろ属する世界としては異質なのかもしれない。

二百年前まで、この国は一人の帝を頂点として、武家が政治を司る軍事国家だった。それがデモクラシー革命で体制が変わった。しかし国民は過去も今も自然とともにあった。豊かな自然だ。豊かすぎる故に災害も多かったが、それすら飲み込んで私たちは国土ともにあつた。

帝は民の安寧を祈り、君臨すれども統治はしなかった。統治したのは生々しくも下世話な政を行う武家政権だ。この国はそういう国だ。いままも首都の御所には帝がいる。数千年前から続く血筋を護り、祈り続けている。政権を担う政治家たちの大部分は、かつての武家政権の血を引いているが、連邦国を始めとするデモクラシー革命を経て普通選挙によつて国政は支えられる。

「不思議な国なのかもしれない」

「唐突に、」

南波が歯を見せた。

「私たちの言葉のことを考えていたんだ」

「お前はどうかんだ。言語と文明は。人類は言葉とともに進化したのか、言葉があとからついてきたのか」

私はしばし考えた。どちらだろう。そして気づく。

「考えてる。……けど、南波、」

「なんだ」

「あなたは、記憶をいくつまで遡れる？」

記憶。イメージとしての記憶と、言語を介した、言語をメディア

とした記憶。

「時系列で話せるか」

「たぶん、」

南波は無精髭が伸びる顎を指でなぞる。

「ここに傷があるんだ、」

「見えない」

「三歳の時、転んで切った。痛かった。病院に行った。接着剤でくっつけられた」

「ああ、縫合に使う奴だね」

「それは憶えてる。でもそれより前のことは憶えていない」

「南波、言葉はいくつに覚えた」

私が訊くと、さすが、質問の意図を理解してくれているようだ。

「三歳頃さ」

「わかるな」

「記憶は言葉で補強されるってことか」

「そういう説があるのさ。だから、言語化できない、味覚とか嗅覚の記憶は、さらに遡れるんだそうさ」

「そうなのか」

「そうらしい」

「サケの燻製の味とか」

「そうさ。重油が燃える臭いとかだ」

「なるほどな」

言つと南波は立ち上がった。

「すっかり目が冴えちまったぜ」

「歩けるな」

「姉さんこそ」

「行こう」

「俺の武器を調達したい」

南波はCIDSを下げていた。

「アルファの坂崎が、あの交差点の向こうにいた」



「見つけたのか」

「マーカが反応した。悪いが、奴の装備を借りていく」

南波はローレディで拳銃を構える。私はあとから、ライフルを同じくローレディにして、続く。

三日月が美しい。

美しい、としか形容できないいまの私の精神状態を、残念に思う。

普段なら、きっともつと気のきいた形容ができるのに。

「そうだ、」

「なんだ、入地」

入地。私の名字。南波はすでに臨戦態勢になっている。

「この国の言葉には、自然を形容する語彙が飛び抜けて多いんだぞうだ」

「だと思ったよ」

南波は囁くように言うと、あとはもう一言もしゃべらなかつた。

私も。

夜が明けるまで、もう、しゃべらない。

心の裡で、この世界を讃えることにした。

敵兵の死体と戦闘車両の残骸が散らばるこの町で。

国道といっても、簡易舗装に近い粗末な道路だ。幅員だけは本土のそれよりずいぶんと余裕を取って作られているが、それは単にこの地方の開発が立ち後れていて、とにかく場所だけはいくらでも空いている、そういうことなのだ。

「いちばん近い拠点まではどれくらいなんだ、」

南波に問うてみる。もうすっかり夜は明けている。嵯峨精工舎製のごつい腕時計は、すでに午前六時。空は雲に覆われていて、西の空には鉛色の雨雲がどろどろと渦巻いていた。航空機や車両の音は聞こえない。国道はこのまま南へ、港湾都市である高泊へ向かう。

「歩いたら半日以上かかるだろうな。どこかで足を調達しないとな」

一時間ほど前、国道沿いに小さな温室を併設した農家を見つけた。建物に全く損傷はなかったが、住人はいなかった。敵……北方会議同盟国軍の侵攻を察知した政府の通達で、この地方全域の民間人は、友軍の戦線よりさらに南へ避難していることになっている。

温室にはトマトが鈴成りだった。温度や湿度管理、そして水や養分の補充など、すべて自動化されている。悪いとは思ったが、鈴成りのトマトをいただいた。二人で十個ずつ程度食べたところで、後から後から次々に果実は実ってくるだろう。生産性を極限まで高めたシステムなのだ。

私たちはトマトを本当に二人で二十個近く食べた。本当に旨かった。皮は固いが身が詰まっっていて、ずっしりと重い。かじると歯ごたえがあり、しかしびっしりと子房室にはジェリー状の種と果汁が満ち、酸味も甘みも強く、最初の二、三個は一瞬で胃に収ってしまった。

満たされた。その一言に尽き、食べ終わった私たちはどちらともなく顔を見合わせ、作戦中初めて笑顔を見せたのだった。

国道はまっすぐ続く。あたりはオチャコヴオ海が近く、平野と湿

地が広く続く。国道は保呂那川に沿っている。水の匂いがした。

南波は保持した4716自動小銃の光学照準器になじめていない。おそらく、照準調整が微妙に自分の失ったものと異なっているからだ。元の持ち主……坂崎第一七作戦隊准尉と55派遣隊の私たちでは、想定する交戦距離に若干の違いがあるのだ。アルファ・ブラボー・チャーリーの3班が所属する第17作戦隊は、いわば戦場への切り込み部隊だ。想定する交戦距離はかなり短い。対する私たちは基本的に敵の部隊との直接交戦を想定しない。不意の遭遇に対する可能性は否定しないが、正面からの戦闘は行わないからだ。

「情報が漏れてるのかね、」

南波は縫高町を離れるとき、かなり小さい声で呟いた。

「漏れる？」

「どういう理由かはわからない。完璧のはずだったんだ、この作戦は」

「私もそう聞いている」

「風連奪還戦までにはいい感じだった」

「発電所も確保できたからな」

縫高町から西に八キロ。敵部隊が侵攻後真っ先に確保したのが、風連の発電所だった。六〇万キロワットの発電機が二基。風連湖に面した設備は、高さ百メートル近い排気筒が目印で、遠くからもよく目立っていた。私たちは第17作戦隊と攻撃ヘリコプター隊の到着前、空軍による空爆から間髪を入れず空挺降下し、まずは発電所の奪還を行った。奪還できない場合は、破壊せよ。そうした指令を受けていた。

「壊さずにすんでほっとしてるんだろう、大方」

敵部隊はその主力を縫高町に差し向けていた。だから、私たちの隊が潜入したとき、かなり呆気なく敵は総崩れになった。もし手間取るようなら、戦闘爆撃機による発電所空爆を依頼しなければならなかった。そうしたら、私たちも施設ごと消し飛んでいた可能性が高いのだ。

ただ、そこからの筋書きが狂った。まず、私が敵の狙撃に遭い、大切なCIDSを破壊された。頭ごと破壊されなかったのは本当に幸運だった。そして私を援護しようとした南波が、別方向からLAMを放たれ、しかしあわてて発砲したらしい弾は大きく目標をはずれ、炸裂、爆風でバランスを失った南波は、やはり大切な4716自動小銃を川に落としたのだ。

「奴らの声、まるで聞こえなかったのが気味悪い」

国道を歩きながら、南波が振り返る。

「それこそ、コミュニケーションに音声を使わないんだ。奴らは」「北部空域には電子戦機が来てるはずだ。ECMであんなもの使えないはずだろう」

南波はかの同盟国が実用化したと言われているSVTS、無音声伝達機構ともいべき装置のことを言っている。考えるだけで相手に意思が伝わるという機械だ。親機が一人、あとは子機。アンテナはそれぞれの身体。通信範囲は半径最大五〇メートル。万一「親機」役の兵士が戦死しても、あらかじめ優先順位を指定した次の先任が「親機」となる。全員が親機としての機能を有しているが、さらに上位部隊や上官からの情報を受信・送信するのは、各ユニットで一名ずつに絞られ、情報の重複を避けるのだ。

考えるだけで相手に意思が伝わる。耳が聞こえなくても相手の意思が自分に届く。ある程度、装備される肉体側にも加工が必要らしいが、簡単なものと私は聞いた。詳しい原理は、それこそ軍事機密のカーテンに仕切られて全くわからない。我が国も同じ技術の研究は進められているが、未だ実用化には至っていない。

「あれは、電子的な妨害……ECMにはかなり強いんだそうだよ。人間そのものにECMをかけても、『考えることを妨害』できないだろう？」

「より強力なECMをかければ、」

南波は国道を歩きながら、CIDSは装着していない。肉眼での索敵と、露出した耳で音を聞く。人間の感覚は案外精密にできてい

るのだ。

「そんな強力なECMをかけられたら、地上にいる私たちもフライになってしまう」

「そういうもんか」

「ためにしに海軍のミサイル巡洋艦に乗って、作戦行動中に甲板へ出てみればいい」

「健康に悪いんだな、」

「私は試す気にはならない」

「それにしても、思うだけで考えが相手に伝わるってというのは、気持ちが悪いな」

「作戦中は便利なんじゃないのか。無線に頼る必要がないからな」

「遠隔地の友軍とは伝達できるのか、それって」

「中継局があれば問題ないらしい」

「中継局？」

間に友軍兵士が一人でもいればいい。あるいは、五〇メートル以内にヘリコプターや戦闘車両がいてもいい。それで意思は次々に中継される。

「タイムラグってのはないのかね」

「反応速度は相当速いようだ。それぞれの個体との通信は、無線機そのものだから」

「本音と建て前はどうかやって区別するんだ？」

「何？」

「たとえばだ、」

南波は歩行速度をやや緩めた。

「よくあるじゃないか。姉さん、」

「なんだ、」

「口では、『入地准尉は親切で優しいです、おまけに美人です』って言ったとするだろう。けれど人間は卑怯だから、胸の裡では『入地准尉は厳しく冷酷な人間です。美人かもしれないけどツンツンしてます』って考えてるとする。SVTSではどちらの情報も伝達さ

れるんだ？」

「南波、私のことをそう考えていたのか」

「例え話だ、例え話」

「そのへんの原理も私は詳しくは知らないが、」

前置きしてから、私も南波に並ぶようにして、歩く速度を緩めた。だが、二人揃って同じ方を向くことはしない。できるだけ、草食動物のように視界を広く、耳をそばだて、異変があれば肉食動物のように瞬時に牙を剥ける体勢を維持しなければならない。南波に近寄ると、彼の匂いが漂っていた。汗と、火薬や燃料と、微かなトマトの残り香と、彼自身の固有臭。おそらく私も、人間である前に動物である、生き物らしい匂いがしているに違いない。実際、匂いが強いことは野生の世界でも有利にはならない。草食動物の糞はさほど臭わないが、食べ物や腸内細菌の影響だけによる帰着ではない。「臭い糞をした個体が淘汰された」から、「臭くない糞をする個体が大多数を占めている」のだと考えられるのだ。私たちの社会でも、体臭が強い個体はあからさまに阻害される。何を持って悪臭とするかいい匂いだと認識するかは、それぞれ個々人の意識そのものに依存するが、しかし大まかに、強い匂いを発する個体は避けられる。「発声しようとする『考え』と、お前の言う『胸の裡にしまっておこう』とする『考え』は、脳で処理されて『出力』される直前で、選別されているらしい、そういう考えがあるんだ」

「どういうことだ？」

「『南波少尉は頼りがいのある上官だ』と私が考えたとして、同時に、『頼りがいはあるが何を考えてるかいまいわからない軽薄な男だ』と考えたとする」

「入地、お前そういうふうに思っていたのか」

「例え話だ、例え話。気にするな。……で、実際に音声化して相手に伝達しようとする言葉が『頼りがいのある上官』の方に決定したとする。すると、ブローカ野……運動性言語野で処理された情報が、声帯を発振させて、音声にするわけだ。脳の中で『何をしゃべろう

か』、きちんと選別されてるんだ」

「だから、いわゆる『心の声』は伝わらないってことか？」

「そこなんだ、」

私は話しながら、4716自動小銃のグリップから右手を離した。グラブをはめてはいるが、さすがに五指が同じような形で緊張してしまい、痛みを感じていた。

「おそらく、これは私の推測だけれど、同盟軍のSVTSを使用するに当たって、相当な訓練が必要はなすんだ。それこそ、反射速度や伝達速度からすると、あんたの言うとおり、『考えるだけで考えが相手に伝わる』くらい、精度は高いはずなんだ。するとだ、」

「伝わらなくてもいい『考え』が伝わってしまう？」

「そう思う。だから、本当に必要な、相手に伝えようとする『考え』を選別し、送信しなければならぬはずなんだ。それにはある程度の訓練が必要だと思う」

何度か右手を握ったり開いたり繰り返して、血流を促して、また私はグリップに手をそえた。何も、四六時中グリップを握る必要はないのだ。危機を感じて、即座に発砲できる体勢であればいい。もちろん、発砲する瞬間まで、トリガーに指などはかけない。

「さつき話した運動性言語野だが、」

南波も見るとグリップから手を離し、手のひらを広げたり閉じたりしている。お互い疲労はたまっている。できればここに座り込むか大の字になって休みたい。けれどこれは心の声だ。本音で願望だが、実際に行くことはしない。本音と建て前だ。

「あの部位は、言葉を話したり、文字を書いたりするときに活動する部位なんだ。運動性言語野が活動しているということは、ようするに脳が何かをしゃべるか書こうとしていると判断している。大まかにだが。だからおそらく、同盟軍のSVTSは、その部分で動作を確認しているんじゃないかと思う」

「訓練をした上で？」

「そうだ。訓練をした上で」

「難しいんだな」

「だが、私たちが相手に意思を伝えようとすると、近くなら声を出す必要がある。これは戦闘中はリスクだな。敵にも聞こえる。遠隔地の友軍と話すなら、無線通話するしかない。CIEDSは、囁くような声も拾って相手に伝えてくれるが、プレストークボタンを押すだけのチャンネルはどうするのだ、そうする手間はある。だいたい、装置が故障することだってある。手順が増えればリスクも増える」

「その点、奴らのナンチャラはその心配がない？」

「相当な技術的試行錯誤はあったんじゃないかと思う。そもそも電源は体温を利用してはいるって話だ。どういうモニタリングになっているのかもよくわからない」

「鹵獲した個体はいるんだろう？ いくら何でも」

「捕虜から装置そのものは回収されているが、これがどういう手順なのか、システムそのものは見事に破壊されていて、研究ができないそうさ。おそらく、」

敵の手に落ちると判断された瞬間、何らかの回路を兵士個人の判断で作動させ、肝心要の主要部を「自爆」させる機能も内蔵されているのだ。考えるだけで意思が伝達される装置だ。「考えるだけで自爆する」安全装置がついていてもなんの不思議もない。ただ、その誤作動によって、作戦行動中に機能が失われる事故も想定される故、私は彼らとその装置を戦場に投入するにあたり、相当な研究と実験が繰り返されてきたのだと想像する。そして、ある程度の犠牲もあつたはずだ。同盟国はそういう国だからだ。

「どの程度まで配備が進んでいるのかね」

南波。

「少なくとも、こちらに来てから私たちが遭遇した部隊のほとんどは、会話らしい会話をしていなかった。だよな、」

「そうだな」

「通信傍受もできなかった。機械的無線機を使っていないんだ」

「そうらしいな」



「通常型の衛星通信や、航空機だとか戦闘車両どうしの通信は普通に傍受できたから、人間同士の会話にのみこれは使われているんだろっ」

「そっちに転用した方がメリットはでかいと思うんだがな」

「暗号の問題もあるんだろっ。機械が考えるわけにも行かないのだからっし。通常の通信システムとは原理からしてまったく違うはずだ」

「そのわりに、俺たちのEMP攻撃で、連中のへりも車両もみんな黙ってしまったな」

「人間にEMPは効かないが、機械には効くからな」

「おかげで今俺たちはここに居るわけだ」

確かにそうだ。風連奪還戦で発電所を確保し、当初優勢だった戦闘が、SDD-48の登場と友軍のAH全滅により、戦況はひっくり返ってしまった。本来であれば、私たちの55派遣隊と坂崎たち第17作戦隊の混合部隊は、縫高町の港施設をさらに確保、敵部隊が占拠していた鉄道施設も解放する予定だったのだ。近接航空支援はあくまでも最終手段だった。奪還できなければ破壊せよ。そういう任務だからだ。EMP攻撃は当初から予定されていたが、それも保険のひとつだった。本来は友軍のAHが敵の部隊と車両を無力化し、そこを私たちが占拠する予定だったのだ。が、AHは川に沈み、第17作戦隊のほとんども、SDD-48の25？機関砲の餌食にされ、EMP攻撃で沈黙した敵戦闘車両の目を盗んだ私たちがあの現廃墟元病院に逃げ込んだ。生き残りで少尉でもある南波は、「近接航空支援による目標すべての破壊」を決意した。EMPダメージから回復した敵部隊が息を吹き返し、私たちが殲滅すれば、結果的に発電所も再度奪還され、作戦は失敗に終わるところだった。結果、町は味方の爆弾で壊滅、港も木っ端微塵、建設されて半世紀近く、空沼川の要衝として物流を支えていたあの鉄橋も落としてしまった。再建には相当の時間と労力と金がかかる。

「入地、」

不意に、やや緩んでいた南波の表情がふたたび引き締まった。

「私もわかる」

遠方から振動が来る。足許から伝わるそれは、装軌車両が走行する振動だ。

見ると南波はすでにCIDSを装着していた。

「戦闘情報は、」

私が訊く。訊くしかない立場がふがない。

「まだ>STANDBY<だ。情報の更新がない」

「戦車と二人で交戦はごめんだ」

「俺も同感だ、」

生身の兵士二人が自動小銃と拳銃だけで戦車に立ち向かうのは、もはや自殺そのものといつていい。足許から伝わる振動も、国道のカーブの向こうからすでに耳に届いてくるエンジン音も、明らかに戦闘車両、それも戦車の類なのは明白だった。

「一個中隊規模だな、これは」

ぼそぼそと南波が言う。私たちはすでに路上からはずれ、国道の盛土に伏せていた。ずいぶん生長したフキが生えていて、鼻先で香った。蚊がぶんぶん飛び回っていて不快だった。

「南波、」

「とりあえず、森まで退くか」

「IRで補足されたらおしまいだ」

「ここにもな」

それでも私は絶望など全く感じなかった。死の恐怖を医官たちによる「カウンセリングの名の下に行われる洗脳」である程度取り除かれていたというのもあるが、しかし今の私は戦車の振動を感じて死ぬ気がしなかった。この、「く気がしない」という感覚は重要だ。これこそ訓練と経験で鍛え上げ、作戦行動のサポートにできれば心強い。もちろん感覚で動いてはいけない。南波はどちらかというとその気があるが、感覚を頼りに行動するのだ。第六感の類では決してない。大仰な云い方、私たちは戦士であり、「戦士の勘」は職人たちが手触りだけで十分の一ミリ単位の加工をするように、経験と

鍛錬で培われる裏付けのあるものなのだ。いずれこうした感覚も数値化され、同盟軍のSVTSのように具現化されるのかもしれない。いくつかの要素を絡め合つて、私は「死ぬ気がしなかった」。

妙な強気とともに私が4716自動小銃を伏せ撃ちの体勢で構え、光学照準器で拡大された国道のカーブを覗いていると、隣にいる南波が安堵の息を漏らした。

「南波？」

私が声をかけると、CIDSを降ろしたまま、口許だけ笑った。そして、立ち上がった。

「南波、」

あつげにとられて私が見送ると、

「入地、大丈夫だ。あれはフレンド（友軍）だ」

私は返事もせず、南波に続いて国道の路面に上がった。カーブまでは四百メートル程か、森の木々の上に、うつすらと排気煙が見えた。エンジン音が高まる。ようやく私も安堵の息をついた。

「97式だ、」

南波が歯を見せた。やたらと白い。絶対に目立つ。

「戦闘情報は、」

「更新された。第72戦車連隊が北へ向かっている。第721戦闘航空団が完全に航空優勢を確保してるそうだ」

戦車部隊はもうカーブからその車体を覗かせていた。一両約五〇トン。昨日89式支援戦闘機が縫高町にばらまいたGBU-8が二〇トン。一両でその倍近い重さ。爆弾の量を多いと見るか、戦車が重いと見るか。

97式主力戦車は水冷2ストロークのディーゼルターボエンジンで独特の音がする。エンジン音が耳に届けば、私も戦闘情報がなくても安心できた。戦車部隊が自走しているということは、それでもやはりこのあたりは最前線に近いのだ。

「電子マーカを発報した」

南波が言う。いわゆるIFF（敵味方識別装置）を私たち個人も

装備している。それはCIDSに頼る部分が大きいが、生体マーカとして体内にセットされているチップもある。それがなければ、いきなり味方に射殺されても文句は言えない。昔の戦場のように、合言葉を使い合う時間的余裕はない。南波はさらに航空部隊からも認識できる精度がある電子マーカで戦車部隊に存在を知らせたというのだ。

97式戦車は遠くから見るとコンパクトにまとまった形をしているが、近寄ると大きい。鉄の塊といった印象がある。44口径120?の戦車砲は強力で、昨日89式支援戦闘機に粉碎された敵のT99型戦車（戦車はもともと航空攻撃には弱い）を真正面から撃ち抜けるのだ。

「ハケンか？」

戦闘の戦車が停止する。続く車両も停止する。行軍中の各車両はデーターリンクで繋がっており、その動作に乱れない。砲塔のハッチから顔を出したコマンドが怒鳴る。

「55部隊D中隊の南波少尉」

「第72戦車連隊第1中隊の小谷野だ」

「入地、中隊長だ、大尉だ」

南波が私に囁く。CIDSが普及してから、階級章が目立たなくなった。特に戦闘服の階級章のわかりづらさと言ったらない。メリツトは、狙撃されづらくなったことだ。

南波が軽く敬礼した。私も倣った。谷野が砲塔から私たちをわずかな時間見下ろして、そして降りてくる。

「縫高町作戦は終了したようだ」

小谷野は機甲部隊用CIDS（狭い車内での使い勝手を考えて薄型軽量。うらやましい）を跳ね上げて、笑いじわが目尻に刻まれた顔を緩ませた。

「ギリギリだったが」

「ご苦労だったな、」

言葉に暖かさがあった。おそらく、それは小谷野の言葉に、北部

自治域特有のアクセントがあつたからだ。「お国訛り」は暖かい。不思議な感覚だ。

「南の方はどうです、」

南波が訊ねる。小谷野の戦闘服に汚れはなく、乱れもなかった。

片手に4716自動小銃の短縮型「K」タイプが握られている。銃身を切り詰め、ハンドガードも短く、ショルダーストックが折りたためるタイプだ。弾倉も短い二〇連発タイプを装着する。戦車乗組員の自衛用火器だ。従って光学照準器も装備されないことがほとんどだ。小谷野のライフルにもアイアンサイトしかついていない。

「我々は高泊から来たんだ。まだ敵の姿を見ていない」

「地上制圧に段階が進んだってことですな」

「航空優勢が確保されたからな、縫高町はどんな様子か聞かせて欲しい」

小谷野は自分の車両の陰に入るようにゆっくりと歩いた。私も南波も続く。それにしても戦車の存在感と安心感は凄まじい。剥き出しの敵意という感じがする。停車していても、アイドリング中のディーゼルエンジンはかなりうるさい。が、いまはそれが頼もしく感じた。なんとも男性的だ。

「港も橋も落ちました。敵の部隊に残存勢力はないはずですが、おそらく一両日中、国境線を越えた部隊が南下してくると思われれます。発電所は無傷で奪還しましたが、」

「残値部隊はいるのか」

「残念ながら、敵のSDD-48にやられまして」

「いないのか」

「発電所の起動コードは我々で奪還しましたから、仮に敵増派部隊が再度発電所を占拠しても、発電機は絶対に動かさせません」

そう。いま風連発電所は無人だ。もともとほとんど無人に近いような施設で、安全管理のための運転員が少数勤務しているに過ぎなかった。敵は運転員ごと一時奪取したが、それは発電機それぞれに振り分けられた独自の起動コードが必要だからだ。起動コードは一

種のパスワードだが、非常に難解な文章の体をなしている。発電機本体からの読み出しも不可能だ。子どもに絵本を読み聞かせるように、発電機に起動コードを読み込ませて、子どもが童話の魔法使いに目を輝かせる反応のように、発電機も起動コードに「感想文」を返す。それで発電機は起動するのだ。

「発電機は、」

「止まっています。冷却器だけ動いています」

「我々の目的地が風連だ」

「再度確保せよ？」

「いや、陣地を構築する。縫高町にも橋頭堡を築く予定だ。我々の後続に工兵隊が来る」

話ながら、南波は明らかに落胆した表情で、それを隠さないから余計におもしろかった。小谷野はおそらく、南波が戦闘で疲労しているように見えただろう。私はあくまで無表情だ。いちおう二人の「上官」を前にして、直立不動の姿勢を保っていた。

「後続隊の到着は、」

「半日ほど後だと思う。君らはどうする」

「高泊を目指しています」

せつかく「クルマ」に出会えたのに、彼らは北へ向かう。便乗もできない（戦車はもともと定員での運用だから、私たちが「乗る」なら、車体にしがみつくしかないのだが）。南波はそれで落胆しているのだ。まだ、歩くのか、と。それでいいじゃないかと私は思うのだ。そもそも「南へ向かう車両部隊」が来たら、それはすなわち同盟軍……敵の部隊なのだから。

「したつけ、俺らに行くから」

情報交換もCIDSに表示される以上のものはあまりないと判断したようだ。小谷野が南波の肩を叩いた。ねぎらいのつもりだろう。「ハケン」の通称でひとくりにされる私たちら5派遣隊の任務は、歩兵部隊や戦車部隊からすると、明らかに正規軍のそれとは思えないのだろう。共通の話題も少なく、お互いに居心地がよくな

いのだ。戦車のドライバーもハッチを開けてこちらをうかがっていたが、黒ずくめに近い戦闘服姿の私たちを見て、稀少動物でも発見したような顔をした。

「武運長久を」

南波が使い慣れない社交辞令を口にした。いや、もしかすると本気の言葉だったのかもしれないが、私は思う。

「自分の言葉を使えばいいのに」

排気煙を色濃く吐き出し、戦車部隊は国道を北へ向かって再出発した。小谷野大尉が私たちに砲塔上から敬礼した。私も南波も背筋を伸ばし、敬礼した。そもそも私たちの部隊は、攻撃目標を選定したり、不意に遭遇した敵を殲滅したりするだけで、友軍や上官にきっちりした敬礼をする機会も少なかった。訓練はもちろんするが、駐屯地や司令部に詰めている時間などほとんどないからだ。

「いいんだよ、言ってみたかったんだ。『武運長久』。カツコイじゃないか」

陸軍には武家出身の兵士が多い。設立の経緯からどうしてもそうなる。刀を銃に持ち替えても、彼らのまなざしは私でも怖いときがある。郵政局配達員の父を持つ南波や、開拓民の子孫である私には流れていない血だ。そうした血の濃さもまた、経験的にわかるようになってくる。それは、帝国国民として私たちに染みついた一種の機能なのか、それとも後天的なものなのか、わからない。

南波も私も、何となく敬礼したまま、国道を走って行く戦車部隊を見送った。

エンジン音はしばらくあたりに響いていたから、野鳥がずっと囀っていたことに気づくのは、私も南波も、ふたたび南へ向けて歩き始めてしばらくたってからだった。

保呂那川の川幅は三百メートルほどで流れは緩やかだ。低湿地が広がるため、海も近い。数万年前の温暖期には、辺り一帯は海底だったようだ。

戦車部隊から別れて私たちはまだ国道を南下していた。徒歩での移動だから、車両でなら五分程度の距離を一时间以上かかる。西から広がりつつある雨雲はすでに頭上いっぱい、いつ雨滴が落ち始めても不思議ではなかった。空気に水の匂いが混じっているのは、目の前の保呂那川や湿地だけのせいではないはずだ。空気に混じる水の匂いは、はっきりと雨の予兆だった。私と南波は、もう昨日から続いている雑談をする気力もかなり失せていて、しゃべる気力を、周囲の警戒に振り向けていた。CIDSや生体マーカの発信から、私たちの位置を本隊は間違いなく把握しているはずだが、いまだ何の連絡もない。自力で帰れ、そういう意味か。

そのまま昼頃まで歩き続けた。トマトのおかげで、水分と栄養はなんとか足りていたが、足の筋肉に蓄積された乳酸の分散が十分に行われず、ようするに両足がかなり痛かった。訓練や実際の作戦行動でいやというほど経験を積んでいるが、戦闘服の内側にこびりついた様々な臭いと、そして立ち上ってくる自分の体臭と、脂っぽい顔や髪の感触がとにかく不快で仕方がなかった。川に飛び込んで水浴びでもしたい気分だったが、以下の二点から断念した。

ひとつ、水温が十度前後であること……調べずとも北緯五〇度、初夏も初夏、もしかするとまだ晩春であるかもしれないこの地方のこの季節、流れる川の水に入るのはいろいろな意味で自殺行為だ。ひとつ、南波がいること……説明不要だと思う。

赤外線をほとんど放出しない特殊素材で織り込まれた戦闘服もすっかり薄汚れていた。もともと夜間戦闘や隠密作戦に適した色調の迷彩だから、真っ昼間の国道上を移動していると目立つ。ほかの陸



軍兵士が装備する迷彩色ともパターンも違つたため、森の中や茂みの中でもあまり迷彩効果がない。本来は風連奪還戦から縫高町攻撃を経て、味方の装甲ヘリコプターと合流する予定だったのだ。それが、部隊の壊滅と支援戦闘機による攻撃でふいになつた。

「南波、」

前に行く南波の足取りはまったく変わらない。たいしたものだと思う。南波は陸軍の一般部隊……歩兵部隊だと聞いている……からの選抜を経ている。いくら志願した、いくら体力に自信があるとはいえ、私の肉体能力と南波のそれでは比較にならないのかもしれない。身体の大きさも違つ。筋肉量も違つ。勝っているのは体脂肪率だ。だからもしこのまま私たちが補給もなにもかも絶たれ、無人島に打ち上げられた漂流民の如く、ひたすらいつか来るはずの救援を待つことになつたとしたら、そのときは私が有利になる。数日か、数十時間。余分な脂肪がまったくなく、どうやら遺伝子的にも生命力が弱いとされる「男性」の南波より、生物学的裏付けがある強さを持つ私の方が、生き残ると思う。けれど、生き残るのなら二人同時だ。私たちは最小行動単位……チームだからだ。合理的に考えてチームの再構築にかかる時間とコストも馬鹿にならないのだ。

「南波、」

「聞こえてる。気にせずしゃべってくれ」

「私たちの位置は、」

「ビーコンなら出しっぱなしだ」

「現在位置を知りたい」

「一時間前にも知らせた」

「教えてくれ」

「一時間前から六キロ南下した。……大丈夫か」

「言いながらも南波は歩き続ける。」

「何が」

「歩けるよな、」

「歩ける」

「なら安心だ」

南波は一度も私を振り向かなかつた。信頼されているのか、振り返る余裕を惜しんだか。どちらでも構わないと思った。

そして私たちは保呂那川沿いの国道をまた二時間ほど歩いた。途中で二回休憩した。今が八月、せめて七月なら、と私は思った。森の中に多少は食べるものが実っているはずだからだ。今の森の中は、蚊とダニしかない。好んでこんな深い森に入ろうとは思わない。そう考えて、私自身がかなり追い込まれてきていることに気づく。作戦行動中、食べ物が無心しようとする欲求など滅多に抱かない。まだ南波と言葉の話をしている方が健全だ。

ぼつりぼつりと雨が落ち始めていた。

葉を広げたフキや、森の木々の葉に雨滴がはね、簡易舗装の色がゆつくりと変わっていく。まずい、と思った。私たちの装備……特に戦闘服は防水機能がない。この気温で雨に打たれたとすると、瞬く間に体温を奪われる。体温を維持するのに必要なのはエネルギーだ。高カロリー食料がなければ、私たちは行軍することもできなくなる。

やむを得ず、雨宿りを南波に……南波少尉にリコメンドしようと思ったとき、風の音や雨音とは異質の、爆音と呼んでさしつかえない暴力的な音があたりに響いた。雷鳴に似ていたが、長く尾を引いている。雷鳴でも爆発音でもない。南波はすでに身を伏せていた。もちろん私も同時に同じ姿勢を取る。

「なんだ、」

私は>野生の勘< を保持している南波に確認する。

「脅威としての警告は来ていない。友軍機じゃないか、」

音の発信源が航空機であることは間違いがない。

「北からだ、」

北から。北から飛来する航空機は、敵か味方か、脅威対象でなければ味方機だ。

「見えた、（方位）二七〇」

CIDSを用いなくても、実は南波より私の方が視力は上だった。  
「俺も見えた」

CIDSが捉えると、戦闘情報が付加されるので今度は南波が有利になつてくる。

「黒煙を曳いてる」

かなり距離はある。が、飛び方がおかしい。あの黒煙は、ジェットエンジンの排気ではなさそうだ。

「被弾してる」

南波が言う。CIDSが光学補正をかけたか、サブ窓に衛星からの情報を表示させているか。

「一機、64式だ」

私にもわかる。空軍の64式戦闘爆撃機。89式支援戦闘機がある程度空中戦も考慮した軽快な機体だとすれば、64式は地上や水上目標の殲滅のために、要撃機並みの強力な双発エンジンと、低空侵攻に適した翼面荷重の低い主翼、二枚の垂直尾翼を備えた機体で、サイズも大きい。空飛ぶ戦車のような存在だ。その黒っぽい迷彩もはっきり見えるが、なにより左主翼後方から黒々とした煙を吐き出している。エンジンは生きていようだが、双発のどちらかはおそらく死んでいる。

「左の水平尾翼がない、主翼にも穴が空いてる……下からやられたな。あれは墜ちるぞ」

南波が伏せたまま言う。縫高町から私たちがいるこの場所まで、三六キロ弱。私たちが夜明けから歩き通した距離も戦闘機なら一瞬だが、さらに北の国境までは優に二〇〇キロはある。地上部隊が展開したのは風連のあの発電所の周囲だが、航空勢力はさらに北側で散発的な戦闘を行っている。64式が的拠点を爆撃し、89式支援戦闘機がさらに小さな拠点をしらみつぶしにする。81式要撃戦闘機はその上空をカバーする。おそらくオチャコヴォ海には海軍の機動部隊がいるはずだ。艦載機も攻撃に加わっている。

「入地、ここはまずい」

肉眼でも垂直尾翼に描かれた部隊マークや機種の種類が読めそうな距離に来ていた。恐ろしく高度が低い。エンジンに致命傷を抱えていて、ここまでは位置エネルギーやら運動エネルギーやらをなんとか犠牲にして飛んできたが、そのどちらもいま失われようとしていた。

「あ、」

国道の盛土に伏せ、見上げたところで戦闘爆撃機は最後の力を振り絞るように機首を空に向けた。対地速度はほとんどゼロに近い。失速だ。黒煙の元から火が出ている。機体後部はほとんど炎に包まれている。そのまま機首が上を向いたまま、尻から墜ちる。針葉樹林帯と、やや川幅が広がった保呂那川。おそらく機体は川に墜ちるだろう。それを予期した鳥達が一斉に羽ばたいていた。

「まずい、爆装してる。投棄しなかつたのか、」

機体の腹には、攻撃で使い切らなかつたか、あるいは使い切ろうとした矢先に被弾したのか、89式支援戦闘機のGBU-8がかわいらしく思えるような、真正銘の爆弾……GBU-4……が何発かぶら下がっているのが見えた。数える暇はなかつた。私も南波も、頭を抱え、背を丸めて、盛土に伏せた。機体が後ろ向きにゆっくりと墜落をはじめたとき、キャノピが吹き飛んだ。ここまでなんとかだましましたし機体を制御してきたパイロットが、とうとう万策尽き、機体を捨てる決心をしたのだ。続いてコクピットから座席が射出された。そこから先は私は見ていない。首を守るため両手で頭と首をしつかり押さえて、口を開き、耳もふさぎ、口を開いた。近い。衝撃波でえらいことになる。

爆発。

地面がはつきり揺れた。耳をふさいでいても、凄まじい音だった。耳というより、私の身体そのものに音圧として伝わってくる。全身を張られたような衝撃波。続いて、驟雨のような水しぶき。顔を上げることができない。何が降ってくるかわからない。機体の破片が命中しないことを祈った。

「入地、」

素早く、南波が私に覆い被さってくるのがわかった。バラバラと何か降ってきている。金属音。おそらく機体の破片。バシヤバシヤ音を立てるのは川の水、泥炭、あるいは魚。

あまり長い時間ではなかったと思う。南波が伏せていた身体を起こし、私も目を開けた。とっさに全身を確認する。耳に蓋をされたような違和感があったが、音は聞こえる。視界も問題なかった。南波も同じように全身を点検していた。炸薬が燃えた独特の臭いと、航空燃料の臭い。そして、川底から巻き上げられた泥の臭いがする。「入地、」

南波がこちらを見る。俺の目は大丈夫か、俺の耳から血は出ていないか、俺の口から……、白目と黒目のくつきりしたいつもどおりの南波の目がそういつている。私も同じように南波に訊ねる。私の目は破裂していないか、両手両足はくつついたままか。

「近かったな、」

半身を起こして、南波。それでもまだ距離は離れていた方だったかもしれない。二人とも破片の直撃も受けず、衝撃波で致命傷を負うこともなかった。近くに墜落したように見えだが、機体規模が大きな戦闘爆撃機だから、目視距離より実際のそれは離れていたようだ。川面は大きく波立ち、澄んでいた水は濁っていた。針葉樹林が一部なぎ倒されていた。「パイロットだ、」

南波が顔を上げた。鉛色の空に、パラシュートが二つゆらゆら揺れている。64式戦闘爆撃機は二人乗りだ。射出座席でベイルアウトしたのだ。高度ゼロ・速度ゼロ、機体の姿勢がいかなる場合でもパイロットを機外に射出してくれる空軍自慢の座席は、機体が真上を向いた不自然に姿勢にもかかわらず、きちんと機能したのだ。パイロットは針葉樹林のはるか上をゆっくりと降りてくる。彼……あるいは彼女が無事なのかけがをしているのか、それはここからはわからなかった。

「行こう、」

南波が素早く立ち上がり、駆け出す。風は弱いが、二つのパラシュートはゆっくりと流されている。ひとつは国道からさほど離れていない草原に降りそうだが、ひとつはそのまま湿地を越えて川に落ちる。

「入地、走れるか」

「大丈夫」

「安心した」

一人が着地した。もう一人が時間差で着水した。

「生きてるな、」

南波が国道脇に着地した一人に駆けていく。しっかりと両足から着地して、パラシュートに引きずられながらもコードを切り離そうとしている。もう一人は……、

「南波、」

着水姿勢もなにも考慮されず、まっすぐに落ちた。そして、そのまま浮かんでこなかった。意識がないだけなのか、あるいは……。わからなかった。

「遠すぎる、ダメだ……」

ボートも何もなく、一人が着水した位置は、岸から距離があつた。水温やこちらの装備を考えると、二次遭難のおそれが考えられた。

草原脇に着地したパイロットに駆け寄る。

「大丈夫か」

南波がパイロットの肩に手をかける。飛行服姿に航空ヘルメット。マスクをつけたままだが、ヘルメット・バイザが割れていた。割れた隙間から目が見える。薄い茶色の瞳。

「大丈夫、」

パイロットが答えた。マスク越しのくぐもった声だが、……女だった。飛行服のネームを見る。伊来中尉。階級章を見て、一瞬だけ南波が複雑な表情をした。この瞬間から、伊来中尉が上官になる。

伊来はパーソナルシュートを切り離し、ハーネスの類を解き、マスクをはずした。見ると、飛行服の背中側に血の飛沫が散っていた。

「けがはないか、」

南波がそれに気づいて訊く。

「私の血じゃない」

はつきりした口調。やや細かい声だったが、力が入っていた。

「後席のWSOだ……、ユサ……」

「とりあえず、立てるか」

「立てる、大丈夫」

南波が差し出した手を無視して、伊来は立ち上がる。

「陸軍55派遣隊の南波……少尉だ」

立ち上がると、伊来中尉は私よりも小柄だった。おそらくパイロット資格を得るには最低限の身長だろう。だが強い目をしていた。

「なぜこんなところにいる」

挑戦的な目をしていると私は思った。もしかすると、彼女……伊来は屈辱を感じているのかもしれない。そうかもしれない。乗機を墜としたのだ。クルーとともに。

「作戦行動中」

「たった二人でか」

伊来が私を向く。階級はいちばん上だが、おそらく年齢は一番下だろう。そう思う。

「仲間はいたさ。たくさん。あんたと同じさ、でも今は二人だ」

南波はこういうときの口調が軽すぎる。

「相棒は……」

伊来が歯切れ悪く言う。南波に対して彼の相棒は、という意味ではない。ようするに私のことを言ったのではなく、彼女自身の相棒を指しているのだ。WSO……戦闘爆撃機の兵装士官。彼女の後席。南波は言葉では答えず、もう一つのパラシュートが着水した水面を、右手の大きい動作で示した。泡立ち波立っていた水面はもう落ち着いていた。オレンジと白のストライプ模様のパラシュートが波間に漂い、萌葱色のマーカが水面を染めている。その様子を見ると、伊来中尉は硬く唇を結ぶ。

「気の毒だ」

南波。

「いや……、墜ちる前から、致命傷を負っていた。なんとか基地までたどり着きたかった……私の責任だ」

伊来はそれつきり口をつぐみ、パーソナルシュートに付属しているサバイバルキットやビーコン発信器を集めに廻る。私と南波も続いた。

「構わないで。一人でできる」

「気にするな、」

「食料が目当てならくれてやるよ」

「勘違いしないでくれ、フレンド（味方）だろう、」

サバイバルキットに付属している自動小銃を手に取る伊来。機甲部隊向けと同じ、Kタイプの4716。やはり光学照準器はついていない。そして、伊来がかぶっているヘルメット付属のCIDSは航空機搭乗員向けの仕様で、本体はあくまでも機体側にあり、彼女が身につけているのは子機だ。電源も供給されなければ、機能もしない。

「銃、撃てるのか」

南波。やめておけ、私は目配せをしたが、彼の態度は変わらない。軽薄なのだ。こういうときに。

「訓練は受けている」

「俺たちに任せろ、」

「つきまとわないでくれ」

「南波、よせつて」

どちらにしろ、彼女の装備は私たちのものと比較にならない。せいぜい数日分の非常食と、私たちのものより出力の大きなビーコンがある程度で、防弾機能皆無の飛行服に予備弾倉一本の自動小銃。信号弾も用意されているが、基本的には「待ち」の体勢だ。私たちが有利で「頼れる」存在なのは明白だった。

「伊来中尉、」



私がしゃべるしかない。

「55派遣隊D中隊の入地准尉です、」

伊来が私を向く。

「私もあなたも、立場はたいして変わらない。私たちも作戦中に装備をかなり失い、救援を受けることができなかった。ここから拠点まではまだ距離がある。一緒に向かいませんか」

「それには及ばない。空軍の救難機が来る」

パイロットはそれを信じて飛ぶという。残念ながら、陸軍の特殊作戦隊とはいえ、私たち一人の命の重さと、パイロット一人の命の重さを天秤にかければ、費用対効果でパイロットの天秤が大きく傾く。パイロット一人を養成するのにかかるコストは、戦車一両に相当するのだ。機体は再建すればいいが、パイロットを失うことの損失は計り知れない。だから、空軍はパイロットを決して見捨てない。

「伊来中尉」

「私はここで救難を待つ。装備もある」

「夜は冷え込みますぞ」

「訓練は受けている」

「一緒に行きましょう、伊来中尉。このまま歩けば、日が暮れるまではないちばん近い拠点にたどり着けそうだ」

「俺たちと一緒にの方が安心できると思うがな」

お前は黙ってる、言いそうになったが、仮にも少尉に対して准尉がそれを言っておしまいだ。伊来中尉の手前、まずい。彼女はエリートだ。私たちのように地べたを這いずり回る人間とは違う。感性も考え方も違うはずだ。その若さが何よりのエリートの証だった。「ビーコンを持って行けばいいんです。南波少尉が持ちますよ」

「おい、」

「行きましょう。ここは寒いです」

「なぜ君らはそう急ぐんだ、」

「私たちはまだ作戦行動中です。拠点に戻って、次の任務がある」

「私もだ……」

「上空から見えていたかどうか、この道路はいちおう国道です。たどり着けますよ」

できるだけ慎重な口調に努めた。こういうとき、同盟国のSVT Sがあつたらどうなつただろう。私の考えが彼女にすべて伝わつただろうか。別に見捨てて行つてもよかつたのだ。本当に救難機はここまで来るだろう。戦車部隊の小谷野によれば、航空優勢は確保されている。だから戦車が自走してここまで走つてきたのだし、ならば救難ヘリコプターも飛行できるだろう。ただ、

「失礼ですが、被弾したのはあなたの飛行機だけでしたか、」

訓練機が基地の近くの海に墜ちるのは違う。作戦行動中の戦闘爆撃機が、戦闘地域で被弾し、墜落したのだ。被弾する機体は彼女の機だけではない。もっと多い。当り前の存在なのだ。撃ち墜とされたパイロットが等しく同時に救いあげられるわけではないはずだ。救難隊がいつ彼女を拾い上げに来るのか、今日中なのか一週間後なのか、私は保証できないと思った。以前出会った元空軍パイロットのことを思い出した。救難を待ち続け、死の世界を覗いてしまった彼のことを。

「わかった、」

伊来は短く嘆息した。そして、かぶっていた航空ヘルメットを抜き、パラシュートのそばへ放つた。そして、サバイバルキットから、非常食を私に放つた。

「陸軍のハケンなら……風連奪還戦に参加したのか、」

伊来が訊く。

「まあ、そんなとこだ」

南波が答える。

「私は第735戦術戦闘航空団第8飛行隊の伊来だ。……木須加の製油施設を爆撃したのは私たちの飛行隊だよ」

風連奪還戦で、前哨戦として敵主力拠点を大規模空爆したのは64式戦闘爆撃機を主体とする航空戦力だ。私たちは発電所を攻撃したが、55派遣隊のA中隊は木須加の製油施設の奪取に向かつたの

だ。私たちは発電所の奪還に成功したものの、伊来が言うとおり、製油施設は奪還に失敗、「奪還できなければ破壊せよ」の命令通り、完膚無きまでに破壊されたのだった。発電所とは違い、盛大に破壊できる。闇夜を朱く染める炎は、私たちの部隊からも見えた。

「行こう、」

伊来は栗色のきれいな髪をしていた。ヘルメットを抜くと、肩まで伸ばした髪が風に舞った。彼女は数時間前まで、安全が確保された空軍基地にいたのだ。

「食べなくていいのか、」

南波が、私に放られた非常食を見て言う。

「私は、今朝基地でしっかり食べてきた。君らにやる。風連奪還戦は一週間前だった。君らはずっと作戦行動中だったんだろう、君らの方が必要だ」

「全部はいりません。あとできちんと分配しましょう、中尉」

私が言うと、南波はビーコンを拾い上げ、タクティカルベストに挟み込んだ。スリングを直し、私に目線で合図をくれる。出発しよう。

サバイバルキットはたいして重さもなかったが、私たちがバックパックを失っているため、どうしても搬送にかさばった。非常食は三人で分配して、国道をさらに南下する。

「伊来中尉、」

歩きながら私。先頭は南波、二番手が彼女、最後尾を私。装備や戦闘能力からすると、パーティの順序はこうなる。もっとも白兵戦に弱そうなパイロットを前後から守る形になる。

「なんだ、」

「今日の目標はどこだったんです」

「機密だ」

「話してくれよ、」

「なぜ陸軍に言わなければならぬ」

「どうせ戻ったらわかるんだから」

「では戻ってから確認すればいい」

「縫高町ですか」

「あそこにもう軍事目標は何もない。22SQの89FSが叩きつぶしたから」

22飛行隊の89式支援戦闘機。空軍的な口調。やはり私たちとは違う。

「AAA（対空砲）にやられた？」

南波は前を向いたまま。

「低すぎたんだ。……遊佐が警告してきたのに」

伊来は淡々としゃべる。もしかすると……、彼女は相当強いカウンセリングを受けている。パイロットは私たちとはまたまったく違う強いストレスにさらされる。それを緩和させるというより、意識させない方向で補強が入ると聞いたことがある。そのかわり、常に精神的抑制と補強をかけ続けなければならぬ。さもないと破綻する。だから、戦闘機のパイロットは、彼ら彼女らが駆る戦闘機と同じように、整った設備でのメンテナンスが欠かせない。

そしておそらく、敵の対空砲が強固なフレームで知られる64式を撃ち墜とすくらいの抵抗を示す場所というと、空沼川の河口からさらに洋上へ抜けた、メタンハイドレートの採掘施設に違いない。

私はそう直感した。地上部隊が接近できないため、もっぱら航空攻撃の反復が実施されている。

「任務の話は、またにしましょう、伊来中尉」

私の前に行く伊来の背中。派手に散った血しぶき。後席に乗っていた彼女のクルーは、座席が射出される前にきつと絶命していたに違いない。コクピットに命中弾があったのか、破片がキャノピを貫いたのかはわからないが。被弾と同時に召されたのだろう。

死の世界へ。

「空軍の知り合いから聞いたことがあります。あなたが知っているかどうか、」

「なんだ、」

「拠点まで歩く、その時間つぶしだと思って聞き流して下さい。聞いた話ではないんです。だから真に受けしないで」

「わかった」

パラパラと雨が落ちてきていた。飛行服姿の伊来はやはり寒そうだ。私たちは彼女の機体の墜落で水しぶきを派手に浴びていたから、すでにかなり寒かった。

「北方戦役での話です」

「ずいぶんと前の話だな、」

「十五、六年前か」

先頭の南波。しっかりと話を聞いている。

「そのときに戦ったパイロットたちの間で話されていたことです」

「空軍の」

「ですね、空軍の。……伊来さん、『死後の世界』ってあると思いますか」

雨音。

「死んだらどこへ行くのか、気になったことはありませんか」

「そんな話は今したくない」

「暇つぶしです。聞き流して下さい」

「気になったことなんかない」

「もし『死後の世界』……天国があるとしたら、」

南波がどんな気持ちで私の話を聞いているのか何となくわかった。また始まった。これだ。

「天国があるとしたら、どんな場所だと思いますか」

「知らない」

「おおむね、『天国』というくらいだから、それは空の上にあると思われる。これって、世界的にはなかなか普遍的なイメージなんですよ。逆に云うと、普遍的すぎて陳腐だけれど、」

足音。

「私たちの宗教でもそうだし、西のデウスを神とする彼らの宗教でも、死者が天へ上っていく宗教画がいくつもあります。だいたい空

の上に天国があると思われているわけです」

「毎日飛んでいるが、そんなものはなかったよ」

「私もそう思います。けれど、どうして『死後の世界』のイメージが、時も場所も隔たって共通、というか普遍的なんでしょう。不思議だと思っただことはありませんか」

「それは……。なんとなくそれはわかる気がする。入地……准尉、君も空を飛んでみたらわかる。雲の上には、確かにかみさまがいるような気はする。でもそこが天国だとは思わないけど」

「おや、伊来中尉、」

「南波、茶化すなよ……失礼、南波少尉」

「よろしい」

「私は戦闘機には乗ったことはありませんが。輸送機から空挺降下する前、空を見て、たしかに『天国があるとしたらこういふ場所かもしれない』と思ったことはあります。縁起が悪いのであんまり考えないようにしていますが」

塗り込めたような空。直視していると酔いそうなくらい白い雲。遙か高空を漂う彩雲、雲に落ちた輸送機の影と、それを囲む虹。地上の猥雑さなどかけらもない世界。

「お前そんなこと考えながら飛んでいたのか。勘弁してくれ」

「南波、ちよつと黙っててくれないか。私の講義を聴いていてくれ、私が言うと、伊来がくすりと笑った、ような音が聞こえた。

「でも、ほかにイメージがあるんじゃないのか」

伊来が言う。

「どんなですか？」

「……お花畑とか」

「なるほど」

「川を渡るっていうのもある」

「だから棺に硬貨を入れる風習がありますね」

「光が満ちた世界」

「そうですね。暗い天国はイメージとして斬新だけれど聞いたこと

がない」

「斬新……そうなのか？」

南波。

「南波……少尉、なにかほかのイメージでも？」

「昔読んだことがあるぜ。巨大な洞窟を住居にしている部族があった、その彼らの宗教では、死者は洞窟の奥に送られて、地下の世界で蘇るっていう」

よく知っている。バスコ文明の「地底の王国」の話だ。彼らは洞穴の多い地形で発達した文明を持ち、だから建築技術はほかの文明と比べてもつたなかつたが、建築に労力を割かなくてもよい分、文化的な面で特筆すべきものをいくつも残した。大規模な壁画は、中世西部域の教会に描かれた宗教画にも匹敵する彩色と筆致で研究者たちを魅了する。洞窟内で正確な彩色が行われたことも驚嘆すべきことだが（灯りの問題）、彼らの「神話」は、地下世界と深く関わっていることがめずらしい。そう、南波が言う、「地下の世界の天国」だ。

「俺は何度もケービングをした。けど、あれは人間の住む場所じゃないな。湿度は高い。コウモリだの地を這う無数のゴキブリだの、それを食らうやたらと足の生えた虫だの、得体の知れない気色の悪い生き物の巣窟だ。なにより健康によくないぜ。お天道様がそばにいてくれないと、俺はダメだな」

「私もだ」

伊来の口調が砕けてきた。やはり彼女は私たちよりも年少なのは間違いない。少女の面影が見え隠れする。するとやはり彼女はエリートだ。

「それにしても、南波少尉。洞窟の中に天国なんて、私は初めて聞いた」

よかった。心までガチガチでは、身体まで固まってしまふ。それでは拠点まで速度と体調を維持しながら歩くことすらままならない。「それはただ、例外だと思う。バスコ文明の場合は、地下洞穴が網

の目のように発達していたその特殊な立地から、生活範囲がどうしてもほかの民族より偏っていたからだ。そういう生活をしていれば、身近な場所から天国が続いていると考えても不思議はない。私たちの国でも、山がちな地域だと、伝承として、山の奥のどこかに死者の国があると言われてるし。

けれど、やはり多くの民族では、天国は地の底ではなく、空にあることが多い。伊来中尉が言うように、花畑があったり、北方民族だと、氷の世界の向こうに安寧の地があると信じられていることもあるけれど、それでもやはり光に満ちた世界だ」

「イメージが貧困なのかね、人間は」

「私は理由を知っている。それって、臨死体験……だろう」

伊来がためらいがちに言う。

「そうですね。いわゆる、ニア・デスという、極限状態で脳に麻薬によく似た物質が分泌されて苦痛を緩和する。その副作用的に、みな同じようなイメージを得て、それがおそらく全世界で普遍的な天国イメージができあがったのではないかと、そう言われていますね」「言われていますねってことは、お前の意見は違うのか」

「例外があるってことは、ちょっと違うんじゃないかと思うわけだ」「どういうこと?」

「伊来中尉、立ち止まっちゃダメですよ。疲れたら休憩します。あと一時間、行きますよ」

「すまない」

雨脚は強まることはなく、ぽつりぽつりと私たちの肩を打つ。

「そこで最初の命題に戻るわけです……天国は、死後の世界は本当にあるのかどうか」

「ないだろう。あるわけない」

「私もそう思う」

「そんなところだと私も思います」

「話が終わるじゃないか」

「いや、そこで十五年前の北方戦役の話です」



十五年前に一旦停戦した北方戦域。我が帝国と北方会議同盟国との資源紛争に端を発し、結局北部自治域からオチャコボ海沿岸全域を巻き込んだ大戦争に発展した。北緯五〇度からさらに北、そしてその東、庫裏流諸島の領有権まで巻き込んだ戦い。帝国海軍は北方艦隊の三分の一を失うか機能不全に陥る大損害を被った。結局どちらが勝利したのかわからないほど曖昧な停戦状態となり、結果今回の戦争に繋がった。

「この北部自治域……もうちょっと狭めれば、北洋州のどこかに、地平線まで広がる『ワタスゲの原』が存在する、そういう噂がパイロットの間で広まったんです」

「ワタスゲってなんだ？」

「ちょっと違うけど、タンポポの綿毛みたいな、ソバの花みたいに白い草さ。北部自治域ならどこでも生えてる。内地なら高原の湿地に生えてる野草」

「じゃあ、本当にあるんだろう。そういう場所が」

「……その話、聞いたことがある」

「伊来中尉、」

「ワタスゲの原。……一面の。かならずそこは晴れていて、暖かくて、動物もいなくて、でも、ツルの営巣地があつて、いつも鶴が飛んでいる……、戦闘機の残骸がぼつぼつ落ちていて、廻り一面どこまでもワタスゲの原だつていう。今はほとんど信じられないけれど、古参のパイロットから聞いたところがある」

「おおむね、私が聞いた話と同じですね」

「けれど、そこへは行けないって。……撃ち墜とされたパイロットだけが行ける場所だつて」

「何？ なんだそれ、」

「どれだけ探しても、そんな場所はなくて、行ったら帰ってこられないっていう、そういう場所だと」

一種、戦闘中の極度のストレスが生み出す幻想なのかもしれないと思われたが、そのワタスゲの原』のイメージは具体化されて、当

時の空軍パイロットたちの間で、「戦死した後集う場所」として信じられていたという。

「そんな話、信じられないな。むしろ、本当にあるんじゃないのか、そういう場所が」

「確かに。ワタスゲなら実際はかなり広く分布しているから、廻り一面ワタスゲという、そんなところもあると思う。けれど、『行ったり帰れない』とか、『戦死したら集う場所』というのが、実のところ世界的で普遍的な『天国』のイメージと重なるところがあるんだ」

「そうだな」

「あまりにその話が蔓延したので、厭戦的ムードを払拭するためにも、戦況の間隙について、空軍が偵察機を飛ばしたんだそうだ。衛星写真の解析だとか、大まじめに」

しかし、北洋州や庫裏流諸島クリル、そして北部自治域全域をある程度走査しても、それに該当するような場所はなかったという。そもそも、陸上で撃墜され、運良く脱出したパイロットたちの生還率は五〇%を超えていた。「行ったり帰れなくなる場所」とは大げさなイメージだった。

「人間の脳に、『天国願望』があるんじゃないか、そう思いませんか」

「脳内麻薬の話ではなくて？」

「光に溢れた場所……それくらいなら私もあなたも、南波少尉も、極限状態になつたら見られる幻覚かもしれない。けれどそれを、なぜ私たち人間は『天国』だと判断するんでしょうか。『光を見た』ではなく『天国の入り口に立っていた』となぜ思うのでしょうか。私たちは、もしかすると、彼岸への憧れを常に持ち続けているのではないか、そう思うんです。たとえば、遺伝子的に、ヒトには『天国』のイメージがデフォルトで設定されている」

「なぜだ、」

ついに南波が立ち止まってしまった。

「一種の逃避かもしれない。死ぬかもしれない、生き残れないかもしれない、そういうとき、生への執着を断ち切るために、無理矢理、別次元の世界を構築して、そこへ逃げ込めると、自分自身を安心させる場所」

雨音。

「だから、まぶしい場所、明るい場所、空の上、そういう場所を、死者が集う場所だと理解する。……そういうイメージが、私たちの中に刻まれているのだとしたら？ それを補強するのが、宗教だとしたら？」

「宗教は好かん。……奴らは生きること放棄してる。天国なんてものがあるとしても、俺はそんなところに行くつもりはない」

「ずいぶんと極端だな。カルトな連中はそうかもしれないが、おおむね人生の安定と道徳に寄与する存在として、宗教はいい装置だと思うが。……だいたいお前、いまわの際になってもそう思えるか？」

「思ってたやんさ」

南波なら本当にそうかもしれない。息絶える瞬間まで、この男は生きようとするだろう。今まで何度も出撃してきたが、必ず帰ることを考えていた。あの映画を観ていない、帰ったら何を喰う、手当が安すぎる、エトセトラ。生への執着を感じさせないほど、南波は死の臭いがしない。だからこそ、55派遣隊で生き残っているのだろう。おそらく私も。話ながら、私は天国の存在など信じていない。宗教は人が生きる上での支えになるべきもので、あくまでも手段であり目的ではあり得ない。連邦国の軍隊では、アイコンとしての十字架を首から避ける兵士も多いと聞くが、私たちの国では一般的ではない。そもそも私たちの信ずるかみさまは森羅万象どこにでもいて、わざわざアイコンを作る必要がないというせいもあるかもしれないが。

「無責任だ、」

伊来がうつむき気味に言う。

「伊来さん」

「遊佐は、……天国なんて考える暇もなく、やられた。声をかける時間もなかった。人が死ぬ瞬間に天国を見るとか、そんなことはどうでもいい。考えるまもなく死んだ人間はじゃあ、どこへ行くんだ、准尉？」

「どこへも行きはしないさ、伊来中尉」

南波が、やけに明るく言う。

「あなたの中にいるんじゃないのか。……あなたの相棒は、残念だけれど、飛行機と一緒に川に沈んじまった。けど、存在はあなたの中に残ってるんだろうよ。俺もあなたに賛成だ。天国なんて、弱い奴らの世迷い言さ。こいつ……入地准尉が言うとおりさ。イメージが陳腐なんだよ。天国は空の上？ 地獄は火山の火口みたいなドロドロの場所？ ふざけるなさ」

「南波、お前は相変わらずだ」

「そう思わないと、俺は何人殺してきたと思う？ 普通に考えたら一撃で地獄行きだ。小さい頃はそう教わってきたからな」

人を殺めた人間は例外なく地獄へ。この国の標準的な道德観だ。

「俺が地獄へ行くとしたら、それは温泉旅行だな。今度『地獄谷』が名物の温泉があるから、一緒に行こうぜ」

どこまでが本気なのかよくわからない。

「ただ、」

南波が歩き始めた。

「言葉は悪いが、気休めにはいいかもしれないな。……死んだ連中が、もしみんな天国にいるのなら、そこで幸せにやってくれればいい。残った俺たちがそう思って楽になれるなら、そう思えばいいんだ。死んだ人間は俺たちのことなんて考えられない。死んだ人間を考えられるのは俺たちだけだからな。……考えるのも面倒になるが」

「南波、一言多い」

「入地准尉、ありがとう」

伊来が半身、私に振り返る。

「私を気遣ってくれてるんだろう」

「そんなつもりはありません」

「違うのか」

「あなたは、戦闘機乗りです。……もしかすると、私や南波少尉がいままでに殺してきたよりずっと多く、……いろんな人間を天国に強制的に送っているかもしれない。そんなあなたに、気休めなどは言えませんよ」

「そうか、」

「行きましよう。ちょっとおしゃべりが過ぎたようだ」

「結局、」

南波。

「そのワタスゲの原っていうのは、本当にないのかね」  
ワタスゲの原。

三六〇度、まばゆいばかりのワタスゲが揺れる場所。

二度と戻れない場所。

「さあ、どうかな。任務で行けと言われれば、私は行く」

「俺もだな。そして帰ってくる」

私は、しかし聞いた。空軍の元パイロットから。

彼は、北方戦役で81式要撃戦闘機に乗り、そして北洋州の上空で撃墜された。高度一万メートル。射出座席ごと放り出され、非常用酸素ボトルが作動し、急激なGに薄れそうな意識の中で、身体は機体から離れて、座席ごと雲を突き抜けて降下する。視界の端で、黒煙と炎の塊となって四散する愛機の姿が見える。脱出シーケンスは自動化されているため、パイロットと座席の切り離しからパーソナルシュートの展開までそれらすべては、彼の操作なしに実施され、彼が気づいたとき、そこは一面のワタスゲの原だった。

パイロットたちの間で話し合われていたその幻想の場所は、彼自身知っていた。しかし、信じてはいなかった。南波と同じだ。妄言だと思った。生き残る気持ちのない奴らが勝手に言っているだけだ。

しかし、眼前に広がっているのは、上空での戦闘が嘘のように静

かな草原で、夏を迎えた一面は、白いワタスゲで埋め尽くされていた。

救難ビーコンも作動していた。サバイバルキットもあった。風にパラシュートキャノピが揺れていた。四散した機体はどこにあるのかわからなかった。ただ、……首を巡らせても、方向感覚がなくなるほどに、そこは一面のワタスゲの原なのだ。

本当にあったのか。

いや、彼は思った。

俺は死んだのか。

今見えているすべては幻覚で、俺の身体は機体とともにバラバラになったのではないか。だとしたら、ここから出ることは二度とかわらず、しかしもしここが死後の世界であるのなら、もう命の心配をせずとも、生きていける。

不思議なことに、彼はワタスゲの原に立ち、「生きている」と実感した。

その瞬間、不思議な感覚から醒めたという。

これは現実だ。

俺は今、現実の世界にいる。

傍らでは、救難ビーコンが短い間隔でしきりに信号を発信しているのではないか。天国に救難信号が必要だとは知らなかった。ビーコンには全地球測位システムが組み込まれている。衛星を見失っていたら、ビーコンはエラーを出す、それはなかった。そうだ、ここから出られたら、この場所がどこかわかる。そして、基地の連中に言ってもらえる。天国なんてない。俺は帰ってきた。ワタスゲの原は本当にあったんだ。天国なんかじゃない。俺たちの世界と地続きなんだ、と。

彼は歩いた。サバイバルキットと、当時の制式だった自動小銃を手に。

食料はある。ビーコンを持ち、身体のだこにも異常がないことを確認し、彼は歩き始めた。

「ワタスゲが生えるような季節ならよかったのにな」

歩きながら、南波がぶつくさ言っている。寒いのだ。吐く息が微かに白い。明け方から休憩を挟みながらも歩き通して、足が痛い。

「伊来中尉、歩けますか」

「南波少尉、……バカにしなくてもいい」

「失礼」

私はくだんの元パイロットに同意する。おそらく天国など存在しない。きっとワタスゲの原は実在するのだろう。どこかに。

どこかに。

どこかはわからない。

私が元パイロットにインタビューしたのは、都津野市の帝国大学医学部付属病院の……閉鎖病棟の談話室だった。精神医療課のだ。

都津野市にある帝大医学部には、戦時後遺症を専門に治療する医官が常駐していた。軍病院ではなく第三者機関である医学部の方がより多角的に治療できると政府が判断したからだ。私は南沢教授の紹介で彼に会うことができた。結局、元パイロットはあまりにも過酷な経験をしての生還のため、戦争が終わって、精神のバランスを大きく崩してしまったのだ。大規模な戦争のあとにはよく見られる後遺症だ。だから、彼が主張するワタスゲの原が北部自治域のどこかにあるとしても、だれもまともに探そうとしなかった。空軍内で伝承されていたその話を、みな知っていたからだ。おそらく彼もまた臨死体験を経て、幻想と現実の区別がつかなくなったのだろう、と。

しかし、私は彼と話をしてみても、撃墜され、「ワタスゲの原」に降り立ってからの話に信憑性を感じずにはいらなかった。時系列にまったく破綻がなく、本来描写しなくてもいいビーコンの作動など、微に入り細に穿ち、説明によどみがなかった。惜しむらくは、救難機の到着までに予想以上の日数がかかってしまい、低湿地帯のはずれでビーコンを感知した救難ヘリコプターが彼を発見したとき、ついに彼は瀕死の状態まで衰弱していたのだ。結果、彼が撃墜され

た空域からどこに降り立ち、どうやって救出点まで移動したのかわからなかった。ビーコンは信号の発信機能があるだけで、位置の記憶まではしない。そして、当時の救難体勢も無数の救難ビーコンをすべてリアルタイムで受信し記録するようなことはしていなかった。あまりに遭難者が多かったからだ。

けれど、と私は思う。

彼の言葉をそのまま引用するなら、「地続きの場所」に天国があることになる。

もし戦士たちが集う黄泉の国がこの島のどこかにあるのなら、私は行って見てみたい。

そして、南波が言うように、必ず帰ってくる。

彼岸への憧れなど、潰してみせる。

「南波、」

「ヘリコプターだ」

「准尉、少尉、……救難機だ」

固定翼の搜索機が円を描いて飛来している。その向こうに、救難ヘリコプターが頼もしいローター音を響かせて飛んでくるのが見えている。

南波のタクティカルベスト。ビーコンが作動している。

「さすが……飛行機を持っている軍隊は違いますね、救難が早い」  
「やれやれ。自嘲気味に南波が私の顔を見る。それはそつだ。パイロットは「高価」なのだ。」

「南波、よかったな。私たちも便乗させてもらおう。……中尉、たのめるだろうか」

「大丈夫、と思う」

私と南波は、初めて伊来中尉の笑顔を見た。

緊張が一気に緩んだようだ。少女のような顔をしていた。

「南波、信号弾」

「了解、准尉」

南波は信号銃を、陸上競技のスターターのように高く掲げると、



トリガーを引いた。

ヘリコプターは高度三〇〇メートル程度を飛行した。スライドドアは開け放たれていて、私も南波も無言だった。無言で4716自動小銃を抱えるように、吹き抜ける風を感じていた。やはり寒い。傍らの救難員は私たちを時折向くが、声をかけてこようとはしなかった。国道脇に着陸し、まず伊来中尉を乗せ、そして私たちが続いた。彼らは何も言わずに我々をヘリコプターに招いてくれた。

針葉樹、低湿地、森を貫く国道、そしてさほど遠くもない場所に、黒煙を上げる縫高町が見えた。あの荘厳さまで感じさせた鉄道橋は崩壊し、川の流れに沈んでいるようだ。南波が遠くを見ていた。北洋州のこの島は、南部はだいたい平野で、上空三〇〇メートルから見渡しても、地平線が望めた。地平線が切れるあたりに微かに見えているのは中部から北部へ連なる山地で、もっと近寄ればまだ雪を頂いているはずだ。激戦が続いているのはそのあたりだ。ここから二〇〇キロ近い距離がある。

私はあまりヘリコプターが好きではない。なにより不安だ。武装らしい武装は私たちが持つ自動小銃だけというこの救難ヘリにしても、下方から襲われたら一撃だ。武装ヘリコプターも、ドアガンの射線をかいくぐった敵に狙われたら、墜ちる。その点でも、攻撃ヘリコプターを除くと、装甲車よりはやはりバスに近い乗り物だと思う。

本物の乗り合いバスなら、都野崎にいた頃は毎日乗っていた。その頃の私は、4716自動小銃やメルクア・ポラリス拳銃の代わりに、テキストやペン、それを入れたバッグを肩から提げていた。よもや自分がバッグの代わりにライフルを、普及していた携帯電子端末<sup>ターミナル</sup>の代わりに拳銃と予備弾倉を持ち歩くようになるとは、思っていなかった。

都野崎はこの北部自治域……北洋州のこの島から南へ二〇〇〇キ

口近い距離がある。いまごろは気温も二〇度を超え、花の季節も過ぎ、すっかり色濃くなった木々の緑が賑やかだろ。開けた湾から吹き込むやや湿った風も、北極圏から吹き下りてくる寒気よりはずっといい。私は長く暮らしたはずの北部自治域の鬱屈した気候より、穏やかで冬も降雪がない都野崎の季節が好きだった。今年には都野崎の紀元記念公園、その満開の桜の花を見ることはできなかった。去年も、一昨年も見えていない。私にとってあの街はすでに遠く、四年過ぎた間にできた友人たちも縁遠くなった。

この地の桜はいつ咲いたのだろう。

ヘリコプターから森を見下ろす。背の高い針葉樹は樹高五〇メートルに近い。針葉樹帯を取り囲むように、白樺が見えた。白樺は広葉樹の中では生命力が強く、たとえば野火で焼き尽くされた森林で最初に復活するのは白樺だともいわれる。白樺の枝からは淡い萌葱の若葉が映える。曇り空でも映える。南で暮らした四年で唯一私が北の風景で思い起こしたのは、晩春に見られるこうした緑の芽吹きだった。この喜びは、南のその比ではないからだ。

呼ばれた、ように思えた。

顔を機内に戻す。ヘリコプターのローター音が凄まじく、誰が私を呼んだのかわからない。南波は目を閉じてじっとしていた。メデイックはコクピットに首を突っこんで何かやっている。私を向いているのは伊来中尉だった。

「中尉、」

私にはじり寄るようにして、伊来を向いた。

「呼びましたか」

「礼を言っただけ」

伊来の栗色の髪がダウンウォッシュに舞っている。こうして見ると、彼女は純粹培養のエリート色がさらに強い。印象的なのは彼女の目だ。今は閉じられている南波の目と比べるとよくわかる。彼女の目は澄んでいる。

「どっちみち、このヘリコプターがあなたを見つけていましたよ。」

礼を言うなら私たちだ」

そのとおりだと思っていた。事実、伊来と出会ってから、二時間も経たないうちにヘリコプターがやってきた。あと半日近く歩かなければならないところ、不謹慎ながらも私と南波にとっては幸運だったのだ。

「この機は、豊滝A Bへ？」

空軍の前線基地だ。常設部隊はいないが、今は空軍の飛行隊が駐留している。私たちが目指そうとした高泊からは内陸に車で半日ほどの距離だ。場所は知っているが行ったことはない。陸軍の部隊は駐屯していない。

「おそらく、」

「あなたは、伊来中尉は、そこから？」

「そう……もともとは御津納沢だけだ」

北東自治域の空軍拠点でかなりの規模の基地だ。彼女が駆る64式戦闘爆撃機が二個飛行隊、81式要撃戦闘機が同じく二個飛行隊、89式支援戦闘機も一個飛行隊が所属している。救難部隊に高射砲部隊、気象に医療に後方支援と、空軍関係者だけで御津納沢市には万単位が居住している。ここには陸軍の第12師団が駐屯していて、列車で一時間も行けば海軍の基地もあるから、あたりは一大軍事拠点ということになる。北部自治域にはここまでの拠点は無い。

「寒いだろう……」

伊来中尉は目を細めるようにして、曇天の低湿地と針葉樹林を眺めていた。私はつい、ややあどけなさまで残るその横顔に、声をかけていた。南波が私を見た。一瞬目を細めて。

「もう慣れた」

伊来が返す。私を見ないで。眼下は芽吹いたばかりの新緑の木々と、鉛色の湖沼、川、簡素な道路に、延々と続く送電線。殺風景を絵に描いたような光景だ。しかし、一ヶ月季節が逆戻りすれば、さらにこのあたりは殺風景になる。雪解け直後の北洋州の風景は、おそらくどんな人間でも厭世的になる。ところどころにはびこる永久

凍土は濃み、舗装していない道路は泥濘に沈む。装輪車はおろか、装軌車ですら往生するような場所もある。初春の季節はめまぐるしく高気圧と低気圧が行き来するため、二日と青空が安定しない。思いついたように降る雪を恨めしく仰ぎ見、あきらめかけた頃によりやく本格的な春が来るのだ。

「伊来中尉は、どこの出身で？」

立ち入った質問かと思った。黙って基地到着を待てばよかったかもしれない。南波が意外そうな顔をして私を見ている。普段私がこんな質問をしないからだ。

「私は、……京<sup>みやこ</sup>。」

首都だ。意外だったが……すぐに私はしかし納得した。伊来の表情に、ふと洗練された何かが見える気がしたからだ。

「慣れましたか」

「慣れた」

「寒さに？」

「……この風景に」

ヘリコプターの騒音が凄まじい。私たちはインターコムを付けていなかったから、それなりに大きな声を出す必要があった。伊来の声は周波数が高く、私の耳によく届いた。南波がぼそぼそしゃべっても、彼女の声ほどには届かないだろう。

「京には、……昔行きました」

学生の頃だ。都野崎から高速列車に乗り、桜の季節に行った。都野崎の桜も美しかったが、首都……京の桜は格別だと聞いていたからだ。丹野美春が京の近郊の出身だった。だから丹野美春の言葉には、独特の訛りがあったことを憶えている。都野崎から七〇〇キロ。私の生まれた北部自治域の中心都市・柚辺尾からは二五〇〇キロ近い距離。もはや別の国だ。私が育った自治域では、一度も首都へ上京せぬまま、北の果てで朽ちる者も多いのだ。

「上洛してなにを？」

「桜を見ました」

「……そうか」

人口三〇〇万人を超える大都市だが、帝国の首都として一三〇〇年の歴史がある。地下鉄工事をすれば数メートルおきに遺跡が出土するとまで言われる都市で、世界的にも貴重な寺院や神殿が連なる街だ。一度として外患の危機にさらされたことはなく、経済の中心地として発展した都野崎とは別の雰囲気があった。

「准尉は、」

伊来が私を向く。薄い茶色の目。南波が何か言ったようだが聞こえなかった。もう、よせ？

「私は北部出身です。……見慣れた風景ですよ。こういうのは」

ヘリコプターはペースを変えず、しかしゆったり旋回していた。

ぶ厚い雲も、ところどころで割れ、『天使の梯子』と呼ばれる光のカーテンが垣間見えていた。

「殺風景ですけどね。こういうのは悪くない」

針葉樹と湿地と原野が続くその上空から、天使の梯子が下りてくる。正面左の奥側は線を引いたように真っ平らで、それはオチャコヴオ海の水平線だ。ずいぶん飛んだ。当初私たちが目指していた拠点など通り過ぎている。このまま空軍の前線基地まで運ばれるのだろうが、私と南波が原隊に復帰するなら、さらに高泊までいく必要があった。が、友軍の拠点までたどり着くことができれば、連絡を取るのもたやすく、また足の確保もどうにかなるだろう。まずは食事をしたかったし、わがままを言えば、シャワーも借りたかった。そして、一時間でもいいから横になりたい。南波はヘリのキャビンで目を閉じたりしていたが、眠っているわけではないだろう。

会話はそれで止まった。南波がまた私を見ていた。

（話しすぎだ）

明らかに表情はそう言っている。同盟軍のSVTSなどなくても、この程度の思考は読める。むしろわからなければ、私たちは相棒<sup>パティ</sup>たり得なかった。

（反省してる）

私は話しすぎるのだ。南波相手でもだ。彼はそれをわかって付き合ってくれているし、私が果てしなくしゃべる、機械仕掛けのトーキングマシンのようなものだと思っただけで、彼なりの疑問や話題を私に向けても来てくれる。本来は必要ないのだ。私たちはバディだが、それは戦闘地域や任務中だけの話で、それ以外の時間を共に過ごしたことはない。南波は非戦闘地域……本拠地において、完全に任務からはずれて休息しているとき、市内の料理店を廻り、肉料理を食べるのを何よりの楽しみにしているようだが、私は肉より魚が好きだったし、外食は好まなかった。だから彼と食事に出かけたこともない。駐屯地の食堂で同じテーブルに着くことはあるが、それは同じチーム、同じスケジュールで行動している故の話であり、南波がいくら食堂の肉の味付けや焼き方に文句を言おうと、普段彼がどのような調理を好んでいるのを知らないから、相づちの打ちようもなかった。それでも私に最も近い人間は誰かと訊かれれば、南波だと答えるだろうし、そう答えるしかないのだ。現実、私たちは幾度となく死地を踏み越えてきたからだ。

南波はふたたび目を閉じていた。眠らなくても、目を閉じているだけで、少なくとも眼球から入力される情報は遮断できるから、その分の脳の処理能力をセーブできるだろう。意図的に耳をふさぐことができれば完璧だろうが、人間にそのような機能はなかったから、意識的にこのやかましいヘリコプターのターボシャフトエンジンの咆哮と、空気を切り裂く周期的なローター音を無視するのだ。コンピュータがなかなか模倣仕切れない人間の脳の機能の一つに、「関心を寄せる対象以外を無視する」ことがあげられる。気づかなかつた。見えなかった。聞いていませんでした。

いま、南波は最低限の情報を除いて、外界から自らを遮断しているのだろう。ヘリコプターが前線基地に到着したといっても、わずかな時間しか休息は取れない。いまはなにより歩く必要もなければ、警戒の任務はこのヘリのクルーが負っている。私も南波も休めるのだ。事実私の身体は、一種心地よい疲労感に満たされはじめていた。

まずい、とも思った。この心地よい疲労感に絡め取られると、歩くこともできなくなる。身体を再起動させるのに凄まじい労力を必要とする。南波はそのあたりの切替が上手いのかもしれない。過酷で知られる陸軍の遊撃戦闘訓練を経て、その資格を持っているのだから。

私はしかし、目を閉じることなく、ヘリコプターから北洋州の殺風景極まりない晩春の風景を眺め続けた。よく見れば、湿原や原野の日なたには、可憐と形容するのが一番似合う野花が咲いている。桜よりも健気で、桜よりも目立たず、そして桜ほどに愛されないが、毎年必ず春が訪れると、桜よりも早く花弁を広げる。南向きの斜面一面を埋め尽くす、淡い青や紫のカタクリや、残雪の間から気も早く顔を覗かせるフクジュソウ、内地では高原でしか見られない草花……。

都野崎や京の風景、雰囲気が懐かしくないはずがない。私は北部自治域の厳しい冬が好きかと訊かれれば、ためらわずに嫌いだと答える。マイナス三〇度を下回る厳冬期、溶いたばかりの青い絵の具を、エアブラシで塗ったような空、日を浴びてきらめくダイヤモンド・ダスト、まばゆいばかりの新雪の平原、そうした景色を美しいと思うが、私は冬が嫌いだった。

マイナス三〇度を下回ると、空気中の水分はみな音を立てて凍りつく。車のエンジンはなかなかかからず、人家もまばらな街道を行く自動車の故障は、大げさでもなく死を覚悟させる。盛大に白い息を吐きながら歩く住民たち、凍りついた川、流氷に埋め尽くされる海、わずかな間しか顔を出さない太陽。

伊来中尉はここへ来るまで、映像や写真でしか知らなかった風景だろう。冬期間の戦闘はまさに地獄だ。戦う相手が敵だけでなくなる。季節そのものと戦わなければならなくなる。食料の現地調達は不可能で、液体のまま水を保持することも難しくなる。私はこの地を一度離れ、陸軍に入り、55派遣隊に配属されると、冬の戦闘技術をいやというほど学ばされた。あまりに過酷な訓練だった。その



ときから南波とは同じチームだったが、彼は終始無表情だった。最初は何を考えているのかわからなかった。次第に、何も考えていないのだとわかった。そして、時折何かを考えているのだということもわかった。助教や指導官はうまくチームを編成するものだと思う。今では南波と私の最低行動単位エレメントは不可分のものになっているのだから。

「もうすぐ着陸する！」

メディックが怒鳴る。南波がSTANDBYモードから復帰する。私はやや弛緩していた上半身を引き締める。伊来中尉は、クルーを失いこそしたが、けがもなく帰還できたことに幾分安堵しているように見えた。

「陸軍さん、ここでいいな」

メディックは航空ヘルメットにバイザを降ろした姿だ。表情はわからず、口調も強かった。歓迎はされていないのだらうと思いがながら、

「助かった。ありがとう」

私はそう伝えた。南波が親指を立ててみせていた。連邦国の兵士がやるような仕草だが、南波がやっても似合わない。私は南波に小さく首を振ってみせたが、私の仕草が彼には理解できなかったらしく、私にも親指を立ててみせた。

ヘリはぐつと右に旋回し、高度も落ちていた。豊滝ABは二五〇メートルの滑走路一面と平行誘導路、建造物のやたらと少ないエプロン、ひよる長い管制塔と、必要最低限の設備だけがある、例えはおかしいが、国道沿い、不意に現れた小さな売店とガソリンスタンドしかないパーキングエリアのようだった。コンクリート造りの掩体が森とエプロン地区のあいだに並んでいて、出撃待ちなのか、64式戦闘爆撃機と81式要撃戦闘機の姿が見えた。

私たちの救難機は、ゆつくりと、エプロンの端に着陸した。

メディックが先に降り、エスコートされるように伊来が続ぎ、私と南波は言葉や意思を介しないアイコンタクトを交わして、471

6 自動小銃を手に、短い空の旅を終えた。

私たちは空軍基地に降り立った異質な黒い染みだった。空軍の兵士たちは空色の制服を身につけていた。戦闘機に取り付く機付員たちは濃いグリーン作業服を着ていたが、黒の戦闘服上下は私たちだけだった。伊来はヘリコプターを降り、メディックが付き添いながら、離れていく。彼女がこれからすることされることは多いに違いない。とりあえずは医官の診察を受けるのだろう。上官への報告あるいは審問も受けるかもしれない。そしておそらく、私たちはもう会うことはないだろう。悲観的意味ではなく、彼女は空の住人であり、私たちは地を這い、駆けるのが任務だ。住む場所が違う。今まで出会わなかったように、これからも会うことはないだろう。ただ、会おうとする意思があればまた出会えるかもしれない。邂逅の機会があったとして、私たちは会おうとするだろうか。私は彼女の後ろ姿に、首都で見た桜の花を思った。満開の。

「伊来中尉」

ヘリコプターはエンジンを切っていたから、ローターが空を切る音と、ランナップ中の出撃待ち戦闘機のタービン音があたりを支配している。

伊来中尉。振り返る。

「よかつたら、……タクティカルネームを、教えてもらえませんか」  
私の声は届いただろうか。私の声は彼女ほどに高周波ではない。  
南波が私の隣に並ぶ。

「……！」

伊来が答えた。スロットルを開いたらしい81式要撃戦闘機のエンジン音に、彼女の声は紛れてしまった。

私と南波、そして伊来中尉との距離は、もう開いていた。私たちが彼女に歩み寄るには不自然なほどに。そして、私たちは彼女の言葉を二度聞き返すほどに親しくはなかった。彼女は先任だったが、彼女の言葉は命令ではなかったから、確認する必要もなかった。

「南波、」

私は前を向いたまま、伊来中尉を見送ったまま、南波を促す。

「中尉！」

エンジン音に負けない大きさで、南波が声を張り上げた。肺活量の大きな南波の声はよく通る。伊来は私たちを向いたまま。

「武運長久を！」

伊来中尉。じっと私たちを見る。そして、ゆっくりと腰を折る。敬礼。

彼女と並んでいたメディックも、倣った。

私たちも、腰を折る。角度一〇度。できるだけ、はっきりと。

そして、伊来は踵を返し、しっかりとした足取りで、エプロンから離れていく。

「陸軍さん、」

後から呼ばれた。振り返る。

「高泊まで、はあ、あんたら乗ってくか」

パイロットがバイザをあげ、にやりと笑っていた。

「え、」

南波が聞き返す。

「ここは前線基地だからな。救難機は連絡機も兼ねてんのさあ。…今すぐじゃないけど、今日中に高泊の統合司令部まで行くから。行きは空荷だからよ。よかったら乗っていけばいいべ。誰もそつたらことで文句は言わんべよ」

南波が私を見る。大尉の階級章とウィングマークをつけたヘリコプターのパイロットは、コクピットから降り、腕を組んでエプロン地区を見渡す。

「いきさつは知らねが、55派遣隊の名前は知ってるから。なにをやっただかは知らねが、まあ、いろいろ大変なんだべ？」

パイロットはこの出身なのか、おかしな訛りがあった。

「まあ、そうだね」

南波が答えた。伊来と話したときとは声音が違った。

「俺も五年前までは、ハア。戦闘機に乗ってたんだがな」

「そうなのか、」

南波は階級章に気付かないふりをしている。そしてパイロットもそれを許している。

「あんた、夢は見るかね」

「夢？」

「夢さ。さつき、俺のへりん中で寝てたべ、」

「寝てない」

「目エ閉じてたべや」

「脇見運転は勘弁して欲しいね」

「空に障害物はなかなかないから平気なんだ？」

聞き覚えがある訛りだった。きつと北部自治域の南側、海沿いの出身に違いない。そういう匂いがした。

「困った運転手だぜ」

南波に並ぶと、パイロットはやや南波より背が高かった。南波は標準的な身長だから、やや長身といえる。私は……私も標準的なほうだろう。

「あの子は、また飛べるべかね、」

今にも煙草でも吸い出しそんな口調だ。パイロットは伊来のことを行っている。

「なぜ」

「馬から落ちたらすぐに馬に乗れ、っていうけども、はあ、あの子はどうかかね」

「やさしいんだな。若い女の子だからか」

「違うさ。俺がそうだったからさ。……撃ち墜とされっと、怖いもんね。飛ぶのがさ？」

CIIDSもバイザも上げた彼の左の眉が分割されていた。大きな傷がある。外科的手術で目立たなくしているのだろうが、完全には消えていない。

「あの子はアクセニック・カルチャー純粹培養だからな」

パイロットの言葉に私は勢い、振り向く。

「やっぱり？」

「南波、」

「見ただけで分かるさ。どうせあんたもわかってたんだらうよ」

「そうだ。伊来中尉は、間違いなく、純粹培養系だと感じた。生物学的エリートだ。」

「空軍には多いんだ？」

「パイロットは機長側のシートにもたれて言う。」

「陸軍さんには、いないのか」

「……俺の中隊にはいなかった」

「あんたは。それっぽい顔はしてるけど」

「パイロットが私を向く。飛行服のネームには、砺波とあった。砺波大尉だ。」

「私は、違います」

「本当はそうだったりしてな」

「やめろ」

「気づいていないだけかもしれないぜ」

「南波、」

「そういう話も、聞くなあ」

「砺波機長が言う。」

「本人が気づいていないって、あり得る話か？」

「南波。私に言ったのか、砺波に言ったのか、両方か。」

「いや、いずれ気づくらしい。……だいたい中等課程に入学するあたりで」

「私が答える。」

「なんでだ」

「夢を見ないんだそうだ」

「夢を見ない？」

「そう。寝ても夢を見ない」

「救難ヘリの副操縦士コパイはいつのまにか機体を離れて、私たち三人になっっていた。」

「それで訊いたのか、」  
南波。

「まあ、実際、あんたア、俺のへりん中で目エ閉じてたしな、顔見りや分かるべ。あんたア違うつて」

「俺は違つか」

「あんたは違つ顔してるから、すぐわかる」

「入地」

「いやア、実際そうなんだわ。顔見りや、分かるからなあ」

「あんたは、……砺波さんは、純粹培養が嫌いなのか」

「好きとか嫌いってンじゃないべなあ。まあ、気持ちの問題だ？」

「気持ち？」

「気の毒なんだ、」

「気の毒。ちよつと違つとは思つたが、私もおおむね砺波の言葉にうなずいた。」

純粹培養系。

夢を見ない子どもたち。

遺伝子的に精神的補強がされていると言われている。……言われている、というのは、今のところ政府も厚生省も純粹培養系の存在を公式には認めていないからだ。存在は間違いないが、見て見ぬふりをしている。夢を見ない子どもたちは、戦争に強いからだ。

「フラツシユバツクしない。……夢を見ないからな。悪夢も見ない。もちろん楽しい夢も見ないけど」

「うなされるつてことがないのか」

「原理的には」

「そりやめでたいな」

「あんたでもうなされるなんてあるのか」

「俺は繊細にできてるからな」

「けど、あんたらア、耐えられつかね。夢エ見ない人生なんて」

「俺は……夢を見たかどうかなんて、憶えてないぜ」

「でも夢を見たことはあるはずだろう」

「まあな」

「純粹培養系の子たちは、まったく夢を見ないんだ」

「だったら……さっきの伊来中尉だって、また飛べるだろう、いくらでも」

「そう、思うべなあ」

砺波はヘルメットを取ると、腹の前で両手で抱えた。ヘルメット一体型の航空用CIDSのインターフェースがディスプレイコネクタされている。砺波はヘルメットを抱え、私たちは自動小銃を抱えていた。空軍基地において自動小銃を扱うのは、基地警衛の兵士と、基地防衛隊の隊員だけだ。

「夢を見ないってことは、ハア、逃げ場もねえってことだべ？」

砺波が言う。私は彼が言わんとすることはよく分かった。

「逃げるって、どこに逃げる？」

南波が聞き返す。

「夢の世界」

私が答えると、南波は口を半分開き、あきれたように聞き返す。

「夢の世界？」

「そう。夢の世界」

「そんなに……、眠いのか。空軍にベッドでも借りて寝るしかないな」

「本当の話だ」

「なにがだ」

「……夢を見ないってことは、追体験も『予習』もできないってことなんだ」

「なんだそれ」

「南波、自分が死ぬ夢、見たことあるか」

「……」

「自分じゃなくてもいい。私でもいい。いや、家族でもいい。そういう夢、見たことあるだろう」

砺波は黙っている。

「……お前が殺られる夢なら、死ぬほど見てる」  
「そうか、」  
「俺も、何回殺られたか分からないな」  
「なるほど」  
「それがどうした」  
「それが『予習』だ」  
「なにが『予習』なんだ」  
「お前の脳が、勝手に予習してるんだ。私が戦死するときの体験、自分自身がやられるときの体験を」  
「どういふ効能があるんだ、そんなもん。……悪夢なんだぞ」  
「悪夢。そうだろう。悪夢だ。」  
「耐性ができる。免疫みたいなものだと思えばいい。精神的な」  
「免疫？」  
「私が殺されるとき、シーン、とでもいうのか、それをお前は何回も『予習』して、現実には備えているわけだ」  
「俺は……お前を戦死させるつもりはない」  
「わかっている。けれど、夢の中での体験で、お前はもう、私が殺られたらどんな感情を抱くか、もう知っているわけだ」  
「……そうだな」  
「自分が殺られるときのシーンも、憶えているわけだ」  
「憶えてる」  
「何度も何度も見れば、……夢を見ているあいだはそれが現実としか思えないだろうが、目が覚めればそれが夢だったと分かる。夢で人生が変わることだってあるだろう」  
「あるべな」  
「砺波が口を開く。」  
「それが夢の世界だ」  
「伊来中尉は、それが無いっていうのか。それがどうしたんだ」  
「精神的耐性がないってことだ」  
「強いんじゃないのか」



「フラッシュバックしない、悪夢で精神疾患を誘発する心配がゼロ、そういう面では強い。はるかに私たちより強い。けれど、『体験の予習』……これは私の言葉じゃなくて、グスタフ・ロールバックという精神科医が言い出したんだけど……これがあるのとないのは、予見される『悲劇』を体験したとき、一部のグループで、精神的破綻を呼び込むことが分かったんだそうだ」

「なぜ、」

「その『悲劇的体験』を、あとになってから、現実と区別不能の夢として脳が追体験して、ヒトは過去にしていくなわけだ。分かりづらいつらと思うが」

「ようするに、辛い体験をしても、何回も夢で見れば、免疫ができるってことか？」

「ホラー映画を何回も見たら怖くなくなるだろう？」

「まあな」

「伊来中尉は、それができない。とびきり恐ろしいホラー映画を一度しか見られない。その強烈な恐怖は心に焼き付いて、それつきり劣化もしなければ、慣れることもない。夢の中でフラッシュバックはしないが……物理的に夢を見ないからだ……覚醒時に『思い出す』ことはあり得る。」

たとえば南波、私が戦死する夢の話だけれど、風連の発電所で野井上が敵の狙撃で殺された場面と、明確に区別できるか。お前の記憶の中では、『私が戦死した』のは夢だとタグがついているから区別できるだけで、それがなければ、私も野井上も等しく『戦闘中に戦死』している記憶になっていないか」

どうも言っていることがまとまりきっていない。それは南波の表情で分かる。唇を歪めて、考えている。砺波はそれを興味深そうに見ている。

「記憶の中で、私も野井上も戦死しているが、けれど、お前は過去に夢の中で、私が戦死するシーンを何度も体験している。……だから、たとえば風連で私も野井上と同じく戦死していたとしても、お

前が私の死で受ける精神的衝撃は、より少ない、そういうことなんだ」

「だから、」

「伊来中尉は、訓練でしか墜落を経験していないはずだ。シミュレータさ。シミュレータはしよせんシミュレータじゃないか？」

「そうだな……俺もそう思うわ」

「砺波がうなずく。」

「シミュレータでいくら敵に撃ち墜とされても、痛くもかゆくもねエベ。……思い出したところで辛くもねエ」

「そう言うことか。……あんたが、あの子がもう飛べなくなったんじゃないかって言うのは」

「砺波がうなずいた。」

「けれど、純粹培養は強いんだろっ？」

「強い」

「と私。」

「けれど、弱い。……きっと伊来中尉は、今日のことを何度も思い出す。それを乗り越えられなければ、きっと彼女はもう飛べない。」

「砺波さん、あなたはそう思うんですよね？」

「砺波がうなずく。」

「いままでそういうパイロットを、見てきた？」  
「うなずく。」

「復帰できた奴はいないのか」

「南波が問うと、砺波は私たち向き直り、唇を固く閉じ、そしてゆっくり目を閉じた。」

「砺波大尉」

「私が訊く。」

「飛ぶだけなら、誰でも戻れるさ」  
「静かに言った。」

「彼女は、」

「私。」

「さあ……あの子次第だべなア」  
そう言つて、砺波は目を細め、笑つた。  
轟音。

64式戦闘爆撃機がアフターバーナーに点火し、猛烈な勢いで離陸滑走を開始。しかし、増槽にGBU-4に自衛用の空対空誘導弾を鈴なりにした機体は、滑走路を延々突っ走り、ようやく浮いた。曇天にアフターバーナーの炎は鮮やかなオレンジ色で、主翼端からは白いヴェイパートレイルを曳く。ジェットプラストもまだ余韻の残る滑走路に後続機が進入、同じようにアフターバーナーを全開にして離陸滑走をはじめ。あたりは凄まじい轟音に包まれる。私たちのつまらない会話も終わりだ。

「飛行隊本部に顔を出して来い。高泊まで飛ぶ便があるって聞いたつて。して、……飯でも食べてくんだな。飛ぶのは二時間後だ。一眠りしてこい」

離陸機の爆音が遠ざかり、後続がエンジンを吹かす前に、砺波が怒鳴つた。

「了解」

南波が親指を立てた。

「陸軍さんには似合わねえべ」

砺波が笑つた。

「武運長久を」

「そのセリフはまだ早エえなあ」

「南波、」

「了解、行くぞ、准尉」

「了解、少尉」

本当は駆け出したかったが、私は歩いた。

南波も。

4716自動小銃が、重く感じなかったというと、嘘になる。  
そつえば。

伊来中尉のタクティカルネーム。

タービンの甲高い音にかき消された彼女のもう一つの名前。

私の耳には微かに届いていた。

南波はどうだったろう。

……それは、花の名前だったと思う。

北洋州の野に咲く花ではなく、格調高い、首都……帝都に咲く満

開の花。

彼女の名前は、そう聞こえたのだった。

- - - 録音記録 - - -

日時…… 修文17年5月2日午後2時36分開始

修文17年5月2日午後3時11分終了

いやね、そういう噂があるのはね、俺も知ってたさ。でも実際見た奴なんて俺は聞いたことがなかったし、そんな場所があったところで行きたいか思ったことはなかったわけさ。

なんで俺、空軍に入ったかって？

そりゃ、空軍で戦闘機に乗ってるような人間に、そういう質問しちゃいけないよ。飛行機が好きなんさ。まあ、そうね、飛行機っていうか、空をね、飛ぶのが好きなのわけ。

飛行機を見たことがなくて飛行機に乗りたかって奴は聞いたことがないなあ。飛行機に乗ったのが、候補生試験の適性検査でって奴はいっぱいいたけど。うん、俺もそう。

あんた、飛行機乗ったことあるかね。ある？ あんな旅客機、そう、中島のG33とか、あんなのは飛行機って言わないよ。あれは輸送機っていうの。実際ね、旅客機ってね、もとは輸送機だったり、輸送機の原型がもとは旅客機だったりするからさ。窓は小さいし、ただね、路線バスみたいにまっすぐ飛ぶだけでさ。

飛行機ってね、こう、軽くバンク取ってね、すーっと高度を下げたりするときのマイナスGだとか、操縦桿をくっくと引いたときに、すっと機体が浮き上がっていくあの感じが気持ちいいんでね、旅客機なんてね、あんなのつまらないよ。初めて乗ったときは怖かったもの。

グライダーでもいい。あんた、一回乗ってみたらいい。グライダーだってバカにできないさ。操縦方法は戦闘機と同じなんだ。スロットルレバーがないだけさ。雲の上は、いつだって晴れてるんだ。

本当に気持ちがいい。

ああ、なんの話をしていたっけね。

天国の話か。

俺の言うこと、真に受けて発表とかしないほうがいいよ。なんで？ そりゃ、そうだろうさ。誰も俺の言うことを本気にしないからな。夢を見ていたって思ってるんだ。誰が夢なんか見るかってね。そうだろう？ 夢を見るにしても、もっと気の利いたものを見たいものでね。そんな、一面のワタスゲの原なんて夢で見たところでおもしろくも何ともないだろう。実際ぜんぜんおもしろい場所じゃなかったからな。

あんたはどう思う？ 本当だと思ってるのか？ 違うだろう？ だから、俺のところに来たんだろう？

あんた、聞いたよ。

陸軍に入隊するんだって？

このまま、学者さんになったらどうなんだ。あんた、なんだって軍隊なんかに入ろうなんて思ったんだ。それも陸軍か。

体力には自信があるのかい？

そうは見えないな。

かわいらしい顔をしてるくせに、世間知らずなのかな。

気分を悪くしたかい？

何も、一兵卒から地べたをはいつくばって、穴掘って歩こうなんて思っていないんだろう？ 士官学校にでも入隊するのか？ 違う？

なんで？ ますます分からないな。

物好きなんだな。

あんた、休みの日は何してるんだ？ この街はいいところだな。

なんでもある。暖かい。

あんた、どこ出身だ？

袖辺尾？ ずいぶん寒いところから来たんだな。

そうか、土地勘があるんだな、北洋州に。それでスカウトされたのか？

俺みたいになんて南出身だと、あつちの寒さにはついていけない。雪がきれいだとか食い物が旨かったなんてのは、最初の一週間だけさ。あんたには悪いけどね。

戻りたいとは思わないよ。だから訊いてるのさ。もし陸軍に入つたなら、あんたは間違いないよ。あつちに飛ばされる。人手不足らしいからな。いや、皮肉で言つたんじゃない。

俺の祖父さんが、……大洋戦争のあとの動乱でね、北洋州に派遣されて帰つてこなかった。俺の祖父さんもパイロットさ。血なのかね。戦闘機に乗つてた。プロペラ機さ。分かるかね。22式戦闘機つてね。水冷十二気筒エンジンの、すごい奴さ。機銃は二〇？でね。機会があつたら俺も乗つてみたかったな。低空だつたらきつと気持ちがいいだろう。

そう。

飛行機つてね、あんまり高いところを飛んでも気持ちよくないんだよ。飛ぶだけでいっぱいになつちまうからな。二万メートルとか。もうそのへんまで行くと空じゃないね。

本当に飛んでるって実感するには、まわりに何か見えた方がいい。雲でもいい。まあ、でかい積乱雲なんてのは願ひ下げだけだな。分からないか。分かる？ あんなかに飛び込んだら、そりゃ洗濯機の中みたいなもんだ。グルグル。そんなのが真夏はね、太鼓叩いて次から次へとやってくるんだ。空に壁ができたみたいだね。遠くから見ると、真つ白できれいなんだ。

飛ぶなら、そうだな、この街のタワーくらいの、あれ、何メートルあるんだ？ 電波塔さ。五〇〇メートル？ 案外低いんだな。下から見てるともっと高く見えるけど。上つたことはないけどね。あんた、あるのか？

一人で？

そりゃよくないね。あんた、学生さん、若いんだから。本当は彼の一人くらいいるんだらう？ 聞かなかつたことにするよ。

あの塔、おれは上つたことがないんだけどな。まあ、あれくらい

の高さで飛んでると気持ちがいい。道路を走ってる車も、煙吐いて走ってる自動車も見える。結局、人間は雲の上を飛んでると不安なのかもしれないね。地面が遠いからね。俺だけかもしれないが。

結局は戻ってこなくちゃならない。

パイロットって仕事はね、敵を撃ち墜とすだけじゃダメなんだ。必ず帰って来なきゃならない。貴重な飛行機、そして自分自身が貴重な存在だからな。無鉄砲な命知らずは、実はパイロットにはいちばん向いてないんだよ。

そんな話はどうでもいいって顔しているな。

あんたが俺の話を知りたいってのは、北方戦役に参加するからか。そういうことなのか？ だったらあんまり役には立たないかもしれない。それとも、「天国」の話が聞きたかったのか？ このあいだ話したとおりだ。

俺は本当に行った。

帰ってきた。

見たんだよ。

だから、あれは天国じゃない。祖父さんもいなかった。妹もいなかった。誰もいなかったよ。俺だけさ。天国ってのは、死んだ連中がごまんといるんだろう？ 誰もいなかった。俺しかない天国ってなんだ？ そんなところ、天国であるはずがないじゃないか。

そう思わないか？

だから、あの場所は、本当にあるのさ。

偵察機？

そんなことをしていたのか。無駄な話だな。

空から見た地上ってのは、狭く見えるもんさ。もしかしたら、俺はあの場所を相当広く感じていたのかもしれないけど、本当は狭かったのかもしれないな。俺は正気だったが、普通じゃなかったから。そりゃそうさ。ためにあんたも撃ち墜とされてみれば分かるよ。普通じゃいられないからな。

海の上じゃなくてよかったさ。



海の上だつたら帰ってこられなかった。きつとね。

冬も夏も、あつちの海は冷たいからな。地面の上で助かった。

まあ、どうでもいいか。

あんたは、向こうに行つて何がしたいんだ？

天国でも捜しに行くのか？

そんな場所、言つておくがな。いぜ。

……疲れたな。

よくもまあ、……学生さんだから暇なのか。こんなところまで来るもんだ。

中庭？ ああ、ここの中庭か。アトリウムつて言うんだつて？

固有名詞じゃない？ あの温室だろう？ ときどき行くよ。あんたによく似た女の子がいるんでね。知り合いか？ 違うのか。俺は寒い場所は嫌いだな。あのアトリウムはいい。水も流れているし、木も草も生えてる。奥へ行けば果物も成つてるじゃないか。柵があるから入れないけど。

そうだ。

今度、一緒に行くか。

ワタスゲの原じゃない。アトリウムだよ。俺はこの建物からはなかなか出してもらえないからな。

おっと、そろそろ時間かね。いい時計をしてるじゃないか。嵯峨精工舎のマーク？ つて奴だ。俺の航空時計も嵯峨精工舎だ。高いけどな。一秒も狂わない。自動補正されてるからだつて？ それでもいいじゃないか。故障知らずなんだ。あんたのもだろう。……もらい物か？ 学生さんが買えるような値段じゃないからな。しかもそれ、男物だ。

いろいろあるんだな。あんたも。幸せそうな顔をしてるが、人間、外見じゃわからねえ。

じゃあ、また来ればいい。

水路潜入は経験がなかった。

私が見つ軍事特技区分……MOS (Military Occupational Speciality)……に、水路潜入のスキルは含まれていないからだ。ヘリコプターからのリペリングや空挺降下、迷彩装備を生かした隠密潜入など、そうした訓練はやってきた。が、水路潜入はチームが違う。そのMOSを持った隊員は別チームで編成されているのだ。私や南波がこうした任務に就くことなどあり得なかった。

「シグナス、シグナス、ゼロワン」

南波の声がCIDS……ヘルメットと一体化されたイアフォンから聞こえてくる。作戦本部を呼んでいる。なぜだ。無線封鎖しているはずだ。私たちが許されているのは、衛星からの一方通行で得られる情報の表示と、高度に暗号化された生体マーカの発報だけだ。

『ゼロワン、シグナス。花は咲いたか』

信じられない。応答が来る。

「種を蒔いた。花はあと十五分で咲く。カウントダウン」

『ゼロワン、シグナス。了解した』

それにしても、私は……ここはどこだ？

「ゼロトウ、」

私は南波を呼ぶ。声帯を発振させず、口から吐息を漏らすように言うだけで、CIDSのリップマイクが解析・増幅して、相手に伝える。

「どうした」

南波は私の前方五メートルほどを先行している。あたりは一面の水。足先がつくが、ほとんど泳いでいるような状態だ。何も見ええない。暗闇だった。おかしい。CIDSを装備しているのに、なぜ見えない。水の間も怪しい。私は自分が相当に疲労しているか、あるいは精神的平衡感覚を失っているのではないかと一瞬恐慌に駆られそうになる。まずい。

「ここは、どこ」

「入地、」

作戦中に、南波が私の名前を呼んだ。

「岸から上がるぞ。もうすぐだ」

「蓮見や野井上は」

信じられないことに、私は彼らの今作戦でのコールサインを失念している。

「先行している。大丈夫、ついてこい。いつもどおりだ。何を怖がってる。お前らしくない」

ブーツがしっかりと地面を掴まえた。全身が水を吸って思い。水路潜入用にはドライスーツに似た機能の戦闘装備が指定されるが、いまの私が着ているのは、いつもどおりのタクティカルベストに、黒っぽい迷彩の戦闘服だった。装備がすべて水に浸かっている。自動小銃も、拳銃も、予備弾倉も、何もかも。本来ならすべて防水処理をした上で隔離されていなければならぬのに。

「……、」

「南波」

南波が銃を構えている。その前に、なんて言ったんだ？

「南波！」

「静かに、……！」

私の名前だ。名字ではなく、南波は私の名前を呼んでいる。

「行くぞ、……」

なぜか、そこだけ音声として聞こえない。なのに、彼が私を名前で呼んでいることがはつきりと分かる。なぜだ。なぜ。

目の前が真っ白になった。

足許も、両手も、南波も、何も見えない。

「……南波！」

「……！」

相変わらず、南波は私の名前を呼んでいる。やめる。私を名前で呼ばないで。

不意に照明弾でも撃ち込まれたか、それとも敵の拠点からサーチライトでも照らされたか。サーチライト？ そんな設備？

……！

南波を呼んだはずが、まったく音にならない。CIDSも沈黙している。真っ白だ。何も見えない。私はCIDSをあわてて跳ね上げた。それでも視界は真っ白だった。真夏の日な日なたのような、まぶしさだった。

身体が重い。

耳のすぐ横を、何かが空気を切り裂いた。

銃弾。

撃たれた。やや遅れて発砲音。

見つかったる。

潜入は失敗だ。

「南波、ダメだ、撤退しよう」

南波？

いない。

破碎機のような連続音。機関銃で撃たれている。私はとっさに伏せたが、相変わらず何も見えない。白い。

南波、ダメだ、行こう。

どこへ？

すぐそばを次々に銃弾が掠める。

着弾。

完全に私は敵の射線に入っている。撃たれるのは時間の問題だ。

南波！

彼が私を呼ぶ声も聞こえない。

聞こえない。

遠くから凄まじい雷鳴が聞こえる。

私が南波を呼ぼうとする努力も、その長く響く雷鳴にかき消されてしまう。

そこで……、目が覚めた。

汗の臭いがする。

簡素なベッドに、私は横になっていた。窓が近く、傾きかけた陽が差し込んでいてまぶしい。毛布一枚を戦闘服の上からかぶり、私は横になっていた。

大きく息をついた。肺の中の空気をすべて入れ換えるつもりで。

豊滝 A B。

私は腕時計を見る。伊来中尉とエプロンで別れてから、一時間半。砺波大尉に言われた連絡機の出発まで、あと三十分ほどだった。

仮眠室だから、設備は恐ろしく簡素で、スプリングがキイキイ言うようなマットレスのベッドが四つ並んでいて、仮眠室というよりは病室に近かった。天井の蛍光灯は点つていなかったが、ペラペラのカーテンが半分開いていて、そこから陽射しがあるのだ。二重のガラス窓の向こうは兵舎なのだろう。木造の建物がいくつも見えた。そしてその向こうが滑走路だ。凄まじいアフターバーナーの轟音は、窓を閉めていても地面から響いてくるようだった。

半身を起こす。

南波と二人、基地の厚生係に案内されてここへ通され、とにかく仮眠を取ろうという話で合意した。タクティカルベストをはずし、ホルスターもはずし、戦闘服の上も脱いだ。アンダーウェアも汗やら汚れでひどい有様だった。ブーツを引っこ抜くようにして脱ぎ、ソックスも脱いだ。両足はふやけたように真っ白になっていて、凄まじい異臭がした。それを見て南波が笑っていた。ひどいもんだなあ、と。またこのソックスとブーツを履くのは正直憂鬱だったが、南波はまったく気にしないようで、両足の指を閉じたり開いたりと器用なことを私にしてみせた。スポンからベルトも抜き、とりあえず大きく息をついた。

厚生係からもらった水を飲み干し、固形の戦闘糧食をもらい、私たちはそれらを瞬く間に胃の中に入れた。あの国道脇の農園で戴いたトマトは旨かったが、体力の足しにはあまりならなかったようだ。固形食を胃に入れただけで、血流が幾分早くなったように感じた。何より、固形食の微かな甘さが沁みた。

そして、私は言葉もなく、ベッドに横になったのだ。吐息が漏れた。そして、横になった瞬間に意識を失ったような気がした。

一時間ほど眠ったことになる。ただ、私自身の主観では五分も経過していないように感じる。なのにその間、しっかりと夢を見ていた。私はよく夢を見る。

だから、私は少なくとも、純粹培養系の「お人形」ではない……お人形というのは失礼かもしれないが、夢を見るという機能を追加された新形態でなければの話だが、そこまで疑うと、もはや生きていくことができなくなってしまう。私にとって、夢を見ること、そしてその見た夢を鮮明に覚えていることは、当り前の自前の機能だった。

南波の姿がなくなった。彼が寝ていたベッドはきっちり整えられていた。まるで、最初から私しかいなかったかのように。

南波。

夢を思い出す。

夢は……現実世界に戻ってきた瞬間から劣化していく。憶えていようと努力をしなければ、見た夢は端から劣化し、夢の中の時系列もバラバラになっていく。それを防ぐには、覚醒したとき、できるだけ詳しく見た夢を思い起こし、それを意図して記憶していかなければならない。私は勝手に「夢の録画」と呼んでいた。憶えようと努力が不要なほどに印象的な夢ももちろんあるが、だいたいの夢は、現実世界に戻ってくると、時間を追うごと、加速度的に霧散していくのだ。

南波。

私はもちろん水路潜入の経験はない。そうしたMOSを持っていないからだ。実際水路潜入が必要な任務があれば、別班が充てられる。私や南波が出撃することはない。

ベッドに腰かけける。この部屋に鏡がなくてよかった。私は今の自分の顔を見たくなかった。……泣いていたら困る。泣くって？ 私か？

一時間でも眠ると違う。水と固形食も効いているのだろう。明らかに身体が楽だった。そして、頭もすっきりしていた。幾分緊張も緩和されている。

あまり任務の夢を見たことがない。

自分で南波に講釈しておいて……私自身はどれほど過酷な任務を経ても、任務の夢を見なかった。『追体験』も『予習』も、どちらもだ。だから、南波には悪いが、夢の中で南波を喪ったこともなければ、私自身が戦死するような夢もほとんど見ない。私の精神が樂觀的にできているのかもしれないし、ひどく鈍感なのかもしれない。私は自分を比較的感受性は敏感だと思っていたが、戦闘地域を渡り歩くような任務をこなし、凄惨を極めるような景色をいくつも見ても、それを夢に見たりしないあたり、本当の私は相当に鈍感なのだろう。

凄惨な現場。

筆舌に尽くし難いとはよく云ったもので、だから私がいくら口で説明しても、文章を書いても、一割も伝わらないと思う。できることなら、私はそうした光景を説明したくなかったし、文章にするなどもつてのほかだった。……面倒だからだ。口頭での説明にする文章にしる、第三者の反応をいちいち確かめ、補足し、同情したふりをするのが疲れるのだ。

やはり私は鈍感なのだろう。

大きく息を吸い、吐く。

南波がいれば、「ため息はやめろ」と無粋なことを言う。ため息ではない。深呼吸だ。だいたいため息だとして、いちいち咎められる理由などないはずだ。大きなお世話だ。ここは酸素が貴重品の衛星軌道ステーションではないのだから。

それでも、一見がさつで大雑把に見える南波は、気配りが行き届き、繊細な一面があるのは認める。余計な気を使わせないのも気遣いなのだ。簡単なようで難しい。私にはできない。南波はわかまえているのだ。バディとして組んでいながら、彼も私の領域を必要以

上に侵さない。

たとえば。

彼は私の名前を一度も呼んだことはない。

コールサインか、だいたい私の名前を呼ぶ。

彼は馴れ合いを嫌うのだ。そうは見えないが、事実そうなのだ。適度な距離を保つ。それが縮まることはない。永久に。おそらく。だから当然、私も南波の名前は呼ばない。呼んだこともない。

私の名前。

こんな生活を始めて、私は自分の名前を時折忘れそうになる。誰も私の名前を呼ばないし、部隊は私を十二桁の識別コードで管理するから、余計そうだ。コールサインは作戦によって変わるし、私を識別する固有名詞は名字だけで十分で、コンピュータはコードがあれば問題ないのだ。

最後に名前を呼ばれたのはいつだったろう。

おそらく、この戦役に参加してからは一度もない。ずいぶんと時間をさかのぼらないといけない。

窓から外を見る。

タンポポが一面に生えていた。陽射しを浴びて、まぶしい。タンポポの向こうの兵舎はくすんだ淡いグリーンの木造だ。もともとここは軍事的な施設ではなかったのだろう。中継的な飛行場か、その類だ。それを空軍が接收して、前線基地にしてしまったのだろう。私がいま腰かけているベッドも、その頃から使われていたものかもしれない。ものに記憶があるなら、それを呼び戻すとおもしろいだろう。軍が保有する装備はICタグで管理されていて、移動履歴や故障、修理の履歴、戦闘機ならば出撃回数、そうした情報が埋め込まれているが、ベッドや机の記憶はどうなのだろう。備品管理用に簡易チップがついているかもしれない。が、それ以上、このベッドに誰が寝たのか、どんな夢を見たのか、一日の大半を「孤独に」過ごすこいつが、私のような「来客」をいままで何人迎えてきたのか、それを知ることができたら。……なぜこんなことを考えてしまうの



だろう。

窓辺にスチーム暖房があり、ぼんやりと熱を出していた。あらかじめ私と南波はそこにソックスと戦闘服を載せておいた。乾けば異臭も多少は抑えられるだろう。見ると、ソックスはパリパリになって塩を吹いていた。臭いのことは考えずに足を通した。ブーツの湿気はどうしようもない。あと三十分。

「おはよう、入地」

南波。

ベストは着けていなかったが、戦闘服姿だ。隙のない格好。ただ、4716自動小銃は持っていなかった。拳銃も、部屋の片隅の机の上に載せたままだ。

「すつきりしたか、多少は」

「多少は」

「晴れたな」

「そうなのか、」

「快晴さ。気づいたら」

「お前は寝たのか」

「俺は十分ほど前に起きたんだ。しっかり寝たよ」

私はベッドを降りる。戦闘服を身につける。

「気分はどうだ」

南波はタクティカルベストを着ける。メルクア・ポラリスMG-7Aをホルスタに挿し、自分の4716自動小銃を取ると、ベッドに腰かけた。

「いい」

「俺もだ。でも寝たりないな」

「それは同感だ」

「夢でも見たか」

私ははっとして南波を見返した。

「なんで」

「眼が赤い。ちゃんと眠れてない証拠だ……それともあんたも純粹

「培養系なのかな」

「違う」

「冗談だよ。ムキになるな。分かってるから」

南波は低く笑った。おそらく本音だろう。私たちの間に疑念や秘密は存在しないからだ。そんな雑念のために判断が鈍ってはかわかない。ただし、知らなくてもいいことはお互いに知らない関係だ。知る必要がないことは無理に知ろうとしない。それが不文律だ。

「どこに行ってた」

「PX（売店）」

「そんなものがここにあるのか」

「キオスクみたいなのがあったぜ」

言いながら、南波は私にチョコレートとコーラを差し出した。

「悪い」

コーラの缶はよく冷えていた。

「高泊に帰ったら返してくれればいい」

「自分ののは」

「ちゃんといいただいた。気にするな」

私はプルタブを引き、コーラをあおった。炭酸が喉を灼く。喉が鳴った。旨かった。

「こつこつこのを見ると、日常が帰ってきたって気がする」

ぼんやりと思う。

「入地准尉でもそんなことを考えるんだな」

「なぜ」

「どこに行っても非日常に文句を言ってる、そういう印象だからな」  
「ひどいな。なんだ、その『どこに行っても非日常』って」

「表裏なんだろう。あんたにとって、日常ってのは。どこに行っても日常の延長で、帰ってくるときは、いままでの日常が非日常になっ  
てるんだろっ」

「難しいことを言うんだな」

「難しいことを言うのは、あんただけの得意技じゃないんだよ」

南波の声が穏やかに私の耳へ届く。CIDSもインターコムも何も通さない肉声だ。銃声も間に割って入らず、ジェットエンジンの轟音は聞こえるが、ここは私があるとなく理解できる日常の世界だと思う。思いながら、チョココレートをかじった。これも旨かった。

「悪いが、コーラとチョココレートは、合わないな」

「そうか？」

「コーラが……ただの炭酸水だよ」

「それって真理じゃないか？」

「なにが」

「強い甘みの前に、弱い甘みは無味になる、ってね」

「意味が分からない」

「いいんだ。気にするな」

気にしようがなかった。

「さつさと食べ。行くぞ」

私はチョココレートを口に放り込み、無理矢理咀嚼して、それをコーラで流し込んだ。もう少しゆっくり味わいたいと思ったのは、口の中にチョココレートの余韻を確かめてからだった。

高泊たかとまりの街は、オチャコヴオ海を望む広い湾に面していた。一年を通して風が強いため、街を望む丘陵には笹の葉がびっしりと自生していて、背の高い木々はほとんど生えていない。それでも、こうした荒れる気候に強い庫裏くろ流諸島原産の桜や、入植者が植えた広葉樹や針葉樹の類が、防風林のように続くのだ。

人口四十万人。

北洋州と海峡を挟んでこちら側、椀武戸カハフトと呼ばれるこの南北九〇〇キロに及ぶ島の中で、北緯五〇度以北の同盟国領土をひっくり返しても、椀武戸の中心都市・富原市に次ぐ人口と規模を誇っている。港からは大型フェリーが何隻も行き来し、帝国海軍の停泊地にもなっている。市街地は丘陵地とわずかに開けた海岸線の平地にあり、夜は高台から望む夜景が名物だ。陸軍の駐屯地は、中心部から車で十五分程度、市電なら三十分弱ほど離れた丘陵地の中腹に位置している。

一週間ぶりの「帰還」だった。砺波大尉のヘリコプターに便乗し、到着した頃は日が傾き、街の灯りが瞬いていた。私はどうにもこの時間帯が苦手だった。それを南波に言っても理解されないだろう。そして理解しようと努力する過程で、私が彼に説明しなければならぬその雑多な手間を考えると、なおさら南波に話そうとは思わなかった。それに彼も私の身の上話には、興味を抱かない。戦闘地域から離ればなおさらだ。

レポートは携帯電子端末機タイミナルでも作成できたが、ひとまず三十分程度、私と南波は上官に口頭での報告と説明を行った。そして任務終了が告げられた。この作戦における私たちの任務は、ここで完了というわけだ。

一週間着たきりの服をすべて脱ぎ洗濯室に出すと、私は浴室で全身を洗った。髪を洗い、全身の汚れと匂いを落として、私は気分が

よくなった。浴室を出てスウェットに着替え、談話室を通りかかる  
と、ソファに南波がいた。

「よお、姉さん」

サイダーの瓶がテーブルに載っていた。彼もさっぱりした顔を  
していた。

「飯、喰ったか」

「いや、」

「余り物だけど、もらえるぞ。食堂に行つてこいよ」

「もう休みたいんだ」

「そんなことだろうと思った。ここへ来いよ、」

南波は傍らからスチロール製の容器を差し出した。

「もらつてきた。食べるといい。姉さん、痩せたぜ」

「それはありがたい」

何がありがたいのか。痩せたことか。食べ物のことか。言つてい  
て自分でよくわからなかった。

談話室には南波の姿のほか、名前も知らない兵士が数名いた。全  
員が55派遣隊の隊員だ。この建物は派遣隊がすべて使用しており、  
一般隊員の姿はほとんど見られなかった。

「やるよ」

南波の隣に腰かけると、別のサイダーの瓶を渡された。瓶はうっ  
すらと汗をかいている。南波が栓抜きで開けてくれた。

「グラスはないからな。そのまま飲んでくれ」

瓶をあおった。強い炭酸。南波は炭酸飲料が好きなのだ。コーラ  
にサイダー、その類をよく飲んでる。酒を飲んでいる姿は見たこ  
とがないから、アルコールがダメなタイプなのかもしれない。

「蓮見はすみが生きてたぞ」

南波も瓶をあおりながら、言う。

「本当か」

「樋泉大尉ひしずみに聞いた。風連と縫高町の途中の国道で救出されたそう  
だ」

「D中隊はどれくらい生き残ってるんだ？」

「三分の一ってところだろうな」

「全滅だ」

「そうだな、全滅だ」

「でも、発電所は取り返した」

「そうだな。縫高町もあんな形だが、制圧したしな」

「成功か、」

「どうだか」

南波は瓶を天井まであおり、サイダーを飲み干した。喉が鳴ったのが分かった。

「次の指示、もう聞いたか」

「明日聞く」

「俺もだ」

「次があるってことだよな」

私も飲む。淡い緑色のガラスの瓶。懐かしい。夏休みの味がした。

「そりゃ、あるだろう」

「戦況は、どんな様子なんだ」

「高泊がここまで平穏なら、悪くないんじゃないのか」

「楽観的だな」

「戦況なんて俺には関係ないからな……ひとつひとつの任務がすべてだろう、姉さん」

そのとおりだった。私たちは戦車部隊が激突する最前線にも、戦艦が艦砲射撃をする上陸作戦にも、表だっては参加しない。あくまで、メインイベントの直前だったり、直後だったり。私たちはキャンプファイアの火付け役か、火消し役か、あるいはキャンプファイアが「ここにあるぞ」と知らせたり、さもなければよその団体が火を点けようとしているところを、消してしまうとか、そういう役回りばかりなのだ。そして、キャンプファイアの周りで手をつないで踊ったりなど絶対にしない。

「とりあえず、姉さん……入地准尉」

ふと見た見た南波の横顔はやはりげっそりと痩せていた。石鹼の匂いが漂っているのがアンバランスだ。

「しっかり寝てくれ。明日は指示を受けたら半日はオフだ。しっかり休もう」

「了解。……まだここにいいのか」

「なんだか、脳みそにやすりを掛けられた気分だ。テレビでも見るさ。ウエルカム・トゥ・日常世界って奴だな」

「北方戦役のニュースが入ったらどうするんだ」

「一般市民のつもりで見るさ」

「……おやすみ、南波少尉」

私は飲み干したサイダーの瓶と南波から受け取った容器を持って、立ち上がった。

南波は私を見ることなく、電源の入っていないテレビをじっと睨んでいた。

午後の風は穏やかだった。

海流の影響か、高泊は風は強いが気候としては内陸よりは暖かい。空はどこまでも澄んだ青い色で、陽射しが気持ちよかった。

私服に袖を通したのは相当に久しぶりだった。IDを警衛に見せ、私は駐屯地を出た。ゲートの向こうは、埃っぽいが穏やかな日常がどこまでも続いていた。昨日までの「私たちの日常」を無理矢理思い出させようとするのは、哨戒飛行に飛び立った空軍の戦闘機の爆音だ。ただ、高度がかなりあるので、探そうと思っただけ見上げないかぎり、音のした場所に首を向けても、機影は見えなかった。戦闘情報も表示されず、サブ窓も開かない視界。私は度に入らない赤いフレームのメガネをかけて、小さなシオルダーバッグを肩から提げ、通りを歩く。なるべく「戦士」に見えないように。それでも、見る人間が見れば、私たちの職業など一目瞭然だという。姿勢が違う、歩き方が違う、何より視線が違う。

ゴトゴトと路面を響かせながら、市街電車がやってくる。坂がち

なこの街にあつて、市電が縦横に走っているのは私から見るとめずらしかった。真冬でも、凍りついた軌道の上を、なんでもないようなそぶり、ゆるい坂道を上っていくのだ。

CIDSも4716自動小銃もMG-7Aセミオートマティックも一切適切所持しない身軽な私は、しかし携帯電子端末はコートターミナルのポケットに入っている。しっかりランヤードで身体と固定されて。あくまでもこれは端末であり、「本体」は軍の管理する電算機のごかにあるのだろうが、これが私の身分を証明してくれる。そして、電車に乗るにもこれが必要なのだ。決済機能も内蔵しているからだ。機能や形、メーカーは様々だが、民生版を市民のほとんどが持っている。通話もできるし、一秒と狂わない時計もついている。あらゆるメディアと通信ができる。私の持っているそれが多少違つとすなら、堅牢性と、対電子防御機能が奢られている点だろう。電子戦機によるECMを受けようが、上空一〇〇キロで戦術核兵器が炸裂しても、私の携帯電子端末は決して沈黙しない。バッテリーもCIDSと同じ、固体高分子形燃料電池で駆動、民生品よりはるかに長時間、すべての機能がフル稼働するのだ。その分ちよつとだけ重いのは許容範囲にしておこう。

停留所は砂つぽかった。昼過ぎ、平日。こんな時間に電車を使うのは、のどかな一日を信じて疑わない人々だ。およそ戦争中とは思えなかった。戦線まで三〇〇キロ。戦闘機なら三十分足らずで到達してしまう距離なのに、恐ろしく穏やかだった。任務から帰還した翌日、私はこの落差にいつも戸惑うのだ。そして、この戸惑いを経験しなければ、私は私に戻れない。

海外旅行から帰つてくると、自分の国の風景に違和感を抱くという。私はそれほどの長期間、旅行をしたことがないのでよくわからない。この話をしたのは丹野美春だ。電車を待ちながら思い出す。日常で経験した記憶は、非日常の世界より、こつした日常世界へ帰還してからのほうが思い出しやすい。

(あのね、話す言葉から、まず変な感じがするの)



あれは南沢教授の研究室だったか、いや、学生食堂だっただろうか、紀元記念公園だったろうか。このあたりが曖昧だ。それでも丹野美春の声は鮮明に思い出せる。

(きつと、頭の中には、言葉の切り替えスイッチがあるんだと思う。それまでは湾口域の言葉で考えていたのに、いきなり空港のゲートを出るとね、こっちの言葉であふれかえっているでしょう)

停留所の私。思い出しながら、周りを見る。プラタナス並木。石造りのビル。トロリー線。自動車。若い母親に連れられた小さな女の子。

(一瞬ね、戸惑うんだ。あ、私、何を話したらいいのかなって)

対向車線、カーブを曲がって、電車が来る。フランジが軋む音。私の側の電車はまだ来ない。

(すぐに思い出すんだけど、それでも何となく、向こうの言葉でも考えちゃうの。並列処理しちゃうんだね。頭が勝手に)

(そんな器用なことができるの?)

私の声だ。私の声も同録されていたのだ。

(もちろん、無意識なんだけど。でも、空港から家に帰る途中の電車だね、もう向こうの言葉では考えなくなるの。そしてね、見えるでしょ、風景。それがぜんぜん違うの)

風景。落ちた鉄橋。煙を上げる港。びっしり並んだ遺体。発電所、制御室、南波、上半身が消し飛んでしまった野井上。

(上杵の街<sup>ジョコハマ</sup>って、もっとごちゃごちゃしてて、ほら、物乞いとか普通にいるのね。電波塔の下とかに。見たことあるでしょ、あの電波塔。あの辺、お金持ちもたくさんいるのよ。なのに、物乞いもたくさんいるの。建物も家もね、なんだか汚れてて、そういう風景に馴染んでしまってるからなのかな。帰りの電車から見える都野崎の街がね、変に見えるのよ)

SDD-48に蜂の巣にされたヘリコプター。ソニックブームを叩きつけて飛び去る友軍の戦闘機。黒煙がにじむ夕焼け空。言葉を話さない敵の兵士たち。

(身構えなくても平気なのにね。カバンとか、気がついたらしつかり抱きしめてたりして。それもね、北三番街の駅を出たら、すっかり忘れちゃうのよ。物乞いなんていないし、すごいお金持ちもいないし。果物屋さんでリンゴを買ったり、持っているカートが重いなあなんて考えて、家のドアを開けたら、忘れちゃうのよ)

丹野美春のおっとりした口調と、西方訛りが耳の奥で再生され続ける。

(風景が違っつて、そんなに気がつくものなの?)

私の声だ。

(うっん、すぐに戻っちゃう。意識していないと、分からないかも。でも、空港を出て電車に乗っていると、ここは上杏じゃないんだ、都野崎に帰ってきたんだあって、はっかりわかる)

戦車部隊。小谷野中尉。保呂那川と、64式戦闘爆撃機。ああ、

この音は、GBU-8……。私の頭が混戦気味だ。

(適応っていうのかな。きっと人の脳って、そういうふうに来てるのね。今まで普通だと思ってた風景も、別の街に長くいると、普通じゃなくなるって。でもそれも、元の場所に戻ってくれば……)

それが馴染みの場所であればあるほど、元の適応性が発揮されて、違和感もすぐに霧散する。そうなのか？ 丹野美春はそう言っていた。

レールが軋む。顔を上げる。電車が来る。私は回想のスイッチを切る。丹野美春の声が途切れた。途端に私は、初夏の高泊の街に戻される。私の日常はいくつあるのだ？ 機能までの日常は、やはり地続きでここにあるのだろうか。

(でもヘリコプターで帰ってきたからな。地続きじゃないね)

南波の声が聞こえた。なぜ？ 南波はそんなことを言わなかった。これは私の脳の創作だ。

南波なら言いそうなこと。

私を感じたことを、私自身の声で言わず、南波の声が代読した。

昨日。

豊滝 A B から砺波大尉の操縦するヘリコプターは、高度千メートル程まで上昇し、滑るように高泊駐屯地に到着した。南波は終始無言だった。疲れていたのかもしれない。私もしゃべらなかつたし、砺波は副操縦士コパイや管制と最小限話すだけで、私たちには一言も話しかけてこなかつた。スライドドアは閉じていて、ターボシャフトエンジンの音、ローターが空気を切る音はそれでもやかましかったが、私は南波に倣って目を閉じて機体に身を委ねたのだった。

私は停留所でそつと目を閉じ、大きく息を吸い、吐く。ため息じやない、深呼吸。

電車が耳障りなブレイキ音を甲高く鳴らし、停車する。電車を待っていたのは私を含めて四人だけ。乗り込むと、車内には同じ数の四人が、位置もバラバラに座っていた。

(姉さん、悪い癖だな)

また南波。これは本当に言われたことがあるかもしれない。けれど場所も日時も特定できない。南波が私の視線をたしなめた台詞だろう。室内にいる人間の数と位置、それを入室した瞬間に把握する癖。……悪い癖かどうかは知らない。生き残る術だ。55 派遣隊で教育された。けれどここは戦線から離れた高泊で、味方の勢力下にあり、敵の間諜は紛れているだろうが、窓際の座席に座ったところで狙撃される心配などない。私が駐屯地司令だったり、あるいは有名な政治家であるならばその心配も有用だろうが、私はただの「戦士」だった。秩序が維持され保たれた市街地で狙われる道理がなかった。

電車はさらに市街地を離れていく。進行方向向かって右手に海を望みながら、周りからは背の高い建物が消えていく。勾配の緩やかな坂道を、道路と軌道と電車は上っていく。いくつもの停留所を通り過し、いくつかの停留所で停車し、そのたび、車内の乗客が入れ替わる。けれど、満席になることはなかつた。車内は陽射しにあふれている。なんの躊躇を考へることもなく、陽向に立ち、風景を望む。遮蔽物を考慮する必要もなければ、だいたい私の両手はいまフリー

だ。

フリー。

今日の最終目的地までに、私のおそらく片手には何か握られることになる。けれどそれは武器ではない。危険なものでもない。今の私の服装でそれを持って、なんの違和感もないもの。けれど私には似つかわしくないもの。

やがて勾配は終わり、いわゆる旧市街地からは一段丘の上に通る道を、電車は行く。このあたりは住宅街で、旧市街に勤める人たちがささやかな住宅を建て、住んでいるのだ。建物どうしの間隔もまばらになってくる。この丘陵は富原市へ延びる区間高速道路の路線に寄り添うように（順序としては逆だが）続き、やがて平野に溶けて消えていく。風が強すぎるので耕作地には向かず、市街地が途切れると、広大な牧場が点在する牧歌的風景になるのだ。

電車に揺られ始めて二十分ほど。ようやく私の目的地が近づくと、電車が速度を落とし始めて、私は席をそっと立ち、電車が止まると携帯電子端末ターミナルを運転台横のカードリーダーにかざす。運転士が短く乗車への礼を告げ、私も返礼。開いたドアから、背の低い停留所に降り立つ。降りた客は私だけだった。電車は溜息を漏らしてブレーキを解除し、モーターを唸らせてさらに郊外へと走っていくのだ。この路線がもつとも市街地の外側へ向かう系統だと憶えている。そのうち終点まで乗ってみたいと思っているが、機会がなかった。いや、機会ならいくらでもあるのだ。いまも、そのまま乗っていけばよかった。今日は夜の点呼までに帰ればいい。まだ日も高い。終点まで乗ってからここに寄ればいい。でもそうしない。人の意思などそんなものなのだ。

信号機もまばらな道路だ。二ブロックほど行くと、角に黄色い壁と緑の屋根の小さな店がある。花屋だ。店頭には初夏の野花が数種類飾られていた。私は一方的に馴染みになってしまった店員に、いくつかを指さして、ごんまりとした花束を作ってもらった。剪定してもらった間、私は店内を眺めるのだ。小さな店。地域の店。けれ

ど生きている店。きつと発電所の傍の町にも、あの鉄橋を見上げる縫高町の商店街にも、こんな花屋があったに違いない。人がいなくなつた町は、建物が破壊されず残っていたとしても生きていない。町は人がいて初めて「生きている」と言えるのだ。だからきつと、建物が破壊され黒煙を上げ瓦礫の山になつていても、そこに住民がいればその町は「生きている」。私はそう感じる。

店員が笑顔を向けてくる。

「できました。こんな感じでよろしい？」

笑顔だ。私と同じくらいの年齢好で、エプロン姿がよく似合っている。

「ありがとうございます」

私もなんとなく笑つてみた。南波を連れてくればよかつたかもしれない。彼は笑うことに関しては、自然な振る舞いができるのだ。そして私に言うに違いない。姉さん、その顔はないぜ、と。

レジスターに携帯電子端末ターミナルをかざし、決済する。

「ありがとうございます」

何度目だろう。彼女の挨拶は気持ちよかつた。南波も文句が出ないだろう。

私は店を出ると、ほんのわずかな時間、立ち止まる。花束の根本を右手で持ち、左手を「傘」になつた部分にそつと添える。……持ち方がまるきり控え銃の体勢だ。苦笑しながら、これもいつもの動作だつたと思ひ出す。そのままの姿勢で、私は店を立ち去るのだ。

店の横の路地はそのまま一本道で、なだらかな丘陵へ続く。木製の電柱と街灯が一定間隔で並び、道の両側から住宅が切れると、何もない草原になる。気まぐれに立つ針葉樹と、右手に広がるのは海だ。もちろん海岸線の手前には旧市街が見渡せる。やがてコンクリート製の門が見えてくる。

墓地。

私はひとつの任務が終了すると、丹野美春が言うところのスイッチを入れるために、ここへ来る。ただの個人的なイベントで、深い

意味はなかった。こうすることで、私は日常生活に戻してもらった。このイベントについては、南波にも言っていなかった。彼はきつと、私のこの行動が理解できないだろう。この無意味かつ非効率的で、非論理的な私の行為を。

雨ならば傘を差して来たと思う。

風雨なら、雨具を着て来たと思う。

雪の日も足跡を深く刻んで。

おそらく、私はこの場所が好きなのだ。

海を望み、街が見え、しかし喧燥からはほど遠いこの場所が。

一度調べたことがあった。墓地がいつ造られたのか。それは開拓時代からさらに遡り、この辺り一帯に住んでいた先住民の生活まで戻る必要があった。

北部自治域から北東自治域に跨るかなり広い範囲に、一〇〇〇年ほど前から、私たちとはやや文化と言葉の異なる先住民の文化があった。北洋州やこの樺武戸の地名はほとんど、帝国の言葉ではなく、先住民たちの呼び名をそのまま使われている。彼らは文字を持たなかったが、話す言葉の文法の骨格は、私たちのものとほとんど違わなかったため、今では国内の一方言という扱いだが、しかし発音は難しく、綴られる物語も、自然と共存し、ときには命を失い、あるいは命を戴く、そうした生活に密着した壮大なものだった。

彼らは部族の墓地を、集落を見下ろせる高台に造った。私たちの慣習とは違い、彼らは墓標に木を使った。使われる木は、葬られる人によつて違った。部族によつては墓標代わりに木を植えることもあったようだが、場所についてはやはり高台を選んでた。この墓地もまた、高泊一帯を治めていた部族の墓地だったという。開拓民として入植した人々は、この地の先住民とともに汗を流すこともあったのだそうだ。そして、ともに同じ場所に葬られた。

もし、いつか戦役を離れ、許されるのであれば、私は彼らの造った墓地を辿つてみてもいいと考えていた。きつと、ここと同じように見晴らしがよく、気持ちのいい場所に違いない。街……集落で暮

らす人々は、高台から常に彼らの肉親に見守られるのだ。それはいい慣習だと思った。

花束。初夏の野花が薫った。

誰か、特定の墓標を訪れるわけではなかった。墓地の中心地に、ひととき大きな墓石がある。墓地全体を統べる墓標。すべての亡き人たちを鎮めるため、弔うための墓標。私にはそれが、この街全体を鎮めているようにも思えたのだ。私は静かに、そっと、墓石の前に花束を置く。この墓標にはいつも花や供物が絶えなかった。

私には特定の神はいない。教義もない。ここで花束を供えて、目を閉じ、頭を垂れることに意味はないかもしれない。しかし、経典はなくても祈ることはできた。私の言葉でだ。

私は多くの命を奪う側の人間だ。

死の恐怖を敵は思う存分私に与えるが、作戦が終わりここにこうして立っている私は、その恐怖をはねのけて、私や私たちを狙う敵の命を奪ってきた。だから戻ってこられたのだ。

墓地で、この墓標に、そっと頭を垂れること、それは私なりの弔いのつもりだった。私が躊躇いもなくトリガーを引いた先に、友人になれたかもしれない誰かがいたのではないか。いや、きつといた。この世のものとも思えないGBU-8自己鍛造爆弾の叫びを聞きながら、粉々にされた敵の中にも、話をすれば、わかり合えた誰かが……。

海から吹き抜ける風に頬を張られ、私は顔を上げる。

南波には絶対言えない。彼は私のこのような無意味な慟哭を理解できないし、して欲しいとも思わない。花束を見下ろして、私は思う。

振り返る。

墓標の傍に、一本の広葉樹が立っていた。ハルニレの木だ。初めて来たのは真夏だった。空へ向かって枝を広げ、幾百、幾千の葉をそよがせる姿を好きになった。私の地元の草原にも生えている。今、眼前のハルニレはまだ若葉が芽吹いたばかりで、枝を透かして真っ

青な空が見えた。見上げると、飛行機雲が二筋、北へ向かって伸びていくところだ。雲の先端に、小さく機影が見える。

また海を眺める。

海上はさほど風が強くないのか、凪いでいる。

民間の船より、圧倒的に軍用艦が目立つ。本来あの鼠色は迷彩色のはずだが、こうした市街地や民間の船に混じると、やたらに目立っている。あれは、第四艦隊……北方艦隊の重巡洋艦に、その奥はミサイル駆逐艦だろう。空母や戦艦の姿が見えないのは、彼らが未だ北の海で作戦行動中だからだ。

指令。

午前、隊本部へ出頭した私と南波に、次の指示が出た。

北へ向かえ。

指令から贅肉をすべてそぎ取ると、私たちが行わなければならぬ行動はそれだった。最前線への復帰。

南波は表情をまったく変えることなく、了解の意を示した。もちろん私もだ。

作戦に関する詳細なプリブリーフィングは三日後に行われる。そこから必要な装備の調達と、最低限度の訓練。一週間後にはふたたび北へ向かう。私たちは二名一組を最小行動単位にする。これは戦闘機の編隊と同じだ。戦闘機も二機一組の編隊<sup>エレメント</sup>で行動し、それ以下になることはない。戦場に「一匹狼」が存在しうる余地など全くなく、ワンマンプレイは強く戒められ、なにより協調性が重要視される。私や南波に協調性があるのかどうか、一般的なレベルからするとはなはだ疑問だったが、しかし今の今まで生き残ってきていることが何よりも答えだと思う。

風連奪還戦以降、私と南波の二機編隊<sup>エレメント</sup>になってしまったが、次回作戦ではチームも再編成される。2 + 2 = 四名で1チームを編成し、任務に就く。先任が南波で、従ってリーダーは南波だ。ほかの二人は顔見知りだったが、任務以外での交流が全くないのは南波と同じだ。風連奪還戦での生き残り四名だ。



南波、入地、蓮見、桐生。

リストに並んだ私たちの名をじっと見てみると、文字が意味をなさなくなってくる。南波と書かれた文字と、あの軽薄な彼の顔が繋がらなくなるのだ。入地とは何者か、蓮見の姿、桐生の声。字面だけをじっと見てみると、偏も旁もすべてがバラバラになる。ゲシユタルト崩壊だと教えられた記憶があつたが、それを私に言ったのが南沢教授だったか丹野美春だったのか、記憶が曖昧になっていた。どちらにしろ、私はまた赴く。

墓標を作りには。

私や南波や、チームメイト以外の名前を刻みに。

そして、きつと、また私はここに来るのだ。

必ず。

丘から見下ろした港に、重巡洋艦の姿も駆逐艦の姿もなくなっていた。南から吹き込んでくる風は暖かく、宿舎を出る私の頬をなでる空気は微かだが甘い匂いがした。どこかでひっそりと咲いているに違いない花の匂いだ。

夢を見たような気がしていた。

悲しい夢だったと思う。

断片的にでも何か思い出せないかと思っただが、目覚めたときに見えた天井の白さと、窓から差し込む陽射しの暖かさにすべてが消えた。思い出そうとする努力もやめた。思い出す必要がないと思っただから、私は「夢の録画」を怠った。それでいいと思っただ。ただ、止めどなく涙が溢れて困った。子どもが泣くように、大粒の涙が次から次へと私の目から流れ出した。夢の記憶は残っていないのに、そのときの感情だけは残滓として私の涙腺を刺激し、夢は確かに存在感を主張しているのだった。

私は身繕いをして、ドアから出るとき、ふと部屋を見渡した。いや、見渡すほどの広さもない。本来は二人部屋。両側の壁にベッドがあり、その手前側に無愛想な木製のデスク。相部屋だった彼女……チームBの嶋田准尉……はもう二度と戻らない。北東自治域からやってきた嶋田はお国訛りも抜けきらず、きれいな目をしていた。私たちが風連奪還戦に出撃する直前、敷花市防衛戦しきかに参加して、そのまま帰ってこなかった。

デスクはきれいに片つけられていた。ベッドにはマットレスが載っているだけで、シーツも布団もブランケットも何もなし。小さなロッカーも空っぽだ。私たちは、いつでも私物を実家へ送り返せるように荷造りさせられている。そのへんもシステマティックになっているのだ。嶋田の私物はだから、たいして同僚たちの手を煩わせることもなく、すんなり送り返されたに違いない。私が出撃する前

は、まだ彼女の残り香のようなものがあつたが、今はもう何も残っていない。

いずれ私もそうなるのだろうか。

私は私生活というものにさほど興味を抱いていないせいもあるのだが、デスクもロッカーも何もかもが素っ気なく、整えられたベッドを無視すれば、この部屋に生活感は漂っていないかった。

いつから私は刹那的になったのだろうか。

帰れない可能性を考えはじめてからだろうか。

南波は、部屋を散らかり放題にして出発するという。わざと片つけもせず、ロッカーの中もデスクの引き出しの中もめちゃくちゃで、私物の整理もまったく手を付けない。彼は孤独な神を信じることもなく、験を担ぐ習慣もないという。けれど、私から見れば、部屋を片付けもせず、また戻ってくることを前提に生きている彼の生活そのものが、やはりなにかに支配されている気がしてならないのだ。南波は強固に否定するだろうが。

わずかに嘆息してから、私は部屋を出た。

プリブリーフィングはすでに終わらせていたから、待機室で南波と顔を合わせたとき、彼はもう装備を調えつつあつた。私も倅い、武器担当から今回の作戦で使用する装備一式を手渡された。

CIDSは新品、私の「体調」に合わせて調整が済ませてある。

これを怠ると、作戦中に私が囁いても、南波の耳に意味のある言葉として届かなかつたり、サブ窓が私の視界正面に開いてしまうことになる。戦場で倒れた仲間からCIDSを調達できない理由はそこにあつた。使用者に特化した微調整が必要だからだ。そしてその微調整は戦場<sup>フィールド</sup>では行えない。

タクティカルベスト、メルクア・ポラリスMG-7Aセミオートマティック。予備弾倉、バックパックには戦闘糧食<sup>レーション</sup>その他が詰め込まれて、適度な重さが気を引き締める。ベンチに座った南波が自動小銃をいじくり回していた。

ヘツツアー4726。前回の風連奪還戦で私たちが使用したタイ

ブの口径違いだ。今回はメンバー全員が三〇口径バージョンを使用することになった。一般部隊ではほとんど配備されていないタイプで、ごく一部の選抜隊員や特殊任務に就く部隊に配備される。私たちはその特殊任務に就く部隊であり、今回の作戦の方向性がそれで何となく分かった。

「見敵必殺つてことかね」

南波が光学照準器をのぞき込んで、CIDSとのリンクを調整していた。照準に関しては個々人がそれぞれ事前に零点規正ゼロ・インを行っているので、問題はない。

「7・62ミリなんて久しぶりだ」

私もベンチに腰かけ、銃口の方向に注意しながら構えてみる。5・56ミリ版の4716と基本的なフレームや操作系は変わらないが、銃身バレルは太く、長い。弾倉も大きいので、受けも広い。全体的に4716よりは重く大きいのが、弾薬の威力もまた三〇口径は大きい。ざっと、5・56ミリ弾の三倍ほどだ。弾道も非常に素直で命中精度も期待できるが、なよりの違いは、その打撃力に尽きた。三〇口径のライフル弾を被弾したなら、おそらく衝撃でもう身動きがでなくなる。身体の末端ならまだしも、基幹に近いところに命中すれば一発でノックアウトだ。撃たれたことはないが撃たれたいとは思わなかった。

「気が進まないか」

口数少ない私に南波が笑う。

建物を制圧したり、拳銃弾でも届きそうな近距離での戦闘でなら、三〇口径など必要ないし、こんなに全長の長い銃は不要だ。この銃は野戦向きなのだ。今回の作戦は、比較的長距離の交戦域を想定している。そして、発砲したからには、南波の言うとおり、一発で相手を仕留める必要があるのだ。けがをさせるのではない。射殺だ。

「近接航空支援で爆弾を降らせる方が気が楽だな」

南波。まだ小銃に弾倉は装着していない。これから私たちは、得意のヘリコプターに乗って移動する。北へ向かうのだ。ふたたび。

「もうあの金切り声は聞きたくない」

「俺も嫌だな、あれはな」

「でも、」

太い銃身をひと撫でする。拡張レールにフラッシュライトとCIEDS連動の側距器。アンダーレールにフォアグリップは今回装備しない。くるくる左右にスイッチングしたり姿勢を変動させるような戦闘を考慮していないからだ。そもそも4726……三〇口径は連射に不向きだ。

「最終的には、呼ぶわけだろう」

南波を見る。笑ってはいなかった。

「作戦がうまくいかなければ、最終的には、また奴らのお世話になるんだろうな」

奪還できなければ破壊せよ。……今回の作戦は奪還ではなかったが、作戦遂行上問題が生じた場合や、事実上作戦が失敗した際は、再び89式支援戦闘機を呼び、「目標」を粉碎する手はずになっている。

「最初からそうすればいいんだよ」

蓮見が4726を手に私の隣に腰かけた。蓮見の目を見、私は嶋田を思い出す。二人の目が似ているからだ。パイロットの目。それに近い。澄んでいるのだ。蓮見の長いまつげの向こうに、黒々とした瞳がじつと私を向いていた。

「なにも私たちが行く必要なんてない。最初からあの『癩癩娘』をバラ撒けばいい」

陸軍の一般部隊から、GBU-8自己鍛造誘導爆弾は「癩癩娘」のあだ名で呼ばれているらしい。誰が名付けたのか、私は同意できなかった。あれは癩癩ではない。断末魔の叫びだ。あるいは、気のふれた魔女が鎌を振りかざして襲ってくるような、そんな声だ。できれば二度と聞きたくなかった。

「『癩癩娘』で済めばいいがな」

南波。

「しびれを切らして『お母さん』でも落とすっていうのか」

蓮見。彼女は符牒やあだ名の類が好きなのだ。89式支援戦闘機には搭載できず、より大型の64式戦闘爆撃機でなければ使用できない大型の爆弾。

「それはちよつとな。今回の作戦では使用しないだろう。趣旨が違う」

そつだ。GBU-8ならまだしも、半径数キロを更地にしてしまふ『お母さん』は、今回の作戦の趣旨とは違う。私たちは発電所に絵本の読み聞かせをしに行くわけでもなければ、鉄橋を落としたり街を奪還しにしに行くわけでもないのだ。強いていうなら、敵の戦闘機を離陸前に叩きつぶすのがいちばん近い。しかし私たちは敵の戦闘機を破壊しに行くわけでもなかった。

「無駄口は十分だな、」

南波が立ち上がる。タクティカルベストの下にはボディアーマー。

セラミック板が前後に入ったもので、重い。私も付けているが、これが私を守ってくれるのは7.62ミリまでだ。それも真正面から直撃すればどうなるか分からない。ないよりまし。しかし、ゼロか1かなら、私は1を選ぶ。

窓を向く。

ヘリコプター。

「行くぞ」

南波が言う。銃を掲げ、まっすぐに背筋を伸ばし、歩き出す。

蓮見が私を見ている。まぶたでうなずく。私も立ち上がる。桐生が水を飲んでいた。蓮見が桐生をつま先でつつき、桐生は飲み干したボトルを床に置き、立ち上がる。

A、B、C、D、四チームが再編成され、南波はチームDを率いる。表では四機のヘリコプターがローターを回している。あの日、砺波大尉が飛ばしてくれた汎用ヘリコプターとは違う。ローターブレード先端は屈曲しており、極端に騒音が少ない。テールローターはダクテッドファン。これも従来のもと比較すれば無音に近いほ

ど騒音がない。ターボシャフトエンジンも消音改造が施されており、砺波大尉のヘリがトラックなら、このヘリは高級車だ。値段もそれくらいに違うらしい。黒く塗られた外観はまがまがしさすら漂っており、のっぺりとした印象は、そのままレーザーを乱反射させる塗装と構造になっている。レーザー技術が発達し、どれだけ欺瞞措置を施したところで、戦闘機も爆撃機もそれから逃れる術を持たなくなっている現在だが、「見えやすい」よりは「見えにくい」ほうがいいのだ。

「武運長久を、」

乗り込む際、ドアガンを構えるクルーが私たちに呼びかけた。ドアガンは左舷・右舷に一挺ずつ。なのでガンも二人いる。積み荷は私たちチームDの四人。そしてコクピットには機長と副操縦士<sup>コパイ</sup>。ここから戦闘領域まで、わずかな時間だが運命をとにもする八人。南波はすでにヘルメットバイザと同化したCIDSを下ろしてしまっていて、口許以外に表情がうかがえない。きれいに髭は剃っていた。私は蓮見とならんで座る。向かいの席に南波と桐生。桐生は細い目をさらに細めて、眠っているように見えた。

「離陸する」

機長の声がヘッドセットに届く。連邦国のパイロットのように、<sup>エアライナー</sup>民間旅客機の機内放送を做ったようなジョークを言う人間は、私たちの友軍<sup>フレンド</sup>にはいなかった。

離陸。

私はヘリコプターの隔壁に背をあずけ、上半身だけ脱力させた。

そう。余計な力は、私たちの仕事に必要なものだ。

柚辺尾市<sup>ゆへお</sup>は北部自治域ではほぼ中央部に位置し、<sup>ツインカウ</sup>对雁川が作った広大な沖積平野に広がる大都市だ。開拓期に計画的に造成された街路はほぼすべてが直角に交わり、二セアカシアの並木道がまっすぐ続く。路面電車が走り、古びた地下鉄が三路線。私はその柚辺尾の郊外で生まれ育った。

街は海岸線を持つてはいないが、対雁川の河口が近く、水と湖沼と森が間近で、だから私は祖父に連れられて、週末は人家もまばらになる草原や森へ出歩いた。……祖父は開拓期からこの地に移り住んだ名うての猟師だった。大洋戦争に従軍し、敵兵を幾人も血祭りに上げたらしいのは、彼の弟やほかの係累から聞き及んでいたが、祖父本人は戦争のことはほとんど話さなかった。ただ、必要なときに引き金を引けるのが兵士だと、そのようなことを言っていた。春先に咲き誇る桜の花を何よりも好み、むしろ満開の桜より、吹雪のような花弁を散らすその姿を好んでいたように思う。

祖父は男の子を望んでいたのだと思う。私は三人姉妹の末妹で、長姉は一回り年が離れており、姉というより二人目の母だった。婿を取り、早々と家業を継ぐと、私とは疎遠になった。次姉は四つ離れていた。彼女は外で遊ぶよりも祖母とお手玉を覚え、裁縫を得意として、高等課程を出ると、同じく柚辺尾の街の有名私立大学に進学し、教職に就いた。

彼女たちの中にあつて、私だけが異端だった。私は外で遊ぶのが何よりも好きだった。本を読んだり、絵を描いたりすることももちろん好きだったが、私は祖父に連れられ、山野を巡るのが楽しかったのだ。祖父も私の性向を見抜いていたのだと思う。初等科に入学し、高学年になると、自らの猟に私を同行させるようになった。

祖父は狙撃の名手であり、銃の扱いに長け、それ以上に自然に対する畏怖を知っていた。だから、一人で山に入るようなことは絶対にしなかった。彼はいつも、同年輩の男を連れていた。祖父はその男をユーと呼んでいた。青い眼、枯れ草のような髪、祖父より頭半分ほど高い背。そして彼の話す言葉を私は理解できなかった。けれども言葉が通じなくても、ユーの私に向ける眼差しは優しく、私の手を握る彼の体温は暖かかった。彼は北洋州のさらに北……彼らが今「祖国戦争」と呼ぶ北方戦役で私たちが銃口を向ける、彼の国の出身だった。

「昔は、一緒に山に入り、飯を食ったもんだ」



大洋戦争でも彼らと銃口を交えたはずだが、祖父はユーにも優しかった。

祖父は木訥で、友人は少なかつた。社交的で明るく、開けっぴろげな優しさがわかりやすい祖母とは対照的で、自宅での祖父は、暖房用の薪を、かつての武士のように黙々と割続け、食事のときも、私たちが三姉妹の賑やかなおしゃべりに文句も言わずにそれを聞いていた。祖父もまた、私たちの家では、服飾販売を広く手がける実業家の父……祖父の息子だ……や、華やかで女学生の印象すら未だ漂う母、そして私たちの間にあり、確実に異端だった。疎まれていたわけでもなかつたが、長姉も次姉も積極的に祖父に関わろうとはしなかつた。

「お祖父様が持つてきてくれるお肉は好きよ」

次姉はそういつて笑っていた。食卓に並んだ肉料理を頼張りながら。長姉も次姉も、その肉が料理される前、血を抜かれ、解体される前……山野を駆け回っていた頃の姿を知らない。おそらく知ろうともしなかつただろう。私はだが、料理が食卓にならぶ一週間ほど前、祖父の引き金に斃れた獲物が、どんな目をして私たちを見上げていたか、それを知っていた。生きるものの命を奪い、それを私たちが戴く、その過程を私は祖父に教えられた。

なるべく一撃で倒すこと。

手負いの獣が手強いこと。

あくまでも銃を持って初めて、私たちが獣たちと対等に渡り合えるのだということ。

それですらわずかな均衡の崩壊は、容易に私たちの命を奪うのだということ。

銃弾を撃ち込み、鉦のように大振りのナイフでとどめを刺す祖父の横顔は、いつでも謙虚だった。十二歳の私にも分かった。上物の背広を着て高級な外国製の自動車に乗り、それでもお客様を向いて商売をする父を私は好きだったが、父は謙虚ではなかつた。祖父が仕留めた獣の肉を食べる父の横顔はただの笑顔で、自然への畏怖は

どこにもなかった。

私があの実家に次第に違和感を覚えるようになったのは、だから祖父の影響が非常に大きい。父も母も長姉も、私が柚辺尾の帝国大学に進学するものだと思っていた。だから高等課程をあと半年で終えるという秋、私のはるか南、都野崎の帝大を受験すると言いだしたときは、まったく不思議な顔をしたものだった。

私は柚辺尾の街を離れたかったのだ。

吐く息が即座に凍りつき、ダイヤモンドダストとして散っていくこの地の冬からも、短い盛夏を惜しむように催される夏至祭からも、緑柱石のような色で満々と流れていく対雁の川からも、何もかもから離れたかったのだ。

祖父からも。

私が初めて祖父から銃を渡されたのは、十五歳の時だった。猟場ではない。そこへ向かう途中の射撃場だった。

その日、祖父は嚴重に鍵をかけてある物置から、一挺のライフルを取り出し、合計二挺を肩から提げて、車に乗った。

「触りたくなかったら、それでいい」

射撃場はユーと祖父、そして私の三人しかいなかった。対雁川を渡る長い長い橋を越え、空軍のレーダーサイトを間近に見上げる山間部の場所。祖父から渡されたライフルは、ボルトアクション式の7.62ミリ。連邦国では大変ポピュラーなタイプ、M700と呼ばれる銃だった。祖父がいつも携えているのは、国産のライフルだ。村中四七式。口径は同じだが、フォームはM700よりも無骨な印象だった。

「お前はいつも俺についてきてくれた。お前は銃を知るべきだ。俺はそう思う」

祖父の銀髪が春風に……あれは新緑の季節だった……なびいていた。静かな目だった。命を奪う者の目。それは本当に静かな色を持たえているものなのだ。

私は、何もいわず、祖父からライフルを受け取った。

思えば、このときが私の現在を決定づけたのだ。

袖辺尾の街を出ること。

北部自治域を離れること。

言葉について学ぼうと思ったこと。

そして、軍隊に入ろうと思ったこと。

私は運命論を否定する。けれど、転機は必ず存在する。将棋のように。はるか以前の一手が大局を決するように、あときの転機を越えた瞬間、進む道はあるべき方向へ分岐する。そうした運命なら、私はあると思う。

祖父から渡されたライフルは、ボルトがホルドオープンになっていた。まず、薬室に弾薬が入っていないかどうか、それを確かめる。銃には必ず弾が入っているものと理解しろ。便利な道具だが、使い次第でどうにでもなる。

両手で抱えたライフルは重かった。重量だけなら、三〇口径仕様でC I D S に四倍率光学照準器、フラッシュライトにレーザーポインタを装備したヘツツアー4726の方とたいして変わらない。そして銃本体が重いことは、必ずしもデメリット一辺倒にはならない。第一に強烈な反動を受け止めてくれる。しかし、祖父が私に託した銃の重さは、おそらく精神的なものだ。私はその時点で、銃が生ける命を奪う道具だとはつきり自覚していたからだ。祖父は猟師であり、かつての狙撃兵であり、標的射撃をゴルフのように楽しむ父やその仲間たちとはまったく違った。祖父は錬成を除いて標的射撃などまったくやらなかった。そして消費する弾薬も、標的射撃を楽しむ父よりかはるかに少なかった。私はそんな祖父の姿勢を、なぜか刀の柄に手を当てていながら決して抜かず、じっと時機をうかがう武士……侍の姿に重ね合わせていた。帝国陸軍に今も息づく武士の姿だ。

祖父に直接訊いたことはないが、祖母は言っていた。私たちの家は、かつての武家政権時に疎外され、幕藩から離脱せざるを得なかった武士の血筋なのだ。本当なのかは分からない。それが事実

でも、私の家が武家だったのは二〇〇年以上も前のことだ。私は今の自分に興味があるだけで、過去の家系に興味がなかったからだ。けれども、銃を手にした祖父の姿や、ナイフで鹿にとどめを刺すときの眼差しに、その面影を感じていた。

私には長姉のような商才も、次姉のような人望を集める術もなかったが、やはり、というべきか、射撃に対する抵抗感はまったくなかった。ただ、上達したかと言われるれば、私は今でも射撃は苦手だ。私が姉妹の中では異端だったように、祖父も猟師の血を引いているわけではなく異端だった。私の中には狙撃兵の血もなく、猟師の技量もなかった。それでも祖父は私に銃を教えてくれた。三〇〇メートル先の標的は小指の爪よりも小さかったが、当てることはできるようになった。

「射撃の腕の上手い下手は、どうでもいいのさ。お前は、殺すってことを分かってる」

祖父とユーと三人で実際に山に入り、獲物を探して歩き始めた頃、祖父が私に言った。

「でも、ぜんぜん上手くならないよ」

「的には当たるじゃないか。錬成すればいい。針の先を狙う必要はない」

森の中は静かで独特の匂いがする。射撃場での標的なら、三〇〇メートル先に確かに存在する。見れば分かる。けれども、森の中の「標的」は、どこにあるのかが分からない。

「そっちの技術の方が難しい」

祖父は中腰になり、笹藪に半身を沈め、じつと森の中に目を凝らす。風上から歩くな。そんなことを言いながら。

祖父の銃には光学照準器がついていなかった。私の銃にもついていなかった。簡素なアイアンサイトだけ。しかしそれで祖父は三〇〇メートル先の鹿を仕留めた。頭を狙わないのは、即死させず、心臓を動かし続け、全身の血を抜くためだった。そしてナイフでとどめを刺す。

「お前、やるか」

祖父はギラギラと生々しく光るナイフを私に渡した。十六歳になつていた。

私は射撃を始めてまだ一度も獲物に弾を当てたことがなかった。

森の中で発砲もできなかった。私には獲物がどこにいるのかわからなかったからだ。第一撃を放ち、獲物を仕留めるのはいつも祖父の役目だった。

「私が、」

「できるか」

つぶらな目。

鹿は息も絶え絶え、私たちを見上げていた。今失われようとして  
いる命が目の前にあった。

祈る必要はない。

かみさまを孤独にしてはいけない。

口に出さなくても、心が伝わるように。

もしかすると、祖父はこの地の先住民たちとも交流があったのかもしれない。あるいは祖父に猟を教えたのは彼らではなかったか。

祖父は帝が祈るような物語に彩られた神を知らなかった。知っているのは木々や川や動物たちに宿る、たくさんの「かみさま」だけだった。

私はナイフを持ち、祖父に示された急所に刃を突き立てた。

悲しくはなかった。

怒りでもなく、もちろん恍惚であるはずもなく、私の心は不思議とフラットだった。

躊躇いもなく、私は鹿の急所にナイフを突いた。

あっけなく。

あまりにもあっけなく、鹿は目を閉じた。

息も絶えた。

体温は残っていたが、森の中で、私がひとつの命を奪った。

その後、鹿を森から運び出し、祖父とユーが鹿を解体した。真冬

は湯気が上がるのだという。あたりは血の臭いでいっぱいになる。森の中で解体すると、いらぬ動物たちを呼び寄せてしまう。命を奪ったことをあけっぴろげに知らしめる必要はない。祖父とユ一はひっそりと鹿を解体した。私も手伝った。両手が血で染まった。私が猟に同行することを、はたして父や母や長姉が賛成していたかという、そんなはずはなかった。遠回しに、私ではなく祖父を責めていたと思う。私が自分の銃で獲物を仕留めるようになった頃、そんな雰囲気を感じた。

私は祖父を擁護した。私が望んで森に行くのだと。母が悲しそうに顔をしていた。父が首を振っていた。長姉が眉を顰めていた。

「いい、俺が始めたことだ」  
祖父は低く言うだけで、言い訳もなにもしなかった。私は十七歳になっていた。

私は祖父が好きだった。父よりも好きだった。父は嫌いではなかったし、その商才を尊敬もしていた。言葉の使い方が上手く、言葉を使って商売をしていた。祖父は言葉を操るのが上手くない。多くの言葉を駆使して自分を表現しようとしめない。まるで引き金で主張しているようだ。でも数少ない祖父の言葉一つ一つを、私は取り逃さないようにしっかりと掴まえた。

そんな祖父だったが、たった一度、私は祖父と意見が対立したことがあった。

それが祖父の優しさだったのかどうか、今でも私には答えが見つからない。

十八歳になった頃だ。私は高等課程の三年生で、すでに進学先を都野崎の帝国大学に絞り込んでいた。名実共に、この地を離れる決心をしたあとだ。都野崎ヘライフルは持っていけないから、私は猟からも離れる決意をしていた。

秋の日だった。祖父とユ一、私で森に入った。  
見事な紅葉だった。

済んだ青空と、不純物が何もない空気はずっと遠くまで見渡せた。

山の頂は真っ白に雪化粧。ユ一の瞳が空の蒼さを写しているように見えた。丘陵と森と。本当にきれいだと思った。

私はM700、祖父は村中式。ユ一はいつもライフルは持たないが、マグナム弾を装填した長銃身のリボルバーを腰から提げていた。クマ対策だ。冬に備えたクマはいま、目の色を変えて食べ物を集めているに違いない。ふだんからユ一はリボルバーを持っていたが、秋になると右手は常に銃に触れていた。

その日も鹿を追っていた。

祖父が弾薬の消費も少なく、猟の成功率が高いのは、遠距離射撃をしないからだと分かっていた。わずか三年では私には身につくはずもない技術だ。敵をアウトレンジするのは容易いが、仕留めるのは難しく、リスクも高い。目標に接近して撃てば、弾の威力も高いまま、そして命中精度も上がる。祖父は風下から上手に獲物に接近し、そして仕留めるのだ。

ユ一は勢子役を引き受けていた。私が先頭で、祖父が続く。森の中には木イチゴの類がたくさん実っていて、時々つまんで食べたりした。おいしかった。

「いた、」

おそらく祖父は私が見つけるのを待っていたのだと思うが、しびれを切らして私の肩を軽く叩き、そして示した。あまり身体の大きくない鹿が、向こう百メートルほどの斜面にいた。こちらには気づいていない様子だった。

「やるか」

「うん」

まだ遠い。祖父はそう感じただろうが、私はいまが好機だと思っていた。

左膝を立て、そこに左肘を載せ、銃を保持する。ストックを右肩甲骨のあたりに当て、右手の人差し指はまだ用心金の外だ。照星と照門を合わせる。呼吸を落とす。口をそっと開けた。息を吐きながらの方が、不思議と命中率が高かったからだ。

鹿はまったくこちらに気づいていない。  
右手。

引き金に人差し指を当てる。

引き金とはいっても、指で引くわけではないのだ。撃鉄を落とすための動作。そう思って、指を動かす。狙う私は、両目を開いたまま。片目を閉じてはいけないと教わった。

発砲。

7.62ミリは反動が大きい。わずかな時間で速射するのは、ボルトアクションの性質から無理だ。だから一撃必中が要求される。

反響。

銃声は思った以上に拡散するのだ。

硝煙。

当たった。

斜面に鹿が倒れていた。

私は吐き続けていた息を最後まで吐き出し、そして吸う。秋の日の冷たい空気が肺に染み渡る。

立ち上がり、歩もうとしたとき。

「あ

動かなくなった目標。その傍らに、駆け寄る何かの姿があった。

子どもだ。

子鹿。

息絶えようとしている……おそらく母親に駆け寄り、懸命に顔を寄せている。

初めてだった。

親を撃った。

一〇〇メートル先の斜面で、子は親に呼びかけていた。

仕草で分かった。言葉がなくても。言語がなくても。

私は目を背けず、その様子を見た。

そして。

私は身体を落とした。



片膝を立てる。

左肘を乗せる。

ボルトを引き、排莖。次弾装填。  
構える。

私は子鹿に狙いを付けた。

人差し指を、引き金に……。

「よせ、やめろ」

祖父の声だった。初めて聞く声音だった。

「なぜ」

私は構えたまま言う。

「殺す必要はない」

「どうして」

「お前こそ、なぜ撃つ必要がある。一頭で十分だ。……子どもは逃がせ」

「かわいそうだ。……皆殺しにする」

私はそう言ってしまった。

「馬鹿なことを……」

「お祖父ちゃん」

「やめろ。無用な殺生はするな」

「あの子、生きていても仕方ない。親を殺されて、悲しそうじゃないか」

「ならば殺していいのか」

「その方が、あの子のためだ」

私の視界で、まだ子鹿は母親の横にいた。

はたして鹿の知性が、親子の情を解するのだろうか、それは分からない。ただの本能的動作なのかもしれない。が、子鹿は顔を母親に寄せ、何度も足踏みをし、周りを歩いた。

「今なら、」

「やめろ」

祖父は言うが早いか銃を構え、親子から離れた斜面へ向けて発砲

した。

反響。

銃声に驚いた子鹿は、一瞬私たちに顔を向けると、跳ねるようにして母親の元を離れた。

銃声。

祖父が第二弾を発砲した。

わずかな躊躇いはそれで霧散した。子鹿は一目散に母の元から駆けだした。

「お祖父ちゃん」

私は構えをといた。

「それは、間違いだ」

漂う硝煙の匂い。

祖父が私を見下ろしていた。

叱られると思った。

「それは、優しさではない」

「でも」

「それは、違うよ」

低い声だったが、刺々しくはなく、私を非難する口調でもなかった。

「殺す必要はない」

ユーも私を見ていた。

私は、じつと祖父を見上げた。

答えが分からなかった。

今でもそうだ。

あのときの私が間違っていて、祖父が正しかったのか。

それとも逆か。

私があの子鹿だったなら。

そう思った。

私があの子鹿だったなら、いつそ射殺された方が幸せだったに違いない。

それから、しかし祖父は私を避けるそぶりもなく、あらためて諭すようなこともなく、冬になる前に三人でまた二度ほど山に入った。別の親子が私たちの目の前に現れることもなく、あのときの子鹿に出会うこともなかった。

私は間違っているのだろうか。

ポルトアクションの古びたライフルから、衛星との通信機能まで奢られた自動小銃に持ち替えてもなお、私の疑問は晴れないのだった。

ターボシャフトエンジンは三基。もともとは戦術輸送を担う目的で開発された87式装甲輸送ヘリコプター。7・62ミリはおろか12・7ミリを被弾しても即時墜落には至らないという豪華仕様のヘリコプター。その分重い。だから強力なエンジンがいる。私たちチームDが乗り込んだのは、コールサイン「エエンレラ02」。この地の部族の言葉で「冷たい風」という意味だそうだ。私たちの乗機よりやや高度を取って、82式戦闘ヘリコプター二機が護衛についている。エエンレラ02を前後から挟み込むようにして。

夜明け。しかし空は曇っている。この地特有、地表近くには霧が巻いている。視程はかなり悪い。が、電子の目や衛星の誘導や、人間には本来備わっているはずのない動物的勘を満載した私たちには、霧などあってもなくても関係なかった。少なくとも飛んでいる間は私はCIDSの拡張機能を展開させて、ヘリコプター本体をすべて透過させた。衛星とのリンク機能がフルに生きているとこういう気色の悪い芸当ができる。まるでビデオゲームだ。ワイヤーフレームだけになったヘリコプターを透かして、流れる空気や雲や霧、針葉樹の森と、前方を行く82式戦闘ヘリコプターが見える。ズームしろ、と考えると、視線入力で戦闘ヘリをTDボックスが囲み、サブ窓でズーム映像が見られる。メイン窓でズームしないのは、それがすなわち視界を妨害することと等しいからだ。

82式戦闘ヘリコプターは陸軍自慢の戦闘能力を誇る機体だ。黒に近いダークグリーンで染め抜かれた迷彩は、時間・場所・季節に従って、表面の迷彩色が自動変化する。今は針葉樹の森の色に近い。あるいは影か。

戦闘機の見た目が猛禽などの鳥類なら、戦闘ヘリは昆虫だ。しかも、オオスズメバチに代表される森の戦士たち。私は祖父に、クマよりもハチの怖さを教えられた。スズメバチは恐ろしい存在だ。飛

行能力は高く、しかも速い。単体でも十分な脅威だが、彼らはフライト単位どころか大編隊を組んで襲ってくる。クマは厚い毛皮で何とかその猛攻をかわすらしいが、私たち人間はひとたまりもない。毎年、八チに刺されて命を落とす人間が後を絶たない。82式戦闘ヘリはまさにそうしたスズメバチのような印象があった。機首下面ターレットには、三〇ミリチェーンガン。これは八チの一刺しどころではない。劣化ウラン弾を秒間十発ずつ目標に叩き込むその威力は、装甲車を文字通り八チの巢にする。機体両舷のスタブウィングには空対地ミサイルを合計八発と任意で対空、あるいは対地兵装をさらに二セット装備できた。

「なに見てるんだ」

蓮見が私をつついてくる。

「頼もしい護衛」

私はCIDSを下ろしたまま言う。おそらく、機内天井を見上げながらのつぶやきなので、裸眼の彼女は不思議に思ったのだろう。

「役立たずだ。蚊トンプボが」

縫高町戦であっけなく的のSDD-48の返り討ちに遭い、空沼川に油膜を引いて沈んでいったのもまたこの82式戦闘ヘリだったからだ。あれは分が悪かったのだ。82式戦闘ヘリは自機レーダーを搭載していない。上空の早期警戒管制機や地上レーダー車の誘導があつてこそそのアウトレンジ能力であり、森から突然現れた自走対空砲がゼロ距離射撃を仕掛けてくれば、為す術がないことを蓮見もわかつて言っている。

蓮見は膝の上に4726自動小銃を載せて、チヨコレートバーをかじっていた。横顔はまだ少女の面影があつた。蓮見自身は否定しているし、南波も違うと話していたが、彼女が漂わせる雰囲気は、あの戦闘爆撃機のパイロット、伊来中尉とよく似ている。そう、純粋培養系特有の匂いだ。

もともと純粹培養と呼ばれる「人種」は、軍が始めたわけでも、政府の優生政策が発端というわけでもない。一種の自然淘汰なのだ

と私は理解している。自然に生きる生き物はみな、より「優秀」な遺伝子を後世に残そうとする。それは強いわけではなく、かの有名な生物学者が唱えたように、「変化に強い」遺伝子が生き残るのだ。純粋培養系の子どもたちは、生まれながらにして、この生き残りにくい世界への順応性を備えている。多様性よりもシンプルさ。不要な機能一切をはず取り、身軽な身体能力と精神性を備えた子どもたち。一種の遺伝子操作なのだ。富裕層を中心として遺伝子のブランド化が秘かに高まっているが、それに近い。遺伝子的に「戦場ストレスに強く、適応力に長け、人並みはずれた集中力を持つ」という特性。後天的な訓練をしても限界があるそうした能力を、純粋培養の子どもたちは生来のものとして備えるのだ。自覚症状もなく。

私は蓮見に夢の話をしてみたいと何度か考えたことがあった。けれどしなかった。彼女が純粋培養系だろうが原生種だろうが、チームメイトとしての不足は何もないのだ。個人的興味から彼女にいらぬ質問をする必要はなかった。

「なんだ、入地准尉」

蓮見が私を見とがめる。

「旨いか、それ」

「お前も持つてるじゃないか。食べればいいんだ」

「味がくどいんだ。あまり好きじゃない」

「私は好きなんだ。……ほら」

ひとかけらちぎって私に差し出す。薄茶色の瞳。丸みを帯びた頬。二重。少女そのものの顔だった。

「いいから、自分で食え」

私はCIDSを下ろしたままだ。サブ窓にはまだズーム中の82式戦闘ヘリが映っている。電子制御で微動だにしない飛行姿勢。いま、私たちは四チームに分かれている。それぞれに戦闘ヘリが護衛についており、二フライト合計八機が作戦行動中。それらは統合されたユニットとして管理されていて、本部とはデータリンクで繋がっている。データリンクは私たちの上空一万メートルを飛行中の

早期警戒管制機のレーダー情報を元にして、早期警戒管制機は、戦域を二四時間哨戒飛行中の戦闘機の交通整理も行っているはずだ。「あと、四八時間だな」

向かいの席から桐生が言う。腕組みをして、じつとこちらを見据える。CIDSはアップした状態。猛禽のような目をした男だ。階級は私や蓮見と同じ准尉だが、軍歴は南波より長い。年齢もいちばん上だ。私より六歳年上。なので南波より八歳年長。

「正確には、四八時間と五六分」

南波が足を組んだ姿勢で言う。4726自動小銃のグリップに右手を添えている。こいつはいつでも戦闘態勢だ。スイッチが入ると、なかなか切れない。だから頼りになる。私の相棒<sup>ハテイ</sup>。

「気乗りしない」

蓮見がチヨコレートバーの最後のひとかけらを口に入れて言う。

拗ねたような口調。

「いつだってそうだ」

桐生。

「どうせ最後はお祭騒ぎさ」

「それは願い下げだな」

私が桐生に言う。お祭騒ぎとは、縫高町戦がそうであったように、收拾がつかなくなった戦域をまるごと消し去るといふ近接航空支援をさしているのだ。確かに私たちの作戦の大部分はそうした幕切れが多い。

「『癩癩娘』の声なんて聞きたくない」

蓮見。戦闘服のジッパーを顎の直下まで上げて、ヘッドセットの装着具合を確かめている。

「聞いたか、」

南波。

「なにを」

桐生。

「ダムスクを核攻撃したらしい」

「本当か」

「ああ。……酒保で聞いた。三メガトン級だと……もっともこれは測候所が観測した地震波の解析らしいが」

「更地を作っちまったか」

「鉦山都市まるまるひとつを消し飛ばしたってわけだ」

「発掘に行くとも？」

「さあな」

二人の会話は有線をOFFにして話されている。帝国軍が敵の工業中枢を狙って戦略爆撃を行っているらしいとは聞いていた。堅牢な岩盤と切立った渓谷に守られた鉦山都市の攻略に難儀しているらしいという噂も。そうか、核攻撃という手段に出たのか。

「報復は？」

「事前通告をしているらしいからな。……鉦山技術者とその家族含めて四万人は確保したらしいぞ。捕虜として」

「捕虜？ 移民だろう。ご丁寧に」

「だから報復があるとすれば、」

南波は言葉を止めて私を見た。

「北方戦域だと？」

私が訊く。

「メタンハイドレートの採掘基地をぶっ飛ばしてるしな。俺たちは正確には、私たち、ではなく、友軍が。伊来中尉が参加した作戦の一環だ。」

「ただっ子みたいなものだ」

桐生が隔壁に深く背を預けて言う。

「奪還できなければ破壊せよ」

南波が続ける。

「わかりやすくして結構だ」

蓮見。

「わかりやすいか？」

南波が聞き返す。



「わかりにくいか？」

「今回の作戦がわかりやすいか？」

「少尉、わかりやすいと思うよ」

蓮見の口調は、教師が物覚えの悪い生徒に含んで聞かせるようなものだった。

「敵戦力の無力化」

南波が4726自動小銃を肩に立てかけた。

「確かにそれだけ言うならわかりやすい。けれど、いい気分はしない」

ヘリコプターは右に左に機体を揺らす。超低空。窓に水しぶきが散る。川の上空を編隊は進んでいる。川はクネクネと針葉樹林帯を蛇行していた。このあたりは人家もなく、川を渡る橋もない。ダウンウォッシュにしぶきを散らして、四機のヘリコプターは高速道路を進む自動車並みのスピードで飛ぶ。

「敵航空戦力の無力化。それも、長期間に渡って……戦術、教育体系、技術の継承それらも破壊せよ」

南波。

今回の作戦の目的は、敵の航空戦力を壊滅させることだ。そして私たちの目標は、敵の戦闘機でも航空施設でもなかった。

人的リソースの破壊。

パイロット。

整備員。

技術員。

その家族。

あるいは教育隊の人間。

食堂の調理師。

基地の修繕係。

戦闘機を破壊しても、次々と代替機が製造される。

基地を破壊しても、工兵隊があつという間に修復する。

たとえ敵の空軍基地に核攻撃を加え、ローコストおよびローリス

クで更地にしてしまっても、彼らはその更地に杭を打ち、地をならし、また基地を築くだろう。

しかし、パイロットはどうか。

戦闘機の整備を知り尽くした整備員はどうか。

パイロットに戦術を一から教える教官はどうか。

一朝一夕に彼らを育て戦力化することはできない。

戦車一両よりクルー一組の方がよほど高コストであり、陸軍は装備より人的リソースの滅失毀損を大問題にしている。空軍も同様だ。確かに戦闘機一機は、パイロット一名の養成コストよりもはるかに高額だ。開発にかかる時間も長い。が、一度量産を始めれば、一定の品質の製品として、戦闘機は次から次へと作り出されるのだ。

パイロットは違う。

最低五年、一人前になるにはもう少し。それくらいの時間がかかる。

そこで友軍の参謀たちは考えた。

機体破壊の優先度は低いものとする。

施設破壊の優先度も低いものとする。

搭乗員を抹消せよ。

機付整備員を抹消せよ。

彼らをサポートする隊員を抹消せよ。

彼らの拠り所となる彼らの家族を、地域コミュニティを抹殺せよ。そして、当然、最後に付け加えられた文言はこうだ。

……作戦遂行に失敗した場合は、海軍艦艇による艦砲射撃を実施する。

核攻撃とまでは行かずとも、私たちが目標としていま向かっているその地区に対し、おそらくは海軍が総力を挙げた艦砲射撃を実施し、住民もろとも地形まで変貌させ、辺り一面癩癩を起こした子どもの遊び場のようにしてしまうに違いない。

手に入れないものは破壊する。

そうということらしい。

我が帝国は、事を始めると徹底的にやり尽くす。やり過ぎるくらいに。だからこそこの国の歴史は二〇〇年以上途切れることなく続いているのだろう。断固たる意思を対外的に表明することで。そもそもこの戦役がどちらが始めたのかすでに曖昧になっているにもかかわらず。負けることは許されていないかった。

なぜ、殺傷能力の高い銃を今回選んだのか。

目標を確実に射殺するためだ。

余計な苦痛を感じさせることもなく、一発でできるだけ接近して。

そうすれば、三〇口径のライフル弾は、より高威力を発揮してくれる。

「チームAは」

「スベルドゴロフスクの軍港」

「チームBは」

「矢岱別の測候所」

「ああ、敵の気象隊が占領しているんだったな。チームCは」

「水路潜入の装備をした。海軍の潜水艦を使うらしい」

南波と桐生がぼそぼそと続ける。私はすでに彼らの会話に興味を失っていた。

私が入隊したときの助教はこう言った。

（任務だからやります。命令されれば行きます。……そんな奴はいらない。即刻やめる。今すぐ帰れ）

私は作戦を続けるうち、彼の言葉を理解できるようになっていた。敵のパイロットを狙う。

空中で敵の戦闘機を撃ち墜とすのではなく、パイロットそのものを狙う。敢えて戦闘機は狙わない。パイロットを喪えば、操縦資格のない有象無象がいくらいたところで戦闘機は飛ばない。それが任務だ。

任務だからやるのではない。

望んでやるのだ。

命令されたから行くのではない。

私の可能性を展開するために行くのだ。

ここにいる四人はみんなそうだ。

仕方なくこのへりに乗っているクルーはいない。

「あんたら、不思議だな」

軍曹の階級章を付けたガンナーが私を見下ろしながら言う。

「なにが」

「緊張感つてものがないんだな」

「そう見えるか」

「本当にあんたら、55派遣隊なのか？」

「違うと言ったら？」

「信じないさ」

「ならいいじゃないか」

「だから不思議なのさ」

「おい、」

右舷側のガンナーが、（やめろ）の表情で軍曹を呼ぶ。

「いいじゃねえか」

「構わないよ」

私も言う。南波が右舷ガンナーを向いた。

「それ、MG-3Rだろう」

南波がニヤニヤしながらガンナーに訊いた。ドアガンの機種のことを言っている。

「それがどうかしたか」

「撃たせてくれよ」

「何言ってるんだ、ダメだ」

「俺のこれ、貸してやるから」

南波は4726自動小銃を差し出す。ゴテゴテと追加装備をくっつけた、およそ百年前の歩兵に見せても銃だとは分からないような代物だ。

「黙って座っててくれ」

ガナーは鼻白んだ顔で首を振った。

「南波、」

私は彼の遣り口が分かっている。だから私も彼に向かって首を振って見せた。

南波は4726をガナーに渡す気などさらさらなのだ。道具に執着するタイプの隊員は私たちのクルーにはいないが、しかし自分の命と仲間の命を預ける道具だ。むやみに他人に渡したりはしないものだ。ただガナーをからかったのだ。

「あんたらは本当に不思議だな」

左舷のガナーが短く嘆息して私と目を合わせてきた。

「そういうことにしておいてくれ」

私はその一言を最後に、彼らとのチャンネルを閉じた。

64式戦闘爆撃機は「ノスリ」の非公式な愛称はあったが、軍やメーカーが名付けた愛称はない。その点、設計された時点で、東方経済区域で最強であることを運命づけられ、コスト度外視で開発された81式制空戦闘機とは異なっていた。81式は「猛隼」の愛称で広く呼ばれる。が、パイロットや整備員の間では「ナナニー」で通じた。メーカーが付けた開発ナンバだ。そのルールに従うと、64式戦闘機は「ロクイチ」になる。メーカーの開発ナンバ……: KI-61 FFR。君嶋インダストリー社製の……: もとはこれでも制空戦闘機だった。誰も「ノスリ」などとは呼ばない。

強力なエンジンを目覚めさせるのはごく簡単だ。コクピットに座り、エンジンマスターアームスイッチをONにし、右膝元にあるT字型のレバーを引けばいい。これで、機体中央部……: 強力な双発のデュアル軸流圧ターボファンエンジンに挟まれた、ジェットファンエンジンが起動する。機体内燃料を燃やしてセルモーターの役割を果たす小さなエンジンだ。これが始動すると、掩体にサイレンのような音が響く。

空軍豊滝 A B。

前線基地として、御津野沢基地から 64 式戦闘爆撃機二個飛行隊と、81 式制空戦闘機一個飛行隊が駐留している。針葉樹の森の中に伸びる滑走路は、もともとこのあたりの開発用飛行場として整備され、時折民間の輸送機が、点と点を結ぶような椋武戸の都市のために離着陸をしていた。北方戦役の拡大で、ひっきりなしに飛行機が離着陸する活気に恵まれたが、本来の主であるはずの民間の輸送機はなりを潜めていた。

ジェット燃料スタータが正常起動し、コンソール左側のスロットルレバーに添えた左手の指を伸ばし、まず左舷エンジンに接続する。スロットル六〇%。エンジン回転計が目覚ます。デジタルメータだが表示はアナログ方式をとっている。一瞥してメータ位置が読めないと困るからだ。左舷エンジンの燃料流量計が跳ね上がる。正常に起動した。同様にして右舷エンジンを起動させる。細かな調整は必要ない。コンピュータが面倒を見てくれる。

キャノピはすでに閉鎖<sup>フースト</sup>、緊急脱出時にきちんとキャノピ・レールが破碎されるよう、キャノピ・コントロール・ハンドルはアームドにセット。機外では二基の石田航空発動機製 J E - 770 が耳をもつんざく金属音をまき散らしているはずだが、コクピットは静かなものだ。ヘルメットに C I D S 内蔵バイザ、酸素マスクに流れ込むブリードエアと、自分の呼吸だけ。場違いなイメージだが、ここが僧房なのではないかと、出撃前の静寂に一瞬だけ思うのだ。それは、パイロットになる前、まだ学生の頃に京の寺院<sup>みやじ</sup>で見たイメージに左右されているような気がする。

プリフライトチェックは滞りなくすべて終了した。フライトリーダーがタワーをコールして、クリアランスを受けている。ヘッドセットに届く早口気味のやり取りはいつもどおりだった。いつもどおりでないのは、機体の装備だ。

N B - 55 熱核爆弾。機体センター下部のステーションに装備している。両主翼の各ステーションには自機護衛用の空対空ミサイル。

その他、この戦闘機が得意とする自由落下式通常爆弾は今回一発も装備していない。主翼内側に二・四キロリットル入りのドロップタンクをぶら下げる。それでもさらに洋上で空中給油を受ける予定だ。自機護衛用ミサイルを装備してなお、81式戦闘機がエスコートする。ただし、途中まで。64式戦闘爆撃機が原型の制空戦闘機から改造されたのは、機体規模から来る航続距離の長さを評価されたからだ。81式は64式ほど燃料を積めない。

「ノルドリーダー、チェックイン。チャンネル1に合わせ」

「タキシウエイ 掩体を出、誘導路に差しかかると、ヘッドセットにフライトリーダーの声が届く。」

「2」

「3」

僚機のコールが続く。

「4」

自分も答える。ノルドフライトの四番機。「ノルド04」が自分のコールサインだ。

「サクラ。大丈夫か」

フライトリーダーが自分を呼ぶ。滅多にあることではない。むしろ本来はあり得ない。

「大丈夫」

リーダーは五期先任の細身の男だ。いつも窓から空ばかり見ている。新聞を読んでいる姿も、携帯電子端末ターミナルのディスプレイを指で弾きながらトピックを検索するような様子も、見たことがなかった。

「怖いか」

「いえ」

空は青い。雲もほとんどない。事前の気象ブリーフィングでも、ウエイポイント 経路地、目的地、すべて快晴。航路上に障害になるような気象現象はないということだった。

「行くぞ」

滑走路はまっすぐに伸びている。ランウェイ34。やや北北西寄

りだが、離陸すれば旋回の必要もなくまっすぐ北へ向かう。機体センターに抱いている熱核爆弾の核出力は三メガトン。たとえばこれを京に投下すれば、寺院も神殿も御所も、何もかも、一瞬で消し飛び更地にしてしまうほどの威力だ。地下のシエルターに潜っているも、爆心直下では命の保証はどこにもない。

滑走路に進入する。フライトリーダーの編隊エレメントがまずノーズギアを沈ませて、間髪を入れずに離陸していく。ジェットブラストが陽炎となって揺れる。さすがにアフターバーナの爆音はキャノピを通しててもビリビリと伝わる。

先行する二機があつという間に滑走路を離れ、青空に二つの点となって消えそうな頃、自分と僚機のペアもスロットルをアフターバーナ位置へ押し込む。64式戦闘爆撃機のスロットルレバーはとにかくごつい。設計者はまず間違いなく男性で、それもある程度の体格を、自慢したくなるほどの体格の持ち主だったに違いない。

「サクラ、大丈夫か」

ノルド03……彼は「イスルギ」で呼ばれる。みな、好き勝手にタクティカルネームを付けるところ、彼の名は本名からそのまま取られていた。石動いっどう。山を修行の場とする修験者たちに由来する名前だと彼は言っていた。

「大丈夫。なぜ」

「よく眠れたか」

「上で話すよ」

「了解」

イスルギのヘルメットがやや前に傾いだと思ったら、ノルド03は瞬間ノーズを沈ませて、滑走を開始した。それが合図だと知っているから、自分も遅れず、スロットルをアフターバーナへ。

ジェットエンジンは、おそらく大洋戦争時代のレシプロエンジン戦闘機のパイロットが乗ったなら、その加速の鈍さに驚くはずだ。とにかく初動が鈍い。アフターバーナは、このJF-770マーク？の場合五列エンジンコア部分から並んで配置されているが、全ス



テージが点火してようやく蹴られたような加速になる。ただし、初動こそ鈍いが、この機のターボファンエンジンは、蹴られたような加速がそのまま最高速度まで続く。レシプロ機が息も絶え絶え、飛ぶだけで精一杯の高度を軽々と超えてもだ。

一五〇ノット。操縦桿を軽く引く。元が制空戦闘機だけあって、鈍重に見えそうな大柄な機体も、それぞれの舵は素直で飛ばしやす。機首が浮き、メインギアも滑走路から離れると、機体は恐ろしい勢いで加速する。機体が浮いた瞬間ともいえるタイミングでギアアップ動作をしなければ、すぐにギア速度警告灯が点いてしまう。そのまま三〇〇ノットまで加速、三Gをかけて、機首を青空へ向ける。仰角七〇度。

水平飛行は一万メートルちょっと。ハーフロールを打って、マイナスGを打ち消す。レーダーは沈黙させてあったが、早期警戒管制機が自機と編隊各機の位置をしっかりと教えてくれている。空はもう紺色に近い。

「サクラ」

イスルギの声。マスクにはかなりの勢いでブリードエアが流れ込んでいる。呼吸法にはコツがある。吐くことを意識するのだ。吸おうと思っても、吹き込んでくるエアのためまならない。ならば、吐き出すことに集中した方がスムーズな呼吸になる。

「なんだ」

無線はCIDSを経由した閉鎖系を使っている。ほとんど囁くようなしゃべり方でも増幅されてしっかりと耳に届く。耳への伝達も、鼓膜を振動させるといふより、内耳に直接音声振動を与えて、聴覚全体で聞き取るような、そういうシステムだ。エンジンの轟音があつても、直接頭の中に響いてくるような明瞭さがある。

「ちゃんと眠れたか」

「眠れた。お前は」

「当り前だ。ちゃんと眠れた」

マツハ１・３。超音速巡航。スーパークルーズしかし周囲に雲もなく、静止してい

るような気分になる。ふと上空に視線を転じると、細く薄い飛行機コックピット雲を曳いて、エスコートの81式戦闘機が飛行しているのが見える。あちらは高度二万メートル近い。64式だとなかなか到達できない高度だ。

「イスルギ、」

これは私語ではない、そう自分に言い聞かせながら。

「なんだ」

「お前は、夢、見たことあるか」

「なんの話だ？」

「そのままだ。……昨夜、なんか夢、見たか」

「……そうだな。見たような気がするな。そうだ、飛行学生の頃の夢だ。……ループに入れたら、てっぺんで機体が止まって、そのまま落っこちる夢を見たな」

淡々と話すイスルギは普段からあまり感情を見せない。顔は笑っても目が笑わないタイプだ。けれどそれは自己抑制が強いからだを知っている。

「お前は、なんか見たか」

イスルギが訊ねてくる。訊ねてくるのは分かっていた。だけれど訊いた。訊きたかった。そして答えたかった。

「見てない」

「何だ、熟睡モードか」

「違う」

機体は安定している。原型が制空戦闘機であるが故、機動性が安定性より優位になる。そして、機動性と安定性は二律背反の関係であり、従って機体の性質は機動性側に振られる。ようするに、人間業では決して安定させることができない機体として生まれる。機体を空中に静止しているかのように安定させているのは、高性能なフライトコンピュータだ。片時も休まず、それぞれの翼を微調整し、機体を「辛うじて」まっすぐに飛ばしているのだ。パイロットに悟られないように。

「私は、夢を見たことがないんだ」

サクラ。私のタクティカルネーム。空軍でパイロットでいる限り、この名があれば本名で呼ばれることは滅多にない。桜の花。淡い桜色。今年は見えた記憶がなかった。

「見たことがない？」

「見ているのかもしれないけれど、覚えていない。……いや、本当は夢なんて見ていない。見ていないから覚えていないんだ」

「それは、いいじゃないか」

「どうして」

「悲しい夢も怖い夢も見なくて済む」

「見られるものなら見てみたい」

「サクラ……あんたは、アクセシック・カルチャー 純粹培養系なんだな。俺からすればうらやましい。『寝覚めが悪い』なんて言葉、あんたには理解できないだろう」

イスルギの機は、自機から四〇〇メートル程離れてやや上位に位置している。戦闘隊形だ。彼の機体のセンターにも、装備しているNB-55の姿が見える。四機が全弾を投下するわけではない。投下するのはノルドフライトの内一機でいい。ほかの三機は予備だ。爆弾そのものは堅牢すぎるほどに設計されていて、投下母機からのコードを受領しない限り、どんな状態になっても爆発しない仕掛けだ。だから、目標地に到達する前に撃墜されても、爆弾はどこかに落下し、爆発することはない。いずれ友軍の回収部隊が凄まじい犠牲を払って取り戻しに行くだろうが、敵勢力に手渡ったところで使用される心配もほとんどない。いわゆる「絵本の読み聞かせ」とまて言われる暗号コードが必要だからだ。それがなければ、核物質とコンピュータと金属の塊に過ぎない。

「本気で言ってるのか？」

「本気」

「純粹培養系だったらどうだって言っただ」

「何も言ってない。……夢を見ないのはうらやましい」

「不感症だと？」

「そんなことは言っていない……大丈夫か。今回のフライト、スキップした方がよかったんじゃないのか」

「宿舎で寝ていると？」

「サクラ……。陸軍の奴らと何かあったのか」

「なんでだ」

「ハケンの連中に何か言われたのか」

操縦桿には軽く手を添えておけばいい。握ったりする必要はない。薬指と中指の根本で保持するイメージだ。乱気流もなく、空は安定している。カウントダウンが始まったというのに。

「私と、彼らと、どっちが……」

「何だ？」

「イスルギ、私と、ハケンの連中と、どっちが……地獄に堕ちると思う？」

「そのような世迷い言、やめておけ」

「リリース、押せるか？」

「押せないなら、今すぐ帰れ」

「分かっている」

投弾指示はCIDSに表示される。HUDはあくまでも補助装置だ。優先機器も選択できるが、真横の敵もロック・オンできるオフボアサイト射撃の管制に必須のCIDSをオフにすることはほとんどなかった。シュートキューが出たら、おとなしく機体を安定させて、リリースボタンを押せばいい。マスターアームスイッチがもちらんオンになっているのが前提だが。しかし、前線管制機の判断いかによっては、マスターアームが強制的にオンになり、当機パイロットの判断がキャンセルされる場合もある。作戦遂行が最優先であり、パイロットの意思はこの際無視される。

「気分、悪くならないか」

「イスルギに訊いてみる。」

「何がだ」

苛立っている。

「カウントダウンなんだ」

「カウントダウン？」

「目標地までの距離表示」

「ああ」

「退避勧告、出てるんだろう？」

「知ったことか。……陸軍の連中が失敗したからだ」

国境を越えた山間部の渓谷にある、大規模な鉦山都市。

陸軍部隊が敵勢力の攻撃にすり潰され、鉦山都市の奪取に失敗した。

だから。

私たちが破壊しに行く。

どという戦争だろう。

住民もろとも、施設を消せ。

そういうことか。

「戦略爆撃機でも呼べば良かったのかな」

イスルギが意地の悪い口調で言うてくる。

「その方が、……よかつたんじゃないか」

「サクラ……伊来中尉」

「なんだ」

「ハケンの連中に何か言われたのか」

「なにも」

「だったら、何も考えずに、リリースを押しさえいい……そもそも、

ノルドリーダーが健在なら、俺たちはただ見てるだけだ。この物騒

な爆弾も持って帰ればそれで済みだ」

「けど、鉦山都市は消える」

「それが仕事だからな」

サクラ。……伊来中尉。バイザーを上げる。この動作でCIDSはHUDに優先権を委譲する。途端にHUDの照度が上がる。ライトグリーンの表示。NAVモードなので、フライトレベルを示す水

平線と、ステアリングキューだけが表示されている。

「伊来中尉。引き返すなら、今だぞ」

まだ通話は閉鎖系を使用している。CIDS子機間の会話は傍受されず、記録もされない。

「このままいくよ」

誰かがリリースを押す。

それだけは間違いないことだからだ。

「疲れてるのか」

「夢を見てないから」

「いつか見られるかもしれないよ」

イスルギが言う。

伊来……サクラは答えずに、シートに押し当てている背の居住ま  
いを少しだけなおし、鬱血気味だった筋肉を、わずかでもほぐして  
みる。

空は紺色だ。

目標地は、もうそれほど遠くないのだ。

上空を82式戦闘ヘリが警戒しているなか、私たちが乗った武装ヘリが森の中にひらけた草原に降下する。両舷のスライドドアは開け放たれていて、射撃手がドアガンを構えてこれまた警戒中。

「念のためだな」

耳に直接南波の声が届いてくる。すでにCIDSが起動していて、細く頼りないが高感度のリップマイクに囁けば、コンピュータが補正・増幅して声にならない声まで声にしてくれる。それにしても、敵が配備中のSVTS……無音声伝達機構……で会話したらどんな気分になるのだろう。耳に直接声が届くというレベルではない。声は耳で受け取り、それを脳が「聴く」わけで、終着点としては同一だと理解できるが、耳を経由せず、直接脳に届く声というのはどうにもイメージできなかつた。考えただけで意思が相手に伝わる機械だ。確かに訓練しないと運用できないだろう。

「二〇メートル切った」

ヘリのクルーが怒鳴る。彼らもCIDSを装備しているが、私たちのものとは仕様が違う。彼らのものは暗視機能やヘリコプターの航法や機体情報の表示、赤外線感知など、飛行要員向けに特化したものだ。通話は通常のインターコムで行われる。私たちの機材にあるような増幅・補正機能はついていない。

「リペリングするより気が楽だ」

私の隣で蓮見が言う。やはり耳に直接届く。ようするに私たちがチームDの会話は、ヘリコプターのクルーには伝わらないのだ。しゃべっているのに伝わらない。秘密の会話。中等科の生徒だった頃にこの機材があれば、ずいぶん楽しい授業ができただろう。私や級友たちは、細かくちぎったノートブックの切れ端に細かな字を書き込んで、それを机から机に伝達させていた。あのころの教室には、そうした情報のやり取りのインフラができあがっていたわけだ。信書

の秘密などは保持されるはずもない、やりとり。もつとも、お互いそれを理解してやっていた。読まれてもいいこと。読まれる前提で書いた。

私たちのCIDSに声に出さなくとも声になる機能が装備されているのは、必要とされるからだ。声は当然音であり、動物のうなり声や囁きと決定的に違うことは、まったく言語が異なる民族同士でも、私たちの会話が、意味は通らずとも「会話だ」と認識できてしまう。会話をする動物は今のところ人間以外に確認されていない。クジラがいくら歌を歌おうが、狸々がいくらジェスチャーをしようが、私たち人間にとって、それらは法則性のある高度な「言葉」には見えないし聞こえない。

音楽……譜面に意味を持たせて、旋律で会話することもできるだろう。あらかじめ決められた符牒のようなものとして。しかし、それでは効率が悪すぎる。メロディーを聴いてそこに意味を見いだすには、演奏する者、聴く者の間にしつかりとしたルール付けが必要だ。聴く者によってまったく捉える意味が異なるのでは、言語としては不的確なのだ。だから私たちが発声し相手に伝えようとする「音声」は、言語を操る技術を持つ人間が聴けば、意味が分からなくても「言葉」だと認識する。言葉を発するのは人間であり、すなわちどこかから言葉が聞こえてきたら、そこには人間がいるのだと思ってもいいわけだ。それは私たちの仕事上かなり都合が悪い。

私たちがあけっぴろげに発声し、会話し始めたら、それはあからさまに戦闘が始まったことを意味する。それは作戦終盤に差しかった場合だけだ。多くの場合、目標に接近する段階で私たちは音声を発することができない。相手に気づかれるからだ。

「今から飛び降りてもいいぞ」  
南波が言う。

高度、一〇メートル。この程度の高さなら、上手く降りればけがもしないかもしれない。しかし一〇〇%ではない。

「冗談、」



蓮見が言う。笑っている。微かなニュアンスも増幅・補正される。敵が実用化したSVTSは本当に必要なのか。そう思う。発声しないメリットは何か。考えてもあまり浮かばない。南波に訊いたら、どうせろくでもない答えが返ってくるに違いない。

草の池だ。ヘリはダウンウオツシユをまき散らしながら、針葉樹の森の中にぽっかり開いた草の原……私は一瞬ここが湿地なのではないかと訝ったが……に着陸した。ヘリコプターのスキッドが草に沈む。南波が車から降りるような動作でヘリを出る。桐生、私、蓮見の順で続く。

「エエンレラ、ありがとう」

南波が振り返り、きっちり発声して言う。無線通話。ヘリコプターのクルーと同じインターコムの周波数を使う。もっとも、あちらは機内に限っては有線通話だが。

「派遣55、チームD、武運長久を」

機長がコクピットからこちらを向いている。ガンナーが手を振っていた。

「武運長久を」

南波が返す。

上空の82式戦闘ヘリコプターはほとんどローター音が聞こえない。それでも黒い影が横切るから、確かに彼らは存在しているのだろう。そして彼らはエエンレラ……武装ヘリコプターの護衛であり、私たちチームDの護衛ではない。ここから先は、お互いがお互いを、あるいは自分自身を護っていく。あらゆる脅威からだ。保持した4726自動小銃にしっかりとした重みを感じる。この銃は、自分自身を護る武器でもあるが、その前に目標を殲滅するための道具だった。今回の任務はあからさまに目標がソフトターゲット……人間だった。

「やっぱり、」

蓮見が言う。耳に直接届く。

「気が乗らないな」

蓮見は4726を水平に構え、光学照準器を覗いた姿勢。ダウンウォッシュが私たちに吹きつける。高度を急激に上げていくヘリコプターの腹が見える。地上に脅威が現出した場合、対処するのは私たちの役目だ。彼らが去るまでは。ある程度の高度に達すれば、脅威の判定と排除は、あの頼もしい82式戦闘ヘリが受け持つ。

「行くぞ」

南波が先頭。草は柔らかく、腰までの背丈があっても歩きやすかった。雪解けの水がこのあたりにはたまりやすいのだろう。それを目当てにした種類だ。もつと気温が上がり、地面が乾燥してくるとまた別の種類の植物が背丈を伸ばすのだ。私が上空からここを見て湿地のようだと思ったが、靴の裏の感触はやはり柔らかく、あながちはずれてもない感想だったようだ。

チームDは四人。私たちの最小行動単位は二名だから、ほぼ最小に近いユニットだ。この人数を投入するなら、89式支援戦闘機を呼び込んで、目標を殲滅してしまった方が早いように感じるが、上層部はそう判断しなかった。生身の部隊を送り込み、兵士の持つ銃で、目標に弾丸を撃ち込む、その過程を重視したようだ。その行動そのものが敵に与える影響。爆弾で殺されるのと、間近に敵の姿が見え、その敵に射殺される恐怖感……それらをセットにしてひとつの攻撃と見なすのだ。万一作戦が失敗したとしても、失われる味方の兵力は一チーム四人だけ。……失われるスキルや経験値を無視するなら、確かに戦闘機一機よりはるかに安い。そして、いくらおりこうさまでかわいそうなGBU-8自己鍛造誘導爆弾でも、目標の姿形……表情まで判別して落下するわけではない。GBU-8は建造物などの施設や車両破壊を目的にした兵器で、たまたま建物の中にいた人間や、運悪く車両に乗っていた人間を「巻き添えにして」殺してしまうことはあっても……それが普通だとは思いが……人間だけを選別して殺すような機能にはなっていない。だいたい炸薬の量からして、人間一人だけを選別して殺害するにはできていない。航空機が得意とする攻撃方法は、町ひとつを消し去るだとか、

鉄橋を基礎ごと吹き飛ばすとか、発電所を更地にするとか、そうしたダイナミックでわかりやすいものなのだ。私たち人間が得意とする攻撃手段は非常に分かりにくく、せせこましい。

「目的地までは、」

「このスピードなら、三時間。一個目はな」

時速六キロ。結構な早足だ。走るわけにはいかない。走ってもいいが、消費したエネルギーの摂取が面倒になる。走るという動作は想像以上にエネルギーを消費する。走れば時速は八キロから一〇キロまで向上させられるが、途端に私たちの燃費が悪化する。たった時速二キロの違いだが、歩行速度時速六キロは堅持だ。

「こんな森の中を行くんだな」

「蓮見、分かっていることをいちいちしゃべらなくてもいい」

南波が前を向いたまま言う。

「プリブリーフィングで行程表は確認したはずだ」

「蓮見はわかってて言うのさ」

桐生。補正された声も低い。

「退屈なんだろう」

私が言ってみる。私たちの戦闘服はすでに周囲の植生を感知して相当に濃い緑へ変化している。さすがには虫類や両生類、一部の頭足類のようなカムフラージュはできなかったが、それはエネルギー源の問題であり、動力源からの出力に比較的余裕のある戦闘車両やさつきまでエスコートについていた戦闘ヘリコプター、戦闘機の類は地形や植生に合わせてかなり細かな自動迷彩機能がついている。個人装備としての自動迷彩機能は、せいぜい周囲の植物や建物の色に合わせて変化する程度にとどまっているが、それは有力なエネルギー源が人体の発する熱……体温程度しか存在せず、そしてその熱は、自動迷彩機能を駆動する動力源としては足りないというわけなのだ。もつとも、現状で十分に目立ちにくい色彩になっているから、これ以上の迷彩となると、色が変化するよりも、戦闘服そのものから草が生えてきたり、枝が伸びてきたり、あるいはレンガが生成さ

れる、コンクリートの壁ができあがるといった、初等科学校の学芸会レベルの機能になってしまっただろう。そうした機能は、狙撃兵なら重宝するかもしれないが、彼らは彼らで、全身を覆い尽くす蓑虫のような装備……ギリースーツを自作することで満たしている。ギリースーツを作成する技術もまた狙撃兵たる要件の重要なひとつの技術となっていると聞く。だいたいしつかりした動力源を持っている戦闘車両にしても、狙撃兵のように車体を草や木の枝葉で覆う細工をするのだ。いくら擬態が発達しても、本物には敵わないといったところか。

「誰がこんな作戦考えたんだ」

蓮見。彼女の口数の多さは、おそらく年齢から来るのだろう。彼女はチームD最年少だ。良くも悪くも老成されていない。気になったことは口に出さなければ気が済まない。そういうタイプだ。

「上」

南波が答える。南波はいつでも、答えてくれる。私が相手でも、蓮見が相手でも。

「どうして考えたんだ」

「膠着した戦線を押上げるため」

「押し上げてどうするんだ」

「戦争に勝つのさ」

「勝ってどうするんだ」

「戦争が終わる」

「どうせ次のが始まるんだ」

「次のが始まったら、また俺たちの出番だ」

「どうでもいい問答だった。問答にすらなっていない。」

「文句を言うなら、なんでチームに入った」

チーム……第55派遣隊そのものを指したニュアンスだった。

「志望動機？」

「そんなところだ、」

「極限」

「何？」

「極限状態が好きだから」

「どういう意味？」

「そのまま。私は極限状態のあの気分が好きなんだ」

蓮見が言う。初めて聞いたような気がする。

「病気だな」

桐生が言う。低い声。感情の抑制された声。そんなニュアンスまで増幅・補正してくれる。ますますSVTSなど不要だ。

「桐生やめておけ、蓮見のテだ。テ」

南波は歩調を緩めない。足許はけっこうしっかりしているが、獣道だ。両側は針葉樹林。背筋を伸ばしてハイキングというわけにも行かず、やや猫背にした四人は足音を殺しながら時速六キロで進む。「殺すか殺されるかってのが気持ちいいのか？」

南波が訊く。

「違う」

「じゃあ何だ」

「殺すとか殺されるとか、そんなのどうでもいい。ただ、身体が極限状態に突入するのが好きなんだ」

「身体だけか？」

「心も体のひとつだよ」

「そうだな……たまにはまともなことを言う。で、その極限状態がなんでウチなんだ？ 山でも登ればいいじゃないか。ハイキング登山じゃないぜ。八〇〇メートル級の山でも登ってくればいいじゃないか。海に潜ってもいい。北氷洋なんておすすめだぜ。水温マイナス一度、ドライスーツを着ていても一時間潜ったら死ぬらしい」

「そういうのもいいんだ。でも、お金がかかる。山に登るにしても、海に潜るにしても」

「それを商売にしてる連中がいるじゃないか。その仲間になればいい」

「違う。南波少尉……分かってない」

「分からないんだ。当り前だ」

「そういう職業に就いたとして、けど毎日極限になるわけじゃない。……どつちかかっていうと、毎日普通で、平凡で、欠伸が出るような感じで、時々、ほんの時々、極限状態の世界に行くだけだ。私は、もつと頻繁に極限状態でいたい」

「手っ取り早く、だからウチに来たって？」

「そう思ってくれて構わない」

「やっぱり病気だ」

桐生が言う。

「入地准尉」

蓮見が私を呼ぶ。

「なんだ」

「あんたって、私と同じ匂いがするんだ」

「シャワーなら浴びてきたぞ」

「そういう意味じゃない」

「わかってる」

「あんた、戦闘中に、取り乱しているところをほとんど見たことがない」

「それは、ウチら全員がそうじゃないか」

南波が口を挟む。そうだ、そのとおりだ。みんなそうだ。

「いや、姉さん、」

蓮見も時折私のことを南波と同じように「姉さん」で呼ぶ。やめて欲しい。

「私のはあなたの姉さんになったつもりはないんだが」

「いいじゃないか。コールサインだ」

「そりゃいい」

南波が笑った。

「姉さんを見てると、時々怖くなる」

森の中の獣道。すでに蚊が飛んでいる。初夏だ。大地は膿み、森や草原は獰猛な蚊の巣窟と化しているのだ。虫除けを念入りに塗っ

たところで汗で流れる。もつとも、私たちの装備は肌の露出が極端に少ない。首から上……顔だけだ。だから顔さえ刺されないようにケアしておけばいい。それがなかなか難しいのだが。

「何が怖いんだ。私の」

「躊躇がないから」

「何にだ」

「撃つことに」

「蓮見、お前だって同じだ。いちいち銃を撃つのに躊躇しているよ  
うな人間なら、いまごろ墓ん中だ」

「そうだ」

「じゃあ、私のどこが」

「姉さん、今回の任務ミッション、どう思う？」

「任務についての感想は持たないことにしてるんだ」

「オフレコさ」

「私たちの言葉はいつだってオフレコだ。人に聞かせられない。特  
に 市民 には」

「じゃあ、市民 に聞かせられるレベルで話してくれよ」

森の中は薄暗い。針葉樹の森はそうだ。下草が極端に少ない。その分見通しもいいから、実際の戦闘になると地形効果があまり期待できない。

「敵の脅威の排除……それでいいだろう」

「シンプルすぎる」

「他になんて言う？」

「敵航空戦力の中期的期間における弱体化」

「似たようなもんだ」

「姉さん、なんで人間を狙う必要があるんだ？」

「何？」

「南波少尉も……どうして施設や戦闘機そのものを狙わないんだ？  
いま私たちが向かってる場所って、敵の航空基地でもなければ、  
レーダーサイトでもない……ただの村だろう」

「蓮見、」

「どうせ、オフラインだ」

確かにオフラインだ。蓮見は声帯を震わせてもいない。耳に届いているのは、CIEDSが増幅した彼女の声だ。あらかじめ登録されている彼女の個人情報パーソナルデータをベースに再生されている彼女の声。

「なんで村に向かつてるんだ？」

「もう一回ブリーフィングが必要か？ 蓮見准尉？」

「分かつてる……気分が悪いだけだ」

真つ当に考えれば、私も気分がいいはずがない。

私たちチームDが向かつているのは、敵の基地ではない。そもそも軍事目標ですらない。いや、むりやり当てはめるなら、広義の軍事目標だ。これから向かう村には、敵のパイロットたちが滞在している。パイロット村だ。ある意味軍事目標であるのは疑いがない。

「パイロットがいなくなれば、飛行機は飛ばせない。そこがライフルやLAM（携帯式対戦車ロケット）との違いだな」

南波は淡々と言う。そういう男だ。どうでもいいところでの感情は抑える。セルフコントロールが上手なのだ。だから安心できるのかもしれない。行き過ぎるとただの無神経だが。

「パイロット個人を狙うのは条約違反ではないのか」

「条約に『兵士を殺害するな』とはどこにも書かれていない」

南波が答える。

「相手は非武装だ」

「そう言いきれるか？ パイロットだって銃の撃ち方くらいは知ってる」

「……虐殺じゃないとなぜ言い切れる？」

蓮見はどこまで本気なのだろう。暇つぶしの戯れ言だとしても、ナイーブすぎる。

「じゃあ、空挺降下して敵の後方に襲いかかり、戦闘に慣れていない補給部隊や工兵隊を血祭りに上げるっていうのはどうだ？ お前の論理なら虐殺か？」



そのとおりだ。対象が違うが、パイロットはパイロットである以前に敵の兵士だ……階級的には幹部だろうが。

「それで三〇口径か」

一チーム四人で襲うにしてもたかがしれている。射程距離を稼ぎ……幸い私たちは、一般部隊と比較しても選抜射手レベルの射撃能力がある……しかも重たい弾丸と初速を生かして、一人一人を確実にノックアウトする。

目標の村……ほとんどパイロットの保養施設のようなもの……には一個飛行隊分のパイロットが滞在しているとみられる。わざわざ危険を冒して敵航空基地に攻撃を仕掛けるより、確実に安全に、そして継続的に、敵の航空戦力を削ぐことができる。

誰がこんな悪趣味で効率的な作戦を考えたのか。

「パイロットだけ、狙うのか」

「お前、話聞いてなかったのか。一村全滅させるんだ。関係者しかいないからな」

「パイロットの家族がいたらどうする」

「関係ない」

「なぜ」

「お前、近接航空支援を要請したとして、『癩癩娘』がパイロットとその家族を選別して攻撃するか？ さすがの『癩癩娘』の映像認識でも、パイロット一人一人の家族の顔まで覚えちゃいないぞ。それに、『癩癩娘』のコドモが直撃したら、俺たちのチーム四人だって粉々だ」

「それはそうだけど」

「蓮見……、帰るか？」

桐生が歩きながら低く言う。

「そんなわけない」

「わかってる。……暇つぶしだな」

「そう……わかってる」

「本音だろう？」

南波。

「何がだ？」

「お前の本音さ。優しいんだな」

「嬉しくもない」

「そうか？　優しさは大切だ……だが、お前の優しさは、自分を滅ぼすぞ。お前は優秀だ。発電所を奪還したのはお前のチームだった」

「私以外は木っ端微塵だよ」

「お前はやるべき事はちゃんとやれる。だが、あとで悩むんだろう。しっかりと投薬とカウンセリングを受けてきたか？」

「帰ったらするよ」

「敵の弾に殺られる前に、自分で自分の頭をぶち抜いたりするなよ」「バカ言つな」

「本気で言ってる。お前はそう言うタイプだ。さっきの話は暇つぶしだとしても、真に迫っていた。それでもお前は引き金を引くだろうさ。入地准尉のように、躊躇もなくね」

「なぜ私を引き合いに出す？」

「あんたがこういうナイーブな相談してきたことはないからな。あんたは悩んだりしないのさ」

「心外な」

「はずれてるか？」

間違っではない。おそらく悩むべきポイントが私は蓮見と違うだけだ。

一人だけ殺すのか。

全員殺していいのか。

祖父の横顔を思い出す。まだ答えの出ていない疑問。皆殺しの優しさ。

私は勝手にそう名付けた。

丹野美春に訊いたことがある。

（たとえばキミが暗殺者だとして、よき夫でありよき父であり、しかし圧政で民を虐げる指導者を目の前にして、彼をかばう彼の妻や、

子どもたちや、彼の両親その他の前で、躊躇なく殺せるか？ 殺したあと、彼の死を嘆き悲しむ親族たちを見て、何の感情もなく立ち去れるか？)

55派遣隊の面接で訊かれそうな設問だったように思う。ようするに今回蓮見が口にした問題と近い性質のものだ。

丹野美春は、そもそもその指導者を撃てないと言った。

問答が成立せず、私は自分の考えを言う機会も失った。南沢教授にはセンシティブ過ぎるこの問答をぶつけることもできなかった。ちょうど私が陸軍に入隊を希望する書類を揃えはじめていたころだったから、私が四年で築いた優秀な学生のイメージを、教授の前で粉々に打ち砕くわけにも行かなかったのだ。都野崎での四年間、私は私のイメージを自分の思い通りに捏造することに成功していたからだ。

「蓮見、」

私は、蓮見に訊いてみようと思った。

「お前が暗殺者だとして、」

「いや、すでに暗殺者だから」

「南波、あんたは黙ってて。……蓮見、もし、お前が暗殺者だとして、目標に選ばれたのが、よき夫でありよき父であり、しかし<sup>ターゲット</sup>圧政で民を虐げる指導者を、彼の妻や子どもや両親たち家族の前で殺せるか？ 殺したあと、躊躇なく、顔色変えずに立ち去ることができるか？ 悲嘆に暮れる家族を背にして？」

「入地准尉、なんだそれ」

「私の質問だ」

「……本当の話か？」

「何？」

「入地准尉の、実体験？」

「残念ながら、私はまだ敵の指導者を狙うような任務に就いたことはないよ」

「真に迫ってるから」

「ただの暇つぶしだ」

「殺すよ」

「だろうな。殺すだろうな、お前なら」

「任務だから」

「それは禁句だったんじゃないかな、」

任務だから。

仕事だから。

命令されればやります。

そうした動機は、55派遣隊では許されない。自分の確たる意思で相手を倒す。そうした精神力も含めての戦力だ。

「蓮見、私は分かる。お前はきつと任務に当たる前、電話帳みたいな資料を、夜も徹して読み込むんだ」

圧政で虐げられた民草の姿。

本来全うすべき寿命を、容易く断ち切られるささやかな家族の姿。餓えと貧困に、大切な娘を息子売り飛ばす親の表情を。

それらすべてに感情移入し、憎しみと怒りを体内に充満させ、そのあふれ出した憤怒で引き金を引けるようになるまで、おそらく蓮見は資料を読み込み、映像講習を嫌というほど受け、そして、おいしい食事をしながら、道端の雑草をかじる対象国の国民の哀れな姿を想像し、さらなる怒りを増幅させるのだ。そうして、何の慈悲も感じることもなく、そのよき夫でありよき父であり、彼の両親の思い出にあるかわいらしい息子の現在の姿……独裁指導者を殺すのだ。カウンセリングの必要もないほどの憎しみと怒りで身体を震わせて。

「そうして撃つ。何の躊躇もなく。そして帰ってくるんだ」

蚊が私の首筋に止まった感触があったが、薬草の主成分と化学合成した殺虫成分を希釈させた虫除けの威力に、蚊は私の生き血を吸うこともなく飛び去った。夏休みのキャンプのとき、これが欲しかった。

「入地准尉、」

「なんだ、蓮見」

「あんたも撃てる……よな」

「当り前だ」

「きつと、間違いなく、私も撃つと思う。そして、姉さんが言うように、帰ってくると思う」

「お前だけじゃない。南波少尉も、桐生もそうだ」

「ああ」

「……だから、今回の仕事も、疑問を感じちゃいけないのさ」

「けど姉さん、」

「なんだ」

「独裁者なら、……私は確かに撃てると思う」

「パイロットは撃てないか」

「いや、撃てる」

「じゃあ何が問題だ」

「……動機の問題なんだろうさ」

南波が言う。

「いいか、蓮見。独裁者もパイロットも変わらない。友軍を容赦なく殺すという点では同じだ。パイロットの方がたちが悪いかもしれん。爆弾を雨あられ、街に落とすかもしれん。お前の家族も友達も皆殺しにするかもしれん。……パイロットだから、指導者だから、そんなのは差別だ。敵は敵だ。等しく敵だ。俺たちの目標は全員敵だ。いいか、外国人は外国語を覚えて話すんじゃないんだ。生まれた瞬間、「オギャー」ってのがもう外国語なんだよ。差別はいけない」

最後の文がまるで意味不明だったが、南波らしいと思った。

私も撃つだろう。パイロットだろうが、指導者だろうが。

パイロットの家族も。

指導者の家族も。

ここには、私を制してくれるあの祖父の横顔はないのだから。

耳許で警報音が鳴っている。

考えるよりも早く身体が動く。

右手、手のひらと、薬指と中指で軽く保持している操縦桿を左に倒す。同時に右のフットペダルを強く踏み込む。蹴るのではなく、強く踏むのだ。機体は左へロールし、機首はそのまま下を向く。ダイブ。

「レーダーを照射されている!」

後席のWSO（武器士官）が短く叫ぶ。まだ顔なじみになってから日の浅い相棒。パイロットは、日々乗る機体は異なるが、前席後席の組み合わせは滅多に変わらない。これでひとつの最小行動単位…… チームだからだ。

パイロットは振り返ることもなく、スロットルレバーを押し込む。アフターバーナーには点火しない、ミリタリー推力。それでも双発のターボファンエンジンは凄まじいパワーを炸裂させる。

「二機だ、二機」

とつくにマスターアームスイッチはON、自機レーダーも目覚めさせていた。この空域には早期警戒管制機の援護がない。防空ではなく攻撃任務であり、すでに編隊は国境を五〇海里ほど北へ越えていくからだ。空も下界も蒼い。海上には出ていないはずだが、はるか眼下、新緑が萌えているはずの大地は、この高度からだと蒼く見えた。

「ノルド04、ブレイクブレイク」

耳に届くのは僚機、ノルド03・イスルギの声だ。

「サクラ、七時に敵機」

イスルギ機も自機とは反対へ散開、そのままパワーダイブをかけていた。

「わかってる」

「サクラ、」

後席が呼ぶ。

「なんだ、」

「二機来てる、」

振り返るのは後席の仕事だ。ネズミのような目をした武器士官の顔が蘇る。飛行学校を卒業したてのような雰囲気さえ漂っていたが、実戦経験は自分とさほど変わらないと笑っていた。

「イバラ、」

後席を呼んでみる。イバラ。彼女のタクティカルネーム。

「まだ来てる、」

機体はすでに音速を超えている。そもそもこの機体は低空侵入を得意とする戦闘機だ。高々度で空中戦をするための飛行機ではなかった……原型機は制空戦闘機だから、当然ある程度は空中戦をもこなすことはできるが、基本設計が古すぎ、友軍の89式支援戦闘機との模擬戦でも、よほど策を綿密に立てなければ勝つことは難しい。従って、いま後から追いかけてきている敵機は間違いなく対戦闘機専用に開発された機体であり、すると自分は逃げるしかないのだ。エスコート役の81式制空戦闘機は往路文の燃料を使い切り、三十分以上前に引き返している。

「ノルド01、全機」

フライトリーダーの声。

「敵機は全部で六機確認した。各個は散開、合流点はウェイポイント7、谷の入り口だ。わかるな」

「02、」

「03、」

「04、」

また全員生きている。

「増槽は切り切りまで捨てるな。帰れなくなるぞ」  
「了解」

イスルギの声だ。他の僚機は、通話スイッチを二回鳴らすジッパ

「コマンドで返していた。戦闘中だから許されることだ。普段、リーダーにジッパーを返せば、あとで基地に戻って説教だ。」

「サクラ、三〇〇〇切ったぞ」

後席が言う。高度計の針が勢いよく逆回転を続けている。二万フイートあった高度は、すでに三〇〇〇を切り、二〇〇〇に迫ろうとしていた。大地はもう青さを失い、道路や河川や家々の屋根がはつきりと見える。

「イバラ、敵機は？」

「かなり後方、……まだいる……、サクラ……、伊来中尉、引き起こせ、」

操縦桿を引く。三、四、……五G……主翼はヴェイパーで覆われて見えない。一五〇〇フイートで水平に。主翼端からは真っ白なヴェイパートレイルが流れている。いつの間にか、空の半分以上に雲が広がっている。

再び警戒警報音。敵機は身軽な29型だ。64式と比べて二回り近く小型な戦闘機で、双発機だがエンジン推力も小さい。局地防衛用の機体だが、おそらく空中戦に持ち込まれると、64式に勝ち目は全くない。身軽な子どもと、くたびれかけた中年が広場で鬼ごっこをしたとしたら、どちらが勝つだろう？ わかりきったことだ。

「サクラ、ブレイク、右だ」

イスルギの声だ。振り返らず、声を信じて操縦桿を右に倒す。フットペダルの左を踏み込む。スロットルレバーをアフターバーナー位置へ。速度、四五〇ノット。

耳許で警報音が野太くなった。

「サクラ、撃った、撃った」

敵がミサイルを放ったということだ。耳許の警報音は断続的で、ひどく耳障りだ。スロットルレバーのフレアディスプレイセンサースイッチを入れる。アフターバーナーはそのままだ。赤外線を大量にまき散らしている計算だが、最近のおりこうさまなミサイルは、盲目的に熱源へまっしぐらには来ることはない。ミサイルには高価な目が



ついている。飛行機の形をしたものを記憶して飛んでくる。フレアを立て続けにまき散らしているのは、ミサイルの目を幻惑するための欺瞞情報……それは賢いミサイルの目に届くような特殊な光線……だ。ミサイルは一瞬、狙っているはずの戦闘機が複数出現したと「勘違い」する。その間に狙われているこちらは一目散に逃げるのだ。

敵のミサイルはほとんど煙も曳かない。なので目視して回避することは不可能だ。フレアを撒くと、フライトコンピュータは危機と判断し、半自動的にパイロットが取る回避行動をアシストする。ミサイルの射線から最適に逃げられるような飛行軌道を一瞬で計算し、動翼を制御、パイロットの意思と強調して機体を持って行く。

「はずれた」

「二発ともか？」

「二発ともだ」

「敵機情報」

後席のイバラが操作するよりも早く、ストアコントロールパネルに空対空ミサイルの発射表示がフラッシュしている。

> READY A A M - 9 x 2 <

「当たるのか？」

伊来はイバラに問うてみる。

「コンピュータの判断だ、」

返事の代わりに、伊来は操縦桿のミサイルリリースを押している。旋回中にもかかわらず、しかもパイロット……伊来は一度として敵機の姿を確認していないにもかかわらず、リリースを押すと、主翼の第三、第六ステーションから、それぞれ、A A M - 9 (92式空対空誘導弾) が発射された。初速が速く、弾体の大きなミサイルだ。図体は大きい、排気ノズルは可変式で、身体に似合わない飛行性能を有していた。空中戦が考慮できない発射母機の代わりに、敵のミサイルよりさらにおりこうさまなA A M - 9は、その大柄な体内に満載した燃料が尽きるまで、敵機を追いかけることになる。

伊来はミサイルの軌跡を確認することもなく、操縦桿を左に倒し、川をめがけてさらに高度を落とす。空中戦で高度……位置エネルギーを捨てるのは自殺行為に等しいが、今この瞬間、彼女は空中戦を行ってはいなかった。

「敵機は、」

「逃げた」

「本当か？」

「一機は……撃墜」

「もう一機は、」

「私たちのミサイルは……はずれた……、が、ノルド03だ。イスルギの攻撃で、……撃墜だ」

高度一〇〇〇フィート。五〇〇ノット。空気が濃い。機体が揺れる。ほとんど目の前に山岳地帯が見える。標高三〇〇〇メートル近いこの地方の名峰たち。深く刻まれた谷がいくつもあるが、氷河地形だという。さらに北部まで行くと、谷はそのまま海まで落ち込んでいる。この戦役がなければ、風光明媚な観光地として自分も訪れてみたいと思っただかもしれないのに。

「サクラ、無事だな」

イスルギの声。

「逃げただけだから」

「上出来だ」

「ありがとう、助かった」

「ミサイルの性能がよかったんだ。俺も逃げただけだ」

「他の二機は、」

「かなり離れてしまったようだが、まだ生きている」

「任務は？」

「継続だ、もちろん」

首を巡らすと、すっかり空は一面の雲に閉ざされていた。不自然に風景が明るいのは、CIDSが光量調整と色調補正をかけているからだ。TDボックスに囲まれて見えるのは、ノルド03、イスル

キ機。彼もミサイルを二発放ったようだ。

「他の敵機はどうなった」

「向こうも二機やったようだ」

「あとの二機は？」

「雲の上」

「まだ来るかな」

「来るだろうな……また」

「残弾二、」

イバラが割り込む。主翼の第三、第六ステーションには、自衛用のミサイルはあと一発ずつで計二発。同じ高性能のAAM-4だが、計算としては敵機があと八機以上来ると、もう対処できない。敵の29型に対抗できるのは、速度と対弾性能だけだった。追いかけたら燃料が尽きるまで全速力で逃げ続け、81式戦闘機が待機している国境の南まに駆け込むか、おとなしく機体を捨てて脱出するかだ。後者は被弾したとき以外はあり得ない選択肢で、そして、国境線を北へ越えているこの地での脱出は、すなわち敵地を丸裸で彷徨うことを意味している。それは避けたかった。伊来中尉もイスルギも、パイロットたちは生存訓練は受けているが、戦闘訓練はほとんど受けていない。おそらく敵の歩兵一個小隊と遭遇しただけで全滅は免れない。

「歩いて帰るのは嫌だな」

つぶやきが声になっていた。

「サクラ？」

イバラの耳が拾ったようだ。

「飛んで帰ろう」

「なんの話だ？」

「イバラ、銃、撃ったことあるか？」

「訓練で」

「じゃあダメだ」

「サクラ、大丈夫か？」

イスルギが続く。

「あんたは、銃、撃てる？」

「……どうしたんだ。……ハケンの連中にやっぱりなにか言われたか」

55 派遣隊の二人。

入地准尉と……南波少尉。

身体の一部のようにライフルを持ち、全身、肉体そのものが武器のようないでたちをしていた。入地准尉は、自分とそれほど歳も変わらないように思えた。せいぜいあちらが数歳年上というところだ。南波少尉は、軽い口調と雰囲気だったが、足取りが機械のように性格で、上半身がまったくぶれていなかった。

第55派遣隊。

槍の穂先のその穂先、そう揶揄されていると聞いたことがあった。もちろん、私……パイロットもまた、空軍では槍の穂先のその穂先だ。そして、穂先が折れれば即座に回収に来てくれる。研ぎすまされた槍はなかなか交換が効かず、生産に時間もかかるからだ。派遣隊のあの二人のように、歩いて半日以上もかかる拠点を、仕方なしとはいえ平気な顔で目指すようなことはしない。むしろ、訓練ではむやみに動かず、遭難地点から離れないように指導される。もし離れる場合も、サバイバルキット同梱のビーコンを必ず所持してからだ。生き残るための術はある程度教えられているが、キットに入っている4716K自動小銃はあくまでも護身用であり、予備弾倉はわずかに一本三〇発。合計六〇発の弾と食料とビーコンを抱えて、私は……敵とは闘えない。

今回の作戦は、眼前の山岳地を貫く溪谷のそのまた奥に造られた北方会議同盟国の鉱山都市を消し去るというもの。しかし鉱山都市をまるごと消し飛ばす役を任されたノルドフライトはあくまでも最終手段としての存在だ。陸軍の部隊が都市の占拠、あるいは主要施設の破壊作戦に従事している。作戦は数日前から決行されており、現在もなお続行中。しかし、ノルドフライトが現地上空に到達した

時刻の時点で、自動的に陸軍部隊による作戦は終了、核攻撃を実施する手はずになっている。

奪取できなければ破壊せよ。

おなじみの命令だ。

単純明快な。

もちろん時間差を設けているはずだ。ノルドフライトの四機の64式戦闘爆撃機が都市上空に差しかかる前に、当該地区で作戦に従事している陸軍部隊は大急ぎで撤退する。友軍部隊ごと破壊するわけにはいかないからだ。もっとも、時としてやむを得ず、友軍部隊が展開している戦域に近接航空支援を実施するケースもある。そのときは、友軍の地上部隊が全員一人残らず「安全地帯に撤退している」ことを了解した上で爆弾を投下する。これは約束事なのだ。兵士同士の。そして近接航空支援はおおむね当地の地上部隊が要請してくる。パイロットがするのは、機体と機体に搭載された攻撃兵器を無事当該空域まで運んでいき、リリースを押し、兵器を機体から分離すること。地上の戦士たちの無事こそ祈れど、仮に彼らがまだ目標にへばりついていたりとしても、パイロットは黙ってリリースを押しだけなのだ。

今回も同じだ。

鉾山都市の規模は、人口四万人。

すでに戦端が開かれており、非戦闘員はとつくの昔に住み慣れた街を捨て、北洋州の国境線北側全域にちりぢりに避難民として散っているという。都市に残っているのは、敵の拠点防衛部隊と鉾山施設の維持管理をする運転員、それら関係者のみだ。それでも数百人あるいは千人単位の人間が残っていることになる。

NB-55は無慈悲な兵器だ。

爆心地はおろか、半径一〇キロ圏は更地になるだろう。地形効果を考えると、爆風はさほど広がらないだろうし、熱も溪谷に閉じこめられるに違いない。しかし、いま眼下に、眼前に広がる初夏の美しい風景は消えてなくなる。

いつも私は上空から眺めてきた。

私たちが向かう前の風景と、私たちが去るときの風景。

同じ場所とは思えない風景。

箱庭のように美しい都市が、私たちが帰るときには黒煙を噴き上げ、あるいは無数のクレーターが穿たれ、または更地となってしまう。

そついう任務なのだ。

どちらがましだろう。

伊来中尉は宿舎のベッドで眠れない時間、天井を見つめながら考えた。

もともと空軍を志願した。

適性があったからだ。

私は、「アクセシック・カルチャー 純粹培養系」だ。

夢を見たことは一度もなかった。

だから、夢がどのようなものが分からなかった。

悪い夢でうなされることもない。

夢と現実の区別がつかなくなることもない。

心はいつも平坦で、起伏が激しくなることもない。

空軍に入隊し、パイロット養成の飛行学校に入校し、日々の厳しい訓練を厳しいと感じたことがない。精神的耐性が生来備わっていたからだ。心の底から笑ったこともなければ、怒ったこともない。心が凍りつくような恐怖を味わったこともなければ、同期が訓練中に殉職したところで悲嘆に暮れるようなこともなかった。

純粹培養系ではない、いわゆる原生種の連中からは、当然憐憫の視線を向けられるか、面と向かわずとも、冷静を通りこして冷酷だと視線を逸らす者も出てきていた。しかしそれすら気にならないのが純粹培養系の精神的耐性だった。

入地准尉の目を思い出す。

パイロットの目のようだと思ったのだ。

澄んでいた。

彼女は原生種なのだろうか。どちらかと言えば、自分と同じ、純粹培養系の目に似ていた。

南波少尉は……、いわずとも分かる。彼は明確に原生種であり、しかし訓練で凄まじい精神的耐性を備え付けてしまったタイプによくある目をしていた。空軍パイロットにはほとんどいない。まれにいたとすれば、陸軍出身者だ。そういう変わり種もいる。空に憧れすぎて陸軍を辞め、空軍に再入隊したパイロットを、伊来も何人か知っている。

入地准尉も出撃したに違いない。

鉦山都市の任務に就いていないことを、伊来は祈った。

祈る？

祈るって、どういうことだ？

自動車が一台も通らないと分かっているけど、道の真ん中で座り込もうと考えないのは、これは身体が常識に絡め取られているからなのか、本能的な防衛反応なのか。

「またそういう話か、」

エネルギーバーをかじりながら、路側帯の法面に半身を横たえた南波が私にうんざりした目を向けた。

「お前は考えすぎなんだよ。これだから学士さんはよ、」

「お前だってそうだろう。南沢教授の論文を、原文で読んだって言うてたじゃないか」

「論文を原文で？ 本当か、南波」

桐生がパックパックからチューブを伸ばしてアイソトニック飲料を飲んでいる。

「まあ、興味があったんで」

歯切れが悪い。南波もももとは「そっち系」の人間なのだ。「言語の収斂進化」などという話題をあつちの廃墟の病院でぶつけてきたのは、そもそも南波の側だ。

「どつという興味だ、」

「まあ、……言葉に興味があつたんだ。俺たちも帝も会議同盟の連中も、意味は通じないが言葉を持つてるだろう？　それが不思議だつたのさ」

「何が不思議なの？」

エナジーバーではなく、チョコレートバーをかじりながら、蓮見が訊く。そう言えば私は蓮見の経歴はよく知らない。

「姉さんにはさんざん話したが、」

私はうなづく。このエナジーバーは歯にくっつきやすく、アイソトニック飲料なしに大量に食べるのは難しい。もっとも超高カロリー食品なので、一パックあたり三分の一も食べれば、それが一回の食事としては適量になる。これをおやつ代わりに食べてしまうと、一月もしないうちに体型が変わる。もちろん不健康な方向にだ。そのときは血液検査もおすすめせざるを得ない。

「姉さんには話したんだが、言葉って、もともと人間すべてに備わっていたのかどうか。もともとは暗黒大陸から出発して全世界に散らばったとして、俺たちは最初から言葉を持っていたのか、それとも、『旅の途中』でそれぞれ言葉を身につけて、進化させていったのか。最初から素質があつたのか、なかつたのか。なかつたとしたら、旅をしながら進化した言葉は、根っこが一緒じゃないから、それは『収斂進化』って言うんじゃないか？　そう思ったんだよ」

「いつ考えた、そんな話」

桐生。

「学生の頃さ」

「お前、大学卒なのか」

「まあな……関係ないだろう」

「そうは見えないからな。入地准尉ならうなずけるが」

「こいつだって似たようなもんさ」

南波はもう食事を終え、路面に上半身も横たえていた。バックパツクも身体からはずし、タクティカルベストも緩め、靴まで脱いでいる。あまりにだらしない姿に見えるが、休憩の取り方としてはこ



れが正解だ。全身を拘束するあらゆる装備をいったん降ろすと、身体はスムーズに血液を流し、全身から疲労物質を取り去ってくれる。ただし、チーム全員が同じことをすると、あまりにも危険なため、いまは南波と蓮見が無防備状態になっている。私と桐生はCIEDSもONにしたまま、銃は身体から放さず、片手でエナジーバーをかじり、水分補給をした。

「それで、姉さん」

南波が寝そべったままで言う。

「居心地が悪いつて？」

「そんなことは言つてない」

「道の真ん中に寝転がるのは、気分がよくない？」

「そんなことも言つてない」

「まあようするに、あれだろう。人間は、結局のところ捕食者側ではなく、追いかけられる、追い立てられる、狩られる側の遺伝子が組み込まれてるってことなんだろうよ」

「南波、お前はそう思うか？」

「違うか？」

「だったらなんで私たちの目は真正面について、立体視ができるんだ？」

「他の動物は違うのか？」

「同じように狩られる側の動物の筆頭、シカだとかウサギだとか、あの連中は立体視はできないらしいぞ」

「本当に？」

「そのかわり、首の真後ろくらいしか死角がないそうだし」

「俺もそんな目が欲しいな。索敵に便利そうだし」

「そう考えたら、結局私たちは捕食者側の目の配置と同じなんだよ」

「クマとか？」

「そうだ。ネコとか、犬とか、オオカミとか、」

「サルは？」

「分類的には捕食者側なんだろう」

「索敵するのに必ずしも立体視が必要か？」

「必要じゃないか？」

「俺はむしろ、シカやウサギの目が欲しいな。全方位死角なしなんて、素晴らしいじゃないか」

そういう考えもあるか。確かにそうだ。私たちはCIDSなしだと、常に首をレーダーのようにグルグル回していなければ、あるいは耳をそばだて、物音に敏感になっていなければ、視覚のみに頼ると、敵がどこにいるのか分からなくなる。

「目がよくない捕食者もいるさ」

と私とは反対を向いたまま、桐生が言う。

「たとえば？」

全身を弛緩させた体勢の蓮見が訊く。

「お前はどっ思う？」

桐生。

「目が見えなくて狩りができるの？」

リラックスしているときの蓮見は、より年下臭さがにじみ出る。

「へび」

南波が言う。

「正解」

桐生。

「犬だって視力はそんなによくない」

「色盲ってただけだ。動態視力は凄まじいぞ？」

「そうなのか」

「知らなかったか？」

「俺は犬を飼ったことがないからな」

「歩哨犬の話だ」

と、桐生。軍用犬の訓練でも垣間見たことがあるらしい。

「でも犬というなら鼻だろう。鼻が利く」

「どっという世界なんだろうね」

蓮見。

「何万倍なんだろう？ 犬の嗅覚」

「嗅覚で個体の識別ができるそうだからな」

「俺も、姉さんの匂いならすぐ分かるぜ」

南波が白い歯を見せていた。五〇メートル先からでも見えそうな白い歯だ。

「変な話はやめてくれ」

「相棒の匂いだ。嫌っていうほど間近で嗅いでるからな」

「それをいうなら私もだ。お前の匂いならすぐに分かるさ」

「それって絆かね」

桐生が言う。平坦な口調。

「クサいな」

蓮見。冗談のつもりらしい。笑ってやった。

「別な世界だろうさ」

南波が言う。別な世界？ 私が？

「犬の話だ」

「なんだ、」

「先天的に目が見えない人間は、『見える』世界が理解できないだろう。俺たちが嗅覚数万倍の世界が理解できないのと同じように。

CIDSはエコーロケーション機能であるが、それだって、視覚的に音を表示しているだけだからな。コウモリやイルカのエコーロケーションと俺たちのそれでは、たぶんぜんぜん処理方法が違うんだろう？」

「そうだろうな」

と私。

「かといって、鼻が利かなくても、エコーロケーションができなくても、俺たちは困らない。……先天的に目が見えないってのも、もしかしたら困らないんじゃないか？」

「それは分からない……そうかもしれない」

「人工眼を先天的に視覚障害がある患者に装着させても、物理的には見えているが、視覚として感知できないって話を聞いたことがあ

る」

「本当に？」

寝そべったままの南波に、蓮見が訊く。

「本当かどうか、これは別に俺は論文を読んだわけじゃないから、ただの伝聞さ。ただ、何となくうなずける話ではあるかな、そう思ったのさ。どうだ、姉さん？」

「たぶん、脳の処理領域の問題なんだろう。……視覚情報を処理してこないのが『普通』の脳は、おそらく私たちの視覚野で処理している情報を、聴覚や触覚から分散させて擬似的に処理しているんだと思う。よく言われる、脳が平素は三〇%程度しか稼働していないっていうのは、あれはまるっきり間違いらしいから」

「俺もそう思うな。もちろん見えるに越したことはないだろうが、極論、俺たちに犬の鼻を付けても、たぶん役に立たないだろう。それに似てるんじゃないか」

「そんな気がするな」

私。

「南波、」

桐生がバツクバツクを降ろした。休憩ターンの交代。あと二十分で休憩時間そのものは終了。再び北へ向かう。

「なんだ、桐生」

「お前と入地准尉は、いつもこんな話をしてるのか」

「いつもじゃないが、退屈しのぎさ。……蓮見の悩み相談室の方がいいか？」

「やめろ、」

「さつきは付き合ってたろう。お前、案外繊細だな。本当に気をつけるよ。できれば俺はお前に銃を持たせたくないな。お前の銃、弾抜いて俺によこせ」

「バカ、」

「本気で心配してるんだ。頭を撃つなよ。お前のそのかわいい顔がグチャグチャになるのは見たくないからな」

南波はすでに半身を起こしており、タクティカルベストのハーネスをしめるのとブーツをはき直すのを同時にこなしていた。桐生はすでにバックパックもベストもはずしていたから、身繕いを始めた蓮見の横で、私も思いバックパックと予備弾倉ぎっしりのタクティカルベストをはずし、気が引けたがブーツも緩めた。

これだけで、身体が一気に軽くなる。

二十分。

きっと一瞬で終わってしまうのだ。

体感的な時間。

そういう機能は、すべての動物が持っているものなのだろうか。時間という概念を持っているのは、私たちだけなのだろうか。

次の暇つぶしで、南波に仕掛ける話題を、なんとなく私は整理してみた。

最初から嫌な雰囲気だった。

私たちが森を抜け、わずかな空間から空が覗いていたが、それは、私たちが辿った細い獣道と、別の獣道が交差するジャンクションであり、そこから空が見えたのだ。

曇っていた。

CIDSを起動させているから、時間の割に空も森も明るい。むしろ濃淡がはつきりしない、コントラストの非常に弱い視界。けれどもものの輪郭はやたらとくつきりしている。それは光学補正がかかっているからだ。極端な話、月の明りでもあれば昼間と同じ。星座が見えれば行動に支障はなく、しかしこちらの思惑としては、月の光も星の光も一切切不要で、今のように曇り空、しかも厚い曇り空で、雨など降ってくれると最高だ。雨が私たちの体温をすべてごまかしてくれる。敵も私たちのCIDSと同じような、野生の勘を機械的に再現して詰め込んだ装置を装備している。体温は恒温動物が生きている証であり、人間の体温は範囲がひどく狭く、その幅約二度前後。訓練を積んだ兵士の体温はわかりやすく、体調にもよるが、一、五度収ってしまう。もし私たちが赤外線を一切外へ出さない、このホツキョクグマ仕様のタクティカルスーツを脱いだラフな格好でうろつけば、みんな似たような体温で似たような行動様式で、ここに特殊訓練を積んだ兵士がいますよと触れて回っているのと同じ状態になるだろう。

もっとも、航空機や戦闘車両がレーダー反射に気を使った設計で気色の悪い形に変化し、光学的電子的にあらゆる欺瞞対策を施したところで、それは盾と矛の関係であり、高性能なアルゴリズムを奢ったレーダーがあれば、小鳥サイズのレーダー反射面積を誇る戦闘機とはいえ見破られてしまう。小鳥と戦闘機では実寸が違いすぎる。レーダー反射のベクトルや反射幅、そういったものを高性能で多大

な犠牲の上に構築したシステムにかけると、あら不思議、見えてしまうのだ。

「嫌な雰囲気だな」

耳に届くのは、CIDSが増幅した南波の声。抑揚に欠けているのは、彼がほとんど発声していない証拠だ。ほぼ口の中のつぶやき。下手をすると喉の奥で微妙に空気が抜ける音だけかもしれない。さすがに空気が抜ける音だけでは、発声者の識別が不可能なので、私たちのシステムは、発声者の音紋があらかじめ登録されており、音声増幅機能はそれを再現する。私の耳に届いた南波の声は、彼の肉声ではないが、原理的には彼の声そのものといえた。

「何か見えるか」

私は彼に続いて二番手。このチームでは私がもつとも小柄であり、二番目に小柄なのが蓮見で、いちばんデカいのが桐生。南波はこの国の平均的な男性の身長を具現化したような寸法で、本当は私もこの国の女性の身長を具現化したような寸法のだが、わずかに蓮見の方が小さい。桐生にしても、難波の身長から五センチほどの大きさの違いしかない。規格化された商品ではないが、私たちのチーム…… 55派遣隊では、極端に身体の寸法が異なる隊員はいない。いろいろな意味で面倒になるからだ。

「小屋が見える」

「小屋だけか」

南波は前方を警戒。私は彼から一〇メートルほど方向で左右方向どちらかというところを警戒し、その後やはり一〇メートルほどの距離に蓮見がいる。彼女も左右方向、どちらかというところを警戒している。桐生が殿で、後方を警戒する。全員のCIDSはスーパースーチモードに設定してあるので、今は人工衛星の支援も受けている。たとえば表面温度三五度前後の物体が接近した場合や、一〇度オーバの吐息をまき散らしながら接近する物体が見つければ、即座に警告してくれるはずだ。が、今は全員のCIDSが沈黙している。彼我の位置と、音声増幅、それらのモニタリング機能だけ。

「嫌な雰囲気だ」

南波は笹の茂みに身を沈めて、銃を……ヘツツァー4726・7  
62ミリ口径自動小銃を構え、首をゆつくりと巡らせている。南波  
の勘はCIDS以上だと私は思う。「嫌な雰囲気」を数値化できれ  
ば、きつとCIDSの性能も向上するだろう。だが、様々な経験則、  
要素、それらを瞬時に計算する人間の皮膚感覚や、そう、「勘」と  
呼ばれるものはなかなか機械化できないでいる。正確さには欠ける  
が精緻なこの感覚を、機械はどうしても再現できない。千差万別、  
新兵が感じる「嫌な雰囲気」は上官の顔色であったり、突発的な所  
持品検査の気配であったりするだろう。パイロットが感じる「嫌な  
雰囲気」は、雲間に見えたような気がする敵の姿だろう。敵の戦闘  
機の主翼が切り裂いた空気のかげらかもしれない。潜水艦を追い回  
す海軍の哨戒機の戦術員の「嫌な雰囲気」は、波間に見え隠れする  
潜望鏡やアンテナの気配かもしれない。戦車乗りの、ヘリコプター  
のガンナーの、整備員の、将官の、それぞれが感じる「嫌な雰囲気」。  
私は思う。そんなものは数値化できっこない。なぜ私たちが戦場に  
いるのか。なぜ南波が4726自動小銃を構え、私が中腰姿勢でじ  
つと茂みから目を光らせるのか。数値化できない何かがここにある  
からだ。

シカヤ、クマ。

彼ら、彼女らは、そうした数値化できない感覚の塊だった。

彼らの戦術を理解することはできない。私たちの言葉が通じない。  
もしかしたら、「死」の概念すらないかもしれない。彼らに「時間」  
の概念はあるだろうか。ないかも知れない。そんな連中の行動パタ  
ーンを読めるか？ 読めるはずがない。

その点、敵の兵士の行動様式なら、まだ読みやすい。

同じ人間だからだ。

私たちが米飯を食べる代わりにやや酸味の効いた黒パンをかじり、  
やはり米でできた酒を飲む代わりに燃料のような酒を食らう彼らの  
行動。同じ人間である以上、動きは読めるのだ。



私は優秀なハンターではなかった。繰り返すが、やはり銃を撃つのは苦手だ。

祖父やユー……彼の名はユーリといった……は、引き金を引いた瞬間から弾頭が銃身を突き進み銃口から出るまでしつかり銃を保持したあと、獲物を目で追ったりしなかった。撃った瞬間、当たるか当たらないかが分かるという。

同じような話を、私は軍に入ってから、空軍のパイロットに聞いたことがあった。彼は言った。敵機を追いかけまわし、照準環に敵の主翼が、胴体が瞬間入りかけたときにトリガーを引き、曳光弾がすつと飛翔していくとき、もう敵機の姿など見ていない、と。

そういうものかと思う。

計算できない何かだ。

いやいざ計算できるのかもしれないが、不確定要素が多すぎて、これをアルゴリズム化してCIDSなりに組み込むことはできないだろう。そうすれば行動様式がパターン化されてしまい、逆に危険だ。そういう部分からも、軍は本気で兵士の「勘」を数値化しないのかもしれない。

「嫌な雰囲気だ」

南波はチームを動かそうとしない。

目の前。

広葉樹と針葉樹がまだらに混じった森。それを抜けると、小さな集落がある。

一つ目の目標だ。

戸数、十一。

衛星からの支援でも、ここが目標地であることが分かる。緯度経度すべて正しい。

「灯り、点ってるじゃない」

蓮見だ。増幅補正された声も、どこか甘えたような声音になっていた。私は瞬きする時間より短く、苦笑した。

「だから余計怪しくないか。戦闘中だぞ、いまは」

「考えすぎなんじゃないか。ここは、国境から五十キロも入ってるんだ」

桐生の声だ。低く、落ち着いている。話すスピードはリアルなものだから、落ち着いていると私を感じたその感覚は間違っていないはずだ。

「空軍が核攻撃したのは、国境から百五十キロも入った山の中の鉾山都市だぞ」

と、南波。

「こことは別さ。このあたりに軍事目標は何もない」

「目の前のが軍事目標だがな」

「そうだな。上が目標だと言えば目標だ」

「棘のある云い方だ」

「そう感じたか」

「ああ」

「そのつもりで言ったんだ」

「おいおい、桐生。ハスミ病か」

「なによ、ハスミ病って」

「任務に疑問を感じるのか」  
ミッション

南波。

「感じない」

蓮見。

「俺も、疑問など感じない」

「任務だからここに来た、なんていう奴はいないだろうな」

「いるわけない」

蓮見。

「よし」

「で、」

私。

「嫌な雰囲気ってどういうことだ」

言つと、南波は全身を、水に潜るように笹の茂みに沈めた。私も

倣う。

「本当にここに敵のパイロットたちがいるのか」

「商法に疑問が？」

「ない」

「なら、」

「ただ、感じるんだ」

「雰囲気？」

「そうだ。……あんたもシカ撃つたりしてたんだっいたら分かるだろうよ。この雰囲気だよ」

「私は何も感じない」

「錆び付いたか」

「麻痺かもね」

「勘弁してくれ」

「二人とも、何話してるんだ」

蓮見。

「聞いてのとおりだ。蓮見、異常、なしか？」

「なんにもないよ」

「桐生、」

「オールクリア、つてとこだな」

「姉さん」

「クリア」

「行くか？」

「あんたがリーダーだ。南波少尉」

「了解、入地准尉」

そう言いながらも、南波はまだ茂みに沈んだままだった。

「どうした」

私が訊く。

「様子を見る」

「この期におよんで、」

「作戦決行時間まではまだある。早着したからな」

「いやなカウントダウンだ」

「死刑執行つて？ 嫌なことを言うな」

「そのために来たんだろう？」

「ハスミ病が伝染ったな」

「なんだよ、その『ハスミ病』つて」

蓮見の声。

「静かすぎないか。虫の声も聞こえねえ」

蓮見の不満げな声を無視して、南波。

「季節考えろよ」

私。

「北洋州育ちらしくない返事だ。それも気に入らない」

「なんだ、絡むなよ」

「とりあえず、ホールド。プラス10 minutes」

「そんなに？」

蓮見。

「蓮見准尉。異論は認めない。分かったな？」

「了解、南波少尉。……でもなんで」

南波の頭がこちらを向いた。実際、衛星が監視しているので、短時間視線をはずしたところで危険度はさほど下がらない。誰かの目が視界に捉えていけばいい。

煙突から細く煙をたなびかせ、暖かい色の灯りが点り、なんの変哲もない村にしか見えない目の前の目標。

「合流部隊を待つんだ」

「合流部隊？」

私が問い返す。声にならないように注意したつもりだが、声になつたかもしれない。

「私たちだけの作戦じゃないのか」

「四人で？ 姉さん、それはないぜ」

「合流部隊つて、同じハケンの？」

桐生が訊ねる。

「違う」

「じゃあ、」

「第72標準化群だ」

「ナナニー？ バカな」

桐生が鋭く言う。こんな感情の機微も、すっかりCIDSは再現してくれる。たいした機械だ。もともとは民生技術だったと聞く。

「本当に？」

蓮見。

「本当だ。村の反対側に、もう到達しているはずだ」

「挟撃？」

「すこしオフセットして配置しているはずだ。さすがに向こう正面だと、友軍狙撃されてしまう」

「そんなことより、」

蓮見が姿勢を変えたらしい。茂みがかさつく音がした。

「蓮見、目立つ」

「ごめん……そんなことより、本当にナナニーが？」

「本当だ。2斑来てるはずだ」

第72標準化群。海軍の部隊だ。海軍の特殊部隊。ルートは、巡洋艦に乗り組み、敵艦の臨検や、港湾の警備、寄港地での警衛、そうした任務を請け負う部隊だ。内地から外地まで、くまなく海軍艦艇に乗り組み、正確無比な射撃と機動力を誇っている……らしい。

海軍と陸軍では、部隊の移動で艦艇の融通が行われているもの、そもそも用兵からして異なっているため、陸戦部隊同士の交流はほとんどない。それは空軍部隊にしても同じだ。空軍も高射部隊があり、基地防空隊がいる。リーダーサイトの警備や防御も当然自前だが、滅多に陸軍部隊と交流しない。空軍の輸送機にはさんざん乗っておきながら、空軍の陸戦部隊とは話をしたことがほとんどなかった。第72標準化群はそうした中にある、海軍随一の精鋭部隊、らしい。

「なんで海軍さんが」

桐生が呟く。

「ここで議論したいか」

南波。

「そうは言っていない」

「すると、」

私。

「ここを更地にするときは、」

「そうだ。プリブリ（プリブリーフィング）で知らされたとおりだ。艦砲射撃でボコボコにされる。地形が変わるぞ。89式戦の、なんだっけ、あの爆弾」

「癩癩娘」

蓮見が答える。こういうのは素早い。

「炸薬の量が違うからな。戦艦の艦砲射撃なんて、なかなか見られないぞ」

「戦艦が沖合まで来てるって？」

「そういうことだな」

「航空優勢は、」

「取れてなきや来ないだろうな」

「だったら空軍でいいはずなのに」

蓮見が言う。理由は分かる。帝国空軍はもとも陸軍航空隊から分化しているからだ。敬礼の仕方から銃の撃ち方、シーツのたたみ方から休日の過ごし方まで、陸軍と空軍は似通った匂いがある。漂う空気に銃弾の炸薬の匂いを感じるか、航空燃料のツンと来る匂いを感じるかの違いだ。海軍は明らかに空気が違う。炸薬の匂いを感じれば、それは四〇センチ以上もある戦艦の主砲弾の炸薬であり、燃料の匂いは重油の匂いだ……さずかに現用艦艇のエンジンはガスタービンに切り替わってはいるが。

「海軍さんが今回の作戦は出張ってきてるのさ。終わったらカレー、食わせてもらうしかないな」

「帰り便は海軍さんが手配してるのか」

桐生が聞く。

「気になるか？ 帰りのことが？」

「一応は聞いておきたい」

「ナナニ」と合流して、この村をぶっ潰し、次の拠点まで一緒に移動して、帰りはお船に乗って帰るのさ」

「船？」

蓮見が聞き返した。

「船だ。北洋艦隊の旗艦が出張ってきてるぞ」

「旗艦に乗せてもらえるの？」

「そんなわけはない。いや、分からん。そこまでは俺も知らない」

「蓮見、船が好きなのか」

私が訊いてみる。

「私は、内陸育ちだから」

「どこだった？」

「出水音しすみね」

「山奥じゃないか」

南波。

「失礼だな。姉さんの袖辺尾よりずっと都会だ。城下町だし」

「城下町だったか」

思い出してみる。列島中央部に楯のように連なる山脈と山脈の間の盆地……その中心都市。すまない、蓮見。私には十分な情報がない。街のイメージが湧かなかつた。

「海は遠いな、確かに」

南波が答えた。

「だから船に乗りたいのか」

桐生。銃を構えたままだ。四キロ以上ある4726を構えたまま保持し、ぴくりともしない。おそらく筋肉量では南波の比ではないだろう。白兵戦になったら頼りになるのは桐生かもしれない。

「乗れるなら」

「俺はカレーを食わせてもらおう。それでチャラだ」

南波はもう前を向いて、4726を照準していた。もう約束の十分を迎えようとしている。

「何か合図はいるのか」

南波に問うてみる。挟撃するのなら、同時に発砲すると効果的なのは自明だからだ。

「衛星から信号が来る。それだけだ」

「衛星はどここの管轄だ？」

桐生は構えた銃を森の中に向けていた。森は真つ暗だ。CIDSが光学補正をかけているが、ひどく暗い。獣の気配がする。

けれど、確かに虫の声はしない。

初夏。

気の早い虫たちはどこへ行ったのか。

鳥の声も気配もない。

私は、故郷の森を思い出してみた。

祖父と、ユーリと歩いた森。

祖父は日が暮れてからは森に入ろうともしなかったし、日が暮れかけたらすぐに森から出た。

（光のない場所では、私たちの出番はないんだよ）

そんなことを言っていた気がする。

人の目は弱い。

暗闇。

本当の暗闇に包まれた森の怖さを、そういえばこのチームの面々は知っているのかとふと考える。

南波は、知らなくても大丈夫だろう。彼はどんな場所でも生きていける。野生動物の匂いがする。それが南波だ。

桐生は。

彼は暗闇の中で動かないだろう。それも正しい。むやみに動いては、自分の匂いを獣たちにまき散らしているのと同じだ。光があるうちには銃を携えて狩る側にいたはずなのに、日が暮れると、私たちは狩られる側になる。銃は、照準できなければただのおもりだ。



それはここでも同じ。もしCIDSにトラブルを来たし、光学補正ができなくなったら、その時点で作戦の九九%は失敗したといつていい。エコーロケーション機能が生きていたとしても、それは退路を確保するために使う。攻撃には使えない。

「衛星からはまもなく合図が来る。……READY?」

全員、無言。

衛星は、……我が帝国に宇宙軍は存在しない。衛星は空軍の管轄のはずだ。管轄しているだけで予算は別会計らしいが。それはそうだ。ロケット一発打ち上げるのに、89式支援戦闘機一機分のお値段がすつ飛んでいくのだ。ロケット先端のフェアリング内部に搭載する衛星本体の値段は、

「来た」

南波がより姿勢を低くした。

私は左側に注視しながら、視界の端に暖色の灯りを捉えている。

煙突から煙り。

本当にここに、一個飛行隊分のパイロットがいるのか？

確かにそうだ。嫌な雰囲気だ。

「南波、」

「入地、なんだ」

「嫌な雰囲気だ」

「だからそう言っている」

全員の4726自動小銃は、ロック・アンド・ロード。薬室に第一弾はすでに装填されている。用心金の外トリガーガードに伸ばして添えている全員の人差し指に、そつと指令が行き渡る。

READY?

煙。

灯り。

誰も出てこない集落。

建物の中に、人の気配はあるか？

気配？

気配を感じるか？  
気配とはなんだ？

4726自動小銃のアップフレームに穿たれたレール。そこに取り付けた東洋光学機工製EF-300F56L光学照準器をのぞき込む。このとき、首や頭を傾けてはいけない。銃に対してまっすぐ平行に、自然に覗き込まなければ。新兵ルキキが自動小銃に載せた光学照準器を覗くとき、たいていは顔が傾いている。それは上半身の構えが完成されていないからだ。頬付けやショルダーストックの保持位置が正しくないと、顔が傾き、正しい照準が取れない。

覗く。

アイリリーフが短いが、非常に明るいレンズ。レンズ位置はCIDS装着に合わせて少々奥気味。なので、裸眼で覗くと少々遠い。

灯り。

窓。

井戸……ポンプが見える。

家と家の間隔は、この地域や北洋州の古い一般的な集落のそれと同じだ。不審な点は何一つない。

何一つ。

「READY」

南波の声。

CIDSと光学照準器はリンクしている。戦闘機のHUDやHMシステムと同じように、目標を指示するとTDボックスが表示される。

「いきなりか？」

私。

「いきなりだ」

南波。

「ナナニは？」

蓮見。

「11時。八名」

南波。

「チエック」

桐生。

「撃つなよ、連中を」

南波。

「誰が」

蓮見。

「カウント、」

南波。

「嫌な感じだ」

私。

「もついい。行くしかない」

南波。

私は分かる。南波の勘、皮膚感覚のようなもの。

私は祖父に銃での狩りだけを教わった。

7.62ミリ……三〇口径ライフルの撃ち方と、シカの探し方、

シカの生き方、歩き方、その他その他。

けれど、狩りの方法はひとつだけではないのだ。

祖父は銃の扱いに長けていた。銃を持たせれば、きっと今でも私は祖父に敵わない。敵うとすれば、クマと対峙するときの人のように、足りない機能を山ほど補い、むりやり対等な立場になるべく、光学照準器に衛星の支援、C.I.D.Sという野生の勘そのものを盛り込んだ機材を使っただ。そうすれば、あるいは祖父よりも早くシカを見つけれられるかもしれない。クマを見つけれられるかもしれない。

祖父の横顔。

銃を使わない狩りの方法。

嫌な雰囲気だと獲物に思わせたら、こちらの負けなのだ。

嫌な雰囲気だと感じさせず、普段と何も変わらない山野を演出する。

そこに、彼らの油断が入り込む。

たなびく煙。

木造の家屋。

井戸のポンプ。

暖色の灯り。

では、この灯りはどこから供給されているのだ？

集落には……発電施設はあるのか？

電線も電柱も見あたらなかった。

風力発電のブレードも、太陽光発電のパネルも、ソージェネレー  
ションの装置も。

嫌な雰囲気の原因。

考え出すときりがない。

「南波、」

「入地准尉、もうダメだ、行くぞ」

「これは、」

もしかして。

私は言うべきだった。

この雰囲気は、猫に慣れない素人が仕掛けた、あれに似ているの  
だ。

南波、これって。

畏じゃないのか？

私は茂みに潜みながら、こんなことを思い出していた。

軌道ステーションとの交信。

中等科の一年生だった頃、特別授業で、軌道ステーションに滞在している宇宙飛行士と交信するイベントがあった。十三歳の私にとって、宇宙がどのようなポジションに位置する世界だったのかという、あのときの飛行士には申し訳ない気持ちになるが、あまり興味のある世界ではなかった。私はもうその頃祖父と一緒に山を歩くようになっていた。ユー……ユーリと三人で。祖父は古びた村中式ライフルを、すっかり年季が入って柔らかくなつた革製の負い紐で肩から提げ、白く息を吐きながら、風下から歩いた。禁猟が明けたシカを狙うとき、初日の山行きに、祖父は私を誘うようになっていた。だから、私にとって身近だったのは山野であり、赤い鉄橋が二キロ近くも続く対雁川であり、夕暮れ、ユーリの運転するマツシマ自動車製RS180の後部座席に斜めに座り、道路と並び、やや離れて渡河するくすんだ緑色のトラス鉄橋を、もうもうと煙を吐き出す蒸気機関車が牽引する石炭列車を眺める、あの風景だった。

何か、メッセージはありませんか？

教師ではなかった。

イベントだったから、液晶ディスプレイにノイズ混じりで映し出された細面の宇宙飛行士のはにかんだような笑顔に向かつて、気の利いた質問でもせよと、宇宙機関の人間か、イベント会社の人間かはたまたま新聞記者かテレビ局のディレクターか、制服姿の私たちに引きつったような笑顔を向けながら、そう促すのだ。

メッセージ？

教師達はイベントの数週間も前から落ち着きがなかった。自身も宇宙飛行士を目指していたんだと、イベントを前にして初めて告白した理科担当の教師は、ぶ厚いレンズのメガネをかけており、とう

てい宇宙飛行士の適性などはなさそう、だから私は、私たちは、彼のコメントもまた、イベント用に用意していた台詞だったのだらうと思うことにした。

人口百万人を越す大都市とはいえ、北洋州の州都たる柚辺尾市はしかし、帝都から二〇〇〇キロ近くを隔たっており、明らかに辺境の土地であり、「開拓」という言葉がまだここでは死語にならず、憧れと郷愁を持って語られていた。住民たちは素朴だったが、思慮に欠け、唐突に実施が決まった国家的英雄との交流に、平静を装えた人材はごくわずかだったに違いないのだ。

宇宙では夢を見ますか？

級友がこんな質問をした。

今にして思えば、危険な質問だった。宇宙飛行士は空軍や海軍のパイロット出身者が非常に多く、それはエリートと同義であり、そしてすでにその時代から、国家的エリート集団に、アフセニック・カルチャー純粹培養系組は確実に存在していたはずなのだ。実際、私たちが通信交流をした宇宙飛行士もまた、空軍で81式要撃戦闘機に乗っていたエリートだった。軍隊出身者は危機管理能力が高く、厳しい訓練にも耐えられ、しかもパイロットたちは頭の回転が速く、何かに盲進するような一転集中型がない。宇宙飛行士の適性は十分だ。だから、軌道ステーションのクルーの大半は、そうした空軍や海軍のエリートたちであふれている。そしておそらく彼女ら、彼らは夢を見ないのだ。

当時読んだ本に、白夜や極夜の元で眠ると、極彩色の夢を見るというフレーズがあった。私たちの住む北洋州は、宇宙へ行くよりもその極彩色の夢を見られるという北極圏のほうが近かった。行こうと思えば、国際航路の貨客船に乗れば、夏休みや冬休みの「冒険」として行っていくことができた……北方戦役がここまで膠着状態に陥らなければの話だが。

宇宙では夢を見ますか？

極地で見える夢。極彩色の夢。オーロラに彩られた、儂くも切ない夢。私は漠然と、氷と雪に閉ざされ、一日中太陽が昇らない極地の

ベースキャンプで、ぶ厚いシュラフにくるまって見る夢のことを思っていた。傍らにはボルトアクシオン式のライフルが、しっかりと銃口をカバーして置いてある。テントの中に入れておいては銃が結露してしまふから、外に置く。白灯油を使ったランタンはやたらとやかましい音がするから、祖父たちは昔ながらのランプや、先住民たちは動物性油脂から精製した油で夜を過ごす。そこで見る夢。

極彩色の夢。

では、宇宙で夢を見るとしたら、どんな夢を見るのだろうか。

私はすまし顔でディスプレイに向かう級友の横で、宇宙飛行士などどうでもよくなり、軌道上で見られるかもしれない夢のことを考えていた。なぜかそのことをはつきりと覚えている。宇宙飛行士がなんと答えたのか、まったく覚えていないにもかかわらず。

「准尉、」

茂みの中で、私の意識は、二〇〇キロ上空の地球周回軌道に飛んでいた。もちろん、地上で索敵中の私の感覚器機はちゃんと生きている。聴覚もオープン状態。だから私を呼ぶ南波の声はちゃんと聞こえている。

「なんだ」

「行くぞ、」

「南波、ちよつと待って……少尉、おかしいって」

腰を浮かせた状態の南波に向かって、私は呼びかける。

私の脳内に開いていたサブ窓が閉じる。

宇宙飛行士との対話。

中等科一年の秋。

蒸気機関車の煙。

長大な石炭列車の編成。

鉄橋。

ライフル。

霧散。

「本当にここで間違いないんだな」

「入地准尉、」

「なんだ」

「間違いない。プリブリでも指示されてる。緯度経度とも秒まで正しい。ここだ。一個飛行隊規模のパイロットが休息している村だ」

「人影がない」

「時間を考えてみる。まだみんな寝てるんだよ」

「本当？」

「今何時だと思ってる？」

「煙が出てる」

「寒いからな。暖房だろう」

「灯りが点ってる」

「寂しがり屋がいるのさ。さすがにどの棟が宿舎かという情報まではない。……掃射する予定だからな、どれでもかまわない」

「姉さん、気になるのか？」

後から蓮見が囁く。

「蓮見、おかしいと思わないか」

「何がだ？」

「この村、おかしくないか？」

「私には、よくわからないけれど」

「入地准尉……姉さん、」

南波がこちらを向く。CIDS越しに彼の目が見えたような気がした。見えるはずはないのだが。

「何か感じるのか？ 奇妙なことでもあったか？」

「上手く言えないが、……下手な猟師が仕掛けた罠みたいだ」

「罠？」

オウム返しは桐生だ。

「ここが？」

「上手く言えないけど、気配が変だ」

「気配がするか？」

桐生。



「しないのがおかしくないか？」

「けど、ここで間違いない。……煙突から煙も出てる。……熱源反応もある」

南波が言う。C I D Sのモニターを切り替えているのだ。規模的には簡易なものだが、温度センサーも内蔵しているから、ヘビのよくな狩りもできるのがこの機械だ。スーパーサーチモードにすれば、衛星か、近傍上空を飛行中の早期警戒管制機や観測機のデータともリンクできる。強力なセンサー情報で、建物の中の熱源反応もチェックできるのだ。南波はまだスーパーサーチに切り替えてはいないようだが（近接戦闘を考えると、スーパーサーチでは高感度すぎる）、確かに並ぶ家や小屋の中からは、複数の熱源反応があった。

「入地准尉、過敏すぎるぜ。R E A D Y？」

私たちはC I D SのコマンドモードをS T A N D B YからR E A D Yに切り替える。戦闘機のマスターアームスイッチのようなものだ。戦闘情報が個々人の判断を待たずにサブ窓へ表示されたり、衛星や観測機からのデータを参照すると、目標をT Dボックスが自動追尾する。

サブ窓が開く。温度センサー画像だ。煙突の排気口が赤い。建物内で火が焚かれている。

「いいか、最初に行くのは海軍さんだ。俺たちは外周から攻める……切り込み隊長は、72S（第72標準化群）でことだ。奴らの撃ち方に続けばいい……姉さん、わかつたな」

「わかつた……」

カウントダウン、マイナス1minute。

私はまた茂みに潜り込んだ。茂みを透過して、さらには森の木々まで透過して、私の視界に友軍を示すピンク色のT Dボックスが表示されているのは、72S……帝国海軍第72標準化群の部隊だ。八名。彼らもほぼ同機能のC I D Sを装備しているので、向こうもこちらが見えているはずだ。

サブ窓。ズームして彼らの姿をとらえる。

温度センサーにはほとんど反応しない。私たちのと同じ仕様のス  
ーツ。ホッキョクグマのように、体温を外部にまったく逃がさない。  
民生品の応用だと云うが、防寒性能よりも、赤外線を漏らさない点  
に神経が使われている。生きている証である体温……熱……赤外線  
を漏らすことは、場合によっては死に直結する。クマはヒトの数万  
倍という嗅覚を武器にするが、ヘビのように赤外線は感知しない。  
だがいまの私たちの敵は、生きる証を狙い撃ちにしてくるのだ。生  
ける屍のように、生きていることを悟られないように、生きる。

4726自動小銃を膝撃ちの姿勢で私は構える。誰も伏せ撃ちの  
姿勢では待機していない。すぐに飛び出せるように。しかも低い姿  
勢で。できるだけ走りにくい場所を選んで。敵に狙われないように  
「目標は、武装している？」  
「さあな。准尉、それは分からんよ。だが、重武装しているという  
情報はない。知ってのとおりだ。休暇村だからな」

南波の囁き。  
そして。

炸裂音。

私の耳に届く、聞き慣れた音。  
懐かしい音。

祖父が持っていたライフルと同じ口径……三〇口径弾の発射音だ。  
一発目が合図だったかのように、次々に射撃が始まる。

「オールステーション、ターゲット・インサイト」  
南波の囁き。

四倍率の光学照準器を覗き、私は右手親指でセーフティを解除す  
る。右手左手どちらからでも操作できるアンビタイプのセーフティ  
だが、レバーの長さそのものが短く、兵士たちからは不評だ。実際、  
私の小さな手……短い指では訓練しなければ素早く切替ができな  
かった。

発射音は断続的に、連続的に続く。CIDSは耳も覆っているの  
で、射撃音が鼓膜を痛めることはない。銃声や砲声、爆発音と云っ

た類の周波数を選別してフィルタリングしカットする機能があるためだ。人の声などの周波数は積極的に透過する。だから、銃声はマイルドなのに、撃たれた兵士の悲痛な叫びやうめきだけがやたらとはっきり聞こえるという悪趣味な機械になっている。

射撃が続く。

窓ガラスを粉碎し、木造の質素な建物の壁を、三〇口径弾が次々と射貫いていく。

72S部隊との音声通信は実施しない様子だ。そのかわり、私たちのCIDSには、72S部隊が現在どの目標に対して照準しているのか、リアルタイムで表示された。これだけで十分だ。南波が射撃を開始した。72S部隊が照準していない建物を狙っている。彼らからは死角になっているか、別の建物の影になっている目標。それを狙う。

私も続く。

熱源反応が動く。

小屋の中に誰かいるようだ。

当り前だ、と思う。思いながら、引き金を引く。肩に反動。残念ながら私の感覚はこれを心地よいと感じる。空薬莖が飛ぶ。セレクターはセミオートマティック。この銃はオプションパーツの二脚をハイホット装備しなければ、フルオートマティックでの射撃を制御できない。精密射撃は一点射のみであり、連射は弾幕を張るだけ。二脚なしではどれだけ訓練を積んでも、三〇口径弾の激しい反動に銃が踊ってしまい、サイティングなどできない。だから私は、しっかりと狙いを付け、一発ずつ撃つ。壁を抜き、ガラスを粉碎し、次々と撃つ。蓮見、桐生もそれぞれの方を向き、射撃している。

南波が一次射撃を中断し、茂みの中を右方へ短く走った。ポジション替えだ。ここから狙える建物はすでに射撃を終えたということだ。南波に続いて、桐生が走る。続いて、私と蓮見のエレメントが続く。短く走り、腰を落とし、膝撃ちの姿勢で銃を保持し、撃つ。

まだあたりは薄暗い。空は曇っている。記憶も低い。目標の煙突

からは煙がたなびいている。風はそれほど強くない。射撃音。友軍狙撃にならないよう、彼我の位置は常にCIDSで調整する。射撃線がお互いのチームで交差し始めると、CIDSに警告が出る。第72標準化群と55派遣隊チームD。一度として共同訓練も共同作戦も行ったことがない。しかし、CIDSのナビゲーションと戦闘情報表示、お互いのリーダーの無言の連携で、いま北方会議同盟軍の空軍パイロット休暇村だと指示された集落が、二方向から執拗な射撃を受けていた。

ボルトがホールドオープンした感触。光学照準器で目標を捉えたまま、素早く弾倉入れから予備弾倉を取り出し、同時に右手の人差し指が弾倉受けボタンを押す。空弾倉が銃から抜け落ちる前に、予備弾倉を持った左手で空弾倉を引っこ抜き、同じ動作で予備弾倉を銃に装填する。空弾倉を左手の薬指と中指で挟み込んだまま、親指でロアレシーバー左側面のボルトリリースボタンを押す。すると、重いボルトが前進する確かに感触が頬に伝わり、予備弾倉から三〇口径弾が一発押し出され、4726自動小銃のタイトな薬室にきっちり送り込まれるのが分かった。小気味いい音。ボルトアクションのライフルでも、薬室に弾薬を装填するときの動作が私は好きだ。気持ちのいい音がする。精度の高い工業製品を扱っている実感が湧く。

射撃再開。弾倉交換に要する時間は十秒かからない。それ以上かかると思いの外は前だと、訓練校でさんざん叩かれた。ボルトリリースボタンの操作を省くため、射撃弾数をしつかりカウントし、薬室に最終弾を残した状態か、あるいは弾倉に弾を残した状態で新しい弾倉に交換する動作も何度も訓練した。が、秒数にすれば大差はなく、どちらかと云えば、人質救出や屋内施設の制圧といった、より機敏かつ一秒を争う作戦で使われる技術だ。いまはやや性格が違う。

いま私たちが行っているのは、一方的な虐殺だ。虐殺というのは語弊があるかもしれない。

戦闘情報では、目標の建物内にいるのは全員がパイロットとその関係者ということになっている。黙っていれば、戦闘機や攻撃機を飛ばし、私たちの友軍や、あるいは私たち……私めがけて爆弾を投下してくるかもしれない連中だ。ミサイルリリースや爆弾投下のスイッチを押すのは、コンピュータでも戦闘機そのものでもない。パイロットとその意思だ。むしろパイロットは自己の判断以上に優位にある上官の命令を携えて指を動かすのだが、戦闘機や攻撃機、爆撃機を飛ばすのはパイロットが培った技術であり肉体である。パイロットの存在なしに航空機は飛べない。だから、パイロットを無力化するのには、長期的に見て、航空機を複数無力化することに等しい。それが今回の作戦の主旨だという。

シカを追って山野を巡る方がよほど気持ちがいい。

私も祖父と同じで、標的射撃が好きではなかった。

撃つだけが目的ではないのだ。

目標を追い、感じ、目を合わせ、お互いの命を見せ合い、引き金を引き、殺す。命を奪う。戴く。あの感覚が私は好きだったのだ。

反撃もない集落に、一方的な射撃をくわえるような今回の作戦は、蓮見ではないが私の本意ではなかった。

「南波、」

呼びかけてみる。

「入地准尉？」

「次、」

「三時、二棟」

「了解」

どの建物も、窓には明りが見えた。白いカーテンが掛けられている。簡素なもの。私たちの宿舎で使っているようなもの。日が落ちたあと、部屋に灯りをともし、窓辺に立てば、外からはつきりと人影が見えてしまうような、質素なカーテン。

撃つ。

窓ガラスが砕け散る。

二発目。

カーテンに穴が空く。

明りが消える。

撃つ。

気の窓枠が折れる。

窓が落ちる。

カーテンが揺れる。

撃つ。

撃つ。

この地方ではありふれた、質素で粗末な家。

木造の。

窓辺に野花を飾っている棟まである。

本当にここはパイロットの休暇村なんだろうな？

南波と縫高町作戦のあと国道を彷徨い、小谷野中尉の戦車部隊に出会う前、サケの燻製やトマトを戴いたあの家々と、目の前の集落はなんの変わりもないように見えるのだ。

もし、パイロットの休暇村ではなかったら。

眠っているのが敵のパイロットではなく、朝がいつもどおり来ることを疑わずに床についた、無事の住民たちであったなら。

おやすみの声とともに両親と別れ、自室で夢の世界に旅だった子どもたち。

その子どもを見守る暖かい視線の母親、不器用な父親。

あるいは翌日、子どもたちと海岸線まで魚介を探しに行こうと考えている祖父母たち。

光学照準器の向こう。

もしそんな世界が広がっていたのなら。

任務だから。

これは仕事だから。

私はそんな低次元な意思でこの部隊に参加しているのではない。積極的に敵を排除するためにここにいる。

そのためには、非武装のパイロットを、就寝中に、休養中に射殺することも厭わない。

だが、この村が、敵のパイロットたちとなんの関係もない存在だったなら。

私はちよつと後悔するだろう。

高泊の駐屯地に帰ってから、もしかしたら何種類かの薬物を投与してもらうかもしれない。すべての罪悪感を不謹慎にもきれいさっぱり流し去ってくれる便利な薬だ。それにダメ押しするようにして、医師によるカウンセリングを受ける。カウンセリングとは名ばかりの、やはり罪悪感を消し去る洗脳行為だ。

私はそんなことを考えながらも、引き金を引く指に躊躇を与えず、三本目の予備弾倉を小銃に装填していた。

三〇口径弾の威力は想像よりずっと大きい。狙撃用ならばさらに威力の大きな三三八口径ライフルもあるが、三〇口径でも十分すぎるほどの破壊力がある。

木造建築の壁くらいなら抜いてしまふ。そして、壁の向こうの間程度なら、射殺できる。

弾薬に躊躇はない。感情もなければ、苦悩もない。

苦悩するのは撃つ私だ。あるいは蓮見であり、……桐生と南波は良心の呵責という言葉が彼らの中に存在しないだろうから、躊躇も苦悩もないだろうが。

撃つ。

撃ちながら、私は耳を澄ませていた。

反応がないのだ。

ほとんど一方的とも言える射撃。

反撃がないのだ。

いくら壁を容易に抜ける三〇口径弾とはいえ、建物を四方から同時に攻撃しているわけではない。私たちの初弾がそのままパイロットたちの息の根を止めているはずもない。休暇村とはいえ、戦闘地域にあって、軍隊の構成員が、まったく小銃一挺すら持っていない

というのは解せない。そんなはずはない。

悲鳴もない。

第72標準化群……72Sの彼らや私たちの射撃能力が、一般部隊の小銃小隊のそれと比べて高精度だとして、一発一発すべてがヘッドショットをしているはずがない。そもそも私は撃ちながら、一発たりとも手応えを感じていなかった。

撃つ対象がシカだろうがクマだろうが人間だろうが、仕留める瞬間は分かるのだ。いや、明らかに命中する、絶命させられるという一撃を放ったとき、それは感覚として分かるものなのだ。これは南波も桐生も、蓮見ですら異論はないだろう。実戦経験があれば必ず理解できる感覚だ。実戦経験がなくても、小石を池に放つてもいい。明らかに狙った場所へ飛ぶかどうか、投げた瞬間に分かる。それと同じだ。

確かに窓ガラスには当たっている。カーテンを貫通している。しかし、その後がない。

明りは消えていく。

だが、煙突から煙は出たままだ。

私はCIDSの機能を温度センサーに切り替える。

そもそも、行動開始直前から、熱源反応は見られたが、はつきりと人間の形を捉えていたかというところではないのだ。屋内に複数  
の熱源反応があり、それは「おそらく人間」だと断定しての行動だった。それはそうだ、家の中の熱源反応はたいていが人間だ。だが、それが擬態だったら？

「撃ち方止め」

南波の声。CIDSの戦闘情報にも表示が出た。

72Sと私たち。同時に射撃が中断される。

温度センサーモードのままのメイン窓。

着弾点が転々と赤い。

あたりに散らばっている赤い反応は、空薬莖だろう。

射撃をやめると、発砲音がしばらく遠ざかっていくのが分かる。



そして一気に静かになる。

「オールステーション、」

南波だ。

「72Sが各戸の探索に入る」

「了解」

私。あとの二人はジッパーコマンドが返ってきた。

「続く？」

私から南波へ。

「こちらも行く……離れるなよ」

チームD四人はこういう場合不可分であり、先頭南波、二番手桐生、三番手が私で後方警戒を蓮見のポジションで、建物に迫る。

「南波、」

「なんだ」

「おかしい、絶対」

「なにがだ、入地准尉」

「手応え、あつたか？」

「なかったな」

「目標の姿を見たか？」

「見なかったな」

「蓮見？」

「見ていない」

「桐生も？」

「同じだ」

「変だぞ、この集落は」

全員、小銃はローレディ。人差し指は用心金の外に伸ばしているが、いつでも撃てる体勢だ。銃口は全員が違う方向。一棟目に近づく。私は温度センサー表示をサブ窓に変更し、近づく。壁やカーテンが燻っている。弾着のあとだ。

「行くぞ、」

ドアの前に立ち止まり、南波がやや腰を落とす。ドアを開けるの

は桐生で、突入役が南波、二番手に私が続き、ドア向かって右側の警戒を桐生、左側を蓮見が担当。ドアブリーチングから建物への突入は、任務の性質上、私たちのチームはあまりやらない。もちろんこれが専門のチームもいるが。

「クリア」

飛び込んだ南波の声。南波の背中に銃口を絶対にクロスさせないよう、私は照準をする。こういう屋内戦闘では、4726自動小銃は重く大きく、そして銃身が長すぎる。取り回しは不便だ。フォアグリップが欲しい、と思う。

「クリア」

私も宣言。

「誰もいないぞ」

南波。

室内に灯りはなく、光量補正はCIDSに頼っている。足許で割れたガラスがバリバリと鳴った。

「蓮見」

南波が呼ぶ。

「なに」

「お前、いちばんちっこいから、こつち来い」

この建物にはもはや脅威がないと判断しての声音。南波が蓮見を呼ぶ。桐生がドアの前で警戒。

小銃をローレディにしたまま、蓮見が駆け込んでくる。

「クリア」

「クリアなんだ、分かってるんだ」

南波。銃を降ろしている。

「なんで、」

蓮見も銃を降ろす。

射殺されたパイロットが転がっていると思っていたのに。

私は内息をついていた。名もなき簡素で幸せな家族を全滅させたのではなくて、正直ほつとしていた。なぜ？ 感情移入能力だけ

は、55派遣隊の「精神的訓練」でも弱めることはできなかったから。私はこれとの闘いを、入隊以来続けていることになる。

「クリア……なんもないな」

建物を出る。出るときは銃を構えて。お互いの肩に触れながら、自分の位置を主張する。友軍狙撃はこうした近接戦闘でこそ注意が必要だ。

南波は早足で、しかも足音を殺す独特の歩調で、隣接する農家の母屋風の建物に向かう。

「いいか？」

南波の確認に全員が返答。

先ほどと同じ順序で突入。

「クリア」

南波の声。

「クリア」

居間。弾痕の残るソファ。砕けたテレビ。私のコール。

「クリア……全員、来い。おかしい」

南波はダイニングキッチンにいた。

私は銃口を部屋の外側へ向けながら、後ずさるようにして南波に接近する。

「誰もいないぞ」

私。足許に割れたグラス。転がった食器。

「わかつてる」

南波はまた銃を降ろしている。食卓の上に、食器が散らばっている。

食器。

グラス。

マグカップ。

パン。

パン？

「朝飯には早い」

南波がパンを取り上げ、まじまじと見つめて、不意に私に放る。左手でつかむ。銃がぶれる。

「なんだ、これ」

つかんだパン。

柔らかさもなく、香りもない。乾燥しているわけでもない。……

原材料は、いったい何だ？

「サンプル？」

「バカにしゃがって」

南波は銃床で私が放り返したパン……プラスチックか何かでできたパンの形をした物体……を乱暴に潰した。パンの形をしたそれは変形したが潰れることはなく、バランスを崩した南波の4726の銃床が、並んでいたプレート類を粉碎した。派手な音がして、リビングから蓮見が、客間らしき部屋を探索していた桐生が駆け寄る。

「何？」

蓮見。

「モデルルームかよ、」

南波が苛立った声を隠そうとしない。

不思議そうな顔をしている蓮見に、私は潰れかけたパンの模型を放る。

「なによ……これ」

「誰かいたか」

「誰もいない」

桐生。

「二階も？」

「誰もいない。熱源も反応しない」

「そんなバカな」

「反応はあったよな」

桐生が蓮見を向く。

「あった」

「俺もだ。確認してる」

南波。

そうだ。行動開始前、各戸の屋内に、ゆつくりと動く熱源は確かにあったし、煙突から煙はたなびき、各戸の窓からは明りが漏れていた。

「行こう、」

南波が食卓イスを蹴り飛ばし、建物を出る。

外はかなりの明るさになっていたが、相変わらずぶ厚く雲が垂れ込めていた。朝と呼べる時間帯になっていた。

建物の外に出ると、離れた場所の72Sが目についた。

南波が手を挙げる。

72Sの先頭の隊員がこちらに手を振る。ダメだな、そんな表情と、その瞬間、手をこちらに振った72S隊員の身体が揺れた。

「伏せろ、敵襲！」

南波の反応は早かった。南波の言葉に反応するより早く、私も桐生も蓮見も、その場に伏せた。

72Sの隊員はその場に崩れ落ちていた。向こうの反応も早い。

他の隊員はすでに遮蔽物を利用したか、建物の中に逃げ込んだか、姿は見えなかった。

「まずい、ここは丸見えじゃないか」

南波が呟くのが聞こえる。

農家の母屋風の建物。

遮蔽物が何も無い。

茂み。

花壇。

広葉樹が数本。

広場風になった前庭から向こうの森まで、途中何も無い。

「スパーサーチ」

南波。衛星リンクに接続したCIDSはしかし、なんの脅威も表示してくれなかった。

「オールステーション、」

「なんだ」

「建物に逃げ込む。いいな」

「駆け込めってわけじゃないだろうね」

私。

「バカも休み休みいうもんだぜ。死にたきややってくれ。俺は許可しない。匍つていけ」

言われなくてもわかっている。

狙撃された。

おそらく、この集落そのものが畏だ。

誰を狙って？

私たちが。

陸軍第55派遣隊。

海軍第72標準化群。

ここへ来ることになった友軍の部隊。

いくら射撃をしても、パイロットたちはいなかったのだ。

おそらく最初から。

「熱源反応はなんだったんだよ」

蓮見。ゆつくりと匍匐している。彼女がいちばん建物に近い。

「カーテン、あとで調べて見るさ」

南波。

「ディスプレイ？」

私。

「なんのことだ？」

桐生。

「カーテンの形したディスプレイなんて、作ろうと思えばいくらでも作れるだろう」

南波。そうなのだ。ペラペラで柔軟性のある電子ディスプレイなど珍しくもない。私たちの携帯端末のディスプレイも実は薄さ一ミリ以下のフィルム状であり、直下のスペースにぎっしりと電子デバイスが埋め込まれている。だから機能の割に薄く、ディスプレイは

物理的に割れたりすることがないのだ。フィルムだから割れるわけがない。

「二セの熱源情報でも表示していたのだろうよ、あの距離では見抜けない」

「疑いもしなかったからな」

私。

「俺を責めてるつもりか」

「リコメンドした」

「あんなもの、リこめんどのうちに入らないよ、姉さん」

私たちのタクティカルベスト、スーツは、建物前の植生に合わせて、淡い緑色に変色をしている。が、短く刈られた……というより、芽吹いたばかりの草原で、人間の凹凸は目立ちすぎる。いつ撃たれてもおかしくない状況になってしまった。

「入地准尉、」

「南波、」

「なんか見えるか」

「私の目には何も」

「俺もだ」

蓮見が玄関に転がるように飛び込んだ。途端に、ドアに穴が空く。おいおいおいおい

南波がぶつぶつ言っている。続いて桐生がダッシュ。壁がはじけた。

「ドアは見えてるんだな」

「私たちが見えていない？」

「その、」

南波が指をさす。小さな花壇と、アジサイらしき植え込みがある。

「あれが死角になってるんだ、たぶん」

「嫌な感じだ」

「撃つなよ」

「弾の無駄」

「そのとおりだな」

南波が玄関に駆け込む。段差部分の階段がはじける。

「入地准尉、逃げ」

南波が呼ぶ。

「逃げといわれても、」

私の肘の先で地面がはじけた。捕捉されている。地面が柔らかくて助かる。跳弾でやられる危険性は低い。その前に直撃されないことを、もはや祈るしかなかった。

「早く、」

蓮見の声だ。玄関まで、四メートル。おそらく、このあたりからアジサイの茂みの死角に入る。もっとも、スナイパーが移動していれば話は変わるが。

「早く！」

南波だ。

私は重心位置を鼻先あたりに置くつもりで、いきり駆けた。左足のつま先で何か爆ぜる。続いて右足の脛の直前を何か通過した。銃弾だ。分かってる。

玄関。

一段、二段、三段。

飛び越えるようにして、頭から屋内に転げ込んだ。背中がバックパックが痛い。

「セーフだ」

私を抱きかかえるようにして、南波が言う。

「ありがとう」

「ここはちっとも安全じゃないぞ。壁は抜かれる」

「私たちがやったみたいに？」

「そういうことだ」

「脱出だね」

蓮見。銃を構えている。だが、何を狙っているのか分からない。全員、姿勢を低くした。床に匍うように。呼吸を整える。いくら



スーツが赤外線を封じ込めても、吐息に熱が混ざれば台無しだ。敵も衛星リンクを使用した場合、私たちの位置など丸見えになる。いや……、私は恐ろしい事実には思い至る。

「南波少尉……」

「俺もいま思ってたんだ」

「なによ」

蓮見が銃を構えたまま、訊く。

「俺たちは、罠の中にいるんだ」

南波の声が低い。はっきり発声している声だ。

「どういうこと？」

蓮見。

「この家さ」

「この家がどうしたのよ」

「これがモデルハウスならだ、」

「なによ」

「センサーたくさんあって、そういう設計だったらどうするよ」

蓮見が絶句した。銃を構えたまま。

「建物そのものが、罠だって？」

「外にいるよりはましだろうが」

「でも、」

蓮見の声が微かに震えた。肉声だ。

「場所は丸わかりだな」

桐生。

「こういうとき、俺たちの立場ならどうするよ？ 蓮見」

南波は囁く。この建物そのものが罠……センサー類を奢った、居住にはまったく適さない、探知機そのもののような仕様だとしたら。

「家ごと……」

「正解、だろうな」

「早く……」

蓮見が言うが早いか動き始めた。

と、蓮見の進行方向、一人がけソファの背がはじけた。

「……」

「まずつたな」

南波。

爆音。

炎が上がる。

一ブロックほど離れた場所だ。

72S。

飛び込んだ家がやられたか。

家ごと。

「まずつたな……」

「とりあえず、出るしかない。ここにいっても死ぬ」

「そとは、でも」

蓮見。

「四方囲むはずがないだろう。友軍狙撃してしまっフレンドリー・ファイア」

「抜け道があるって？」

「大部隊の待ち伏せには思えないからな。……俺たちと似たような、

そんな気がする」

「根拠は？」

「蓮見、勘だよ。俺の」

南波は銃を構えることもなく、しかし足音を殺すように、歩く。

できるだけ遮蔽物が自分の身を隠すように。窓から離れて。私たちも続く。蓮見は傍目に分かるほどにおびえていた。が、南波は平然としていた。縫高町で4716自動小銃を失ってなお平然としていた彼の横顔を思い出す。だから私は気分が楽になるのだ。帰れるよ  
うな気がするからだ。南波がいれば。

「オールステーション、」

各局。南波が呼びかける。

「建物から出たら、全速力だ。あの広場を突っ切る」

「えっ」

「蓮見、あつちのほうで絶対に安全だ。死にたくなければ、ついてこい。いいな」

「了解」

瞬間、南波は駆けだした。リビングの窓を体当たりで破る。桐生が続き、私も続き、蓮見が続く。撃たれている。銃声はしないが、銃弾が激しく掠める音が聞こえる。嫌な音だ。南波が低い姿勢のまま走る。

「できるだけ離れる、ただし離れすぎるなよ」

「南波、どこまで？」

南波は答えず、全速力で行く。速い。だが、私たちもついていく。全員の肉体的スペックは、微調整されている。大差ないようなチーム組になっているのだ。いちばん小柄な蓮見も、走るの速い。

南波は黒煙を上げて燃える住宅風の建物へ駆けている。

そう言うことが。

「燃えちまえば、センサーなんて関係ないからな」

私は、南波と桐生の背を追う。

もちろん、CIDSのサブ窓は、後方警戒モードに切り替えて。

蓮見、ついてきてる。

とんだ感情移入だった。この村に住人などいなかった。

夜は明けている。

もう夢を見るような時間ではない。

走る。

銃弾が、追いかけてくる。

不意に耳許で肉声が弾けた、ように聞こえた。

「72Sリーダーからオールステーション」

第72標準化群指揮官からの……これは補正も増幅もない紛れもない肉声だ。無線通話が完全にオープンになっている。

「Mission Incomplete、Mission Incomplete。ここから脱出する。オールステーション、北端の屋根へ集まれ」

南波と比べると、ややうわずったような甲高い声だが、慌てている様子はない。

「聞こえたか」

走りながら、振り返りもせず、南波が言う。彼の声もすでに肉声だ。

「共同作戦ってことでいいのか」

私が問い返す。

「そのとおりだ。撤退も合同だ」

「失敗した？」

蓮見の声。

「成功したように見えないからな」

私たちは中腰のような姿勢……できるだけ投影面積を小さくしたスタイル……で駆けていた。建物に接近することはできなかった。

ここは敵……北方会議同盟軍の仕掛けた大がかりな罠だ。建物そのものがすべて仕掛けられた罠なのだ。捕えられる代わりに殺される。走りながら、集落全体が地雷原である可能性に思い至ったが、これだけ走りまわって無事である点で、その可能性はいったん否定することにした。ただセンサーが目覚めていないだけかもしれないし、すでに目覚めたセンサーを、たまたま幸運にも私たちが踏んでいないだけかもしれない。しかし標準的な地雷ならば、CIDSが警告

を発するはずだ。地雷原としての規則性、衛星や早期警戒管制機のリーダー、センサー類は、対地雷のごとき土壌表面にさっと埋められているような物体を、なかなか見逃すことはないのだ。金属製か樹脂製かなどは問題外で。どのようなアルゴリズムで発見しているのかはよくわからないが。

「72Sリーダーから55exデルタリーダーへ」

「デルタリーダー」

72Sリーダーからの呼びかけに、南波が応答。

「『バス』を呼ぶ。現在位置は？」

「すまない、立ち止まれない。そちらの位置は見えている。そのまま誘導して欲しい」

「了解」

CIDSの視界には、私たちと同じようにジグザグに走っている72S部隊の姿が見える。ただし、動きが非常に鈍い。走っているようだ、八名全員が無事ではないのだろう。先ほど爆発した家屋にいたのは何名か。無事に機動しているのは三、四名程度に見えた。「バスつて」

蓮見が訊くが、息が上がっていた。

「海軍の96式装甲輸送機……蓮見大丈夫か」

「なにが、」

「データがおかしいぞ、」

「……被弾した」

「無事か」

「身体は」

「どこに？」

「スーツの……パックパックに当たった」

「循環は？」

スーツはホッキョクグマの毛皮のように……体温を逃さず、従って赤外線を放出しない。そのかわり、内部の熱もそのまま続き続けることになる。そうすると、タクティカルスーツがそのままサウ

ナスーツになつてしまふ。人間の体温が上昇すれば汗をかき、気化熱で冷却するが、その気化熱を使用できない以上、タクティカルスーツそのものに冷却機能を持たせているのだ。動力源は私たちの体温そのもの。薄い皮膜状の層に、私たちの身体から放出される水分を吸着させ、それが循環する。サーモスタットは、スーツと接続されるバツクパツク下部についているが、蓮見のそれが被弾したようだ。

「たぶん、故障……。寒い」

「寒い？」

「過冷却っぽい」

サーモスタットが故障すれば、そのまま内部に熱が溜まる一方だが、どこかの回路も一緒にやられたのだろう。あるいは、スーツの全機能が喪失して、……外気温の影響をもろに受けているのかもしれない。私たちはさほど厚着をしていない。それはこのスーツの性能を受けてのことだ。北緯五〇度を越えたこのあたりは、初夏とはいえ二〇度には満たない気温だ。

「負傷はしていないんだな」

「大丈夫、たぶん」

「海軍の装甲輸送機がピックアップに来る。できるだけ海側へ走れ」「視界が開けすぎてる」

蓮見。

「森の中へ逃げ込むわけにはいかないぞ、命の保証はできないな」  
そのとおりだ。遮蔽物だらけの地形は、私たちにとっても敵部隊にとつても、格好の場所なのだ。逃げ込んでそのまま潜むならいい。近寄ってきた相手を一人ずつ始末してもいい。しかし、現時点で私たちはゲリラ戦を展開するわけにはいかなかった。

炎上する住居……に見せかけた壮大な仕掛け罠……を利用して敵の火線をくぐり抜けているが、身体の周囲をしきりに弾丸が空気を切り裂いている。

「オールステーション」

南波だ。

「誰か、敵の姿を見たか」

「見ていない」

桐生が即答した。

「私も見ていない」

私も答える。振り返ると、蓮見はついてきているが、足取りがおかしかった。

「……蓮見、ちょっと待て」

爆発。近くはなかったが、建物のひとつが派手に爆散した。窓枠、外壁、屋根材、様々なものが降ってくる。身体を丸くして伏せる。

「蓮見……足、やられたのか」

私は匍匐するようにして蓮見に近づいた。4726小銃を構えているが、私たちに敵の姿は見えない。見えない敵は撃てない。伏せるしかない。

「入地……大丈夫」

おそらくバックパックを被弾した際だろう。蓮見の左の腿のタクティカルスーツの生地がかぎ裂きになっていた。

「撃たれたわけじゃない……瓦礫に引っかけた」

被弾した衝撃でバランスを失ったのか、鋭利ななにかに当たったようだ。傷自体はさほど深くはないようにも見えたが、確認するにはスーツを脱がすかさらに裂くしかない。そしてそれは今はできない。海軍の装甲輸送機が到着すれば、その中で応急処置をするのだ。それまで、蓮見には我慢を強いることになる。

「走れるか」

「大丈夫」

「よし、」

十数メートル前方で、姿勢を低くし、桐生が後方、南波が前方を警戒しながら待機している。

「行くぞ」

南波。

「行こう」

私。蓮見に対しても。

姿勢を上げられない。銃弾が飛び交う。

「森からだ」

桐生が言う。

「わかってる。……物音もしない。嫌な奴らと再会ってことだな」

南波が憎々しげに言う。

発電所と、空沼川が蘇る。

上半身を吹き飛ばされた野井上。

声を出さない兵士たち。

視線を感じると、蓮見の目がそこにあった。

「無声部隊？」  
ディハヤ・ソルタタ

「行くぞ、蓮見」

風連発電所奪還作戦。

結局、私たちは発電所の奪還には成功した。巨大な発電機に封印の呪文をかけ、「読み聞かせ」なしには友軍部隊ですら再起動できない状態にし、そして縫高町まで撤退した。撤退できたのは、私と南波の二人だけだったが。

「お前、風連で奴らを見たのか」

蓮見の軸足は左だ。駆けだそうとして、顔をしかめた。スーツの腿が赤黒く光っているのは、出血だ。あふれるほど流れていないことにはやや安堵するが、放置すれば悪化するのは目に見えていた。

「私も見ていない。ただ……今と同じで、森の中から撃たれた」

屈んだ蓮見の腕を、私は二度、強く叩いた。蓮見はもう一度私の目を見て、バイザと一体化したCIDSを下ろす。

「72Sリーダーから55exデルタリーダー」

「デルタリーダー」

「バスが応答した。到着まで二十分」

「了解だ……」

「二十分？」



桐生の声。うんざりした声音。増幅も補正もなしだと、生々しい。やはり機械は生身には勝てないということだ。臨場感が違う。

「とりあえず、」

南波。

「72Sと合流しよう。俺たちだけでは、ダメだ……走るぞ。姉さんと蓮見は、後だ。サイティングしなくていい。適当に撃て」

「分かった。蓮見、頼む」

「よし、姉さん、行くぞ。桐生、」

「大丈夫だ」

チームD、四名。とりあえず健在。

燃えさかる建物と、その残骸。ただのモデルハウスで、大仕掛けの罠。

罠？

駆けだした南波、桐生の背中を横目にして、私は森に向かって、それでも四倍率の光学照準器を覗いて……サイティングしないで銃を撃つのは、どうもやはり私の性分に合わないのだ……撃った。反動が肩に響く。予備弾倉はタクティカルベストのポーチにまだたくさん残っている。だから重い。弾薬というのは金属と火薬の塊だ。重くないはずがない。撃てば軽くなる。だが、撃ちまくるわけにはいかなかった。撃つ。短く。蓮見も続く。なんとか彼女も走れる。痛みをコントロールしている。痛みを感じないよりはいい。怪我をしても死ぬまで気がつかないからだ。だから私たちは、結局戦場でも痛みからは解放されないでいる。闘いにおける重要な要素だからだ。痛みを感じない兵士がいたら、すぐに死ぬ。痛みを感じないよう、戦闘をできるだけ回避しようとする努力しなくなるからだ。

痛くないように。

痛みを感じないように。

そうした作戦をとる。

周りはもうCIEDSの補正なしに十分明るかったが、視程は悪かった。全体的に海霧がたなびいており、空はぶ厚い雲に覆われて、

太陽がどこにあるのか、一見しても分からなかった。

肌寒い。

気温が上がらない。

スーツの機能を失った蓮見にはつらいかもしれない。流血していることも、寒さの原因になる。どこまで行っても苦痛ばかりだ。しかし、この場で苦痛から避けようとするれば、敵の銃弾に倒れるのもっとも手っ取り早い手段であり、そしてそれはもっとも禁忌されるべき行為だった。私たちがこの先さらに生きていくには、しばらくは苦痛を感じ続けるしかないのだろう。

撃つ。

空薬莖が視線の端で舞う。

二ーリングで撃つ。

「蓮見、先に。今のお前ではバックアップにならない」

「姉さん、ごめん」

短くうめき、蓮見が駆けた。

草原。木。燃える家。その置くに蒼く黒い森。

光学照準器の中には、弱い風に揺れる森の木々しか見えない。それでも私は敵に照準されている。弾が飛ぶ。空気を切り裂く音がする。CIDSのヘッドセットは、この音まではフィルタリングしないようだ。そう、危険信号だから。爆音と違い、銃弾が空気を切り裂く音は、狙われていることの証左だから。

マズルフラッシュでも見えないかと素早く銃を振り、照準器で探るが、見えない。

銃声もほとんど聞こえず、マズルフラッシュも見えないとすると、どこかの暗殺部隊並みに減音器サプレッサーを装備しているのだろう。銃声を轟かせないためというよりは、発射点を分からなくさせるためだ。銃弾自体は音速の三倍近い初速を持つので、衝撃波までは消せない。結構な音はするのだ。しかし、音がした頃には銃弾は通過しているか、命中している。音より速いものは光であり、減音器はマズルフラッシュを消す効果もある。彼ら『無声部隊』はそれを狙っている

のだろう。音もなく近寄り、気づいたときには獲物は息の根を止められている。戦闘というより、ハンティング……：：： 獵に近い。

私は短く走り、立ち止まって二ーリングの姿勢から数発撃ち、そして走るといふ動作を繰り返した。蓮見も時々同じようにして撃った。だが少なくとも私はまったく手応えを感じなかった。

次第に私の中に、怒りに似た感情が湧いていた。

彼らは私たちを狩ろうとしている。

文明の利器を最大限に利用して。

私が祖父とユーリと森に入ったとき、無線機すら使わなかった。祖父とユーリは口笛のような音と身振りで獲物を追いつめた。本当は祖父は獵犬に獲物を追わせたかったと私に言ったことがある。しかし、祖父は新たに獵犬を育てることに躊躇していた。自分の命が尽きると、獵犬の命が尽きる、その時間を天秤にかけたのだと思う。

短く走った。

集落から抜ける。笹や背の高い野草が茂る丘陵が広がる。強い風が吹くのだろう、生える木は皆背が低く、時折のつぼな針葉樹は傾いて立っている。茂みは背が高いとはいっても腰までは届かず、身を潜めても首から上がはみ出てしまう。伏せてしまえば完全に隠れるが、そうすると身動きが取れなくなる。匍匐して進めばいいかもしれないが、私たちは敵を追いつめているのではなく、……：：： 敗走しているのだ。

茂みに頭から飛び込むようにして転がり、私は両足を広げ、両肘を立てて銃を保持し、伏せ撃ちの姿勢を取った。すぐに移動するが、二ーリングでは目立ちすぎた。

が、集落までは一キロ少々、森まではもう三キロほどの距離があった。五〇口径のアンチマテリアルライフルでならここまで弾丸を飛ばすこともできるだろうが、もし彼らが森からまだ出ていないのであれば、射程外に逃れたことになる。だが安心はできない。だから私は伏せ撃ちの姿勢で警戒する。

「蓮見、大丈夫か」

先行して待機していた南波がすり寄り寄るようにして蓮見に近づく。

「けっこう痛い」

「見せてみる」

うねるような地形の茂みの中腹に、72S部隊の姿が見えた。私たちのタクティカルスーツ、ベストと似た装備だが、こちらはほとんど黒に近い緑色が基調で、彼らは紺色基調の迷彩を纏っていた。

「南波少尉、」

蓮見の足の具合を診る南波に、中腰姿勢のまま紺色の一人が近寄る。

「そちらは全員無事か」

「このチビっ子が負傷したのを除けばな」

南波の言葉に、普段なら言い返すはずの蓮見がおとなしい。蓮見の顔色ははつきりと青白かった。体温を奪われているのか、出血がひどいのか、あるいはその両方か。

「こちらは二名失った。……二名負傷、無事なのは四名だ」

「二人やられた？」

「あなたに手を振ってた奴ともう一人さ。家の中にいたからな」

72Sリーダーが持つ4726自動小銃の銃身部分から煙が出ていた。かなり激しく撃ったあとだ。私の銃の被筒からもつつすらと煙が上がっていた。

「これで済むと思うか」

72Sリーダーは谷井田と名乗った。谷井田少尉。

「済まないだろう。こいつの足の具合を見たら、すぐに移動しよう」  
無声部隊があの場合にとどまっているはずはないと考えている。私も同感だった。あの集落は私たちのために用意され、彼らは私たちのために現れた。逃がしてくれるはずがないと思った。

「そいつは、」

谷井田少尉がCIDSを上げて蓮見を見下ろす。

「大丈夫なのか」

「見かけより強い子だ。大丈夫さ。そうだろう?」

顔をしかめ、止血処理を受けている蓮見が、連邦国兵士のように親指を立ててみせた。

「このとおりさ」

「そっちの、」

顎をしゃくるようにして私を指す。

「そっちの姉さんは」

「あいつもああ見えて元猟師だからな」

「南波、違う」

「聴いてのとおりだ。55exチームDはオール・グリーンなことだ」

私もそうだが、南波はおそらくこの谷井田少尉が気に入らないのだ。海軍風を吹かせやがって。おとなしくお船に乗っていやがれ。

そんなところだろう。無音声伝達機構（SVTS）が私たちの側に配備されていなくてよかった。こうした心の声の処理を、彼らはどうしているのか。今が戦役の時代でなければ、私は彼らに訊いてみたかった。個人的な興味として。思ったことが相手に伝わる、以心伝心が具現化された機械の使い心地を、私も試してみたかった。おそらくそれほど楽しい機械ではないのだろう。

「バスは十分程度で到着する。もう少し海岸線まで近づきたい」

「賛成だな」

私は銃から弾倉を一度抜いた。まだ、十五発程度残っている重さだ。……撃った数を勘定していたつもりだったが、訓練とは違う。なかなか思ったようにはいかない。もう一度装填し、構え、照準器に視線を戻す。

途端に、私の二メートルほど前方の土が弾け、笹の葉が散った。

「伏せる、ダメだ」

チーム全員が即座に反応する。

「もう来たか」

蓮見の声が力ない。

「重機（重機関銃）でも持つてくればよかったな」

私の左手一、五メートルほどに桐生。

「誰が持つんだ」

南波。

「俺以外の誰かさ」

「SAW（分隊支援火器）でいいから携行すべきだったな」

「南波少尉、あんたが持つのか」

「俺以外の誰かさ」

それでも、全員が三〇口径版4726を装備しているのは、この状況をそもそも派遣隊本部が予見していたのではないかと思う。223口径の4716小銃では敵にアウトレンジされ、いまごろ蓮見の負傷どころでは済まなかっただろう。海軍の第72標準化群もまた同様に三〇口径で参戦していることがひとつの答えかもしれない。

連中、無声部隊が来ることを予見していたのだ。ある程度。

「後退、下がれ下がれ」

谷井田少尉の声だ。ヘッドセットからではなく、私に耳に外から聞こえる。

「向こうは負傷者抱えて大変だ」

南波が毒づく。こっちな。言っただろうと思ったが、蓮見の青い顔を見てやめた。

「蓮見、死ぬなよ」

「この程度で？」

「安心した。いつもどおりだな。拳銃は俺によこせ。自決用じゃないんだからな」

「わかってる」

「安心した……走れるか、姉さん、カバー頼む」  
「了解」

微かに爆音が聞こえる。曇天のどこかから。  
土が弾ける。

私の耳のすぐ横を銃弾が掠めた。7・62ミリ弾は凄まじい音がする。空気が避ける甲高い音。嫌な音だ。

光学照準器を覗く。マズルフラッシュは見えないが、奴らはすでにあの集落に展開している。集落からこちらは開けた草原だ。いくら音を出さない部隊とはいえ、透明になれるはずもない。光学的にいくら迷彩を施したところで、CIDSのエコーレーション機能を拡張すれば、無意味だ……と、私はそこまで思い至り、即座にCIDSの表示モードにエコーレーション画像をミックスさせた。

超音波は直進性が強いが、障害物に弱い。その性質を利用して、エコーレーションを行う。CIDS程度の規模では、せいぜいが学校の体育館ほどの広さでしか有効ではないと考えられてきたが、ここまで開けた場所にあつて、はたして本当に使えないか。

出力を最大にして表示させた。コウモリはどうだ？ あの身体の大きさで、飛行しながらエコーレーション機能を使っている。

見えた。

燃える建物と、二階部分が吹き飛んだ農家風の建物の影に、反応があつた。

考えるよりも早く、私は用心金の外に伸ばしていた人差し指を引き金に当て、そして引いた。

反動。

光学照準器の中で、飛翔する弾頭が見える。零点規正は三〇〇メートルで行っているから、その倍近い距離だと弾頭はかなりお辞儀してしまう。クロスヘアは目標の心持ち上気味に当てて撃つた。

当たった。

血しぶきが飛ぶのが見えた。音は聞こえなかったが、彼……あるいは彼女の骨を打ち砕く感触が一キロ弱の距離を隔てて感じられるような気がした。誰にも言えないが、凄まじい快感だった。それを全身にめぐる血に混ぜ込んで、私は次の目標に照準を合わせる。ポルトアクションと違い、この銃は速射性に優れる。もつとも、反動が収まるまでのわずかな時間は仕方がない。それに今は二脚もない。

左手の手のひらに銃を載せるイメージで、構える。銃床は肩胛骨あたりの骨格で支える。この姿勢で私は全身が銃と一体化する。祖父に教わった撃ち方だ。口をわずかに開いて、息を吐きながら。

「入地准尉、」

南波の声だが無視する。

CIDSがイメージングした、実映像とエコーロケーションの合成画。一名を失った動揺が見て取れた。私の上空を過ぎる銃弾の数が増えた。

クロスヘア。

やや上。

もうちよつと上。

残念だけれど、もう見えているよ。

引き金に指を当てる。

撃つ。

照準器が一瞬、マズルフラッシュでホワイトアウト。が、すぐに飛翔する弾頭が見える。

照準器の向こうで、敵兵士のライフルが宙に舞った。ヘッド・ショット。人間の脳はシカのそれと比べて容積が大きい分、容器も大きい。はつきり言っただけ狙いやすい。両目の間に命中した。即死だろう。シカを撃つなら即死はさせない。心臓を最後まで動かし続け、血を抜かなければならない。だが、手負いにはしない。余計な苦痛を与えてはいけなからだ。獲物に対する礼儀であり、なにより肉がまずくなるからだと言った。祖父が言った。

「二人目、」

「本当か！」

南波の声が耳を打つ。

「行きな、バスが来るんだろう」

「姉さん、あんたも行くぜ」

「あとから行くよ」

三人目。銃をわずかに右に振る。一階部分が潰れた民家の影にい



る。ライフルをこちらに向けている。おそらく私に気づいている。だが、私は茂みに紛れ、伏せている。タクティカルスーツの迷彩が周囲のパターンを取り込み、私の姿は熟練した狙撃兵並みに目立たない。逡巡するまもなく、三発目を叩き込む。

はずれた。

空気がやや揺らいでいる。火災の熱だ。揺らぎの中で、ポジションを換えようと身体を起こした私の獲物。

間髪を入れず第二弾。ボルトアクションではこうはいかない。この銃は精度が高い。個体によっては、そのまま選抜射手による狙撃に用いられるほどだ。さすがに狙撃専門の連中はそれ専用のライフルを使う。銃身がしっかりフレームから浮いているタイプだ。

弾頭が見える。

当たる。

血が散る。

三人目。

このへんか。

潮時か。

エコーロケーション合成画の中で、敵兵士たちが集結しつつあるのが見えた。私に気づいている。闇雲でもここめがけて掃射されれば私などひとたまりもない。

私は低い姿勢のまま、……鼻先に身体の重心点を持って行き、自分の体重を利用して機動する。銃弾が追いかけてくる。当たらない、当たらない。なぜかそんな気がした。

「姉さん、」

南波の声。

「何笑ってるんだ」

笑っている？

私が？

笹藪に潜り込むようにして、私は駆ける。

曇天に爆音が聞こえる。

バスか？

96式装甲輸送機は高空は飛ばないと聞く。艦隊から出発した艦上戦闘機か。来るとすれば74式艦上戦闘機だろう。海軍版の近接航空支援でも実施するか。それとも、これから始まるかもしれない盛大な艦砲射撃の露払いか。

「姉さん、」

鋭く南波が私を呼ぶ。丘陵は下り斜面。鉛色の水平線が見えた。

桜武戸……荒涼とした海岸線の風景。

墓標のような樹木。

一面の笹。

鉛色の海はしかしまだ距離がある。

第72標準化群の六人と、私のチームの三人が、斜面の中途にいた。そこならおそらく、集落からは死角になっていて見えない。迫撃砲でも撃ち込まなければ、当分は安心だ。

「入地准尉」

聞き慣れない声は、海軍の谷井田少尉だ。

「バスが来る。置いていつて欲しいのか」

「今行く……姿勢を低くして下さい」

「今度は私たちを狙うか？」

「なんですって？」

「冗談だ。まもなくバスが来る。……艦砲射撃の要請を行った。このあたりは消えてなくなるぞ」

何笑っているんだ。

危うく私は声に出して言うところだった。

本当に谷井田少尉をスコープに入れてやろうか、ちょっと脅してやろうか、なぜかそう思った。

おそらく私は、私の精神状態は凄まじくハイになっており、まともではなかったのだ。

首をひねると、波間を蹴立てるようにして超低空で進んでくる96式装甲輸送機の姿が見えた。バスのような胴体の四隅にスタブウ

イングが設けられていて、その先端に、樽のようなターボファンエンジンが四基。コクピットはサイドバイサイド型式で、見た目はまるつきり本当に空飛ぶバスだ。機体上部に防弾板で守られた銃座があれ、機体両サイドにはドアガン。

「なんともまあ」

南波が海を向いている。

不格好な飛行機だ。

たぶんそう言いたかったのだ。

私はまだもやもやと熱気を漂わせる銃をローレディにして、チムに近づく。

轟音が曇天に響いている。

第一ステージ終了。

そんな気がした。

すぐに、第二ステージが始まる。

その前に、ここを去らなければならない。

バスが来る。

蓮見は茂みに座り込んでいた。

桐生が銃を構えて警戒していた。

私はやや早足で、腰を落として近づく。

96式装甲輸送機は、72Sの隊員と同じ、紺色の迷彩を纏っていた。正確には紺色系。曇天と鉛色の海の色に合わせて、今は濃いめのグレーにも近い色になっている。期待中央部のスライド式のドアに、側面に並んだ円い窓、直方体に近い機体形状は、誰が呼び始めのやはりバスそのものといえた。回転翼を採用せず、機体四隅のスタブウイングに不釣り合いなほどの大きさのターボファンエンジンを搭載したのは、航続距離が短くなるデメリットを、回転翼によるデメリット……メインロータに障害を与えない程度にクリアランスを保つ必要性を鑑みたからだという。確かにこの機体ならば、森の中でも路地と路地の間でも、ヘリコプターよりはるかに狭い場所へ入っていけるだろう。それにしても不格好だが。

96式装甲輸送機……バスは丘陵の中腹にホバリングした。ダウンウォッシュと甲高い爆音はヘリコプターの比ではない。ドアガンの射撃手がすでに射撃を開始していた。私もニーリングの姿勢で、集落方向を警戒する。私の位置からは稜線がちょうど死角になっているが、やって来ないとも限らない。

「入地准尉」

谷井田少尉が私を呼ぶ。負傷した部下を機体に収め、私たちチームDの面々を呼んでいるのだ。私が一番機体から離れた場所にいた。蓮見は桐生が肩を貸し、南波が警戒しながらもうバスに乗り込んでいた。私はニーリングから中腰姿勢になり、銃を構えたまま後ずさる。ガナーはまだ撃っている。射撃音とエンジン音が凄まじい。

「74艦戦だ」

南波の声に振り仰ぐと、CIDSのTDボックスが素早く雲底を割って飛び込んできた海軍航空隊の74式艦上戦闘機の姿を捉える。後退角度の浅い主翼に大振りの水平尾翼、双発のエンジン、そしてバスと同じような濃い紺色の迷彩色。低空で侵入する74式艦上戦

闘機は急旋回し、主翼前縁部のストレーキから盛大にヴェイパーを発生させていた。やや外側に傾いた二枚の垂直尾翼がはっきり見える。二機編隊。

「CAS！」

谷井田少尉が怒鳴り、私に向かって早く来いと手を振る。CAS。近接航空支援。私のCIDSのサブ窓が、遠ざかる74艦戦をズームして追跡している。主翼ステーションに提げた爆弾を一齐に左右に発射つ、合計四発投下したのが見える。精密誘導式ではない、自由落下タイプの爆弾。艦載機なので搭載量もたかがしれているが、視界の端に閃光、四秒ほど遅れて爆音が届く。黒煙が上がる。

「入地准尉！」

南波が機体のステップに足を載せ、私を呼ぶ。私は彼の言葉に駆ける。笹藪が深い。走りにくかった。夢の中で走っているような、おかしい感覚だった。

乗り込んだバスの中は、私たちが往路で乗った陸軍のヘリコプターより広がった。シートは対面式のロングシートだが、本当にバスのようなのだ。救難員メディックが負傷した72S隊員と蓮見の応急処置を始めようとしていた。72Sの負傷兵の傷は深そうだ。戦闘服を脱がせると、機体の床に血が漏れ流れた。意識ももうろうとしているようだったが、蓮見はそんな彼らの様子を、顔をしかめながらもはつきりとした表情で見つめていた。

私が入り込むが早いか、機はすぐに上昇を開始した。スライドドアは素早く閉められる。ドアが閉まると、ターボファンエンジンの甲高いタービン音がいくぶん弱まる。機体が揺れる。

「盛大な畏だったな」

南波が呟く。肉声で。

「たった俺たちだけを畏にかけるのに、村まで作るかよ」

「私の祖父は、一頭のシカを追って、三日三晩山から帰ってこなかった」

「シカだろう？ 俺たちは違う。……あんたのじいさまも、シカを

捉えるために村までは作らなかつただろう」

「本当に罠だったのか、」

「いまさら」

小さな円い窓から、私たちが走った草原が見える。黒煙を上げる集落。新たに四つの閃光が目を射る。74式艦上戦闘機の攻撃が続いているようだ。

「このあと、艦砲射撃を実施するそうだけ」

「どっちが仕掛けた罠なんだか」

「俺たちは餌か」

「違うと思う？」

「どっちだつていい。とりあえず、危ないところだった」

南波が言い終わるかのタイミングで、機体が派手に揺れた。衝撃音。

「なんだ？」

シートから落ちそうになり、南波はとっさに対衝撃姿勢を取る。

「対空砲火！」

CIDSのヘッドセットに、コクピットからの音声が届く。

「対空砲火？」

南波。

「奴らそんな装備、」

機体後部に衝撃。同時に、激しく機は動揺、大きく左に傾く。簡易寝台に載せられていた725の負傷兵がうめく。コクピットから警報が聞こえる。

「なんの音だ、谷井田少尉」

「火災警報だ、おそらく」

私は窓に張り付いた。

「入地准尉、よせ。窓から離れる」

南波が私の腕を引いた。

「第四エンジン火災<sup>ファイア</sup>。みんな、掴まれるところに掴まれ」

パイロットが叫んだ。

「小銃弾じゃねえぞ」

私はCIDSをオープンにした。機外を向く。索敵モード。前線管制機からの情報が瞬時に表示される仕組みだ。

「あいつだ」

「姉さん？」

「SDD - 48」

「まさか」

南波はわずかに窓から離れ気味にして外を向く。視界。

森の中から、ゆっくりと現れたのは、縫高町で友軍の82式戦闘ヘリコプターを空沼川に沈めた、自走対空砲だった。九〇口径三五ミリ機関砲を備え、地上掃射も可能な車両。

「いまごろお出ましか」

「近接航空支援であぶれ出されたんだ、おそらく」

「なぜ俺たちのときに出てこなかった」

「奴らに訊いてくれ」

曳光弾が見えた。

この96式装甲輸送機は、往路で乗った汎用武装ヘリコプターと武装面で大きな違いがなかった。せいぜい、ありあまる推力の恩恵で、機体にぶ厚い装甲を施していることか。それでも、三五ミリ機関砲弾なら、この程度の装甲を二枚まとめて撃ち抜いてしまう。

「早く、海の上まで逃げ……！」

南波は視線を窓からはずさず一人呟いていた。

「第二エンジン<sup>ファイア</sup>火災！」

パイロットの叫び。

左舷側のエンジン二基が火を吹いている。

「バランスを失う……！」

「姉さん、掴まってるか、何かに」

「墜ちるとしたら機体ごとだろう、意味ないよ」

バスは迷走を始めた。低空を飛び続けている。高度を上げられな

い。高度を上げれば、優に一万メートルを超えるSDD-48の機関砲の餌食になってしまう。

「55ex、」

谷井田少尉の声に南波が振り返る。

「南波少尉だ、谷井田さん」

「南波少尉。我々が帰還できなければ、即座に艦砲射撃が始まる」「なに？」

「帰還が困難になった場合、あるいは我々が全滅した場合だ。……私の腕には生体マーカが埋め込まれているが……あんたらも同じだろう……このビーコンが消滅した時点で、艦隊はここに砲撃を開始する」

「あんた、艦砲射撃はもう要請したって言っていないかったか」

「私たちが安全圏まで離脱できたらだ。だが、もともと、我々の部隊が行動不能になった場合、あるいは全滅した場合、……帰還が困難になったと判断された場合は、自動的に砲撃が開始されることになっているんだ」

聞いた南波がうんざりした顔をした。

同じだったからだ。

私たち55ex……第55派遣隊の作戦でも、任務が完遂できない場合、あるいは任務継続が困難になった場合は、空軍の近接航空支援を要請し、「仕方なく」目標を破壊する。奪還できなければ破壊せよ。確保できなければ破壊せよ……。そういうことだった。私たちの要請で近接航空支援を行うのが常だが、谷井田少尉が話したように、私たちの生体マーカのビーコンが消滅した場合も、空軍は躊躇なく近接航空支援を実施する。そういう契約なのだ。

「墜落して、あんたがもし死んでたら、その腕切り離して俺が持つて行くよ。マーカごとだ。戦闘糧食<sup>レーション</sup>でも食わせれば、あんたの腕の細胞もしばらくは生きているだろう。俺たちが安全圏まで脱出するまで」

「たちの悪い冗談だな……さっきの仕返しか」



言つて、谷井田少尉は笑わない目を私に向けた。私も笑わず、じつと彼の目を見返した。しかし山野で対峙した大人のクマのように、彼は視線を私から逸らすことはしなかった。敵愾心を宿した色が見えた。

「酔いそうだな」

南波が苦笑混じりに呟く。機体は左右はおろか上下にも激しく揺れていた。パイロットは機体を制御できているのか、はなはだあやしいほどの動きだった。

「艦隊はどこまで来ているんだ」

南波が訊ねる。

「沖合、二〇キロ」

「近いな」

「戦艦が来てる。重巡洋艦も」

「地形を変えに？」

「目標を殲滅するためだ」

「結果的に地形は変わるだろう？」

「何が言いたい」

「艦砲射撃をくわえる口実が欲しかったのか？ あんたらは」

「なに？」

「先に手出しはできないから、俺たちをばらまいた。陸軍も同意した。俺たちは敵の罠に引っかけたふりをした。どこからが罠なのかもつよくわからんが、だいたい『パイロットの休暇村を襲う』なんてのは気乗りのしないミッションだった。取って付けたような気がした。そういうことだったんだな」

「そういうこと？」

谷井田少尉は両足を床で踏ん張っていた。南波は彼に身を乗り出す。揺れる機体で身体をなんとか保持しながら。4726自動小銃が揺れる。

「俺たちやあんたらが出張れば、とうぜん、連中はあの『無声部隊』を送り込んでくる。そのための部隊だからだ。そうだよな？」

「……………」

「だが奴らは手強い。……………そして、奴らは最低でも大隊規模で動く……………機甲部隊もくつついて」

風連ではそうだった。モジュラー装甲を取り外し身軽になったSDD-48や歩兵戦闘車が森の中で待ち伏せしていた。巧妙にカムフラージュを施して。89式支援戦闘機の目をごまかし、衛星を欺き、私たちを待っていた。

「なんで艦砲射撃なんだ。ご自慢の戦闘機で精密誘導爆弾を使えばいい」

「そういうのは空軍に任せているんだ」

「どうしても地形を変えたいのか」

「……………南波少尉。ここで私たちは、四個中隊を失っているんだ」

CIDSのバイザーを上げ、左右に揺れる機内で、谷井田少尉は低く、だがしつかり通る声でそう言った。

「なんだって……………?」

「あんたら陸軍さんが、内陸の風連や敷花で凄まじい犠牲を払ったことは私も知っている。敷花防衛部隊は全滅したそうだな」

嶋田准尉の顔がよぎる。が、表情が思い出せない。瞬間的に蓮見の顔とオーバーラップした。誰もいない部屋。私の部屋。嶋田准尉の部屋。敷花防衛戦で戦死した彼女の。

「風連の発電所奪還戦で、あんたらが奮闘したのも聞き及んでいる」「そいつは嬉しいね」

「だが、メタンハイドレートの採掘基地を空軍が吹き飛ばしたとき、我が艦隊も近傍にいた。機動部隊もだ。艦隊は洋上で、敵の北氷洋艦隊を迎え撃っていた」

「艦隊同士で?」

「そうだ。……………その後、私たちが海岸伝いにここまで来た」

「ここに何があるっていうんだ。軍事目標なんてありはしないぜ」

「地表にはな」

「どづいうことだ?」

「海岸線から内陸に十七キロのエリアは、北方会議同盟の反応炉プラントの建設が予定されていた」

「ここに？」

「そうだ。ボーリングも行われていたし、実験炉はもう稼働していた」

「そんな情報、俺は知らないぜ」

言いながら南波は私を見た。私も知らない。首を振った。

「小さな出力だ。当初脅威にはならないと思われていたが、プラントの警備を行っていたのが、あんたらのいう『無声部隊』さ。警備がいるとも気がつかなかった」

「この近くののか」

「あの村から半日も歩けば、もっと立派な村が作られてるさ。本当に人が住んでる」

「行ってきたのか」

「だから、四個中隊が全滅したんだ。……今回はその報復だ」

「谷井田少尉、」

私が言葉を挟む。

「海軍は、それを分かって？」

「最初から、全滅させるつもりでいた。艦隊の総火力で」

私は嘆息した。

陸軍は勢子役を買って出たわけか。たった四人のチームで。

「俺たちは、他にもチームを送っている」

「他は知らない。ここはそういう場所だった」

「そうか、」

南波が言葉を句切り、シートに座り直そうとした瞬間、機体後部で激しい爆発があり、一瞬私は耳が聞こえなくなった。ヘッドセットのフィルタリング機能を上回る爆発音。機内全体に警報が響く。煙が後部から吹き出し、一瞬にして機内の視界がゼロになる。

「ドア開ける、」

誰かが怒鳴っている。

「撃たれる」

「見えないよりましだ、早くしろ！」

誰かがドアを開けた。一瞬で視界がクリアになる。

「う」

すぐ横にいたガナーが呻いて倒れた。胸に大穴。即死だ。破片か、砲弾の直撃か。いや、三五ミリの直撃なら、人体など跡形もなくなる。

「誰か、ドアガンを」

また誰かが叫んでいる。

谷井田少尉が何も言わずにドアガンに駆け寄り、装填具合を確認し、撃った。三〇口径の機関銃だ。連射速度が速く、射撃音が一連に聞こえた。

「姉さん、」

南波少尉が銃を構えようとしていた。

「かなりまずいな」

桐生も、蓮見も身構えていた。

「どうやら、敵は大部隊を投入してきたようだ」

南波がCIDSを下ろして言う。私のディスプレイにも戦闘情報表示で大部隊の存在が示されていた。

「あ、」

誰かが短く叫ぶ。

機外。空。黒煙を曳いて、74式艦上戦闘機が墜ちていくのが見えた。離れてパラシュートが開く。パイロットは脱出したようだが、誰が回収に行けるだろうか。

機体の動揺はもはや制御不能を予感させるほどになっていた。

「墜ちるな」

南波が呟いた。

谷井田少尉は無言でドアガンを撃ち続けていた。動揺に合わせて空葉莢がこちらにも飛んでくる。熱い。

「入地准尉、」

南波が真正面から私を見た。

「ダメだ。こいつは墜ちる。……巻き添えはゴメンだ。そうだな？」  
私はうなずいた。

「俺たちの任務はなんだ？」

「最終的には次の任務をこなすこと」

「そうだな。帰らなきゃならない」

激しい振動。また誰かが叫んだ。

「南波少尉！」

谷井田少尉が叫ぶ。

「すまない。不時着するそうさ。何かに掴まれ」

不時着？ 墜落の間違いだろう。すでに対地高度は二〇メートルを切っているようだった。下は湿地なのか、まだらに沼と茂みが続く。歩きづらそうさ。

「姉さん、先に飛び降りろ。……この高度なら、できるだろう？」

「機を捨てる？」

「まともに着陸できると思うか？ この飛行機が」

「無理だろうな」

「蓮見、」

「生きてるよ」

「見れば分かるさ。入地准尉と行け。降りたら、入地准尉に言葉の話をしてもらえ。お前から質問するんだぞ。しゃべらなくても成立する言語が存在するかってな」

「なんだって？」

「いいから、お前と姉さんで先に降りろ。俺たちはあとから行く」

私と蓮見は無言でうなずく。

バスは木立があればかすってしまうほどの高度まで降りてきていた。しかし速度が出ている。ヘリコプターと違い、低速飛行が苦手な飛行機なのかもしれない。もっとも、墜落した場合も、ロータがちぎれてあちこちに飛散したり、機体を切り刻む心配はなさそうさ。「なるべく、下が水の方がいい」

蓮見のスーツの故障が気になったが、それは言えなかった。南波もわかって言っている。

「あんまり深いところに墜ちるなよ」

「わかってるさ」

水煙が上がる。生きている側のエンジンが沼の水を巻き上げているのだ。対地速度は、自動車並みだろうか。転がると痛そうだが、水面に落ちればそれほど怪我をしないで済みそうだった。

「姉さん、行け」

私はうなずき、ドアに歩み寄った。後には蓮見。

途端にドスンと凄まじい音がして、機体は段差から落ちるように急激に高度を失った。

「第二、第四エンジン、オールロス！」

「あっ！」

パイロットの声に続いて、蓮見の短い声が聞こえた。危ない、そう思った。蓮見の腕をつかもうとした。南波は4726を構えていた。その私と南波の間を、傾いた床に足をさらわれた蓮見が滑った。

「蓮見！」

滑った先は開け放たれたドアだ。蓮見はそのまま姿を消した。

「蓮見！」

南波も叫んだ。

ゆっくりと、しかしあっという間に、蓮見は落ちた。

不意を突かれて。

水音。

機体が一瞬安定したのを機に、私も飛び降りた。できるだけ蓮見から離れて。

機体を離れ、顔面を指すほどに冷たい水が覆うのに、二秒もかからなかったように感じた。着水。かなり潜る。全身を脱力させて、浮力を得る。顔が水面から出る。

バスが見えた。飛んでいるのが不思議なほどに、あちこちから黒煙を上げていた。左舷側エンジンは二機とも黒々とした煙を、蒸気

機関車のようにもうもうと吹き上げており、とうてい機能しているとは思えなかった。ドアから蓮見の顔が覗いていたが、機体はフラフラとバランスを失い、一時として同じ場所にはとどまらず、私たちから遠ざかっていった。

蓮見。

離れた場所に、蓮見が浮いていた。両手で水をかいている。意識もあるようだ。よかった。水は切るように冷たい。蓮見を一刻も早く引き上げなければ。

「蓮見、」

銃声と、爆音が聞こえたが、不思議に大きい音ではなかった。

泳ぐと云うより、すでにつま先が水底についていたから、つま先で歩くような格好で蓮見に近づいた。

「入地……准尉」

辛うじて水面に顔を出しているような状態だった。沼の水は本当に冷たい。私のスーツはサーモスタットが生きているから、素肌をさらしている部分以外は冷たさを感じない。が、サーモスタットが機能せず、大腿部に大きな裂け目があり、しかも負傷し衰弱している蓮見には死活問題の温度だ。

「蓮見、動けるか」

流れのない沼でよかった。川だったらおそらく彼女は為す術なく流された。それで済んだ。私は蓮見の返答を待たず、ベストをつかみ上げ、そのまま引いた。浮力に任せて、蓮見の身体を岸まで牽引する。もともと軽いはずの蓮見の体重がまったく感じられなかった。まるで彼女の命の重さが失われていくような気がして、私は嫌な気分だった。

嫌な気分？

私は先ほど、4726小銃で、敵兵三人を葬った。そしてそれに快感を覚えた。誰にも言えないが、紛れもない快感だった。弾頭が敵兵の頭を砕く感覚。ライフルを投げ出すようにして斃れた兵士の姿。

殺すことに快感を覚えるのではない。  
斃すこと。

私を感じる興奮と快感はそこにある。

兵士には、本当の快樂殺人者もいることだろう。私は幸いにして会ったことはなかったが、戦場は少なからずヒトの精神をむしばむ極限状態は、人の心を両極端にする。隠されていた性質まであぶり出す。温厚だった人間が凶暴になり、周りへの気遣いを忘れなかった人間が、自分が生き残るため、周りの仲間を見殺しにする。そういう現場はいくらでもあるという。

「蓮見、」

「姉さん……」

「極限状態が、」

私の吐く息が白い。これで初夏か。

「お前は、こういう極限状態が好きなんだろう、しっかりしろ」

「ごめん、姉さん」

「蓮見准尉！」

「大丈夫……」

爆発音と、断続的な射撃音。遠い。三五ミリ機関砲の音だ。バスはどうなったのか。

私は蓮見を岸まで引きずり上げて、枯れ色の草を両手で押し開いて視界を確保した。

まだ飛んでいた。

フラフラと。

右舷側のドアガンはまだ生きているようだったが、この距離からだど四基のエンジンのどれが生き残っているのか分からなかった。それくらいに機体は黒煙に覆われていた。傾きながら、懸命に機体を制御しようとしているのだ。もっとも、機体を制御しているのはフライトコンピュータで、その入力支援がパイロットの手足に頭脳だと言っても過言ではない。ああした、飛行にとっても適しているとはいえない形状の航空機を飛ばしているのは、常に大量の冷却が必



要な大容量かつ高速処理能力を持ったフライトコンピュータだ。空軍の89式支援戦闘機もそうだ。フライトコンピュータの支援なしには一秒たりとも安定して飛行できない。そのかわり、飛行機とは呼べない超越的起動も可能になっている。エンジン推力にものを云わせて空中で静止する、高度を変えずに宙返りする、その過程で後ろ向きに飛ぶ。その姿はもう飛行機のそれではなかったが、コックピットをパイロットは誰でも同じ機動ができる。コンピュータが飛ばしているからだ。

バス……96式装甲輸送機。

装甲板で保護されたキャabinはおそらく、回転翼機のそれよりはるかに重い。十二、七ミリ程度の直撃ならなんとか耐えられるレベルの装甲を施しているのだ。そのかわりに非常に重い。回転翼ではなくターボファンエンジンを四基も装備しているのはそうした理由もあるのだろう。洋上の艦隊から離陸して、特殊部隊兵士を戦地に送り届けるシャトル便。

陸軍のヘリコプターほどに航続距離は求められないから、そうしたトレードオフが成立するのだ。

バス。

私は銃の光学照準器で機影を追った。

「姉さん……南波少尉は……」

「わからない」

照準器の中で、機はさらに高度を下げ、時折姿が見えなくなった。森がある。機は背の高い針葉樹林に突っこむようにして完全に姿を消した。

「姉さん……、南波、少尉は、……脱出、できた……」

蓮見を見る。顔色が蒼白だった。両手が震えている。顎も激しく細かく震えていた。低体温症だ。危険な兆候だと思った。

「蓮見、南波なら大丈夫だ。必ず生きてる。また会える。お前が生きていれば」

私は本気で言った。私たちが生きていれば、南波となら必ず会え

る。彼は死ぬことを知らない。生きるための行動しか知らない。だからあいつは大丈夫だ。

私は再び光学照準器を覗く。

曳光弾の軌跡が幾筋も伸びる。爆発。轟音。

針葉樹林の向こうに姿を消したきり、バスは見えなくなった。

森の中に降りるつもりだろうか。

しかし、機体の制御はもう完全に失われているはずだ。

安全な着陸などはもう望めない。機体が地面に降りるとすれば、

それは墜落以外にはあり得ないだろう。私は、南波と桐生が、墜落前に機体から脱出していることを願い、信じた。

閃光。

針葉樹の向こう、低く垂れ込めた雲と霧に反射して、爆発が見えた。

かなり遅れて、爆発音がやってくる。

黒煙。

もうもうたる黒煙だ。

間違いない。バスが墜落したのだ。

南波。

私は信じていた。

「蓮見、行くぞ。立てるか」

震える手を私に伸ばしてくる。私は銃を背中に回し、蓮見の手を握った。沼の水と同じくらい冷たかった。強く握った。小さな手だった。私の手よりも小さく、細い指。まるで、少女のような。蓮見は私たちのチームでもっとも兵士に見えない。だから、市街地への潜入任務では街に溶けこんだ。誰も彼女を特殊訓練を受けた兵士だとは思わない。高等科の生徒だと思うはずだ。きらきらした好奇心にあふれた視線は彼女の生来持つ特性だ。私の目とは違う。悩むことがどういふことなのか教えなければ分からないような南波と違い、蓮見は悩んだ。人間らしいと思った。だから、もしかすると私たちのチームは彼女にとって……。

「姉さん、」

「立て。ここにも死ね。南波と桐生が私たちとの合流を待っているはずだ。CIDSを下ろせ」

震える蓮見の手は私の指を握ったまま、動かなかった。私は右手を彼女の指からほどき、蓮見のヘルメットバイザを下ろした。

「立て」

蓮見は高熱を出した子どものように震えていたが、立ち上がろうと私から手を離れた。

「そうだ、立て、蓮見。行くぞ」

彼女の脇から背中腕を通し、引き上げた。冷たい。私の首筋に触れる彼女の身体は氷のように冷たかった。できればスーツを脱がせたかったが、このスーツは原理的に水分は吸い込まない。皮膜状の層だけが水分を保持するのみで、基本的に防水材質なのだ。冷たいのは彼女の身体自身。今触れている蓮見のスーツは、いわば彼女の皮膚そのものだといえる。ほぼ全身を覆うスーツの表面積は広い。そこから一斉に熱を奪われれば、本格的に凍死の可能性を考慮しなくてはならない。火を焚きたかった。自殺行為ではあるが。

とにかく水場を離れるのが先決だった。足場が悪すぎ、蓮見を支えて歩くのが至難だったからだ。縫高町作戦のあとの私と南波と今の私と蓮見で決定的に違うことは、マイナス要因、ひとつ、蓮見の負傷。ひとつ、またもチームがバラバラになったこと。プラス要因、ひとつ、二人の装備がほぼ無傷であること。蓮見のスーツを除いてだが、CIDSはまだ生きているし、二人とも自分の癖に合わせて調節した4726小銃をまだ持っている。予備弾倉もある。腿サイホルスターにはメルクア・ポラリスMG-7A・九ミリ口径拳銃、そして予備弾倉が四本。十分だ。バックパックも無事で、戦闘糧食もサブバルキットもある。

「蓮見、その調子だ」

しきりに爆音と閃光と頭上を曳光弾がよぎっていたが、私たち二人は戦闘から無視されているようだった。CIDSはスーパーサイ

手にしてある。私自身の索敵能力は、平時の三分の一以下だ。蓮見に肩を貸し、時速二キロがいいところの速度で歩く。十五メートルごとに立ち止まり、蓮見の身体を抱きしめながら。

本当にどこかで焚き火をしなければ蓮見は危険かもしれない。私が蓮見を抱きしめたところで、私の身体からは赤外線がまったく出ない。蓮見の身体からの放熱を遮る効果はあっても、私の体温で彼女を暖めることはできないのだ。私がスーツを脱げば暖められるが、それはまったくこの場ではナンセンスなことだった。

「姉さん……入地准尉」

「蓮見、なんだ」

「私のこと、置いていっていい」

言うと思った。そして蓮見は本気で言っている。始末に負えない。「寝言は寝てから言え。そして今寝たら私がお前を殺すからな」

「冗談……」

「お前を置き去りにはできない……センサーの数が五個減る」

「五個？」

「アイボール  
眼球」

「……それじゃ二つだよ」

「残り、当ててみる」

蓮見は左足をかばいながら歩いている。いや、私が引きずっているとというのが正解に近い。いくら海軍の救難員メディックと南波に応急処置を受けたとはいえ、本格的なものではない。痛みまでは取れないだろうし、せいぜい止血処置をただけだ。

「姉さん……わからないよ」

「耳」

「ああ……あとは」

「鼻」

「それで……五つ？」

「人間の感覚は……」

蓮見の息は、体温に逆行して熱い。ダメだ、蓮見。熱を放出する

な。お前の身体の中の熱は有限だ。これ以上熱を放出したら、帰れなくなる。私の脳裏に、上半身を失った野井上の姿がフラッシュバックする。あるとき、彼は私を振り向いた。銃を構えようとした。火線の先には、無声部隊がいた。姿は見えなかった。森の向こうに、何かのモニメントのように、発電所の冷却塔がそびえていた。悪夢の中に出てくる風景にそっくりで、だから私はそのあと何度も同じシーンを夢に見た。野井上は私を向いて、何か叫んだ。爆発音と砲撃の音が凄まじく、彼の声はよく聞こえなかった。次の瞬間、私は南波に突き倒された。激しい音がした。土が巻き上がり、視界がなくなつた。針葉樹の葉がちぎれ飛び、不思議といい匂いがした。森の匂いだ。目を開くと、野井上の破片が散らばっていた。腕があった。左腕は三分割されていた。右手は肘から先が私の頭の向こう二メートルに転がっていた。4716小銃のグリップを握ったままだった。だが、小銃は口アレシーバーを残して、アッパーレシーバーが見あたらなかった。野井上の「本体」は、腰から上がそっくり失われていた。不思議なことに、両足はほとんど無傷で、しかも小刻みに動いていた。野井上……私は口の中で呟いた。呟きはCID Sが増幅して全員に耳に届く。

(野井上はK I A (戦死)だ。姉さん、行くぜ)

私の肩を二度強く叩き、南波が駆けていく。

「蓮見、人間の感覚は、精密ではないが、正確なんだ……しっかり、見て聞いて嗅いでいてくれ」

「姉さんの匂いがするよ」

「南波みたいなことは言わなくていい。……目を開け」

「大丈夫。……私はこういう感覚が好きなんだ」

「そうだ、お前はこういう状況が好きなんだ。これで終わりにしたいのか？」

「……終わりでもいいかも」

「それは、家に帰って、ソファの上でI i d (画像情報ディスク)でも見ながら思い出すんだな」

「姉さん……優しいな」

「気のせいだ」

CIDSのスーパーサーチモード。エコーロケーションモードもデュアルで使用。周囲五〇〇メートル以内に脅威なし。信じるしかない。私は蓮見を抱えるようにして歩く。

歩く。

歩く。

蓮見。

まだ、熱い息が私の頬に届く。

蓮見。

帰るんだ。

国境まで。

日が暮れて、海軍艦艇による艦砲射撃は断続的に続いていた。

空は雲に覆われているようだ。海を向くと、水平線上で閃光が瞬く。艦砲の発射炎。それが低く垂れこめた雲の中でぼんやりと光るやがて、地を揺るがす弾着。弾着の後で、発射音が海から届く。私たちは攻撃目標からかなりもう外れているはずだった。時速三キロにも満たないが、蓮見はなんとか私に引きずられるようにして歩いていた。

道はなかった。

湿地は途切れ、いま私たちが行くのは、腰までの高さの茂みだった。笹とイネ科と思しき細長い草。初夏の椀武戸。明かりあれば、この植物が萌える様子を美しいと感じたかもしれない。そして、絶え間ない艦砲射撃の轟音がなければ。

海上の艦隊からは、圧倒的火力を誇る戦艦の艦砲射撃が続いているようだ。戦闘機の飛行音は聞こえなかったから、海軍はもっぱら上陸支援に使用しているはずの大口徑艦砲の威力を、もうやたらと陸地に向かって撃ち放っているように思えた。艦砲の平均半径誤差…… CEP は、お利口さまでかわいそうな GBU - 8 自己鍛造爆弾で数メートル以内に収まるが、口径四十センチを超えるような戦艦の主砲弾など、よくて数十メートル、それ以上の誤差が出る。精密攻撃など望むべくもなく、艦体の動揺、地球の自転などを考慮すれば、接近すれば接近するほど精度は上がるが、その分陸上からの攻撃にもさらされるといふダブルバインドに悩まされることになる。いま海上からなにかの大会のごとく発砲している戦艦はおそらく四隻、三連装主砲が一隻当たり三基。朝まで射撃を続けるのだとしたら、この付近一帯の地形は間違いなく変わる。

「姉さん……」

蓮見と私は茂みに横たわっていた。南波たちと分かれていから、

ずっと歩きとおしだった。もちろん途中での休憩も挟みながらだったが、疲れ果てていた。とりわけ私は、蓮見の体重を支えながらの行軍だった。蓮見も消耗していたが、私も消耗していた。

「蓮見、少し休め」

弱々しいが、蓮見の意識はまだはつきりとしていた。墜落直後の朦朧とした状態からは、なんとか脱してくれたようだった。大腿部の出血は、ファーストエイドキットで止まってくれた。痛みだけはどうしようもなかったが、彼女が痛みを感じてくれている間は、彼女自身の意識が明晰であることの証左であるから、私はそれを大事にしたいと思った。

「すごい音……」

「艦砲射撃だよ」

蓮見が身体を横に向け、緩慢な動作で茂みを掻いた。視界を啓こうとしたのだ。

「見たいか」

「見える？」

「見えるよ」

場違いだと感じたが、私は断続的だが中断を挟む戦艦たちの艦砲射撃で、真夏、柚辺尾の街の河川敷で見た花火を思い出していた。

真夏。

高緯度の柚辺尾は、夏が短い。

盛夏と呼べるのは、七月から八月の盆までの一ヶ月少々だった。

おそらく、高緯度地域の町や村はみんな同じだろう。みな夏が恋しい。夏がくれば、目いっぱい楽しむ。たくさんのお祭りが開かれ、たくさんの人たちが家から飛び出し、真上から降り注ぎ、足元に小さな影を落としてくれる太陽を全身で感じる。

私もそうだった。

六月が来ると、山も原も、どこも、新緑が萌え始める。一斉に花咲くように。

日は一日ずつどんどんと長くなっていく。



冬が遠ざかる。

北洋州以北の住民たちは、冬とともに暮らすが、一方、冬を嫌っている。

冬に糧を得る職業ももちろんあるが、多くの人々にとって、雪と氷に閉ざされ、一日数時間しか太陽が顔を出さなくなる冬の季節は忌むべき存在だった。

だから、夏が恋しい。

七月の下旬、柚辺尾市では、一週ごとに四週連続で週末金曜日の夜、花火大会が行われる。地元の企業がそれぞれに主催し、その日は町中も河川敷も、花火が見える場所はどこも観客でこった返す。周辺部の町や村からも観客は汽車に乗ってやってくる。開拓記念公園にはびっしりと露店が並ぶのは、六月中旬に開催される鎮守の社の神宮祭と同じだ。

みんな河川敷にならび、みな一様に空を見上げ、一発目を待つ。

私も、父や母、姉たちと汽車と市街電車を乗り継いで、中心街を流れる玲那川れなの堤防に場所をとり、花火を待った。

やがて、一条の光が空へ打ち上げられ、大輪の花を咲かす。

炸裂音。

光。

歓声。

それは一時間余り続くが、呼吸をするように、ふと花火の打ち上げが中断される間がある。火薬や玉の装填であったりするわけだが、その間は、観客の期待をいやがうえにも盛り上げてくれる。私はその間が好きだった。姉たちはその中断に文句を言うこともあったが、私は構わなかった。一連で間断なく、花火大会が一瞬で終わってしまうのが私はもったいないと思った。中断を挟み、できればもっと長く、この夏の夜の時間が続けばいいと思っていた。

水平線。

私は蓮見と同じ視線をたどる。

低く垂れこめた雲の中に、艦砲の発射炎が光る。

「蓮見、」

私は彼女に話しかける。蓮見は低体温から一転して、熱を出しているようだった。傷のせいだ。彼女の身体は戦っている。そうするうちに軍の医療局がセッティングした。私たちは訓練の過程で全身チューニングの調律を受けている。民間での予防接種の拡大版だと考えてくれればいい。特に第55派遣隊の隊員の身体には、強化した抗体アンチボデーが組み込まれている。息の根を止めるような負傷や、風連での野井上のように、身体そのものを木端微塵に吹き飛ばされれば話は別だが、私たちはなかなか死なないように調律されてしまっているのだ。精神的にも。絶望しないような調律。

「花火、見たことあるか」

私は自分の声の低さに時々驚く。もともともこういう声だったろうか。

入隊以前の自分の声はどのような音だったろうか。

丹野美春がいま私に会ったら、私を私だとわかってくれるだろうか。

「花火……？」

「そう。花火」

発射炎。

弾着。

大音響。

なぜ私たちはこんなに平然としていられるのか。

「お前、出水音いずみねの出身だったな」

出水音。城下町。水路。盆地。私が知っているのはその程度だ。

高地に広がる盆地で、夏は涼しいと聞いた。都野崎から特急電車で二時間ほどの距離はずだが、訪れたことはなかった。むしろ、丹野美春の案内で訪れた京の町の印象が強い。一角ごとに存在感を示す寺院、気高い住民たち。経済的首都は都野崎に移転したが、我が国の首都はやはり京であり続けているのだと感じたものだった。

「うん」

「花火、見たことあるか」

同じ質問をした。

「ある」

「覚えているか」

「……家の……二階の窓から見えた」

「そうか」

「お城が見えるんだけど、その、天守閣の向こうに、花火が見えるんだ」

出水音の城。昔の武将が住んだ城。城郭、堀、桜。

「花火、好きだったか」

「姉さん、どうしてそんなことを訊く？」

「さあ、……どうしてだろうな」

「まだ、撃ってる」

海軍は一晩中艦砲射撃を行うつもりなのか。私にはもはやそれが、怨念のこもった行為に感じられて、すでに不快感を伴い始めていた。

「少し眠れ」

私は蓮見のヘッドセットを外した。

「寒い」

「熱発だ。それで寒いんだ」

「傷が痛い」

「その痛みを大事にしてくれ。感じなくなったら、……置いていくぞ」

「姉さん」

「なんだ」

「本当は、姉さん、私を置いて行ったりはしない」

「……」

「だから、休むよ。姉さんも、」

「私は大丈夫だ。……海軍さんの花火大会がまだ続いているからな」

「ごめん」

「なぜ謝る。らしくない」

「わからない」

「弱気になるよ、死ぬぞ」

「……」

蓮見は目を開いたまま、首をめぐらせて、水平線を向いていた。

艦砲射撃。

音。

着弾地点は、内陸へかなり移行しているようだ。おそらく無人観測機や合成開口レーダーを装備した戦術偵察機が高硬度から監視しているはずだが、炸裂音と弾着のすさまじい衝撃で、上空に何がいるのかはまったくわからない。CIDSの索敵モードも今は近距離モードにしてあり、より電力を食うスーパーサーチモードへの変更は控えていた。少なくとも半径二キロ以内の地上に、私たちの脅威となりうる「なにか」はいない模様だった。

かたわらに、というより、私は肌身離さず、蓮見と、そして4726自動小銃を抱えていた。今一度、自分の装備を確認する。ヘツツァー4726・7・62？自動小銃はそろそろメンテナンスをしてやりたいところだが、こんな場所でフィールドストリッピングというわけにもいかない。予備弾倉は、タクティカルベストのパウチに、七本。蓮見はもう少し持っている。ふたりともグレネードランチャー装備しないオプションで出撃しているので、銃そのものには光学照準器とフラッシュライトのみだ。フォアグリップも近接戦闘でのスイッチングを考慮していないので装備していない。ただし、銃本体のフレームが大柄なので、5・56？版の4716と比較すると、一回りほど大きく、一割以上重い。二脚がついていれば、より遠距離への精密射撃も可能だが、この銃はどちらかというとバトルライフルであり、マークスマンライフルではなかった。中距離での破壊力を重視しており、今回の作戦は狙撃が任務ではなかったからだ。

身体が震えた。さすがに初夏とはいえやはり冷え込んだ。火は焚けないが、私は蓮見に寄り添っていた。

「入地准尉……姉さん」

「なんだ」

「なぜ、軍隊に入った？」

私はすこし面食らったかもしれない。南波からも訊かれたことがなかった質問だった。おそらく、陸軍入隊時……とりわけ第55派遣隊への入隊選抜での面接以来、その質問は忘れ去っていたかもしれない。

いや、忘れたふりをしていただけかもしれない。

「姉さんは、帝大出なんでしょう」

それは南波がことあるごとに風潮してまわっているから、隊の顔見知りはみんな知っていることだった。

「ああ、そうだ」

「徴兵されたわけでもない」

「そんな制度はもうないから……もつとも、軍隊経験があれば、『一級市民』としての手厚い権利が保障されるっていうのは魅力だったけどな」

「姉さんはそういう人じゃない」

「どういう人だ」

弾着。地面が揺れる。

「南波少尉が言っていた、言葉のいらぬ民族って、なんの話？」

「話が変わるな……それは、暇つぶしのおとぎ話さ」

「どういう？」

「言葉を声に出さない民族……というか部族だな、そういう連中がいるのさ。イノビリジム諸島って場所に……イノビリジム諸島ってわかるか？」

蓮見は首を横に振った。

「十六世紀まで『文明人』が一人たりとも訪れたことのない、絶海の孤島って奴だ。そこに、文字は持っているが、しゃべらない部族がいたのさ。そういう話だ」

「そういう話を、ふだん、南波少尉としている？」

「二人きりになると、暇になるからな」

「私にも、何か話を……」

「子守唄は歌わないぞ。……気を確かに持て」

「大丈夫。さつきよりは大分楽になった」

蓮見の腿の傷の出血自体はかなり前におさまっている。ただ、かなり痛そうだ。応急処置では今後が心配だった。いくら気温が低いとはいえ、氷雪地帯とは違う。雑菌が入れば、今夜あたりから彼女はさらに発熱するだろう。そしてその発熱量を維持するための食料は心もとないと言わざるを得なかった。

私は背の高い草むらに寄り掛かるように、上半身を脱力させた。両足を伸ばす。すると途端に全身が弛緩する。緊張が徐々に解けていく。筋肉という筋肉に蓄積された疲労が、ゆっくりと脳を麻痺させていく。訓練中、助教からしつこく注意されたこと……甘い誘惑、自分自身の身体が、（休め、休め）と囁きかけてくる。そして、この誘いは本当に甘美で心地よいのだ。

「姉さん」

「すまない。私も、少し疲れた」

南波は無事か。弛緩した緊張感のはざまに、南波の横顔が浮かんだ。

「しゃべらない部族の話、聞きたいか」

艦砲射撃が一時止んでいる。私の声は自分でも驚くほどに大きく聞こえた。

「それより、……姉さんがなぜ軍隊に入ったのか、教えてほしい」

「なぜ」

「知りたいから」

「わかりやすいな」

「話してもいいが、出水音の話も聞かせて欲しいな」

「私の街？」

「そう」

「どうして」

「私は北洋州育ちだ。……ああいう歴史のある地方に憧れがあるのさ」

「都野崎は？」

「自分の街じゃない。四年いたただけだ」

「都野崎のどこに？」

私は上半身をそのまま草むらに横たえた。背筋が一気に弛緩した。疲労に全身が絡め取られていく。心地よい。なんとか抗おうと思っただ。けれど、無駄な努力だとも思った。

「……紀元記念公園のそばだ……高射砲塔がよく見える……アパーメントの二階に住んでいたよ」

鉛色の空は時間とともに青みを増していた。日暮れ。間もなく夜の帳が下り、あたりは闇に包まれる。心地よい、そして危険極まりない夜が来る。

曇天の夜は本来ならば作戦行動にちょうど良い。なにより暗い。星もなければ月もない。この時期は雪も消えるので、雪原の乱反射もない。国境を目指すなら、夜に移動するのがもっとも安全に思われた。

「蓮見……」

もしかすると私自身の身体がすでに限界を超えつつあったのかもしれない。

「すまない。少し休ませてほしい」

私は上半身をやや起こし、熱っぽい蓮見の腕を二度叩く。You have control……そのつもりだった。

「姉さん」

「すまない」

それでも私は4726自動小銃からは手を離さない。セイフティをかけた状態で、しかし薬室からは弾薬を抜いていないから、いつでも撃てる。

「三十分でいい。……休ませてほしい」

「わかった」

危険だとも思った。蓮見がまともに警戒できる状態ではないことも分かっていった。けれど、休みたかった。一瞬でも都野崎の風景が、この青く沈んだ水の底のような曇天の向こうに、都野崎のくすんだ青空が見えたような気がしたからかもしれない。

私は目を閉じた。

艦砲射撃はまだ中断していた。

意識が遠くなるにはちょうどいい静けさだった。

あたりからはすべての音が消えていた。



都野崎は広く標高の低い平野の南端に拓かれた巨大都市だ。本土に穿たれた湾に面しており、湾は内海と呼んでよい面積がある。天然の良港であり、また帝国最大の人口集積地であり、無数の市が散らばっている。かつては草原が果てしなく続き、月も太陽も草原から出でて沈むと詠われたほどの田舎だったようだが、三百年ほど前にこの地を本拠とする強大な武家が政権を得てからは激変し、中世にはすでに世界最大の都市に成長していた。三本の大きな河川と、大洋とつながるいくつもの汽水湖が都市圏東側に連なり、晴れた日に都野崎の上空を飛行すると、湖沼と内海が陽を鏡のように反射してまぶしい。

私が生まれ育った柚辺尾とは文化も気候も何もかもが違う都市。私はとにかく柚辺尾を離れたかった。獵が解禁されると祖父とライフルを肩に、ユーリの青い視線を温かいものとして受けながら歩いた森から、離れたかったのだ。

なぜだろう。

私なぜ、森から離れたかったのだろう。

そう、私は柚辺尾の街から、北洋州のあの気候風土から離れたかったのではなかったのだと思う。おそらく、森から、獵から、銃から、祖父から距離を置きたかったのだと思う。私はあの一時、たしかに銃を二度と手にしたくないと思った。獵が嫌いになったのではない。私の裡に、形容しがたい快感が生まれていたのを、私自身が認めたくなかったのだ。

親を失った小鹿。

それを仕留めようとしたこと。

祖父に止められたこと。

ユーリの青い目が私を見つめていたこと。

なぜか、ユーリが右手を添えていた大口径マグナム弾を発射する

リボルバー拳銃の、あの秋の空を映したような蒼い銃身の色が印象深かった。

硝煙の匂いもだ。

7・62?ライフル弾の反動は大きい。

本格的に自分のライフルを肩に山へ向かうようになる前、私は祖父から一通り銃の撃ち方を習った。

立射、伏せ撃ち、膝撃ち、座り撃ち。

半日で百発近い弾を撃たされた翌日は、肩が腫れ上がって激しく痛んだほどだった。機構が単純だが堅牢そのものだった私のM700ライフルは、重量自体が四キロほどで、さほど重い部類には入らない。だから、弾薬の反動は身体で受け止めることになる。鼻を突くような硝煙の匂いも、やがて慣れる。祖父は私に言った。獣たちの匂いを感じると。それは、獲物の匂いだけではなく、強烈な敵意すら漂わす捕食者としての森の王者の匂いも嗅ぎ分けるという意味だった。森の中で人間は弱い。ちよつとした天候の悪化、あるいは日没、あるいは森の王者との遭遇。経験と智慧を持たない人間は、森の中で生きていくことはできないのだと祖父は言葉少なに私に説いてくれた。

まだ十代だった。

しかし私は間違いなく快感を得ていた。

命を奪う快感だった。

獲物を仕留める快感だった。

何にも代えがたい快感だった。

そして、私は自分が猟に没頭していくのがはつきりわかった。

いや、もしかするとそれは祖父に言わせると「猟」ではなかったのかも知れない。引き金を引き、雷管が炸裂し、パウダーが燃え、弾頭が銃身を貫いていく。簡素なアイアンサイトで照準しても、私には銃弾が飛翔するその様子が分かった。撃った瞬間に当たるはずれるかも。

南波に言ったように、私に射撃のセンスがあるとは今でも思わな

い。数を撃てば、訓練を積みれば、銃弾は的に当てられる。光学照準器があればなおさらだ。ライフルは拳銃と違い、当たるようにできている。三百メートル先の動かない訓練用の標的など、呼吸を制御するまでもなく、誰でも当てることができるようになる。三か月も練習すればだ。

私が恐れたのは、自分自身の中に、標的の命を奪うことに対する快感がはつきり存在することに気づいたこと、そしてそれが成長しつつあったこと、そして自分が紛うことなく祖父の後継者としての資質と血を受け継いでいること、それらだった。

祖父は猟師ではなかった。祖父は兵士であり、優秀な狙撃手だった。

今ならわかる。

山でシカを追うより、森の王者と対決するより、敵の兵士を、自分と同類を狙うほうがよほど簡単だ。バックアップもある。なににより、同類だからこそ、行動が読める。

祖父は私の資質を見抜いていたのだと思う。

私も気付いた。

自分の血に。

後天的に強化された血。

殺戮者としての血。

私は今でもおそらく、親を喪った子がいれば、ためらいなく殺すだろう。悲しみを助長させる必要などないからだ。おとなしく天国へ。それが殺戮者としての優しさだ。

距離を置く必要性を感じた。

北洋州から離れようと思った。

事実、晩秋から初冬にかけての陰鬱極まりない風景も私は嫌いだった。まだ、真冬、降りしきる雪と民家の明かりや、凍てついて青く沈む夜のほうが好きだった。私はあの秋の風景から逃れたいと思った。いやに静かで、けれど気が急いでいる空気。秋の山は、誰もが気が急ぐ。動物たちも。植物も。人間も。

四季と対峙するより、愛でることが出来る地域に行きたかった。

北洋州の支配者は依然として風であり雨であり雪であり森であり、動物たちだ。しかし、都野崎は違った。支配者は間違いなく帝国であり、そこに住む市民だった。

今までの世界とは違う、また別の世界だ。

都野崎に移り住んだのは十八歳だった。

何もかもが違って見えた。

広い通りは市街地を一直線に貫いており、三百年前に築かれた広大な城郭を中心として発展した都野崎には歴史があった。いや、歴史だけならば帝が居を構える京のほう为数段勝っていただろう。数百年、千年を数える寺院、城壁、そして家々。丹野美春が教えてくれた京の街並みもまた、都野崎とは違った歴史そのものを感じさせた。だが、都野崎には京にはない活気があった。猥雑さと、昂揚感だ。

私は紀元記念公園を一人歩くのが好きだった。私のアパートメントがその近くにあったからだ。大学の敷地からも近かった。市街電車が走り、国産の乗用車が、カタログから出てきたそのままの色と形で数百台も通りを埋め尽くしていた。私は地方出身であることを隠さなかったから、教室では幾分外国人扱いをされた。分け隔てなかったのは丹野美春を含めて数名だったように思う。

丹野美春は、私と同年で京の近隣の旧家出身、小柄だが聡明な瞳をした学生だった。知り合ったのは、紀元記念公園の高射砲塔の下だった。私はペーターゼンの名著「青い世界」を古本屋で半額で買い、それを読むともなくページをパラパラめくっていた。高射砲塔を見上げる場所に並んだベンチに座って。「青い世界」は青年期を迎える少年たちの寄宿舎生活を繊細に描いた物語だが、やたらと分厚く、時間を持て余した閑人が学生以外はなかなか読了が難しいといわれている本だった。興味があつたのは、描かれた舞台となる地域が、私の出身地である北洋州に似た、一種荒涼とした寒々しい高緯度地域だったからで、それ以上の動機はなかったように覚えて

いる。もしかすると、学生らしい本を読もうと、そんな気持ちもあったかもしれないが、忘れた。忘れたことにしたい。

丹野美春は春秋用の薄手のコートを着ていた。萌黄色。膝丈の。私は四季というより二季と呼ぶべき寒暖の激しい袖辺尾では用をなしそうにないそのコートが何やら珍しく思えて、高射砲塔を見上げている彼女の姿をしばらく眺めていた。

砲塔の先端には、かつて三五？対空機関砲が据え付けられていたと説明板にはあったが、いまはイミテーションに交換され、都市防空は高性能の地对空ミサイルが受け持っていた。だから紀元記念公園をはじめ、都野崎のあちこちに残る高射砲塔は史跡であり、この国が独立を保つにあたっての決意が具現化された遺物だった。月一度防空訓練が行われているが、私が参加した回数などたかが知れている。サイレンが鳴り響くと、手近な地下鉄駅の入り口まで駆けていき、その時だけ開けられる分厚い対爆ドアを抜けるのだ。当時はよくわかっていなかったが、今の知識を動員すると、都野崎は空軍二ヶ所、海軍一ヶ所の航空基地で爪を研ぐ迎撃戦闘機六個飛行隊に護られており、そうそう高射部隊や防空訓練が生きる体勢ではないことに安堵できる。だがあのころは、高射砲塔が史跡であることも知らなかった。丹野美春も同じだった。物珍しさから休日の散歩途中、石積みの塔を見かけてふらふらあの場所に歩いてきたのだ。

「空を撃つてどうするのかしら」

丹野美春の第一声だ。私は今も思い出せる。

紀元記念公園は中心部に広がるかなり広い池……公園として造成したのではなく、もともと存在する沼……の近隣に市民が集まる傾向があり、芝生と広葉樹と高射砲塔が点在するあの場所は、どちらかというと不人気スポットだったようだ。ベンチには私だけ、砲塔を見上げるのは彼女だけだった。だから、彼女の言葉が独り言でなければ、私に向けられたものであるのはすぐに分かった。

「撃ってるの、見たことあるのか」

私が答えた。答えるしかなかった。放置してもよかったが、なん

となく答えた。私は今ほどに尖ってはいなかった。精神的に。

「見たことないわ」

「よく空を撃つものだったわかったな」

「書いてあるもの。銘板に」

丹野美春は肩まで伸ばした髪を揺らして私に背を向けた。栗色の髪だった。

「読んだのか」

「読んだわ」

私はベンチを離れて、彼女に歩み寄った。間近で見る高射砲塔は異様だった。砲座へ上がる出入り口は鉄の扉で、それはチェーンで嚴重に閉ざされていた。市民に開放していないのは、緊急時にはイミテーションからリーダー管制の本物の対空機関砲に素早く交換するため、実際いまだ軍の管轄であるのだと知ったのはずっと後になつてからだった。

「六十年も前に作られたのね」

「大洋戦争の前だ」

「この街は一度だって空襲に遭っていないのにな」

「そうなのか」

「不見識ね」

「私は……ここに来て間もないんだ」

「ここ？ 公園？ 都野崎？」

「両方さ」

「学生さん？」

丹野美春が振り返る。まだ少女の面影が色濃い表情だった。萌黄色のコートの下は、淡い黄色のブラウスだった。

「あんたは？」

「帝大」

「私もだ」

答えると、丹野美春は目を細めて微笑んだ。

「奇遇ですね」

きれいな声だと思った。言葉には西のなまりがはっきりとあった。テレビジョンやラジオや電子ネットで触れる西方言言葉ではない、生の音。新鮮だった。

「何年生？」

「言つたろつ。この街に来て、まだ二カ月とたつていないよ」

「ああ。そうね」

私の言葉にさらりと応えると、丹野美春はまた高射砲塔を見上げた。

「高いわね」

「高いね」

私も見上げた。

空はうつすらと白く濁つて見えた。どこまでが空なのかつかみづらいような、そう、柚辺尾の街から見上げる、くつきりと輪郭がはっきりした空とは違う、ぼんやりと温かい空だ。

「あなた、北の出身かしら」

丹野美春が言う。

「柚辺尾」

「ああ、知ってる。北洋州の州都」

「あなたは」

「京よ」

「首都から？」

「うっん、京のすぐそばの、……藤雅とつがという町。京佐電車で三十分。京佐電車つて、わかる？」

「さあ」

「佐摩坂と京を結んでる電車」

「佐摩坂。行ったこともない」

「そうなの」

「京にも、行ったこともないさ。北洋州からは……遠すぎてね」

丹野美春と私は並ぶと、彼女のほうがやや上背があった。それでも小柄な部類であることには違いがなかった。けれど、私が北方の

荒地地に生える草なら、彼女は旧家の裏庭で育てられた草花のような印象があつた。着ていた彼女のコートの色のせいかもしれないかなつた。

「私も、北洋州には、行つたことはないわ」

「行かなくていいさ。いまは戦争中だ」

「北方戦役ね。……ここにいと、申し訳ないけれどおとぎ話のよ  
うに感じる」

「私だつてそうさ。柚辺尾から戦線へはまだ海峡を一つ隔てるんだ  
から」

「遠いのね」

「遠い」

「でもあなたとは言葉が通じる」

「同じ国だから」

「そうね。同じ帝国だから」

「京か」

「なにか？」

「千年以上前から人が住んでいるっていうのか信じられないのさ」

「都野崎だつて、六百年前にはもう街になつていたわ」

「柚辺尾は、開拓されてから二百年もたつていないよ」

「先住民がいたはずよ」

「今でもいるよ」

「会つたことが？」

「たくさんいるからな。めずらしくもないさ。目の青い連中もいる  
し」

ユーリ。

「異人さん」

「めずらしい言い方をする」

「そうかしら」

紀元記念公園は広い。もともとの地方の特有の低湿地をそのまま生かしたレイアウトだから、起伏はないが緑が濃い。私の故郷の



冷たい湿地とは違う。荒涼とした、絶望を絵に描いて額縁に入れたようなあの光景とは。

「ねえ、」

丹野美春が私に視線を向ける。

「なんだ、」

「あなたの名前は？」

「入地」

「下の名前は？」

「その前に、あなたの名前は？」

「ミハル。タンノ、ミハル」

控えめな微笑みは変わらず。甲高くもなく特別低くもない声。上品という言葉そのものの立ち居振る舞い。私は初めて出会うタイプの人種である彼女に興味を抱いた。というより、好意を抱いた。

「ミハル」

「そう。丹野美春」

丹野美春は、また何気ない風に首をあおり、高射砲塔を見上げた。

暖かい風があった。

私の頬を撫でた。

彼女の髪が揺れた。

都野崎の春。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8035s/>

---

冬時間

2011年12月11日23時45分発行